
偽り家族の救済レシピ

キョウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽り家族の救済レシピ

【Nコード】

N4968L

【作者名】

キヨウジ

【あらすじ】

天園陽影は姫城一族に名を連ねるおぼっちゃまとして生を受けた。しかし、浮気性の父親の所為で家庭は崩壊、彼の性格も破綻してしまう。更に、父親の再婚が彼にとどめを刺すのだが……。その再婚相手には可愛い連れ子がいた。陽影はニセ家族に戸惑いながらも、義妹が巻き込まれた凄惨な事件に首を突っ込み、親友である色嶺左右良の力を借りて事態の打開を図ろうとする。

序章 『家庭崩壊のプロセス』（前書き）

注意！ 本作には、暴力的な描写および犯罪描写が多く用いられます。露骨な性描写はありませんが、性犯罪に類する悲惨な光景が語られる場面があります。殺人および強姦、脅迫などを含む物語に強い抵抗感を持つ方は、非常に不愉快な思いをしますので読まないでください。

序章 『家庭崩壊のプロセス』

理想的な家庭とはどんなものだろうか？

誰もが憧れてやまない、幸せに満ちた家庭。自分が満足し、家族が納得し、第三者も認める絵に描いたような家庭。それはどのような家庭なのだろうか？

幼い頃、俺には夢があった。

それは、両親と俺、家族三人で夏祭りに参加して金魚掬いや射的に興じ、仲良かったこ焼きを分け合って頬張り、河川敷で花火を観賞した後、ぼろい民宿に素泊まりして三人川の字になって眠る……というものだ。

まあ、ガキの寝言みたいなもんだから、後半部分は俺たち家族にとっては非現実的蛮行であり、民宿に泊まるくらいなら自宅に帰って別個の部屋で快適に、しかし孤独を愛でながら眠るのが現実的なだろう。だが、それは、寝言どころか夢幻に等しい希望であって絶対に叶わない願望……否、妄想でしかなかった。

俺の家族は最低なのだ。

大病院の院長を担う父親と、超名門出でご近所様から絶世の美女と称えられる母親を持つ俺は、物心着いた時から今現在に至るまで数え切れてしまうほどしか顔を合わせなかった。

親父は院長という肩書きを最大限に利用して看護師の女性を誑かし、のべつ幕なしに遊び耽る好色漢である。何人もの愛人を作っているから自宅には全く戻らず、愛人に買い与えたマンションと仕事場である病院を往復する生活を楽しんでいる。妻の存在など忘却してしまっているかのように振る舞っている。ただ、一応、息子を気遣う程度の良識は有しているらしく、定期的に連絡を入れてきやがるし、金銭的な援助も惜しまない。だが、父親としての役割を果たす意思は皆無みたいだ。

そんな親父に比べると、母親はまだマシな方である。

俺は一人っ子だから、幼い頃は母親の愛情を一身に受けることができた。母は掛け値なしに俺を愛してくれていた。欲しい物は何でも買いつけてくれたし、何でも自由に選択させてくれた。ワガママも言いたい放題だった。そんな育て方に問題がなくもなかったが、注いでくれた愛情は掛け替えのないものだったから、俺は結構まとまと幼年期を過ごせたと思う。しかし、それは、母親が親父の度が過ぎる女遊びを察知するまでの、本当に短い間でしかなかった。

普遍の愛を誓い合ったはずの伴侶が多くの愛人を抱えている事実を知り、取り返しのつかない喧嘩を経て、親父が家に寄りつかなくなる、母親は人が変わってしまったかのように俺を放つたらかして遊び歩くようになった。親父と同様に、家に帰ってこなくなってしまう。でも、外で愛人を作っていたわけではなく、ギャンブルに明け暮れていただけだったので、母を責めたりはしない。一応、親父と同じように連絡だけは取り合っていたから、見捨てられたと思わなくて済んだ。それゆえに、俺は親父ほど母親を憎んではいなかった。愛しているとは口が裂けても言えないし、愛情というものを理解できなかった。好意程度しか持っていなかったが、それで十分だった。

それなのに、母親は、俺を裏切って、姿を消してしまった……。それは、俺が中学に入つてすぐの出来事である。

実家から駅二つ離れた場所にマンションを買い、そこから最寄りの中学に通っていた俺は、学校帰りの交差点で親父からの連絡を受けた。

「離婚したからな」

その報告は別に意外なものではなく、俺はもっと早くそうしておくべきだったと思ったくらいだった。

シヨックなど受けなかった。

「ふーん」

そう短く答えただけだった。

俺の認識では、両親は既に離婚していたも同然だった。結婚して

いながら別居状態を続ける現状の方が不自然だ。そして、両親の離婚後も俺たちは今の生活を維持していくものだとばかり思っていた。そう思い込んでいた。

しかし、俺の認識は、見事に打ち砕かれてしまった。

母親が失踪したのだ。いや、実家の門をくぐって引き籠もったと言った方が正確かもしれない。今まではどこに居ようが連絡が可能だったし、こつちが望めば会えた。だけど、失踪後は、母親との連絡が許されなくなってしまった……。文字通り、音信不通。母親は親父どころか俺まで見捨てちまったんだな、と思った。

これは酷い裏切り行為だ。俺はそう感じ、母親を恨み、憎しみ、呪った。離婚した程度で切れるやわな絆ではないと思っていたのに……。なぜ、俺の信頼を踏み躪ったのだろう。

その理由を知ったのは、離婚を知らせる連絡から五日後、母親の失踪から二日後だった。親父から再び連絡が入ったのだ。

「再婚するからな」

一方的な言葉。

その言葉が中学生だった俺にどれほどの衝撃を与えたか……。思い返しても臍腑が煮え繰り返る。なまじ、母親の失踪を無理に払拭し、学校生活を満喫しようとして強引に心を切り替えた矢先だけに、俺の心は核爆弾をぶち込まれたみたいにバラバラに、粉々に砕け散った。親父の卑劣なやり口と母親が消え去った理由を理解した衝撃で、元々狂っていた心が更に捻じ曲がってしまった。

自失から立ち直るのは二分もあれば可能だったけど、平行感覚を喪失した心はもう元には戻らなかった。支配階級出身のお嬢様を誑かして結婚し、自己の地位を築き上げ、日本医師連盟のトップにまで上り詰めておいて、利用価値がなくなると離婚する。そのやり口の汚さが許せなかった。だから、親父に「冗談じゃねえぞ」と怒鳴りつけてやった。俺は、負の感情をコントロールする術を、その時点ではまだ身につけていなかったのだ。

俺のただならぬ反応を電話越しに聞いて、親父も若干の妥協と譲

歩、我慢を余儀なくされたようだ。再婚は見送りとなり、その時の再婚希望相手とも別れたという。

糞親父は苗字とバツクボーンを失った。

しかし、俺は母親の苗字を名乗り続ける道を選んだ。

そして、その六年後、俺が大学の入学式に参加した日、ついに親父が再婚に踏み切った。

有無を言わせぬ強引な再婚。

その連絡を携帯電話で聞いた俺は、「ふーん」と他愛なく返事した。それを受け入れられる強さを中学、高校生活において身につけていたからだ。

最低だった家庭。それをぶち壊した最悪の親父。全てを見限り、全てを捨てた実の母親。中学時代には深刻なイジメに遭い、高校時代に嗜虐者へと転身した俺。そして、俺の承認を得ぬまま勝手に家族になりやがった二人。

新しく家族になった人物を、俺は詳しく知らない。

知りたくねえ。

だが、どうやら新しい母親には連れ子がいるらしい。

しかも、年下の女の子。

妹。

妹？

俺に妹が……？

まあ、そんなの知ったこっちゃない。全くもってどうでもいい情報だ。俺は大学生生活を快適に営む準備に勤しまなきやなんねえんだ。間違っても実家には帰らねえぞ。意地でも帰ってやるかよ。死んでも帰りたくねえ。

憎むべき父親と見ず知らずの義理の母親。そして義妹。

そんな奴ら、会ったところでもどうにもならない。呪いの言葉を吐きかけても、壊れた家庭は修復されない。夢と消えた仮定は光りを得ない。不当な暴力を振るっても、どぶ泥で塗り込められた過程は洗淨されない。

煮え滾った感情をぶつけるのも馬鹿らしい。合理的じゃない。俺の生き方に反している。

だから

だから、俺は定期的に親父と連絡を取りながらも、新しい家族とは距離を保って、一人暮らしを続けようと思っていた。

第一章『欠陥人間の憂鬱』 【1・天園陽影】

ゴールドデンウィークを三日後に控えた四月の第四週。

思いもかけない悲劇に見舞われた。

新入生の歓迎会だ、懇親会だ、花見で宴会だ、と騒いで浮かれていた自分の計画性のなさに腹が立つくらいの大失敗だった。財布の中身が空っぽになってしまったという下らない事件。昨日までは銀行へ行けば金なんか幾らでも引き出せると暢気に構えていたら、今日になって行き付けの銀行が機能不全に陥り、ATMどころか銀行の窓口までも利用できなくなってしまったのである。しかも、こともあるように、ゴールドデンウィーク明けまで復旧の目途は立たない、という最高レベルのギャグをほざく始末。理由は聞いてないが、どうせ人的トラブルが原因だろう。現在の俺にとってはクリティカルな災難。まさに命の危機である。

銀行の出入り口でひたすら頭を下げ続けるバーコード頭の偉いさんを一瞥して、俺は大学へ戻った。そして、残された小銭を使って缶珈琲を購入し、学食の二階に位置するラウンジへと向かう。

京桜大学の構内にある学食は俺の知る限り全部で三箇所存在するが、一般教室に一番近くて一番大きい《東元食堂》に人気が集中していて、俺も主にここを利用している。

ラウンジスペースは四方を全面ガラス張りの窓に囲まれた開放空間で、百人程度の人数を収容できそうな広さを有する、学生どもの憩いの場だ。

勿論、禁煙ではない。

俺は二階へ上がると、窓際の席に腰を落ち着け、缶珈琲をテーブルの上に据え置き、タバコを一本取り出して口に啜えた。そして、一息吐いてからぐるりと周囲を見回す。

昼休みの割には不思議と人気がない。学生の姿がまばらで、シー

ンと静まり返っている。だが、これなら、低調な気分の回復を心置きなく図れそうだ。

十代後半の年齢に達した俺は、自分の感情を面に表さない無愛想で無感動な能面男になり、屁理屈ばかり捏ねて和を乱す協調性に欠けた偏屈者と呼ばれ、面白味に欠ける人間と見なされていた。

まあ、実際、その一文で等身大の俺が表現されちまっている。

でも、そんな自分を改善する努力などしない。正の感情は殺すが、負の感情は半殺し。騒がないし、はしゃがない。お茶らけない。リアクションをとらない。それが俺という人間。だから、今日も不愉快さを全開にする。苛々しながらタバコをふかす。

とにかく気分が悪い。心が最悪に澱んでいて、周囲に吐き散らかさないようにするのがやっと、という感じだ。負の感情が暴発してテーブルを破壊してしまいかねない。この場で絶叫して苛立ちを唾液と共に吐き散らかせば、多少は心中のもやもやを解消できるかもしれないが、そんな醜態を晒すくらいならストレスで胃に大穴を開けた方がマシだった。

啜えタバコに火を着けて大きく煙を吸い込むと、ニコチンが全身に染み渡っていき、心の中で熱く燃え盛る鬼火を鎮火してくれた。すーっと苛立ちが覚めていく感覚。別段、問題が解決したわけではないから落ち着いても意味はないが、負の感情に支配されているよりも心穏やかでいた方がいいに決まっている。

ふーっと紫煙を吐き出し、珈琲を一口飲み込んだ。どうやら、意識せずに缶珈琲のプルトップを開けていたらしい。注意力が散漫になっているようだ。良くない傾向である。早急にニコチンを過剰摂取せねば。

俺は啜えタバコのまま、ガラス窓の外に広がる構内の景色をぼんやりと眺めた。

現在の俺が選べる選択肢はただ一つ。

手持ちの金がなく、銀行でも降ろせないというなら、金を使わなくても済む場所へ非難すればいいのだ。

それはつまり、実家へ帰る、という選択肢だ。

実家に帰れば、衣食住の全てが無償で手に入るだろうし、上手くすれば現金も手に入れられる。しかも、ゴールドデンウィーク期間だけ我慢すればいいのだ。自分の部屋に引き籠もって家族と接触する機会をなるべく減らせば、一人暮らしとそう変わらない環境を作れるかもしれない。

いや、駄目だ！

実家に帰ったりすれば、必ず新しい家族と顔を合わせる。会えば即ち会話が派生する。下手をすると一緒に食事をさせられかねない危険を孕んでいる。そんな状況に陥ったら、平常心を保てるかどうか……：我ながら怪しい。義母や義妹に暴言を吐き、家庭内暴力に及んでしまう可能性がゼロではない。

こりゃ、玲佳か左右良にでも金を借りた方がマシかな、と危機回避計画を内心に立案するが、即座に却下した。気心の知れた人間が相手であっても金の遣り取りをしない、と中学生時分に誓ったのだ。今はそんな綺麗事をのたまっている場合ではない緊急時だが、誰しも譲れない自分ルールがある。金の貸し借りをするくらいなら、実家に帰って新しい家族と対面した方が数段マシだ。心の誓いを破る行為は、自己崩壊に繋がる危険性との二者択一であったとしても、選べない選択肢であった。

はあ……憂鬱だ。

消費者金融で寒い懷を暖めてくるか？

愛車を売りに出すか？

それよか、左右良の家に転がり込むか？ そうすれば、自尊心は傷つくけど急場は凌げるぞ。

そんな情けない思考を働かせてタバコをふかしていると、階段が上がってくる一人の女の姿が目についた。その女は真っ直ぐに、このテーブルへと歩み寄ってくる。

「こんちゃーっす、天園君。どしたのかな、そんな気難しい顔しちやあって？ きみ、普段から無愛想顔だけどさ、今日は輪をかけて辛

臭い顔じゃん。特別仕様？何か悩みごととかあるの？あるんなら、どうぞこ話しちゃってよ。この信頼度百二十パーセント超えのお姉さんが優しく相談に乗ったげるよ」

そう言っただけの席に座った女は、クラスメイトの色嶺左右良だった。テーブルの上にコンビニのビニール袋を乗せて中身を取り出しながら、俺とは正反対の愛嬌特盛りの笑みで口元を飾っている。どうやら、構内で俺の姿を見かけて後をついて来たらしい。

「ぶすーって怖い顔して外なんか睨んでも悩みは解決しないぞっ。ほらほら、こっち見てよ、天園君。こんなに美人のお姉さんが誠心誠意、親切に慰めてあげるって言ってるんだよ。嬉々として愛の告白するぐらいの甲斐性を私に示して欲しいなあ」

相変らずのテンション。光のエネルギーが満載。だから、影はより濃くなる。

「はあ……陰鬱になってきた。」

「なあ、左右良」

俺は眉間に深くシワを寄せ、左右良を視界に捉え、思いつきり睨んだ。

しかし、彼女は至って笑みを崩さず、可愛く小首を傾げて俺の言葉を待った。

「前から言ってるだろ。俺を苗字で呼ぶな。名前で呼べって。陽影でいいんだ、陽影で！次に苗字で呼びやがったら、左右良との縁を即座に断つからな。いいな？」

「うい。了解してますですよ陽影。おーっと、呼び捨てにしちゃいました。ちょっと馴れ馴れしかったかな、陽影君？うんうん、陽影君……陽影君かあ。こんな風に名前で呼ぶと、私の中できみの存在がうなぎ登りに特別な存在へと昇華しちゃうみたいで正直言うと危ないんだよね。きみがどんな意図を持って私を左右良って名前呼び捨てにしているかわかんない……ってわけじゃないけどさ、私の方は確固とした意図に基づいてきみを苗字で呼んでたんだよ。だから、きみに名前で呼べって強制されちゃうと、ちょっと戸惑っ

ちやうんだよね。小躍りしたくなるくらい嬉しくなっちゃうってやつ」

「何馬鹿言ってたんだ、左右良」

俺はぶっきらぼうな口調で言った。でも、全身を蝕んでいた不愉快さは影を潜め、何だか可笑しな気分になっていた。

思わず苦笑しちまう。

目の前にいる色嶺左右良という女は、現在の俺にとって、とても重要な人物である。大学に進学してから友人関係を築いた数少ない人間の中でも、ずば抜けて相性の良い女だ。恋愛感情を一切挟まず、腹を割って話し合える稀有な存在なのだ。親友などという安易な単語では表現したくないが、恋人ではないし、友人と呼ぶには親し過ぎる。無理に表現すると《姉貴》だろうか。俺にとって彼女は、大學生生活が無難に過ごす為のアドバイザーであり、精神安定を図る為の良薬であり、普通の人間である為の導き手であった。同学年ではあるけども、年は彼女の方が一才年上なので、お姉さんぶられても腹は立たない。自らを美人と称するほどに秀でた容姿の持ち主だし、俺は色嶺左右良という存在を結構気に入っている。

「手っ取り早く言っちゃうと、きみのことが好きなんだよ。一分一秒毎に想いが募って、もう恋心が山積しちゃってるって感じ。ちょっとは構ってくれないと、そのうち土砂崩れが発生しちゃうぞっ。なーんて、あははは。まあ、私のことはほっとしても大丈夫。片想いのままで満たされなくても、絶対に浮気しないよ。今は私よりもきみの悩みだよ。陽影君、きみ、何か悩んでるんでは？ 眉間に深い溝を作ったりして窓の外を睨んでる姿、あたしは見たくないな。きみが不機嫌さをそこまで明確に表すなんて珍しいもん。相当の厄介事でしょ？ だから、私に打ち明けてよ。きみを不快にさせてる原因は何？」

左右良はサンドイッチを二つと珈琲牛乳をテーブルの上に並べながら言い、手始めに玉子サンドの封を切った。二切れある内の一つを摘み出し、口の中へと運ぶ。ぱくつと四分の一ぐらい頬張り、も

ぐもぐと咀嚼する。

美人という種類の女性は何をしても絵になるものである。特に左右良は掛け値なしの美人さんだ。外見的には純和風の太和撫子。でも、内面は真逆。他人の迷惑を省みずに騒ぎを起こし、独り善がりの自己満足に耽るお転婆娘である。とにかく元氣一杯。年上のお姉さんには見えない弾けっぷり。しかも、極度の偏食家。好き嫌いは食物だけに留まらず、人間にも反映されている。そういう変わり者なので、少しばかり下品な言動に及んでも許せてしまうのだ。

無論、左右良は下品な女ではない。

滲み出る気品と深い教養。広い知識とそれに裏打ちされた揺るぎない自信。幼さを僅かに残した未熟な色香。それらが色嶺左右良という女を魅力的に装飾している。

答えないままに左右良を見据えていると、彼女は食べかけの玉子サンドを片手に、俺の目を見つめながらにこつと笑った。

「にらめっこしたいの？ 私をじーっと見つめたりしてさ。よーし、勝負だよ。負けないぞおっ！ じゃなくて？ あ、もしかして、今更ながらに私の類い稀な魅力に気づいて、目が離せなくなっちゃってるのか？ 思わず見惚れちゃうくらい惹きつけられてるとか？ そうなら嬉しんだけどなあ。そうじゃないよね？ うーん、本当にどうしたの？ 悩みを打ち明けてよ」

「……………」
苛立ちの原因を左右良に打ち明けるべきかどうか、俺は一瞬迷った。大学生活や人間関係などに問題が生じた時、自分自身の能力では対処できなくなった場合において、俺は彼女に相談を持ちかけていた。その都度、彼女は親身になって話を聞いてくれたし、適切な解決方法を授けてくれた。まあ、その際の親切ごかした説教は余計なお世話だったが……。俺にとって色嶺左右良は、優秀なカウンセラーであると同時に有能なアドバイザーでもあるのだ。必要不可欠な存在だと断言できる。彼女なしの生活を想像すると、ぞつとしたいくらいに心のケアを一任してしまっている。それゆえに、彼女は

俺の大学生活を完全に把握していたし、中学、高校時代についてもある程度聞かせていたので、今更家族の恥を隠しても弊害があるとは思えなかった。

「だけど、俺は言いよどんだ。」

不貞腐れたように両手をテーブルに投げ出し、べたべたと突っ伏す左右良。

「なんだよもうっ！ 私になんか話せない悩みごとなの？ それは少し寂しいぞっ、陽影君。一ヶ月前の入学式の日運命的な出会いをして以来、今日まできみの抱えていた悩みを聞き、相談に応え、より良い解決方法を教授してきた私に対して、話せない悩みがあるなんて悲し過ぎると思わないの？ もうっ！ なんで今日に限って沈黙を守るかなー。怒りを通り越して興味が湧いちゃうよ。ほんと益々打ち明けて欲しくなっけきちゃった」

「別に言えなくねえよ」

俺はつつけんどんな口調を用いた。

左右良はにーっと笑った。

「そんなら聞かせてよ、陽影君」

「仕方ねえなあ……」

左右良には隠しごとはしたくない。

俺は口の端を僅かに歪め、タバコの煙りを大きく上方へと吐き出した。

「金がねえんだよ。連日の花見大会と飲み歩きで使い切っちゃった。そしたら、今日になって銀行が使い物になんねえっていうんだから、どうしようもねえ。現在財布の中身はゼロさ。ちなみに、この缶珈琲で残りの小銭も使っちゃった。もう、どうにもなんねえってこつたな。sonだから、ここで途方に暮れてたってわけだ」

俺が打ち明けると、左右良は心底不思議そうに目を瞬かせて小さく首を捻った。

「お金がないって……こらこら、陽影君。そんな平凡で単純で下らない馬鹿げた理由で不機嫌になっけたの？ それは、一応の原因で

はあつても、悩みの核心部分じゃないよね？ きみがその程度の逆境で私に隠し事するわけないもん。つてことは、きみ、この大親友である色嶺左右良に対して嘘を吐いたの？ そういう解釈で正解？

誤解だよな？ そんな馬鹿げた正解は二秒後に否定してくれちゃうよね？ うん、ない。絶対にあり得ない。きみは私に嘘を吐くような大馬鹿者じゃないから。つまり、銀行が使用不可能になったせいで財布がすつからかんになっちゃったことは、現在きみが抱えている悩みとは直接関係していない、と断言できちゃうわけだね。お金の件は間接的要因だよ。直接的要因は……何なのかな、陽影君？」

左右良に見通され、俺は紫煙混じりの溜め息を吐いた。いつもながらに、あつさりと心を見透かされちまってる。俺の心など左右良にとつてはガラス張りのスケルトンルームなのかもしれない。誤魔化しの通じる相手ではないのだ。俺としては、大学外のプライベートには首を突っ込んで欲しくなかったが、隠す必要を感じないのも事実なので、素直に打ち明ける覚悟を決めた。

「家庭の問題なんだ。だから言いづらい」

「家庭の問題？ あ、そつか。なるほど、よくわかったよ。きみが躊躇した理由、ちゃんんと理解しました。でもさ、陽影君、そうなら尚更に相談して欲しいんだよね、私としては！」

左右良は怒った風に言つて、人差し指で俺の顔を指す。

「きみの悩みのつてのは、金欠状態だからゴールデンウィーク期間中、実家に帰らなきゃなんなくなつたつてことでしょ？ 私とか玲佳さんにお金を借りるつていう選択肢より、実家に帰る方を選んだんだよね？ きみつて、お金の貸し借りについて、ある種の固定観念をいだいている偏屈者だもんね。そして、実家に戻れば否がおうでも両親と顔を合わせちゃうつてことで、きみはそれに耐えられないつてわけだ。私と同じく、きみは両親に対して表現不可能なくらいの激烈な憎悪をいだいているもんね。お金がなくて生活できないけど、両親とも会いたくない、つていう悩みで板挟みになつている状態だね。だから、ここで苛々しながらタバコをふかしているんだよね？

「違う?」

左右良はさもわかったような口振りで言った。俺の家庭環境と現在置かれている状況から推測したのだろう。良い読みをしている。その程度なら一瞬で分析できる能力を所有しているのだ。褒めてやってもいい。でも、完全じゃない。さすがの左右良でも、親父の再婚までは想像できなかったのだ。それは、千里眼の持ち主でもなければ知り得ない情報なので、知らなくて当然だろう。想像できる範囲じゃなかったというだけである。

俺はちよつと可笑しくなって、口許に小さな笑みを刻んだ。

「あ、こらっ、陽影君。いやらしく笑ったりして、感じ悪いぞっ」「悪い、謝る」

俺はすぐさま謝罪して、今度は完全な笑顔を浮かべた。

なぜか左右良は慌てて目線を逸らし、一呼吸の間を置いてからこっちを見た。

「左右良の推測は適確だ。それを、改めて実感したよ。でも、重要な情報を知らなきゃ正確な読みはできないってわけだな。完全には間違っちゃいないが、肝心なところでズレちまってる」

「うい。推測の間違いは、きみの反応を見て察したよ。でもさ、私だって人間なんだから、的を外すこともあるんだよ。それを笑っちゃ駄目でしょ? それに、間違っただのは、私が無能だからじゃないもん。それはわかってるんでしょ? 私が間違っただのは無能じゃなくって情報不足。必要な情報をきみが与えてくれないから誤答を導き出しちゃったんだよ。きみが意地悪だから……って言い訳はしたくないけどさ。私としては、もう少し情報を与えて欲しいんだよね。想像力の飛躍で無知を補う手法もあるけど、きみを不愉快にさせちゃう可能性が高いから、思考から排除するしかなかったんだよ。だから、情報を教えて欲しいな。あ、それよりも、率直に悩みを打ち明けてくれる方が嬉しいぞっ」

左右良はそう言って、手にしていた玉子サンドの残り部分を口に入れた。続いて珈琲牛乳のパックにストローを差し込み、口に咥え

てちゅーつと吸い込む。

俺もタバコの煙りを吐き出し、缶珈琲に口をつけた。

「情報を教える。親父が晴れて再婚した。それで、新しい母親と一緒に新しい妹までできた……ってことだ」

俺が極めて簡潔に最低的家庭状況を説明すると、左右良は大きく頷いて、テーブルの上を手の平でとんと打った。

「どうやら、正解を導き出せたようだ。」

「あははは。駄目だよ陽影君。そこまで説明しちゃったら、クイズとして成立しないよ。ヒントは小出しにしないで、視聴者はそっぽを向いちゃうぞつ。でも、なーるほど、噂に聞くお父上が再婚しちゃったのか……。そっかそっか。きみが不機嫌になっちゃった理由がよくわかるよ。つまり、きみはお金がなくなって実家に避難する必要を覚えたけど、新しい家族と顔を合わせたくないから、こここでぐずって時間を潰してたんだね？ 義理の母親と妹に会いたくないっていう心情は、私にも似た経験があっただけに理解できるよ。でも、それはきみにとって避けて通れない壁なんじゃないかな、と私は思う。今日帰らなかったとしても、いずれ実家に戻って新しい家族と対面しなくちゃならない時が必ず来るだろうからさ」

「そんなことは百も承知してる」

「うい。承知してて当然だよ。きみって笑えるくらいの捻くれ者だけど、お利口さんだから、やるべきこととやらなきゃならないこととの区別はしっかりつけられるもんね。嫌なことを先延ばしにしたりしない男だよ。だから、好きなんだ。でも、そうならそうで、こんな所でタバコなんかふかしてる場合じゃないよ。さっさと実家へ戻らなきゃ。私が急ぎ立てるのは筋違いで、とんだ迷惑行為なのかもしれないけどさ、必須事項は早目に済ませちゃった方がいいと思うんだよ。新しい家族だつて宇宙人じゃないんだから、言葉が通じれば心も通じる。きみは当たり前障りのないコミュニケーションが巧みだから、容易く新しい家族と打ち解けられるでしょ？」

「まあな……」

俺は呟くように応じた。

しかし、左右良は首を左右に振った。

「いや、きみ、全然わかってないよ。自分の置かれてる状況を正しく捉えてない。理解してたら、ここで無駄に時間を費やしてないはずだもん。今頃、一目散に実家へ向かっていなきゃ変だよ」

左右良は人差し指を俺の鼻先に突きつけて言い、残りの玉子サンドを手に取った。そして、がぶりと齧りつきながら話し続ける。

「あんまり帰るのが遅れると、きみの敬愛してやまないご立派なお父上が勤め先の病院から戻ってきちゃうんじゃないかな。きみが帰った際に、義母と義妹と一緒に、お父上が出迎えたりしたらどうするの？ それって、きみにとって好ましくないシチュエーションでしょ？ お父上に新しい家族を紹介されるっていう屈辱、きみは我慢できるわけ？ それに、最も恐れなくちゃならないのは、再婚した言い訳をお父上の口から直接聞かされることじゃないの？」

左右良が美女にあるまじきはしたなさで、口をモグつかせながら言った。

その言葉は、俺の胸をしたたか貫いた。

全く、左右良の言う通りだった。再婚の理由を親父の口から直に聞くなど、一秒とて耐えられるものではない。まさに拷問だ。ヘタをすると、我を忘れて家庭内暴力に及んでしまうかもしれない。俺は親父に対して、言葉で表現できないほど、負の感情をいだいているのだから……。

「左右良の助言はいつもながらに適切だな。俺としたことが全然わかってなかったよ。親父なんかに会っちまったら、その瞬間に殴り倒しちまうかもしれん。言い訳なんかされた日にゃ、ナイフかなんかでさくつと刺しちまうかも。でも、それは、親父が家に帰ってきたら、という仮定の話だから、その点について俺はあまり心配してない。新婚……っていうか、再婚一ヶ月目ってことで、親父がちゃんと家に帰ってる可能性がなくもないが、その確率は百万分の一程度だぞ。俺は親父の頭の悪さを正確に理解してるからな。釣った魚

には餌をやらない男なんだ。餌をやらないどころか、他の魚に餌をばら撒くような糞野郎だ。だから、ゴールデンウィークともなれば、お気に入り看護師さんと温泉にでもしけ込んでいること間違いないさ。家に帰ってる可能性は五パーセントもない」

俺が唾を飛ばす勢いで捲し立てると、左右良は口一杯に頬張った玉子サンドを珈琲牛乳で流し込み、苦笑じみた表情を浮かべた。

「きみのお父上は筋金入りの遊び人なんだな。あははは。おっと、笑っちゃマズイか。でも、すると、きみって男は、お父上を反面教師にしてるから、恋愛に対して積極的になれないんだね？ うい、うい。私としては、それはそれで嬉しくもあり、悲しくもあるけどね」

左右良はティッシュで口を拭い、珈琲牛乳のパックを指先で弾いた。

「パックのジューズって安いから重宝するけどさ、量の少なさが不満点だね。そう思わない？ 思わないの？ あ、そう。で、どういう理由できみは実家へ帰らないの？ 新しい家族に会う必要性を認めてて、お父上が帰ってこないと確信してるきみが、どうしてこんな所にいるのかな？ 私はこの会話してる時間を至福の喜びとして噛み締めてるけどさ、きみはそうじゃないでしょ？ 今のきみは、実家に帰りたくないからって私と会話して、ちよっとでも時間を無駄に使うって、一秒でも嫌なことを先延ばしにしようとしているようにしか見えないよ。さっきも言ったけどさ、きみは愚か者じゃないんだから、やるべきことはやるよ、陽影君。そうすれば楽になれるよ。それとも、きみは、実家への第一歩を踏み出せない臆病者なの？」

左右良は微妙な嘲りを含めて言い、挑発的な笑みを浮かべた。

何とも耳が痛い言葉である。彼女の言う通り、俺は臆病になっっている。実家へ帰るつもりなのに、第一歩目を踏み出す勇気が持てないのだ。

くそっ！

「今の俺は愚かな臆病者だ。左右良の言う通りさ。馬鹿にして罵って蔑んでくれてもいいぞ。甘んじて受ける」

俺はガラス窓の外へ視線を逃し、タバコをふかしながら弱々しく笑った。情けないが自虐的にならざるを得ない心境だった。

左右良はそんな俺に手を差し伸べた。テーブルの上に身を乗り出して手を伸ばし、俺の頬に添えて、外の景色から自分へと強引に視線を戻させる。

彼女は微笑んでいた。まるで、母親か姉のように、包み込むような優しさがあった。

「この私が、きみのことを大好きな私が、馬鹿にして罵ると思う？ 思ってるとしたら、それは大きく誤った認識だよ。私はきみを叱咤激励しこそすれ、罵詈雑言を浴びせかけるような口なんか持っていないんだから。きみに対する好意は、他の凡庸で恥知らずな見掛け倒しの女なんかより、数段格調高くて何倍も純粹なんだからね！ それを踏まえた上で聞いて欲しいんだよ。私からの忠告を」

左右良はまた人差し指を俺に向けた。

「今すぐ席を立って車に乗り込んで、実家に帰りなさい。自分に対する誤魔化しは、みつともないだけで、良い結果を生み出さないよ。臆病者のフリをしてないで行動しなきゃ駄目。それが一番正しいと思う。何より、自分の生き方に背くのは止めて欲しいんだよ。それとも、この場合は、一度きみの頬を引っ叩いて正気に戻してから、無理矢理に席を立たせて送り出した方が踏ん切りがつくのかな？」

お姉さんばい口調で言いながら、左右良は平手打ちをするように手首のスナップを利かせて素振りをして見せる。

笑顔なところが怖い。まあ、こいつぐらいの美女なら殴られてもいいかな、と思ったりする。いや、人目のある場所では恥ずかしいか。それに、冗談だとわかってるので制する必要もない。

俺はタバコを灰皿に押しつけて火を消し、肺に溜めていた紫煙を全て吐き出した。

「しかたがねえ、帰ることにする。でも、その前に、助言を一つし

て欲しい」

「うい。どーんと私の貧相な胸に飛び込んできなさい。どんな相談にでも乗っちゃうから。そしたら、いつものように全知全能を駆使して解決してあげるよ」

左右良はにこーっと笑った。

実に良い女である。頼りになるし、頼り甲斐がある。たぶん、俺の人生で唯一信頼できる存在だろう。

だが、色嶺左右良についてはあまり良い噂を聞かない。愛想は良いくせに、癖が強過ぎて近寄り難いので、クラスメイトに受けが悪く、誰とも親しくないのだ。男を誑かして金を貢がせているとか、中学生の頃から援助交際に手を染めているとか、肉親と不適切な関係にあるとか、耳障りな情報がまことしやかに囁かれている。でも、全く気にしていない。もしそれが全て事実だったとしても、左右良を責めたりしない。彼女が俺の心に入り込んでいるほどには、俺は彼女の心に入り込みたいとは思っていないからだ。

「要は、妹のことだ。俺がこれほどナーバスになってるのは、義理の妹と対面した時、どんな会話をすれば良いのか全くわからないからなんだ。親父と義母のことはいい。再婚は本人同士の決定だから俺に憎まれても文句を言えないし、それだけの覚悟があるんだろう。勿論、俺は理性的な人間だから、女性に当たり散らして、これ以上最低の家庭を最悪にしようとは思わない。そりゃ、少しは皮肉を言っちゃうかもしれないけど……相手はそれを承知した上で再婚したんだろうからな。でも、妹は違う。新しく妹になる女の子は、母親にくっついて来ただけで、俺の妹になることを強制された被害者なんだ。俺と同じなんだよ。兄妹になっちゃう俺たちには何の罪もないんだ。怒りや憎しみの対象にするのは全くの筋違いなんだよ。そうだろ、左右良？ だったら俺はどうしたらいいんだ？ どう接すればいいと思う？ この変な感情をどう処理したらいいんだ？」

「なるほどねー。きみの悩みは理解したよ。だけど、それって、そこまで悩む問題？ きみは、最低の家庭を基準にして、最悪の家族

を想像してるんじゃないの？ それは短慮だと思うよ。きみのお父上が最低の父親ってことは聞いてるし、それは事実なんだろうね。でも、義理の母親と妹には、まだ一度も会ってないんでしょ？ 面識がないどころか名前も知らないんでしょ？ それなのに、どうしてきみは彼女たちを最悪と決めつけちゃうのかな？ 今までの辛酸を舐めさせられてた境遇がそう思わせちゃうの？ それとも性格的な障害？ 何にしろ、きみは彼女たちの存在を好意的に受け入れて最良の人物像を思い描いてみるべきなんじゃないかな？ 今年からポジティブに生きていく、という決意が本物だったらできるはずだよ」

左右良ができの悪い弟を諭すように言った。

「それは考えなかったな……。新しい母親はともかく、妹の方はマトモな女の子かもしれない。確かにそうだ……」

「うい。母親はともかく、ってきみは言うけどさ、その母親にしても、実際には気立てが良くて常識的思考の持ち主かもしれないよ。両者共に美人の可能性だってあるでしょ。そう考えれば、自宅に帰るのも満更悪くないんじゃないかな？ 色々な意味で」

左右良は小悪魔的笑顔を作って言った。

うーん。美人の母親に美少女の妹か……。悪くない。悪くはないが、家族の容姿が家庭の円満に直結する条件にはなり得ない。重要なのは、見目形じゃなくて人間性だ。外見で言うなら、親父と実母は申し分のない美貌の持ち主だったのだ。でも、家庭は最低だった。はつきり言つて、義母は不美人を望みたい。あの親父が選んだ女性だけに、凡庸な容姿であるわけがないけど……。

「新しい母親は美人さんに間違いないな。親父が再婚してまで手元に置いておきたいと思う女だからな。そこまで独占欲をいだかせる女が平凡な容姿であるわけがない」

「それなら益々楽しみじゃん。母親が美人ならその娘も美少女ってわけだし、きみと同じで両親の離別と再婚を経験してるんだよ。ってことは、恋愛も、きみと同じで積極的じゃないって推測できるわ

けだよ。つまり、ぴかぴかの処女の可能性が高いんだよ。これは男の子にとって生唾もののシチュエーションなんじゃないの？ 血縁外の美妹と一つ屋根の下……うはうはじゃん」

「阿呆う！」

苦笑するしかない。

俺を近親相姦というフレーズで興奮する変態どもと同列に扱うなと怒鳴りつけてやりたいが、感情を剥き出しにするのは俺のスタイルじゃないし、相手が左右良なので怒りは心頭に発しなかった。

左右良は無反応者を苦笑させることに成功して満足感を得たのか、鼻歌混じり（こいつは酷い音痴）に玉子サンドを口に放り込んだ。だが、突然、ごふっという異音を発して口を押さえ、激しく咳き込み始めた。

「むぐう！ マ、マスターが……ごほっ、ごほっ！ おえーっ……最悪だよお」

舌を出して悲鳴を上げる美女。

サンドイツチに毒でも混入されてたのか、と一瞬心配したが、マスターの塊を味わっただけなら杞憂だ。俺が缶珈琲を差し出すと、左右良は引っ手繰るようにして口へと運び、がぶっ飲んで、ほーっと安堵の息を吐いた。でも、吹き出した咀嚼物と涎と涙と鼻水で抜群の美貌が台無しになっている。マスターは美女の敵なんだなと馬鹿な思考を働かせつつ、ハンカチを取り出して手渡してやった。「うい。さんくす、陽影君。こういう男の子らしい優しさを示してくれたのって初めてだよ。だから、すっごく嬉しいよ。恥ずかしながら、甘やかな幸福感ってやつに浸っちゃってる。ほんと、きみは、際限なく私の心を絡め取るのが上手いよね。絡め取っておいて放置プレイだから性質が悪いと言うか意地悪というか、私の女心を玩んでどうしたいのやら……。あはは。ま、いつか。このハンカチ、ぐちゃぐちゃになっちゃったから、念入りに洗って返すよ。それとも、左右良さんの噴飯記念としてプレゼントしてくれちゃう？」

左右良は汚れたハンカチを両手で遊びながら訊いてきた。

俺は簡単に頷いた。

「そんな物、くれてやるよ。一応ブランド品だけど、大して高い物じゃねえから気にすんな。ハンカチ一枚で左右良が喜ぶっていうんなら安いもんだ」

「ありがと、大切にするよ」

左右良は礼を述べ、手にしていたハンカチをテーブルの上に置き、違う種類のサンドイッチに手を伸ばした。

ツナサンドである。

「あ、陽影君、一つ食べる？」

余程、物欲しそうな顔をしていたらしい。左右良がツナサンドの一切れを分け与えてくれた。俺は性格上の問題から即座に拒否したが、それを熟知している彼女にもう一度強く勧められると、渋々ながら……という体裁を繕ってツナサンドを受け取った。実は今日、前述の理由により、朝から何も食べていなかったのだ。金さえあれば、今頃は下の食堂でチキンカツ定食か天ザル蕎麦を食べていただろう。俺は彼女の心遣いに内心で感謝しつつ、ツナサンドに齧りついていた。

「陽影君、それを食べ終えたら、真っ直ぐ実家に帰るんだよ。いいね？」

左右良は口をモグつかせながら、家出少年を諭すように言った。

「そのつもりだ」

俺はそう答えて意思を明確に表わした。

「うい。良い返事だね。覚悟を決めたってことかな？ ういうい。それでこそ天園陽影だよ。優柔不断はきみらしくない。決断してから行動に移るまでの速さが、きみの持つ長所の一つだと思っただよね。それをいつまでも大切にしたいな」

「ああ」

俺は短く答え、缶珈琲に口を着けて残りを一気に飲み干した。

【2・天園陽影】

俺が新しいタバコを取り出して口に咥え、火を着ける様子を見て、左右良はむっと口をへの字に曲げて不快感を示した。どういってもりだ、と言うように睨みつけてくる。

「こら、陽影君、何をしてるのかな？ 発言と行動が酷く矛盾してるみたいに見えるけど……これって目の錯覚？ 私が分けてあげたツナサンドを食べ終えたら、実家へ車を走らせるって約束したのに、あれは嘘デタラメだったとか？ もしかして幻聴？ 何にしても、腰を落ちつけたままで新しいタバコに火を着けるのは、言語道断の裏切り行為だよ！」

左右良は珈琲牛乳のパックを手に厳しい口調で言った。

怒っている。

そりゃ、怒るか……。

「俺は左右良が食べ終わるのを待ってんだよ。今日、午後の授業はもうないんだろ？」

俺はぶつきらぼくに訊いた。

左右良は吃驚したように目を見開き、小さく頷く。

「うい。きみの言う通り、今日は午前の授業だけで午後は何の予定もないよ。でも、それときみがタバコを吸うってことにどんな関係が……あ、そっか……きみは親切にも、私を自宅アパートまで車で送っていつてくれるつもりなんだね？ うわあ、感激だなっ！」

左右良は俺の考えをすぐに察し、満面の笑顔で歓喜の万歳三唱した。

おいおい、周囲から注視されてるぞ。羞恥心は皆無か？ 感情表現は控え目にお願したいものだ、と心の中で訴える。その思いが通じたのか、彼女は一転して表情を曇らせた。

「きみの申し出は万歳しちゃうくらい嬉しいよ。本心では厚意に甘えたい。でも、きみの行動を妨げたくないから、断腸の念を禁じ得

ないけど、泣く泣く拒否するよ。本当は、きみの愛車であるあの黒いジャガーに乗せてもらいたい気持ちで心が離反しそうになってるんだけどね……。ジャガーの助手席に座る権利を持つのは、きみの恋人である玲佳さんだけ。その鉄則を曲げてまで私を送ってくれるっていうきみの心優しさと気配りには感謝の言葉にキスを添えたいくらいだけどさ、きみの決意を鈍らせてしまうマイナス要因になるくらいなら、私は心を鬼にして、きみの優しさを拒絶するよ。幸い、私って、きみよりも心が頑丈にできてるから」

左右良は心臓発作を起こした患者みたいに、左胸を押さえて言った。

玩具を取り上げられた子供みたいな顔をしている。そんな顔するくらいなら、素直に応じればいいだろうに。こいつは、余計な気遣いしやがって……。

俺はタバコの煙りを吐き出しながら、「そんなに深刻に考えるんじゃないやねよ」と呟いた。

「大袈裟なんだよ、左右良は」

「大袈裟じゃないよ」

左右良は理知的な美貌に堅い意思を示して、俺を見据えた。

意志の強さというか、一度決意したことを覆さない頑なさは、俺に匹敵するレベルである。思い込んだら、自らの理が覆されるまで己の意志を貫き通す。致命的なまでの頑固者。他者の意見を聞き入れる柔軟さは持ち合わせているけど、自分が納得できなければ排他的なまでに受け入れようとしない偏屈者。長所ではなく短所。間違はなく欠点だ。まあ、似た者同士だが、その性格は嫌いじゃない。

「いや、大袈裟だぞ、左右良。俺はもう実家に帰る決断してるんだ。そのついでに送ってやるって言ってるだけだ。もっと簡単に考えろよ。他の誰でもない、俺が言ってるんだぜ？ 俺の厚意をおかしな思い込みで蹴るようなマネはすんな」

「でも……」

「デモは却下だ。それ以上下らん戯言を吐くなら、もう俺と左右良

の付き合いはお終いだ。ご破算だぞ。そう肝に命じて返答しろよ。どうする、左右良？」

「冗談ばく口の端を歪めて言っているが、俺は本気である。基本的に冗談など言わない。面白味ゼロな人間なのだ。ジョークの類いも口にしないし、ギャグを吐くなど以ての外だ。口が裂けて内臓が引っ張り出されても、内臓がないぞお……などとは言わない。ただ黙って死ぬだけである。それを、左右良も承知しているので、俺の言葉が単なる脅しでないと理解しているはずだ。

「うー。しょうがないなあ。それじゃ、きみのお言葉に甘えさせてもらっちゃおうかな。私のアパートはこの大学からそんなに遠くないんだよ。方角も正反対じゃないから、時間は取らせないと思う。うー、でもさ、そういう脅迫じみた言い種はフェアじゃないと思うんだよね、陽影君。嬉しいけど哀しいっていうか、拒否権を行使できないやり口には反発を覚えざるを得ないよ。はあ……。複雑な溜め息だねー。きみの優しさは、時として私を甘く切なく苦しめるよ。なぜだか、ちょっとばかり悔しいんだなあ。なぜだろう。いや、理由は理解してるけどさ。これ、認めたくない感情ってやつかな？ あははは。まさしく、きみと同様に、私も心を病んでるって証拠だよ。あははは」

「軽快に笑い声を上げる左右良。

釣られて俺も微笑み顔を作った。

すると、左右良はまたしても視線を逃がし、少し間を置いてから戻した。顔が赤くなっている。何のつもりだろう。俺の笑顔が笑いを堪えなきゃならないくらい変だとも言うのか？ 失礼な奴だ。俺はすぐに表情を消して持ち前の仏頂面を再構築した。

「……………」

左右良はそんな俺の表情から何かを読み取ったようだが、一瞬頂垂れただけで何のコメントもしなかった。彼女が口にしたのは、俺の愛車ジャガーについてだ。

「しかし、私も短期間で随分と出世したよね。一ヶ月弱の付き合い

で、きみの愛車に乗せてもらえるくらい親密になれたんだからさ。恋人じゃないけど、準恋人って感じの地位に昇格したわけかな？違う？　んーでも、玲佳さんには申し訳ないけどさ、私もきみに好意を寄せる女だから、きみの愛車の助手席に座らせてもらいたいって願うことは罪じゃないと思うんだよ。そうでしょ、陽影君？　彼女はこの事実を知って怒るかな……？」

「そりゃねえな。あいつは怒らねえよ。哀しいかな、あいつは俺以外の人間に対して率先した感情を働かせられねえんだ。そういう風に作られてるからな……。いや、あいつのことはいい。左右良が気にすることじゃねえ。それよりも、ちゃっっちゃと食っちゃまえよ」

「うい」

短く答えた左右良は残りのツナサンドを口一杯に頬張って忙しく咀嚼し、珈琲牛乳をじゅーっと吸った。急いで食べてくれているのだろう。味わう様子もなく、涙を溜めて苦しげに口内の物を飲み込む姿は、どこか被虐美に通じる儚さがあり、俺にそこはかかない罪悪感を覚えさせた。

「そこまで慌てて食べなくてもいいんだ。急かした俺が悪かったよ。もつと味わって食べ……って言っても、もう全部食っちゃったか……。俺がこのタバコを吸い終わるまでに食ってくれりゃ良かったんだぜ」

俺の弁解を、左右良は恨めしげに聞きながら珈琲牛乳を飲み干した。少しずつと多少下品な音を立てて最後の一滴まで吸い込み、ストローを挟んでいる唇を放す。そして、ふうつと溜め息を吐いた。

「ご馳走さま。一応、食欲は満たせたよ」

左右良はテーブル上に散乱するゴミ類をビニール袋に詰め込んですぐ後ろに設置されていたゴミ箱へ放り込んだ。そして、唇の周りに付着している汚れを落とすように、舌でぺろつと舐め取る。そうしてから、俺がくれてやったハンカチを大事そうに折り畳んでポケットにしまった。

「はあーい、準備万端でーっす」

左右良は授業中に質問する小学生みたいにぴーんと手を伸ばして叫び、にーつと意地悪い笑顔を作ってみせた。

「あとは、きみがタバコを吸い終わるのを待つだけだね！ これ、皮肉だよ。さあ、ちゃっちやと吸っちゃってよ、陽影君」

俺は苦笑するしかない。まだ半分くらいしか灰にしていないタバコを灰皿に押しつけて揉み消し、肺の中の紫煙を全部吐き出した。

「さあ、行くとするか」

「なんだいなんだい、陽影君。そんな慌てなくてもいいじゃん。タバコ一本吸い終える時間なんかたかが知れてるんだからさ、そんな風に当て付けるみたいに途中で吸い止めなくてもいいと思うんだよ。きみはすんごく意地悪だね。皮肉った私も悪いけど、きみはそれ以上に陰険だ。もしかして、いたいけな私の心を弄って暗い喜びを得てるの？ 大人気ないぞつ、と言いたいな！」

左右良はぶつくさ文句を言いながらも席を立ち、俺の横に並んだ。本日の彼女は、白いブラウスに洗い晒しのジーンズ、ダークブラウンのマントみたいなジャケットを着ている。いつもながらにシンブルでいてお洒落ないでちだ。派手さが無い分、如実に彼女の持つ本質的な魅力を引き出している。だけど、今日もスカートじゃないな……。

俺は左右良がスカートを着ている姿を、出会って以来一度も目撃したことがなかった。何かしらポリシーを持っているのだろうか？ 中学、高校生時代には制服という形でスカートを穿いていたはずだ。それも、膝上何センチという際どいやつだろう。もし俺がスカートの着用を望めば、拒まずに着て見せてくれるだろうか……。下らない願望だが、男として正常で純粋な欲求だと思う。

そんな俺の無遠慮な視線に気づいたらしい。

「陽影君、前もって言っとくけど、私は絶対にスカートなんか穿かないから。そのつもりでお尻とか足をじろじろ観賞してね。あ、でも、もしも死ぬほどスカート姿が見たいって言うなら、きみだけに特別、女子校在学時の写真を見せてあげようかな。抜群に可愛い

制服だったんだよ。自己評価だけど、一見する価値はあるんじゃないかな。あははは。美少女制服マニアなら垂涎で涙ものだよ。でも、制服っていうシステムは最悪だよな。ある意味、ぱんつ丸出しで街中を闊歩してるようなもんだからさ。もう一種のトラウマってやつ。それくらいスカートに対して嫌悪感をいだいている私に、穿いて見せる、なんて要求しないよね？」

できるわけがなかった。

まあ、俺もそこまでスカート姿に執着を持っていない。だから、無理強いはいしない。俺にとつて、色嶺左右良という女が特別である理由は、ひとえにそのずば抜けた理解力である。常軌を逸していた俺を分析して理解し、的確なアドバイスをし、適切にカウンセリングをしてくれた存在だからこそ特別なのだ。外見など二の次……とは言わないにしても、最重要視しているわけじゃない。もし彼女が不美人であつたとしても、俺は今現在と同様の関係を結んでいたと断言できる。

俺たちは二階のラウンジから一階の食堂へと下りていった。

その途中、学食から上がってくる一行と出くわした。

男ばかりの四人組だ。

背格好がまちまちで酷くむさ苦しく、視線を向ける気も起きないくらいにどうでもいい連中だったが、あちらさんは俺たちを放っておくつもりが 아니라しく、四人の中で一番軽薄そうな男が妙に馴れ馴れしい態度で話しかけてきた。

茶髪、こげ茶色の肌、へらへらした笑い、そのどれもが気に食わない男だ……と俺は内心で評価を下した。

「おーっす、天園！ いつもながらの不景気面して実に元気そうだな。それに、色嶺さんともいつも通りに仲良さそうで大変結構ですなあ。二人して上で何してたんだよ？ 人に言えないような淫行ですかあ？ おうおう、そんな風にしかめっ面して不愉快さを全面で表現しなくてもいいじゃねーの。冗談なんだからさー。この程度の

冗談を笑って許せねーようじゃ、世間の荒波を無事に渡っていくことなんてできねーぜ……っておい！ 無視すんなよな！」

俺たちはこの軽薄男の台詞を完璧に無視して、横を素通りしようとした。

肩を掴まれた。

「いつもながらに連れねー奴だな、天園。ちょっとは女以外とも会話しろっつてーの！」

へらへら笑って言う男。

なんて無礼な奴だ。そもそも、おまえは誰だ？ 初対面の相手の肩を掴むなんて、礼を失する行為だぞ……。

ん？ 初対面じゃなかったか？ 四人ともクラスメイトだったか？ うーん、記憶にねえ。こういう輩とは親しくなる可能性が皆無なので、意識して覚えよう思わないし、打ち解けたいとも思わなかった。美人の女性ならともかく、男と馴れ馴れしくして何の得になると言うのか。何のつもりで話しかけてきたのかはわからないが、存在自体がうざったいので、とっととラウンジへ行つて欲しい。しかし、クラスメイトを相手に全くの無視を決め込むわけにもいかないので、俺は奴の言う不景気面を向けた。

「何だ？」

これ以上なく短い返事。

大体、俺を苗字で呼んでいる時点で友人としてアウトだ。親しい関係とは認められない。俺は仲間と認知した相手には絶対に名前と呼ぶように強要しているのだ。これは俺と付き合う上での鉄則であり、不動の掟である。もし苗字で呼ばうものなら、その瞬間までどれほど上機嫌であったとしても、たちどころに不機嫌になり、周囲の状況を考慮せずに不愉快なオーラを全開放するのだ。まあ、左右良くらい俺を理解し、俺を上手くあしらえるなら、苗字で呼んでもさして害はないのだが。

「ようよう、色嶺さん。こいつに何か言っちゃってくれよ。もっとクラスメイトと会話しろっつてさあ。こいつって入学式の時から女以

外と一切会話しない姿勢を貫いてるんだぜ。会話不成立の男っていうか、わざと成立させてねーみてえに、だ。それってぜってーよくねえよ。人類皆兄弟って言うだろ。ぶすーって仏頂面しやがって。会話しろよ会話をよ！ ほらほら、色嶺さんからも言ってくれよ。そうすりゃ、こいつもちつとは心を入れ替えるかもしれねーからさあ」

俺に直接言っても効果がないと察したのか、左右良に訴えかけ始めた。

「やだべーっ」

左右良は簡潔に拒否して、腰を屈めて相手の顔を下から覗き込むようなポーズを作り、右目の下に指を当て、べろーんとピンク色の舌を出した。

なんか、すげー可愛いけど……。容姿にそぐわないアクションである。

「私が道理を覆すくらい巧みな弁舌を駆使しても、陽影君は聞き入れてくれないと思うな。きみはお願いする相手を間違ってるよ。それに、私と陽影君は心通じ合う無二の大親友だけど、私ときみは単なるクラスメイトで友人じゃないよね。まあ、話しかけるな、なんて酷いことは言わないけどさ、際限なく馴れ馴れしくされちゃ敵わない。私たちは会話する相手を選別するんだ」

「なんだよ、色嶺さんまで会話拒否権発動組か？ そりゃ、釣れねえよ。寂しいってよ。俺たちやクラスメイトだろうがよ。会話しよーぜ！ 言葉はコミュニケーションをする上での最強アイテムだぞ。マジックアイテムだ。人類全体がハッピーになれる魔法を使おうぜ。頼むからさあ……って、おい！ 二人して俺を無視すんな！ 話が途中だつてよ！ 下に下りんなつてーの！」

あまりに煩く喚くので、俺は仕方なしに会話を成立させてやることにした。別に、男と喋るのが嫌なわけじゃない。会話が億劫なのでもない。ただ、相手が気に食わないだけだ。まあ、性格は悪くなさそうな奴だから、少しだけ時間を割いてやってもいいだろう。気

に入らないのは、声の大きさと馴れ馴れしさだ。

俺は階段を五段上方へ戻った。

左右良は会話を拒否するようだ。

「いいだろう、おまえの話を聞こう。それで、クラスメイトのおまえが俺に何の用だ？」

「ああ、いや……。改まって訊かれると困っちゃうな……。別段、特別な用事があつて話しかけたわけじゃねえから。ただ、お気楽な会話を成立させて、おまえらと仲良くなるきっかけを作りたいかっただけなんだ」

「……………」

なるほど、そういうわけか。この男が馴れ馴れしく話しかけて来た理由、俺は理解して納得した。要は、俺という人間に興味を持ち、接触を試みて、どんな人物かを判断したいのだろう。迷惑極まりない話だが、変わり者のレツテルを貼られ、奇異の目で見られ、常に遠巻きで観察されている俺は、興味の的なのだろうから仕方がない。これは、子供の頃からずっとだ。珍獣か、俺は？ いや、奇人変人か。

「悪いが、俺は今急ぎの用事があつて、あんまりおまえの相手をしてられないんだ。できれば、また別の機会に話しかけてくれねえかな。ゴールデンウィーク明けとかに」

「え？ なんだ、急いでんのかよ……。それならそうと早く言えばよな」

軽薄男はバツが悪そうに、茶髪を掻き回しながら言った。

「引き止めて悪かったな」

そう詫びて、くるりと背を向け、他の三人と一緒にラウンジへと上がっていった。

やれやれ、大学っていう特殊フィールドは、俺にとって厄介極まりないアドベンチャーワールドだな。精神的に成長しろ、ということとかかもしれないが、成長を強要されるのは苦痛でしかない。

俺は一段飛ばしで階段を下り、下で待っている左右良と合流した。

三分ほどで駐車場に到着した。

「ほら、乗れよ」

俺は駐車場の中央にこれ見よがしに停めてある愛車のジャガーを親指で指し示した。

「うい」

ドアのロックを解除して助手席に乗るように促すと、左右良は一転機嫌を直し、にこにこ満面の笑みで車内に乗り込んだ。

「シートベルトはしっかり締めてくれよ。検問に引っかけた点数減らされちゃ堪んねえからな」

「うい。無論、承知しているよ、陽影君」

俺は左右良がきつちりとシートベルトを締めるのを確認してからエンジンをかけた。そして、愛車を発進させる。

「今日、玲佳さんは？ お休みなの？」

そう訊かれて、俺は他愛なく返す。

「体調が思わしくないんだとさ」

「風邪とか？」

「生理」

「あー、玲佳さん、重症なんだってね。体育の授業の時、先生と話してるのをちらっと聞いたよ。それじゃ、彼女は明日も明後日も大卒には出てこないんだね？」

「ああ。次にあいつと会うのは……たぶん、ゴールデンウィーク明けだな」

「ふーん」

この会話に何の意味があるのかわからないが、左右良は大きく数回頷いた。

色嶺左右良の生活するアパートは大学から一駅離れた住宅街の中に建っていた。時間にして十分もかからない距離であり、都内の交通事情を考慮すれば、バイク通学だと更に時間を短縮できる場所だ。

それなのに、左右良はわざわざ電車通学をしている。自動車の免許を持っていないのに、だ。彼女が言うには、路上を走行させるほどの運転技術と集中力を持っていないから、だそうだ。自動車の免許も身分証明書代わりに使用すると便利だから取ったそうだ。それならばバイクを買えば良いと思うのだが、自動二輪は怖すぎて乗車できないらしい。じゃあ、自転車はどうだと言うと、不埒者が絡んでくる可能性が高いから電車の方がマシ、なのだそうだ。電車は痴漢が出るだろうに……。まあ、人それぞれ、考え方と生き方はバラバラで、勝手気侷なものなのだろうから、俺がとやかく意見する問題じゃない。

俺は愛車を左右良のアパートの前に路上駐車させた。すぐに出発するつもりなので、エンジンはかけっぱなしだ。

左右良は一度ドアを開けて車外に出ようとしたが、思い留まったようにドアを閉ざした。

「？」

どうしたのだろう。

「送ってくれてさんきゅーね、陽影君。この感謝の気持ちは未来永劫忘れないよ。そのうち、私の方から何かお礼するから」

「別に、構わねえさ」

「私は構うの！ 構いたいんだよ。そうだなー、もしきみが実家に帰って新しい家族と上手く打ち解けられなかったら、その時は迷わずここへ来て欲しいな。そしたら、ゴールデンウィーク期間中の食事、ゼーんぶ私が面倒見てあげるよ。ううん、何ならこのアパートに泊まり込んで欲しいかも。うい。まさに、それこそを私は望んでるんだよね」

「そうならないように祈っていてくれ」

「あははは。釣れないなあ、陽影君は」

左右良はけらけらと無邪気に笑い、ドアを開いて外に出た。小走りに車から離れ、大袈裟な動作で手を振る。

俺は応じるように軽く手を上げ、「じゃあ、また」と口だけ動か

して愛車を発進させた。

【3・色嶺左右良】

走り去ってゆく高級外国車が視界から消えるまで手を振って見送り、そこから数を三十まで数えてから手を降ろし、「ちえっ。連休明けまで陽影君に会えないなんてつまらないなっ」と舌打ち混じりに呟いてから、私は自宅アパートのエントランスに駆け込んだ。相性番号を打ち込んでオートロックを解除し、階段を上がって二階の住居へ移動する。途中、すれ違った金髪の年上女性と二、三言葉を交わして好感度を上げておくのを忘れない。アパートの住人との軋轢は緊急時のヘルプを躊躇わせる要因になり得るからだ。まあ、私は当たり前障りないアパート生活を営んでいるから、周囲の反感を買うことはまずないだろう。

私の部屋は《201号室》である。

ネームプレートには《色嶺》の文字。

私はドアに電子キーを差し込んで解錠し、暴漢による襲撃の有無を確認してから、ドアを開いて部屋に入った。カーテンが引かれているので薄暗い。靴を脱ぎ、室内に入って蛍光灯のスイッチを入れ、カーテンを開ける。射し込む陽射し。ついでに窓も開け、室内の換気を図った。下を見やれば、クライム防止のひさしが目に入る。このアパートは女学生向けに建てられているようで、防犯意識は高い。簡易キッチンとユニットバス付きのワンルーム。間取りは十畳。女性が一人で暮らすのに申し分ない広さである。でも、壁の薄さはちよつと気になる点だった。

ガラステーブルの横に荷物を降ろし、上着を脱いでハンガーに掛け、冷蔵庫からジャスミンティーを取り出してコップに注ぎ、クッションにお尻を落として、楽な姿勢をとる。

「さーて、左右良さん、長期連休の空虚な時間を何して消費しようか？」

私は周囲に誰もいない場合に限って、自分自身と会話をする癖が

ある。自分との対話によって孤独を紛らわせる自慰が主な理由だ。そして、何より独り言こそが、両親の暴力によって傷ついた幼少期の私を癒し、父親の性的虐待によってひび割れた小学生時代の私の心を保護し、現実から離別しようとした中学生時代の私を踏み止まらせ、全寮制の女子高に入学するまで家族から脆弱な心を守ってきたのだ。だが、両親が死に、兄が去り、もう脅威はなくなつたはずなのに、この癖は治らない。いや、癖だから治らないのか……。

「左右良さん、小腹が空いてるんじゃない？ お菓子とか、何か軽い物でも摘む？」

提案による自問。

「うーん、間食は乙女の敵ですよ。だから、夕食まで我慢するべきなのです」

少々曖昧な自答。

「そっか。じゃあ、下らないテレビでも見て時間潰そっか？ ワイドショーとかさ」

暇潰しの代案。

「我が家にはテレビなんかありませんよ、左右良さん！」

突っ込みで即座に却下。

「あ、そうだったね。うー。困ったぞ。余暇を有効活用できないのは、つまらない人間の証明だよな？ うわあ、どうしよう！ 左右良さん、ピンチ！」

頭を抱えて危機感を煽る。

「じゃあ、ナンパされに行く？」

口に出して自己嫌悪。天園陽影という想い人がいながら、私は何を口走ってるのだろう。ごっん。即座に自分の拳で自分の頭を殴りつけ、突っ込みと共に反省を促す。

「ここら、左右良さん、馬鹿言っちゃ駄目ですよ。あの変態お父様にすら凌辱を許さずに十九年間守ってきた純潔を、暇だからと言って妄りに放棄していいわけはないのですからね」

強い口調でお説教。

「うわあ、左右良さんたらお堅いぞつ。単なるナンパじゃん。カラオケして、ご飯食べて、ぱーっと騒ぐだけだよ。セックスしなきゃ別にいいんじゃないの？」

軟弱な理由付けと捏ねられる屁理屈。

そんなものは即否定。

「陽影君に申し訳が立たないのですよ。絶対に駄目なのです。っていうか、ナンパなんかされたくないし。陽影君以外の男とデートするつもりもないし。恋愛経験の数で女の価値が決まるとか放言してる馬鹿者の仲間入りはしたくないのですね。私の恋愛は後にも先にも一回きり、天園陽影を相手にするのみなのですよ」

軽快に笑い、ジャスミンティーを一口。

「左右良さんは陽影君一筋なんだねえ」

からかい口調。

「もちのろんでやんす！ 恋は妄想と固執。愛は犠牲（偽善？）と妥協なのですよ」

拳を突き上げて肯定。更に謎の格言を添えて自己満足に浸る。

「その恋に破れたら……どうすんの？ 陽影君って玲佳さん一筋でしょ。周囲の女なんて眼中になしって感じじゃん。ただでさえ、お父上が反面教師になって恋愛に積極的じゃないんだから、左右良さんが彼の心を勝ち得る可能性は限りなくゼロに近いと思うよ。違うかな？ 敗北後の身の振り方も考慮しとく必要があるんじゃない？」

自虐的問題提起。

「うー、それは……そうかも」

ダメージ大で返答不可能。

「それにさ、陽影君で恋愛経験……っていうか、セックス経験ないって言ってたじゃん。あの着せ替え人形みたいに従順な玲佳さんと六年近く一緒に生活してて、一回もしてないんだよ。童貞なんだよ。そんな変人が、左右良さんの愛を受け入れて、セックスしようとするかな？」

追い討ちの疑問符。

「ぐはあつ！ 左右良さん、それは酷い言い種ですよ。一片のお情けを私に……」

ダメージは倍。

心が凍結して砕け散りそうになり、胸を押さえてガラステーブルの上で悶絶。

「ほら、テーブルに抱き着いても人肌の温もりは感じられないぞっ。まあ、恋愛経験ゼロとか童貞って告白は、発情した左右良さんの出鼻を挫く為の嘘っていう可能性が高いから、深刻に受け止める必要はないよ。ほらほら、ジャスミンティーを飲んで心を落ち着けて、対策を練らなきゃ駄目。左右良さんは頭良いんだからさ」

その提案を採用してコップに口をつける。

ほーっと一息。

「で、どうすんの？」

休む暇なし。

暇を潰す為に自爆覚悟。

「むむむ……どうしますか？ 彼を道連れにして、死の旅路へ出発進行……ですか？ うー。でも、それは悲しかったりするから、草葉の陰から二人の不幸せを祈る、ってことで今回は勘弁して欲しいのですよ」

停戦協定を提案。

「大学卒業まで時間はまだまだあるし？」

好感触な反問。

「うい。気長に籠絡していくしかないのですね」

結論を示して自己承諾。

「おっけー」

停戦協定締結。私は親指と人差し指でサインを作って、にっこりと笑った。

「さてさて、左右良さん、十分間の暇潰し作戦は成功したけど、夕食時までの四時間をどうやって過ごしちゃいますかね？ 買い出しとかに行っときますか？」

お財布と携帯電話を持ち、上着をハンガーから取って羽織りながら提案。

「うーん、そうだね。早いうちに行つとけば、後でゆっくりできるもんね。よし、そんじゃ、お買い物へれつつあんどごお！ 本日の夕食は久しぶりに、左右良さんの大好物にしちゃおうかな」

号令をかけて調子を上げ、その上、食べ物で釣ってテンションを更に倍。

「わあい！ 銀鱈の粕漬けですねっ」
もろ手を上げて喝采。

私は小躍りしながら靴を履き、うきうき気分を外に飛び出した。階段を下り、エントランスのオートロックを抜け、アパートを後にする。目指すは駅前の商店街。午後三時から行われるサービスタイルムに参加する予定だ。本日の特選品が新鮮な緑黄野菜ならいいなあ、とか願いながら早歩き。周囲に暴漢の気配はない。ストーカーもないようだ。

どうして私がこうも周囲に注意を払うのかと言えば、援助交際や愛人志望の馬鹿男が引つ切りなしに訪れるからである。それは、京桜大学内でまことしやかに囁かれている下品な噂に基づいた行動だ。まあ、全てが虚実というわけではないので、身から出たサビと言えなくもないけど、噂を信じる者の中には力づくで性行為に及ぼうとする欲求不満男も少ないながらに存在する為、そういう連中が群を成す可能性を踏まえて、日夜の警戒を怠らないのだ。それって、容姿端麗に生まれてきた者の宿命みたいなものかな、と不細工な人間（日本国民の大半）から総スカンを食うような思考を働かせて納得。「贅沢な悩みですね、左右良さん。でも、最近のストーカーはナイフとか所持してる傾向にあるって雑誌に載ってましたよ。さくつと一刺し、黄泉の旅路へゴー、ってな具合なのです。それ、マジヤバで怖いから、本気の全力で警戒して下さいね」

背後を振り返り、小声で注意を喚起。

「うい。了解であります、左右良さん！」

びしつと敬礼。おっと、動作を付けるのはマズイ。頭のいかれた女と思われては堪らない。左右を見回して侮蔑の視線がないことを確認。そして、歩行再開。

駅前の商店街に近づくにつれ、すれ違う人間が多くなってくる。

東京都内の主要駅に人が集まるのは当然であって、それに疑問を持つ方がおかしいのだけど、人の増加は犯罪者予備軍の増加に比例しているわけで、私を拉致監禁して変態的淫行に及ぼうという危険分子がその中に混じっていないとは言い切れないから、自然と足早になり、上着の襟を立てて顔を隠したりしてしまう。

「自意識過剰なのですね、左右良さんは」

小声でからかう。

「うー。美人なのは事実だもん」

弱々しい事実確認。

「大丈夫、誰も見てないですって！ それに、都内には左右良さんより綺麗な女の子が何人も歩いてるわけだし、昼間から性犯罪に及ぶ暇人なんてそうそういないと思うのです。何より、過剰な警戒は不審者への第一歩なのですよ」

もつともな意見。

自己改善に取り組む。

アーケード街を抜けて駅前の広場を横断し、交番前の交差点に差しかかった所で赤信号に引っかかった。

すると、向かいの歩道で信号待ちをしている人ごみの中から、見覚えのある大男が手を振り翳して存在をアピールし始めた。

「おーい、色嶺え！」

野太い呼び声が飛んできて私の鼓膜を振動させる。耳に酔だこ。うんざりだった。

目の前に立っているのは、京桜大学二年生でラグビー部に所属してた西川不二彦という名前の筋肉モアイである。この巨漢は、入学式の日、私をラグビー部のマネージャに据えて先輩への点数稼ぎをしようと目論み、強引な勧誘を仕掛けてきた身の程知らずの大馬

鹿者だった。しかも、その際、止めに入った陽影君と睨けられたラグビー部の一年生が乱闘騒ぎを起こし、停学者を出す事態へと発展。西川自身、二週間の停学を言い渡され、責任を取らされてラグビー部を辞める結果となってしまった。その恨みが変な風に歪み、私の噂が触媒となつて、彼をストーカーたらしめてしまったのである。

そんな犯罪者候補生を前にして落ち着いてなどいられない。踵を返して逃走を図ろうかと一瞬思案したが、走力は相手の方に分があり、尚且つアパートまでは果てしなく遠い。その二点のマイナス要素を踏まえて行動の結果を想像するも、私が逃げ切れるビジョンは浮かばず、組み伏せられて凌辱される光景が生々しく浮かんできたので却下。交番へ駆け込んで一時的に身の安全を確保する案もあったが、ことを荒立てると致命的暴走を助長して最悪の悲劇を発生させる危険性があるので却下。そうになると、もう相手と接触して無難な言葉を交わし、気分良くお帰り願う以外に危機的状況を回避する手段がなかった。

そうこうしている間に、信号が青になってしまった。相手に気づかないフリをして別方向へと逃げたかったが、向こうから真っ直ぐに近づかれてはどうしようもない。覚悟を決めて当たり障りのない会話を成立させ、この場を無事に切り抜けるしかないだろう。

交差点の中央で接触。

「色嶺、久しぶりだな」

西川はモアイ顔にだらしない笑みを宿し、挨拶に託けて馴れ馴れしく私の肩を叩いた。微妙に手の平を動かして肩を撫で回す感じが嫌悪を誘う。しかも、昨日もアパートの前で待ち伏せしていたくせに、それを億尾にも出さない厚顔ぶり。気に食わないことだらけ。でも、私は満面に愛想笑いを作る。微細に媚び含ませ、卑屈にならないよう表情に晴れやかさを演出する。それが、幼少期からの虐待生活で身につけた自己防衛術だった。

「こんにちは、西川さん」

「こんなところで会うなんて奇遇だな。何してんだ？ 買い物か？」

「はい、そうですよ。結構急いでるんです。だから、お話ししてる場合じゃないんですよ。ごめんなさい。ってことで、さいならー」

交差点の信号が赤になる前に、会話を一方的に打ち切り、難事からの脱却を図る。とにかく逃げの一手だ。可愛く手を振って、心の中でついて来ないで下さいと哀訴しつつ、逃げるように横断歩道を突っ切るが、相手側も同じ方向へ歩き始めてしまい、結局、逃亡作戦は失敗に終わった。

「うー、左右良さんてば大ピンチ!」

小声で呟き、心の中で諦観の宴。

横断歩道を渡り切り、向かいの商店街に入ると、もう一人、男が声をかけてきた。西川は随員を連れていたのだ。

「おつす、色嶺さん」

巨漢の背後から顔を出して軽薄な挨拶をする男。彼の名前は大迫利一。元ラグビー部の部員であり、私のクラスメイトでもある。軽薄者の代名詞と呼んで陽影君は蔑視しているが、悪い人間ではない。賑やかし屋としての才は認めざるを得ないだろう。でも、個人的に興味はない。友好関係を築く意思もない。彼の出現は、迷惑のサンドイツチ効果しかもたらさなかった。

「二人して何の用かなっ？ ボーイズラブなデートですか？」

「なわけねえ」

西川は冗談と解釈したのか、野卑な笑い声を上げた。臭い唾を私の顔面に降りかけるモアイ。吐き気を堪える美女を気遣うデリケートさとは無縁の人間。こんな男とは百億円積まれても一夜を共にしたくない。

「別に重要な用なんてねーよ。銀行が使い物になんねーから、西川さんに泣きついて飯を食わしてもらおうとしたとこさ」

大迫が自分の置かれた状況を説明した。

「実家に帰ればいいじゃん」

陽影君と同様に、と心の中で付け加える。でも、口には出さない。天園陽影とラグビー部は、入学式の一件以来、犬猿の仲である。彼

の名前を出そうものなら、この場で強姦されてしまうような気がする。彼らはそれくらいやりかねない野蛮な連中なのだ。

「実家に帰る金もねーんだよ」

「それは大変だね」

この軟派男の財布事情など全く関心なかったけど、私は同情して風を装った。

「だから、これから飯を食うってわけだ。色嶺も一緒にどうだ？ 奢るぞ」

「え、えつと……。それは遠慮したいっていうか、ごめんなさいっていうか、同行拒否っていうか、この危機的状况から即座に離脱したいですね」

遠回し、ではなく直接的表現を混じらせて意思を伝えようとしたが、残念ながら上手く伝わらなかった。

「そんな、遠慮すんなって。俺とおまえの仲じゃねえかよ」

どんな仲だ、と訊き返したい。でも、愛想笑いを浮かべて曖昧に首を傾げることが精一杯。情けなさで落涙しそうになった。

「あ、そうそう、俺っち今、十万円持ってるんだぜ。今夜、どうだ？」

冗談ぽく援助交際を申し出る西川。

殺人衝動に駆られ、自己制御。

理性的な自分に拍手を送った。

【4・天園陽影】

俺の実家。

八歳の頃まで母親と二人で幸せに暮らしていた場所。小学校を卒業する日までずっと独りぼっちで過ごしていた場所。破壊願望と加虐衝動を育み続けた場所。俺の心に人間的愛情を芽生えさせず、反社会的行為を模索させ、鬼畜的悪行を斡旋し、常軌を逸した狂喜を飢えつけた場所。ここは、まさに、俺を俺たらしめた最狂の母胎だった。

そんな場所に帰ってきた。

もう絶対に戻らないと誓って活動拠点を移したのに、状況に流される形で、運命に玩弄されるように、親父の身勝手な欲望の巻き添えを食らって、俺は今日戻ってきた。

ここは、紛れもなく俺が生まれてからの十二年間を過ごした家だ。赤レンガがお洒落な二階建てのLDK。プール付きの庭。敷地を取り囲む背の高いブロック塀。都内でも有名な高級住宅街に門を構えているのに、デタラメに広い敷地面積を誇っている。お隣りさんと比較するまでもなく広大。でも、それは俺にとって、羞恥になりこそすれ自慢にはならなかった。こんな馬鹿でかい豪邸を建設した親父の意図を全く理解できなかった。いや、あの馬鹿親父は全然家に帰ってきていないらしいから、もしかしたら羞恥心で帰るに帰れないのかもしれない。何にしる、世界最上位に近い支配階級の血統が俺を苦惱させる最大級のコンプレックスだった。

俺は愛車をこれまたでかい車庫に入れ、車庫裏の勝手口から庭に入った。

手には色とりどりの花束が二つ。俺らしくないアイテム。なぜにこんな物を所持しているのかと言えば、気を利かせて何かプレゼントを用意すれば好感触を得られるよ、と帰りの車中で左右良にアドバイスされたからだ。

「とにかく第一印象が大切だよ、陽影君。重要なのは程いいインパクト。出だしが良好なら、その後の会話がちよつとギクシヤクしちやっても決定的破局に至るってことはないでしょ。例えば……女の子が喜びそうなプレゼントを帰りがけに買って行ってあげればどうかな？ 高価な品物なんて要らないから。相手が重く感じない程度の、簡単に手渡せる物が理想だよっ！」

その助言を基に、俺は花屋に立ち寄り、店員さんの意見を参考にしつつ、プレゼントの花束を購入したのだ。本来なら、姑息な小道具を用いて相手の心象を良くするなど、反吐が出るほどの恥辱行為だけど、俺の好き嫌いで物事が上手く行った例など皆無なので、左右良の忠告に従ったわけである。

俺は鉄の格子扉を開いて庭から正面玄関に入り、砂利道を乱暴に踏み締めながら奥へと歩いていった。

この豪邸を離れて数年。

記憶に刻まれていた我が家は、手入れを怠って酷く荒れ放題の庭、汚泥が溜まって悪臭を放つプール、薄汚れた外壁が廃墟のごとき様相醸し出していた建物……という感じた。

しかし、現在、庭には雑草ではなく色鮮やかな花々が咲き乱れ、プールには泥水ではなく清水が湛えられ、建物の外壁も綺麗に手入れされてレンガの赤が映えていた。

まあ、これくらい予想はしていたが……。

ちよつと嬉しく、しかし、大きな苛立ちが心の中でうねくつた。

こんな風に住み良いように手入れが行き届いた空間は、俺の暮らしていた場所じゃねえ。まるで他人の家だ。庭に飛び交っていた奇妙な虫はどうした？ 屯していた野犬たちはどこへ消えた？ プールに繁殖していたボウフラは駆除されちまったのか？ くそっ、花壇に花なんて咲かせやがって……。新しいお母様はガーデニングが趣味なのですか？ 高尚な趣味をお持ちなんですね？ 畜生っ！ 廃墟のごとく荒んだ空間こそが俺の生活する場所だったのに！ 俺の生きてきた場所である証だったのに、それを一切合切壊しやがっ

て……。何てことをしゃがるんだ！

心がぐらぐらと煮え立つ。

滅茶苦茶に破壊してやるうか。ぐちゃぐちゃに暴虐の限りを尽くしてやるうか。完膚なきまでに破碎してやるうか。血の花を咲かせてやるうか。かつて、俺が悪者に格好良さを求めていた頃のように、弱者を虐待して愉悦に浸っていた頃のように、女の子を玩弄して鬼畜的欲求を満たしていた頃のように、絶対的愛情とやらの存在を確める為に風守玲佳を卑劣極まりない実験にかけて心を殺した頃のように、今この場で人の殻を打ち破って狂喜に身を任せてしまおうか。今度は、俺自身の手で。

そうすれば……。

どれほど安らぐだろう。

どれほど楽しめるだろう。

どれほど苦しいだろう。

どれほど哀しいだろう。

どれほど狂おしいだろう。

どれほど満たされるだろう。

あの時みたいに、心の奥底から笑って、狂ったように笑い続けて、腹が裂けるくらいに笑って笑って笑って……。

劣情を排気するべく、ドアの前に立ち、大きな深呼吸を数回繰り返した。負の感情を家の中に持ち込んではいけない。常にポジティブ志向、と耳に蒸しダコができるほど左右良に注意されている。もう俺も二度と過ちを繰り返したくない。良心によって感情を調節し、常態を保持する。俺にはそれができる、と確認する。それを心の中で繰り返し自己暗示にかける。自己調整機関の安全性を確信する。

俺は………大丈夫だ。

花束を左腕に抱え込み、右手をドアノブにかけて回した。鍵は掛かっていなかった。左右良のアパートから自宅までの移動中に、連休期間は実家で過ごす計画だ、と義母に携帯電話で伝えておいたから鍵を掛けないでくれたのだろう。

さて、ここは俺の家だ。否、建て前上は俺の家……という意味であり、認識としては他人の家なので、断りなく入るのはどうも気が引ける。まるで、不法侵入しようとしている感じだ。いや、家人の承諾なく踏み込めば不法侵入でセキュリティシステムが作動する可能性がある。やはり、ここは無難にチャイムを鳴らすべきだろう。うーん、他人行儀過ぎるか？ うーん……どうする？

俺は二分ほど逡巡し、そのまま思いきってドアを開ける、という選択肢を選んだ。

音なくドアが開いた。

無言ではマズイと思い、「ただいま」と言おうとして……。

目の前に女の子が立っていた。

あれ、この展開って何？

誰、これ？

なぜにこの小娘は俺の家に上がり込んでいるんだ？

一瞬の混乱。

そして、理解。

この女の子は俺の妹だ。

義理の妹になった女の子なのだ。

義理の妹？

義妹……ってやつですか？

俺の……家族？

新しくできた家族で、俺の義妹？

俺は呆然と立ち竦んだまま、義妹になった女の子の姿を凝視した。簡単に表現すると、類い稀な美少女。およそ、国民の九割が認めざるを得ない際立った美貌の持ち主。幼さの残る清純な可愛らしさを持つ女の子。艶やかに輝くさらさらの栗毛。細過ぎない眉毛。形良く筋の通った小鼻。柔らかそうな唇。背はあまり高くない。全体的には華奢でちっこい。胸も尻もボリューム感に欠けている。ただ、バランスのとれた体型をしていた。同年代の女の子の中では飛び抜けた容姿を誇っているだろう。テレビタレントに負けないクオ

リテイだ。

そんな美少女がなぜ、俺の家に？

いやいや、この子は俺の義妹だってーの。理解して受け入れるよ、俺の心。

妙に昂ぶっている自分に気づく。心地好く精神が侵蝕されていくのを自覚。プラスの感情だけど、この想いは妹という存在にいだいてはいけない種類のものだと思う。いわゆる禁忌ってやつだ。今、胸中に去来する心情は、一般的に何と表現されるものなのだろうか。俺にはわからない。わからないけど、悪くない感情だ。良い気分だ。良い。実に良い。

視線を義妹の顔に固定した。

目が合った。

何か言わなければなるまい。

俺は口を開きかけた。

義妹がにつこりと満面の笑みを浮かべた。

そして。

「お帰りなさい、おにいちゃん」

その一言。

それが俺の心を打ちのめした。

この瞬間までプラス表示だった感情が、瞬時にマイナスの極限へと振り切れる。みぞおちの辺りから熱い波動が込み上げてきて脳天まで貫通し、反転して急落していった。刹那、心が凍りついたように凝固し、発熱した身体を凍えさせる。自分でもおかしいと感じるくらいに動揺した。

「あ……あの……、おにいちゃ……」

義妹の方も目に見えて動揺した。見る見るうちに顔を引き攣らせる。余程、俺の表情が醜く変じたのだろう。見ていて可哀想になるくらいに彼女は狼狽し、視線を左右にさ迷わせ、落ち着かなげに身を振らせ、もう一度俺と目を合わせた。

「あの……。あの……」

何か言おうとしているのだが、何を言えば良いのかわからないの
だろう。口籠もりながら、ただただ涙の溜まった目で必死に見つめ
てくる。

俺は目を閉ざして小さく息を吐いた。

ここは大人の対応を心すべき場面だ。初対面で全てを台無しにし
て何になる。俺に妹なんていねえよ、おにいちゃんなんて気安く呼
ぶんじゃない、と喚いたところで事態は好転しない。逆に悪化させ
るだけだ。それは、初志に反してらるう？ 上手くやると決意し
たのだからやり通せ。義妹と打ち解けて見せる。満面の笑顔は見せ
られなくとも、自分なりに微笑んで見せる。

さあ、早く！

俺は全身全霊を駆使し、あらゆる正のパワーを総動員して僅かな
笑みを浮かべた。

そして。

「ただいま」

そう言った。

ごく自然に。

義妹の表情が、スイッチを切り替えたみたいに笑顔へと急変する。
「うん！ お帰りなさい、おにいちゃん！」

胸中に安堵感が広がった。思わず笑みを零しそうになり、口内で
衝動を噛み殺す。

「ああ……………あー。うーっと……………何だ、どう言えばいいんだ……………。
えっと、俺は天園……………って、おまえも天園になったんだ……………。あ、
違うか……………。おまえ、綾瀬だっけ？ えーっと、俺は陽影だ。いや、
もう知ってたか？」
しどろもどろ。

ただ自分の名前を名乗るだけなのに、舌が自在にならない。

義妹はくすくすと可愛らしく笑って、小さな頭を頷かせた。

「もう知ってるよー。陽影おにいちゃん。太陽の陽に、影踏みの影
でしょー？」

「ああ」

「みつきは密希って言うんだよー。秘密の密に、希望の希で密希だねー。前は貴積密希で、今は綾瀬密希なんだよー」

義妹は軽快に名乗ってぺこっとお辞儀した。

物凄く笑顔の似合う少女だ、と思った。

それにしても、面白い名前である。密かな希と書いて密希か。更に、旧姓の貴積は……。きつみみつき？ 回文？ 名付け親はかなりふざけた人物なのだろう。でも、面白い。綾瀬などという苗字に変わっちまって可哀想だ。なにせ、あの馬鹿親父と同じ苗字になっちまうのだから。

「密希か。とても可愛くて綺麗な名前だな」

そう言いながらドアを閉め、靴を脱いだ。

そこで思い出す。

「ほら、これ……。おまえにお土産だ」

ぶつきらぼうな感じに言って、花束の一つを突きつけた。

勿論、俺が花束を抱えている姿を見た時点でプレゼントだろうと気づいていただろうが、密希は想像してたよりも数十倍喜んでくれた。嬉しさのあまり可愛い顔を泣き笑いみたいにくしゃっと歪めたのだ。

「わあ、ありがとー、おにいちゃん。密希、凄く嬉しいんだよー。

男の子にお花貰ったことなんて今まで一度もなかったからー。凄く凄く嬉しいんだよー。ほんとにありがとー」

癖のある口調と間延びした語尾が、頭の悪い女っぽくて少し気に障ったが、その辺は寛大な心で受け止めておいた。まあ、これだけ大袈裟に喜んでくれれば、いちいち花屋に寄った甲斐もあるっつものんだ。大成功と言っても過言ではない。左右良に感謝せねばなるまい。後程、電話を入れておこう。

「おにいちゃん。ママはキッチンで待ってるんだよー。行こー」

「ああ」

俺は手を掴まれ、引っ張られるままにキッチンへと向かった。密

希が母親を《ママ》と呼んだことも少し気に障ったが、彼女の柔らかい手の感触が素晴らしく心地好かったので、苦もなく我慢できた。「ママー。おにいちゃんが帰ってきたよー」

密希は元気な声で母親を呼びながらキッチンに駆け込んだ。

俺は密かに不安で心を強張らせつつ、義妹に導かれてキッチンへと踏み込んだ。

密希の母親は、俺の義理の母親は、流し台に向かって洗い物をしている最中だった。背を向けているので顔は見えない。だけど、その後ろ姿を見ただけでかなりの美人さんだと識別できた。背はそれほど高くない。密希より頭半分くらい高い程度だ。栗色の髪は肩までの長さ。軽くウエーブがかかっている。全体的には成熟した大人のプロポーションを持ち、娘と同様にスレンダーだった。

「はいはい、ちよっと待っててね」

彼女はそう言っ、洗い物を途中で止め、ハンドタオルで手を拭い、くるっと体を反転させてこっち向いた。

輝く笑顔。娘に酷似した容姿。でも、あれ……、と俺は心の中で首を傾げた。戸惑いと拍子抜け。予想していた容姿とのギャップに困惑する。おかしい。この人が、馬鹿親父が再婚してまで繋ぎ止めておきたかった女なのか？ 別人でなく？

混乱する。

親父のやつ、女の趣味が変わったのか？

切れ味鋭いくらいに冴え渡った理知的美貌を持つ女性が好みだと思っていた。実際に、俺の実母や奴の困っている愛人たちは、みんな格好の良い美人さんばかりなのに……。

それが一体、なぜ？

今、俺の前に立ってにこやかな笑みを口許に湛えている女性は、美人と表現するよりも可愛いと言った方が適切なくらい愛嬌に溢れていた。現役大学生と見紛う若々しさ。密希の母親なのだから、三十歳より若いはずはないが、見ようによっては二十歳そこそこに見

えてしまう。物凄い童顔だ。若作り、という次元ではない。魂レベルで若いのだろう。何にしても、大学構内で大手を振って歩いていても全く違和感のない人物だった。

「あらら、思ったより早く帰ってきたのね。もうちょっと遅くなると思ってたのよ。お帰りなさい、陽影君」

密希と同じ系統の、間延びした喋り方。しかし、密希のアップテンポな喋り口調とは反対で、落ち着きのある艶っぽい話し方だった。顔を合わせるなり、義母は俺の顔をしげしげと観察してきた。

「あら、聞いていた以上に優しそうな男の子じゃない。包容力もありそうだし。良かったわねー、密希ちゃん」

「うん。すつごく嬉しいんだよー。クラスのみんなに自慢できちゃうくらいだねー」

「それなら、密希ちゃん。お部屋に行って、お洋服に着替えてきちゃいなさい。お家の中で制服姿なんて、変な女の子だと思われちゃいますからね」

「はあーい」

密希は元気良く返事をし、軽妙な足取りでパタパタとスリッパの音を立てながらキッチンを出ていった。

「……………」

俺は無言のままその場に立ち尽くす。所在なげ、という言葉が見事に当て嵌まる状態だ。自分の部屋に向かうのも、リビングに移動するのも、この場に留まるのも、不自然に思えて身動きが取れないのだ。

「どうしたの、陽影君。そんな所に立ってないで、どこでも好きな椅子に座って」

柔らかい口調で勧められ、俺は言われるままにキッチンの椅子に腰を降ろした。

そこで、はっと思い出す。

「あの、これ……………」

俺は、俺らしくもなく、オドオドとした物腰で手にしていた花束

を差し出した。

「プレゼントって言うか、何て言うか……」

「まあ！ これを私に？ きゃー、ありがとう、陽影君。少し吃驚しちゃったわ。こんな風にプレゼントを用意してくれるような子じやないって聞いてたから」

受け取った花束を胸に抱えるようにして、義母は娘と同質の無邪気な笑顔を作った。娘より、喜び方が大袈裟かもしれない。多分、この人は、プレゼントを貰い慣れていて、どう表現すれば与える側が良い気分になれるかを理解していて、意識してリアクションをとっているのだろう。ある意味、したたかな女だと言える。そういう女は好きじゃないが、実際に派手な動作で喜んでる姿を見ると悪い気はしなかった。

しかし、一体、俺をどういう人間だと聞かされていたのだろうか。親父の口から説明されたのだから、ろくでもない人物像を教えられていたに違いない。例えば、破滅的なまでにネガティブな感性を持つ根暗なひとでなしとか、自分以外を同じ人間と認識していない鬼畜とか、女を口説くこともできない腰抜け童貞野郎とか。何にしても、女の人にプレゼントを買ってくるような人間じゃないと知っていたのだから、俺の人間性は正確に伝わっているはずだ。

「今、お茶を入れるわね。あっ、お茶よりもお酒の方が良いのかな、陽影君は？ まだお昼過ぎだけど、もう今日は出かける予定とかはないんでしょう？」

「え？ あーっと……。いや……。あとで少しだけ出かけるかもしれないから……。酒は止めとく。お茶でいいよ」

「あら……。そう……。お出かける予定があるんだ……。密希ちゃん、がっかりするわ。あの子、お兄ちゃんに会えるって大喜びしてたから……。今日は、ずっと一緒にいたいでしょうに……」

義母は形の良い眉を寄せて言った。けれど、どこにも行かず家にいて密希の相手をして欲しい、と俺に要求せず、いそいそとお茶の準備をし始めた。

数分後。

熱いお茶と和菓子がテーブルの上に並べられた。その間、会話は一切なかった。気まずいくらいの緊張感がキッチンを支配している。でも、俺から切り出す話題はない。だが、義母は言葉を交わしたいに違いない。質問、疑問が山ほどあるはずだ。きっと、彼女のような人なら、こういう気まずい雰囲気でも適切な言葉を用いて会話を成立させ、凍りついた空気を融解させて場を和ませたり、人間付き合いの巧みさを駆使して友好関係を結ぶ、という技術を会得しているだろう。

しかし、義母は話し始めない。言葉を紡ぎ出せない。彼女が俺という人間を理解し、俺が俺であるがゆえに、会話の糸口を見つけ出せないのだ。滑らかなる話術を駆使して気の利いた台詞を幾万語費やしても、俺の排他的波動を取り払うことなど不可能だ、と察しているのだろう。

ん？

いかんいかん！

駄目だ、駄目だ！

俺は何をしているんだ？

義母を牽制してどうする。

睨みつける意図はなんだ？

プレゼントを手渡して良い雰囲気を作っておきながら、反抗心を生じさせるなど本末転倒だぞ。もっと、こう……友好的スタイルで行くべきだろ！ さつき妹に見せたように、義母にも微笑んで見せる。笑顔を装備だ。頑張れ、俺。ブラックホールを白濁させるほどの気合だ。更に、俺の方から話しかける。それしか、この状況を切り抜ける術はない。

俺は意識的に表情を和ませ、口許に薄っすらと笑みを刻んだ。

「一つ、訊いてもいいかな？」

「えっ？ いいわよ。何でも質問して」

義母は驚きのあまり目を見開いて、肩をびくっと痙攣させた。俺

の方から話を振ってくるとは予想していなかったようだ。

「どうして、親父と再婚したんだ？ 貴女ははつきり言って親父の好みじゃないし、手元に置いて独占したいと思うタイプじゃないと思うんだ。きつと、何か理由があつて結婚……、いや、再婚したんだろう。だから、その経緯を聞かせて欲しい」

俺はなるたけ穏やかに訊いた。

義母は不躰な質問をされても、表情から笑みを消さなかった。それどころか快く質問に答えてくれた。

「そうね。陽影君の考えは正しいわ。貴方のお父様が私に好意を寄せたのは、多分、一時の気の迷いか、他の男性に対する見栄からだと思うの。初めは、あの人も私も純粹に惹かれ合つて恋愛を楽しんだわ。不順な動機から始まつたお付き合いだけど、勢いにまかせて周りが見えなくなるくらいにのめり込んでしまったの。私もあの人も、ね。でも、すぐに過ちに気づいたわ。私はあの人を愛していたけれど、あの人は私以外にも多くの女性と関係を持っていて……。わかるでしょう？ 急激に気持ち冷めたのよ。現実を思い知れば、自分の軽率さにも気づくわ。同じ様に、あの人も間違いに気づいて縁を切ろうとしたの」

「それなのに二人は結婚した？」

「そうね」

義母は若干の苦みを微笑に混ぜ込んだ。

「どうして？ 好きでもない男と結婚なんかしても幸せになれるわけじゃないじゃないか」

「好きじゃない、わけじゃないわ。ただ、愛してないだけ……」

「……………」

俺には理解できない。好きだけど愛していない。好意と愛情の違い。恋心と愛の差。好きと愛してるの距離。

「理由を訊いてもいいかな？」

「いいわよ。でも、それを話したら、陽影君は私を軽蔑しちゃうかもしれないわ。折角、家族になれるのに、最初からギクシャクする

原因を作りたくないの。それでも、どうしても聞きたいなら教えてあげる」

義母の顔からは、覚悟と決意の色が見て取れた。再婚した理由を明かして俺に嫌われるとしても、ダンマリを決め込むよりはマシだと判断したのかもしれない。それとも、積極的に理由を打ち明ける行為を触媒にして、お互いの関係を深めようとしたのかもしれない。まあ、どんな理由であれ、この人を軽蔑したりしない。その可能性は皆無。俺は他人を軽蔑できるほど清廉潔白な人間ではないのだ。

「建前と本音の二つがあるけど、どっちを先に聞きたい？」

「順当に、建前から……」

「おっけー」

義母は影のない笑みと共に、指でポーズを作っ て見せた。左右良に近い人間性だ、と瞬間に思った。

「私が陽影君のお父様と再婚した理由は、密希の為よ。あの子は父親を早くに亡くしたから、記憶の中に《お父さん》という存在がないの。頑張って育てたつもりだけど、偏った家庭環境であったことには違いないし、私は仕事のせいで殆ど家に帰れなかったから、色々な意味で苦勞をかけたわ。もしお父さんがいたら……：：：パパがいたらって……：：：何度か言われたことがあって、その時は私も悩んだわ。あの子はいつも明るく振舞っているけど、見えないところで泣いてたんでしょ うね。私も随分泣いたわ。そんな時に貴方のお父様が現れたのよ」

「ああ、それで……。そうか、それなら……。それなら、再婚の選択肢を選んでもおかしくないかもしれない」

俺は納得しかけ、首を傾げた。

「ん？ でも、それが……：：：建前？ 本音じゃなくて？」

「ええ。建前よ」

「それじゃ、本音は？」

「お金よ」

義母は明快な口調で簡単に答えた。

「哀しいけど、お金が理由なの。あつ、そんな顔をしないで。私たち二人が生活保護を受けないで人並みに暮らす為には、どうしてもお金が必要だったのよ。密希を傷つけない為には、夜のお仕事をするわけにはいかなかったし……。そうすると、誰かに助けてもらうしか方法がなかったの。でも、親切ごかして近づいてくる男性は全員ともに邪な目的しか持つてなくて、密希の父親としては頼りなかったし……。そんな時に陽影君のお父様みたいな人に出会えば、どんな女性だって特別な感情を抱いてしまうんじゃないかな。物凄なお金持ちだったしね。私は必要以上のお金なんて欲しいとは思わなかったけど、再婚相手がお金持ちに越したことはないでしょう？密希には人並みに大学まで通わせてあげたいと思ってたから、差し伸べられた手を払ったりしなかったのよ。そういうわけ。軽蔑したかな、陽影君？」

軽蔑できるわけなかった。そんな資格なんか俺にはない。金がないければ何もできないということを現在進行系で思い知っている状況なのだから。それに、あの馬鹿親父を利用している女を、認めこそすれ、軽蔑することなどできない。

「軽蔑なんてしないよ。むしろ、尊敬した。自分を犠牲にしてまで娘の為に過酷な人生の選択ができる親なら、俺は無条件に認める。俺は逆の立場だからね。正直言つて、密希が羨ましいよ」

「陽影君、わかってくれてありがとう」

「いや、別に俺は……。親父が嫌いつていう一点においては想いを共有してるわけで。でも、完全に理解してるわけじゃないし……。ん？ 親父のことは好きなんだっけ？ 愛してないけど好きだって言つてたっけ？ でも、まあ、あの糞親父を利用してる点は、俺と同じだから……。気が合うつていうか、同志気分ていうか、俺たちは上手くやっていけるかもしれないなつて思つて。まあ、何て言うか……。今日から宜しくお願いします」

俺はテーブルに頭をぶつけるぐらい深々と頭を下げた。

「こちらこそ、今日からずっと宜しくね」

義母も真似をするように頭を下げたようだ。
顔を上げる。

俺は義母の浮かべている迷いのない明るい笑顔を見て、親父がこ
の人を独占したいと思った理由を瞬時に理解した。

この人からは、邪念、虚偽、下心、そんな負の要素が一切感じら
れないのだ。明け透けでいて懐が深い。親父にとって特別な存在で
ある意味を肌で感じる。それだけ桁外れに魅力的な女性というわけ
だ。

多分、俺が風守玲佳という女に求めたかったものを全部持つてい
る女性だろう。

多分、俺が色嶺左右良という女に求めたものを全部持つてい
る存在だろう。

この認識に間違いはない。

そして、今、俺の心に湧き立っている感情は、義理の母親に対し
て抱いていいものではない。不適切な感情。淡い恋心？ 異性とし
ての好意？ 邪な欲求？ このぬるま湯に浸かっているようなほん
わかった感じは……。いかんいかん！ 正気を保て。理性に訴えか
ける。この人は義理の母親であつて、本当の母親じゃないんだぞ。
それを心に刻んでおけ。

「あのー。それで、俺は貴女のことをこれからどう呼べば？ お母
さんとは絶対に呼べないし、義理のお母さんとも呼びたくない。マ
マなんて以ての外だ。そんなのは、俺の美意識が許さないからね。
でも、《貴女》って呼ぶのは他人行儀だろう？」

偽りとはいえ、俺が家族と認めた相手なのだから、親しみを込め
て名前を呼びたいのだ。

「いいわよ。私も名前でもらえると嬉しいわ。本心は、密希
ちゃんと同じ風に《ママ》って呼んで欲しいんだけど……その表情
じゃ駄目みたいね」

快く承諾してくれた。

……。だけど……。

「あの……、それで、肝心の名前は？」

「あつ、ごめんなさい！ うっかりしちゃってたわ。何か忘れてると思ってたら……。私ったら、まだ陽影君に名前を名乗ってなかったのね。ごめん、ごめん。道理で、さつきから《貴女》って呼んでたわけだ。他人行儀で悲しいなって思ってたんだけど、名前を知らなきゃ他の呼び方をするしかないわよね」

「てへへ、と可愛らしく舌を出す。そんな仕種がとてつもなく魅力的だった。もしこの人が十歳若かったら、俺の理性はたちどころに吹っ飛んでいただろう。現状でも危ないくらいだ。同じ家の中に密希という第三者が存在せず、俺の心が風守玲佳という女に呪縛されておらず、色嶺左右良と昼間に会話してなかったら、迷わず蛮行に及んでいたと思う。」

「私の名前は、光理。旧姓は貴積で、今は綾瀬。綾瀬光理です。宜しくね」

「みつりさんか……。良い名前だ。それってどんな字で表すの？」
「みつりのみつは、ひかりの光。みつりのりは、理科の理。ひかりのことわり、と書いて光理。カツコイイでしょう？」

光理さんはテーブルの上に指で字を書きながら説明してくれた。

「ああ。格好いいよ。俺の名前なんぞよりも数億倍は格好良い」

「あら、そんなことないわよ。陽影君だってカツコイイ名前じゃないの。自分の名前を卑下するのは良くないわよ」

「……………」
俺は曖昧な微笑みを浮かべ、光理さんの言葉をさらりと受け流した。

名前のことで喧嘩しなくなかった。俺が自分の名前にどれだけコンプレックスをいだいているのか、光理さんが理解しているわけない。だから、俺が怒りを表している道理がない。お互いを理解するまでは、忍耐と妥協こそが肝要だ。

俺の顔からは微笑みが消えなかった。

「じゃあ、俺、自分の部屋に戻ってるから。何か用があったら遠慮

せず呼んでよ」

俺がお茶と茶菓子に手をつけずに席を立つと、光理さんは慌てて止めようとした。

「待って、陽影君」

「？」

俺は立ったまま首を傾げた。

「密希ちゃんがお洋服に着替えてくるから、もう少し待ってあげて」

「いや……、俺は……」

口籠もる俺。

別段、普段着になった密希の姿を見たいと思わないし、楽しくみんなでお喋りする気もない、と言いたいところだが、言葉に変換しないでおいた。それを言ったらお終いだ。密希の存在を拒絶しようというのではなく、ただ俺を放っておいて欲しいだけ。そっとしておいて欲しいだけだ。

俺は孤独に慣れ切っているから、一人でいる状況が当たり前だったから、一人でいる時間を大切にしかかった。左右良なら、この思いを汲み取ってくれただろう。

「陽影君は密希ちゃんのことを嫌いなのか？」

「嫌いなわけではないよ。あんな可愛い女の子を嫌う男はいない。むしろ好きな部類に入るかな。だけど……苦手って言うか、話し難いって言うか、ぶつちやけ、どう接したらいいのかわからないんだ。俺のやり方でもいいのなら楽だけど、それが有効かどうか怪しいし……。ちよつとばかり臆病になってるんだ。だから、もう少し時間が欲しいって言うか、心の準備期間が欲しいって言うか……。いや、何にしても、俺、部屋に行ってるから」

俺はそう言って、キッチンを飛び出した。

脱兎のごとく。

逃げるように脱出した。

光理さんがどんな表情をしていたのかを思うと多少胸が痛んだ。

まあ、タバコを二、三本吸って気分を落ち着かせ、気持ちを整理す

れば、もうちょっとマシな対応ができるようになるだろう。二人には悪いが、もう少し我慢してもらっしかない。

俺は急ぎ足で階段を上がり、二階の廊下の突き当たりに位置する自室に引き籠もった。

【5・色嶺左右良】

常識を知らない馬鹿者に対しては、「君たちの存在が私にとってすこぶる迷惑なのです」と幾ら熱心に説明しても無意味である。洒落た言い回しも無駄だ。奥床しい表現も考え損に終わる。結局のところ、感情を爆発させて理不尽な暴力に及ぶ、という力ずくの説得を試みる術しかない。でも、馬鹿は打たれ強い。しかも、時として打たれることに歓喜する。いわゆる被虐嗜好者。そういうキワモノとは一切の関係を拒絶するべきなのだけど、その馬鹿がストーカーである場合は回避の仕様がな。逃亡不可能な状況での選択肢はゼロ。しかも、受け身にならざるを得ない危機的状況を維持しながら反撃のチャンス待ち。

「うー。左右良さん、大ピンチの巻……」
椅子に縮こまって呟く。

私が現在いる場所は、駅前のアーケード街裏に店を構える《裏飯屋》だった。その二階に設けられているスイーツバイキングで食後のおやつを楽しんでいるのだ。形としては、である。でも、随員が最悪。正面の席にだらしなく腰掛けてプリンを口一杯に掻き込む軽薄男と、隣りの席に鎮座してチョコレートケーキを頬張るマツチヨなモアイが、美味なスイーツを台無しにしていた。

「なあ、色嶺、さつきからスプーンを口に啜えたままでじーっと壁を見てっけど、ケーキ、食わねえのか？ もう満足したのか？」

西川不二彦が馴れ馴れしく私の肩に触れ、脂っこい顔を近づけて訊いてきた。私の醸し出す悲嘆のオーラを物ともしていない。品性ゼロのモアイが大きな声を張り上げるからファンシーな店の雰囲気も崩壊。空気を読めない馬鹿者は最低だ。

「あ、うー……っ……。現実から逃避する手段は、壁紙とお友達になってシミの数をカウントするしかないかなーって。それに、時間が潰れれば夕食が私を呼ぶし、変な女の子のフリをすればストー

カーさんも裸足で逃げ出すでしょ？」

暗に、おまえがストーカーだ、と仄めかしてみたけど効果なし。

「はあ？ 何わけわかんねえこと言ってるんだ。もう食わねえなら、店から出ようぜ」

鈍感も度を超せば鈍器と同等の凶器と化す。私の凶器は左手に装備したフォーク。これをモアイのこめかみにぶすーっと突き立てた。衝動に駆られるが、ぐっと堪えて愛想笑い。そして、促されるままに席を立った。

「左右良さん、トイレに立て籠もって一生出てこないっていう手段がありますよ」

控え目な口調で提案。

「こら、左右良さん、冗談は陽影君の前でだけにしなきゃ怒っちゃうよっ！」

腰に手を当てる前屈みになって叱責。

「うー。でも、他に対処する術がないのです。左右良さんはトイレに自己監禁して、迷惑防止条例に喧嘩を売るしか道がないですよ」
説得して怒りを鎮圧。

「だけど、それは、ご飯食べ終えた直後にも使った手じゃなか。そんな子供騙しはもう通じないよ。また店員さんとか呼ばれてトイレの鍵を開けられちゃ敵わないし……。それに、おしっこの近い女と思われたら嫌だもん」

二度の失敗は恥の上塗りでしかない。それを主張するも、異論が提示された。

「左右良さん、喜んで下さい。失敗は成功の初期段階って言われているのです。二度目のトライで最終調整をして、三度目の正直で成功の母を迎え入れましょう。ね？」

失敗を見越した挑戦を示唆。

「それはちよっとタンマだよ、左右良さん。二度あることは三度ある、って古来から言うじゃん。そうなっちゃうって、絶対に！」

自虐、自爆、自殺、の三段活用。その可能性が大。羞恥を超えて

恥辱。

「そうになると、左右良さん、トイレに行くと言ってバックレるしかありませんね。これ、最終奥義なのです。馬鹿者二名が驚愕必至のミラクルマジックなのですよ」

究極の危機回避術を伝授。

「ここら、左右良さん、戦場放棄は死罪だし、脱走者は死刑だよ。二人を激怒させちゃマズイでしょ。逆恨みだけには注意しなきゃ、単なる強姦じゃ済まなくなっちゃうよ」

逆ギレ注意報。

「じゃあ、どうしますか、左右良さん？ 手をこまねいている間に、貞操がひっちゃぶかれる危険性がうなぎ登りで忍び寄ってきてますよ。早急の対処が必要な状況なのです」

逼迫した口調で危機感を煽る。

「うー。どうしよつか？」

ネタ切れで他人頼み。

「悲しいけど、お手上げなのですね」

八方塞の現状を再確認。

お金は入店時に西川が払った（彼の奢りなど真っ平だったので、自分の分は自分で払うと訴えたが、聞き入れられなかった）ので、私たちはそのまま店外へ出た。

彼らは右へと歩き出した。

それを見て、私は忍び足で左へと歩を進めた。目的地の違いは、すなわち別行動の許可を意味する。つまり、逃げ出すチャンス。でも、三步目で名を呼ばれ、五歩目で逆走禁止命令が出された為、渋々ながら歩行中止。

「おいおい、どこ行くんだ？」

私の細い手首を鷲掴みにして、逃がさないぞ、という意思表示をする西川。

落涙注意報。

馬鹿者を相手に脱出計画を練っても無駄だと今更ながらに悟り、

随員たる大迫利一に涙混じりの媚態（擬態？）で助けを求め。
愛想ならぬ哀訴。

大迫は体を捻って西川に背を向け、私にだけ見えるように親指を立てた。馬鹿者の随員が馬鹿者とは限らないという好例を発見。得てして従者が切れ者だったりする。彼は察しの良い人間だ。

「左右良さん、意外な展開ですよ。軟弱男が先輩に叛旗を翻しました。いえ、まだ反逆の狼煙は上がってないのですが、左右良さん救済の血判には名前を刻んでくれたのです」

興奮気味にクラスメイトを称賛。

「うい。持つべき者はクラスメイトだねっ」

文句なく同意。

「乱交目的で金魚のフンを体現しているのかと思ってたのに吃驚ですよ」

酷評を換言し、評価を訂正。

「ちゃらんぼらんな風体だけど、根は真面目な紳士なのかもね」
幻想に耽って過大評価。

「頼って正解だったかも」

淡い期待を胸に抱いて駅前を歩く。

眼前には駅ビル。

「よっしゃ、カラオケ行こうぜ」

唐突に世迷い言を吐くモアイ。勝手に私の予定を組んで下さったので、感謝の気持ちとばかりに蔑視のビームを両眼から放つが、虫に刺されたほどにも効いていない様子。

「うー。左右良さん、腕は大丈夫？ ぎゅっと掴まれてて痛いのに我慢しちゃってない？ あうー。ずばり、痛いんですね。でも、左右良さん、それよりも逃げられないのが辛いのですよー。このままカラオケボックスに連れ込まれて、二匹の野獣に代わる代わる交互に輪姦されちゃうのですかね？ うー。それ、悲しい運命だね。荷馬車の子牛に酷似？ 怒鳴ってドナドナ？ でも、安心して、左右良さん。クラスメイトの大迫君がきつと助けてくれるよ。彼に希望

を託しなさいな。そうですか？ 左右良さんの言葉を信用しちやいますよ。彼に期待しちやいますよ。じゃないと、左右良さんは悲劇のヒロインを地で演じるハメになるのですから」

テンポ良く孤独な会話。

「左右良さん、貞操帯はしっかりと装備してますか？ ちゃんと鍵を掛けとかなきゃ、夢と希望を強奪されちやいますよ」

内股に違和感なし。

「貞操帯なんて所持してないもん」

所持率は総人口のパーセント以下。

「絶望的ですね、左右良さんの貞操」

知らしめられる現実。

「お助けー」

破滅を絶唱する歌姫に志願。

「おい、色嶺、地面なんか見ながら、何ぶつぶつ言ってるんだ？ おら、行くぞ」

西川が可憐な乙女の腕を掴んで引き摺るように歩き出した。野蛮な男である。一回や二回の性犯罪歴があるのではないか、と思わせる強引さ。

ここで悲鳴を上げて助けを求めれば、偽善に駆り立てられた英雄志願者が我先にと馳せ参じて、暴君の手から悲劇のヒロインを助け出してくれるだろうに。それを逆恨みされて、手痛い仕返しを食らっては元も子もない。だから、大人しく付き従ってしまう私。貞操に危険は及ばないのではないかな、カラオケまでなら付き合ってもいいかな、と妥協。そして、相手の邪気をはぐらかし、暴走を前以って阻止すべく、全開の笑顔で愛嬌を振り撒く。

そこに救いの手。

「西川さん、色嶺さんは何か用事があるみたいですよ。強引に誘っちゃ悪いっす」

この遊び人面した元ラグビー部の軽薄男を大きく見直した。やはり、幸福の十三階段を転げ落ちようとしている美女を見殺しにして

しまっ腰抜けではなかったようだ。

「そうなのか？ 嬉しそうについて来てんじゃねえか。なあ、色嶺？」

同意を求められ、にっこり笑顔。でも、ここぞとばかりに反撃開始。

「えっと、今日は午後五時から家庭教師のアルバイトがあるので、カラオケには不参加の方向でお願いします。ねえ、大迫君？」

「お、おう、その通り」

下手な言い訳にも大迫は相槌を打ってくれた。陽影君には申し訳ないけど、彼と友達になってもいいかな、と思った。でも、思っただけだ。陽影君の不快感を誘って嫌われてまで仲良くしたくない。

「ちっ、仕方ねえな」

盛大な舌打ちをして西川は手を離れた。

頭の悪さは折り紙付きだが、そのお蔭で命拾いをした。

【6・天園陽影】

一ヶ月ぶりの自室。

代わり映えしていない部屋。モノトーン調に統一された家具、オーディオ機器の置かれている場所も同じ。部屋の中央に設置されたガラステーブルと、それを取り巻く座椅子も記憶通りだった。ただ、ベッドを覆うシーツと枕、掛け布団が真新しい物に変えられていた。帰ってくる義理の息子の為に光理さんが用意してくれたのだろう。ベッドメイクも完璧だ。シワやヨレがどこにもない。よくよく見てみると、部屋の中には塵一つ落ちてなかった。俺が出ていった時よりも掃除が行き届いている。

「……………」
心の中で光理さんに感謝しつつ、上着を脱いでハンガーに掛け、俺はベッドに身を投げ出した。ごろりと横になって天井を見上げる。そして、シャツのポケットからタバコの箱を取り出し、一本抜き出して口に啜えた。

「ああ、そうか……………」
いつもの流れでタバコに火を着けようとして、気付いた。
灰皿がない。

タバコを口に啜えて軽く吹かしながら、灰をどう処分しようか、と思案する。勿論、室内を汚すのはご法度だ。だけど、いちいちキツチンまで灰皿を取りに行くのは面倒臭い。それに、光理さんや密希とは極力顔を合わせたくない。

まあいい、灰は窓の外に捨てよう、と俺が身を起こしかけた時、トントンとドアをノックする音が響き、ドアが開かれた。

何の了承もしてないのにドアが全開し、可愛い女の子が遠慮がちに顔を覗かせる。

密希だ。

光理さんではなく、密希。間違えようもなく、俺の義理の妹。幼

顔の美少女が半身を部屋の中に入れて、清純な笑顔を見せている。

「おにいちゃん、ちょこつとだけ入ってもいいかな？ 密希とお喋りしてくれないかな？ それとも、今は駄目なのかな？ もしかしたら、お兄ちゃんのお部屋に入ったら怒られちゃうのかな？」

語尾が間延びしているのに歯切れの良い口調を用い、密希は懇願するように言った。

ちよつとオドオドしていて小動物めいている。大きな瞳を潤ませ、良心に訴えてくる反則すれすれの手口は、小悪魔も脱帽するレベルのクオリティだ。天然なのか？ 計算でやっているとすれば、大した女優だと褒め称えなければならぬ。まあ、確実に天然だろうが……。

「何だよ、遠慮せずに入ってこいよ」

本心から言えば一人にして欲しかったが、義妹の縋るような目を見てしまったのは鬼然と拒絶できなかった。そして、今、嬉しそうにちよこちよこことベッドの傍まで歩み寄ってくる義妹を見たら、はねつけなくて良かったと安堵してしまってもおかしくないだろう。男であれば、誰だってそう思うはずだ。

「よかったー。もしかしたら、おにいちゃん、密希のこと、お部屋に入れてくれないかもって思ったりしたんだよー」

「んー、別にな……。俺はそんなに酷い男じゃねえぞ」

「でも、おにいちゃんは密希のこと、あんまし好きくないみたいだったからー。さつきも少し睨まれたしー。今も、ちよつとだけ嫌そうな顔したからー。もしかしたら、おにいちゃんは密希たちを邪魔だっと思ってるのがないっつてー」

「……………」

咄嗟に否定できなかった。

嫌ではない。邪魔でもない。逆に、好意を持っている。けど、本当の家族と認めたくはない。俺の心が密希を妹として許容していないのだ。

密希はベッドの横に立ち、顔色を窺うようにじつと見つめてくる。俺は仰向けで啞えタバコのまま、どう答えようか悩み、ふと視線を天井から義妹へ移動させた。

スカート姿の密希。膝上三十センチ以上あるプリーツの一杯入った短いスカートだ。俺は今、それを下から見上げる体勢である。

つまり

「ふりふりの白か……」

思わず俺は呟いてしまった。

「んー？ 白って何かなー？」

「いや、可愛いぱんつだなあって思ってた」

スカートの裾を指先で突ついて告げた。

「ち、ちょ……、いやだー。お、おにいちゃん！ どこ見てるんですかー！ そ、それはセクハラなんだよー。いくら兄妹でも……血の繋がりがなくても、良くないことだと思っただよー。犯罪なんだよー！」

密希は顔を真っ赤に染めてスカートの膝上を両手で押さえ、フロアリングの床にぺたりと座り込んだ。半ば泣きそうなくらい瞳を潤ませ、恨みがましい目で睨んでくる。

そんな反応を見て、俺の心はなぜか和んだ。何だか楽しい気分になった。きつと、それは、子供の頃に大好きな女の子を虐めて喜んでいた時と同じ心理状態なのだろう。

「悪かったよ。でも、ちょうど目線の先におまえの膝があって、斜め四十五度の角度で見上げると必然的にぱんつが見えちまったんだからしよーがないだろ。おまえの立ち位置が悪かったんだ。視線の先に白いものが見えたら、誰だって見上げるだろ。そんなに恥ずかしがるなよ。シンプルで可愛いもんだぞ。それに、俺はぱんつ見て興奮する年齢じゃねえし、おまえだって今時の女の子だからぱんつくらい問題じゃないだろ。大袈裟だぞ」

口じゃ何でもない風を装い、冷静な男を演じていたが、実際には鼻血を噴きそうなほど興奮していた。しかも、相手は類い稀な美少

女。そのぱんつを至近距離からガン見したのだから、下腹部に熱いものが滾っていくのもやむを得まい。

くそっ、ヤバイ。身体の変化がバレルと変態義兄というレッテルを貼られちまう。どうして俺は帰宅する前に性欲を処理しておかなかったんだ、と後悔している場合ではない。なんとか誤魔化さねば……。

俺は何気ない動作で足を組み、股間の隆起を隠した。情けないが、駅の階段とかで女の子のスカートを下から覗いたり盗撮したりする変態野郎の気持ち少し理解できた。

気を取り直して密希を見る。

義妹の方が明らかに冷静さを欠いていた。

「問題だよー。大問題いー！ 大袈裟じゃないもんー！ 恥ずかしいもんー。駄目なんだからねー、おにいちゃん！ こーゆーこと次にやったら、密希、怒っちゃうんだよー！ 注意だよー。次は警告なんだからー！」

これ以上ないくらい顔を紅潮させて、密希はぶんぶん両拳を下させた。

へえ、次も警告で済ませてくれるのか……、と邪な思考を働かせたが、必要以上に怒らせるのはマズイし、泣かせてしまつと面倒臭いので神妙に頷いてみせた。

「んもうー。おにいちゃんたらー。密希、お話があつて来たのにー！」

密希は膨れっ面で怒る。だが、全然怖くなかった。むしろ、可愛い。いや、滅茶苦茶可愛い。あの母親にしてこの娘ありつてやつだ。俺はふうつと紫煙を吐き出し、肘を立てて上体を起こした。

「密希、悪いけどキッチンに行って灰皿を取つて来てくんねえかな。部屋に置いといたのがなくなつて困つてたんだ」

「うん、いいよー」

密希は簡単に快諾して身軽に立ち上がり、てってつと軽快な足音を立てて駆け出していった。両手でスカートのお尻の部分を押

さえているところが何とも微笑ましい。

「素直で良い子だよな」

ぼそつと呟いた。

素直で良い子と性格が良くて付き合い易い子は、当然のごとくイコールではない。初対面の俺としては、内面のどす黒さを疑らざるを得ない。可愛く、無邪気で、裏表がなく、素直で、正直な美少女などが存在するだろうか。そんな存在が許されるほど世間は優しいのだろうか。否、許されない。完璧な美少女を許容する器量が今の若者たちにはない。神聖不可侵の偶像的美少女がのびのびと生活できる環境など皆無。出る杭は袋叩きに遭い、凌辱され、貶められる。彼らにとっては横一列であることこそ重要なのだ。

そついう世知辛い世の中。

密希もその例に漏れない。しかも、今の時期、思春期であり、反抗期であり、成長期でもあるのだ。だからこそ、本当の意味での良い子であるとは考え難い。まあ、俺の愚かしいまでに破滅的だった反抗期と比較しちゃマズイが……。男女の差はあれ、難しい年頃には違いない。

がちゃつとドアが開き、密希が戻ってきた。両手で灰皿を抱えている。

「はい、おにいちゃん。灰皿だよー。ちょっと重いかなー。ガラスで大きいから、落としたら大変だねー。テーブルの上に置くよー」

俺が手を差し出して灰皿を受け取るポーズを示しているのに、密希はそれを無視してテーブルの上に置いた。どうやら、ベッドの上でタバコを吸うな、と言いたいらしい。寝っ転がったままの喫煙は危険であり、万が一、火のついた灰をベッドに落として火災を発生させては大変だ、と心配してくれたのだろう。そういう気遣いを感じた。だけど、そんなのはありがた迷惑だ。俺には俺のスタイルがあり、それを邪魔されては、不愉快を通り越して苛立ちをすら感じてしまう。

怒りにも似た感情が喉下まで込み上げてきて、咄嗟に怒鳴りつけ

てしまいたい衝動に駆られた。突発的な負の情動に流されてしまいうようになる。でも、俺は感情的衝動に身を任せるような愚か者じゃない。笑えないくらいに理性的な大馬鹿者である。自己中心的合理主義者なのだ。だから、身体の内部に渦巻く熱い波動を即座に制御した。

「さんきゅー、密希」

気安い感じに礼を述べて、俺はベッドから降り、座椅子に腰を降ろした。優しげに微笑んで見せ、義妹も座椅子に座るよう促す。

「密希、突っ立ってないで座れよ。俺に何か話があるんだろ？ 聞いてやるうじやないか」

「うん、そうだねー。座っちゃおうかなー」

密希はテーブルを挟む位置にある座椅子に移動して一旦膝を折ったが、ちょこつと小首を傾げて俺の顔を見た。

「あの一、おにいちゃん。あの一……」

「ん？ 何だ？」

「あの一。み、密希、おにいちゃんのお隣りに座ってもいいかなー？ お傍に行ってもいいかなー？ この椅子持って、お隣りに行っちゃ駄目かなー？ 怒っちゃうかなー？」

「へっ？ 椅子を動かすって？ そんなの勝手にすりゃいいんだ。横に来たきゃ、そうすればいい。何でそんな下らないこと、いちいち確認するんだよ？」

「んー。でもー。おにいちゃん、密希のこと、すぐ睨むからー」

密希は顔色を窺うようにちらちらと俺の顔を盗み見ながら、座椅子を抱えてベッドの横まで来た。そして、椅子をこっちに向けて、並ぶというよりは向かい合う形で座った。正座を崩した、女の子らしい座り方だ。

「俺がおまえを睨む？」

俺は心外とばかりに呟いた。睨んだ覚えなどない。強烈な感情は、生まれる前に殺している。いつもながらの無表情と薄っぺらな微笑みの二枚看板を通しているはずだ。

密希は「むうー」と唇を尖らせた。

「睨んだよー。凄く怖い顔で密希のこと、睨みつけてたんだよー。邪魔だから出てけー、みたいない。俺は妹なんていらなないー、みたいな感じにねー」

「……………」

俺が心情を剥き出しで表現していたというのか？ あり得ない。

心の支配権は理性と良心に一任されているはずだ。断じて、負の感情なんか支配されていない。

「睨んでない。そんなのあり得ねえぞ、密希。邪魔にも感じてないし、出ていけなんて思ってるわけがない。誤解するなよ」

「本当かなー。ほんとなら、密希、嬉しただけどー」

密希は疑わしげに呟いた。狩猟場の小動物的な卑屈感が多少和らぎ、もう少しだけ気難しい義兄に近づいてみようか、という余裕が生まれたようだ。くりくりとした大きな眼が、タバコを吹かす俺の顔をじーっと見据える。

何だか面映い。

「それで、話っているのは何だ？」

「うん、話っているのはねー。ママが……。んーと、違うかなー。ママは関係なくてー。えーっと、密希がおにいちゃん仲良くしたって相談なんだよー。おにいちゃんはどうなのかなー？ 仲良くしてくれるかなー？」

「……………」

俺は煙りを吐きながら無言で応じた。

仲良くするのは構わない。義理の関係とはいえ、実際に兄妹の縁を結んだのだから、俺には仲良くする義務があるし、義妹にはそれを望む権利がある。それを拒否するつもりはない。ただ、密希が本心から友好関係を望んでいるのか、という疑問が浮かぶ。俺の推察によると、密希がこの部屋を訪れて義兄とのコミュニケーションを求めたのは、十中八九、光理さんの差し金によるものだ。さっき迂闊にも密希のことを苦手だと漏らしてしまったせいで、この状況に

至ったのだろう。兄と妹が疎遠になる前に、積極的接触を図っておいた方が賢明と判断して、密希をここへ来させたのだ。たぶん、この認識に間違いはない。だからこそ、俺は言葉で答えなかった。無言という、卑怯な返答でしか答えられなかった。

密希は不安そうに、卑屈っぽく微笑みながら、俺の仏頂面を見つめてくる。

「それとも、おにいちゃんは……密希のこと、き、嫌いなのかなー？」

「……………」

「答えて欲しいよー。無視されるのは辛いからー。悲しいからー」
「嫌いじゃない。嫌いなんて一言も言っていないぞ。早とちりするなよ。むしろ、好きになりかけてるところさ。ちーっと思うこともあるけど、それは些細なことだしな。八割方はアットホームでフレンドリーなシフトだから、そんな風に俺の顔色を窺うような態度はよせ。無愛想なのは生まれつきなんだ。どうしようもねーから慣れてくれ」

「むうー。でも、ちょっと怖いんだよー。おにいちゃんに睨まれると、密希、泣きそうになっちゃうんだよー。でも……、でも、それじゃ、おにいちゃんは密希と仲良くしてくれるんだねー？ このまま妹になってもいいんだねー？」

「そりゃいいに決まってる」

俺は簡単に応じて、口の端を持ち上げた。そして、唐突とも言えるくらい無造作に手を伸ばし、密希の頭を撫でてやった。

そんな行為に、密希は「にゃ？」といささか動物じみた奇声を発して目を見開いたが、すぐに顔を蕩けさせて、にへーっと笑った。されるがまま頭を差し出す。余程嬉しかったのか、手を引っ込めようという素振りを見せると、もっとう撫でて欲しい、と無言のアピールをする始末。

なんだかな……。

頭を撫でられるのが、それほど嬉しいのだろうか。いや、そうじ

やないな。俺の側から積極的なスキンシップを図ったからこそ嬉しいのだろう。

違うか？

わからない。

どう接すれば親しくなれるのだろう。

どう言葉をかければ優しく思われるだろう。

どう表情を装えば安心させられるのだろう。

わからない。

俺は心の中に重石を摘め込まれたかのような耐え難い苦痛と悲痛で辛くなってきたので、無理矢理に思考を切り替えて新しい話題を振った。

「なあ、密希。ちつと訊いてもいいか？」

「何かなー？ おにいちゃんが密希から聞きたいことってなあにー？ 質問は大歓迎なんだよー。何でも訊いて下さいねー」

密希は明らかに安堵していた。俺からの質問を喜んでいるのだ。それはつまり、密希という女の子に対して興味を持ったということに他ならないから。

「密希、何でも答えちゃうよー」

そう言ってくれるとありがたい。

俺は遠慮せずに質問をぶつける。

「密希って、何歳だ？」

「んー、十四歳だよー。現在、中学二年生だねー。学年で一番の優等生なんだよー」

「なるほど、十四歳か……」

俺は内心で感心した。

十四歳と言えば、俺が風守玲佳を凌辱した年齢だ。悲劇的刺激的自虐的蛮行だった。そして、親父を困らせる為に反社会的行為に勤しみ、反道徳的行為に狂い、鬼畜道を爆走していた年齢でもある。

「んー。おにいちゃん、どうしたのかなー？なんか感慨深げだねー。十四歳に何か思入れがあるのかなー？」

「いや、別に……。単に、俺が十四歳だった頃を思い出してたんだ。あの頃の俺と今のおまえとじゃ随分違うなーってな。精神的にも、肉体的にも。おまえ、胸とかちっこいし」

「あー。おにいちゃん、いやらしいんだー。そーゆー目で妹を見るのは倫理に反するいけないことなんだよー」

密希は咎めるように叫ぶ。あまり発育の良くない胸を両手で隠し、唇を尖らせて照れたように怒ってみせる。でも、本気で嫌がってはいないだろう。可愛いものである。それくらい幼い。

俺が十四歳の頃、周辺にいた女の子たちは、今の密希と比較すると格段に発育が良かったように思う。気のせいかな？ 少なくとも、風守玲佳は密希よりも数段プロポーションが良かったし、素晴らしく大人びていた。育った環境の違いもあるのだろうが、同じ年齢でこつも体格が違う理由は何だろう。単に個人差か？ だが、幼さは悪ではない。俺にとっては喜ばしい。変に大人びているより、逆に好感が持てる。何よりも、《兄妹》することができる。

「十四歳の中学二年生。つまり、義務教育真っ直中の生徒さんなわけだな。一般的に言うところの女子中学生。それで、今日は平日。連休は三日後からで、今日はちゃんと学校のある日だよな。そうだよな、密希？」

俺は確認した。

「むうー。そうだねー」

密希は何を言われるか察したらしく、曖昧でいい加減な返事をした。にこーつと穢れなき笑顔を浮かべ、話をはぐらかそうとしているが、そこを突かない俺じゃない。

「今は何時だ、密希？」

「んー。に、二時かなー。さ、惨事かもー。用事はないけどー……後事万端でー……」

下らん戯言は無視してやった。

「今は二時ちよい過ぎだ……。ってことは、まだ学校にいなきゃいかん時間だろ？ 授業を受けてなきゃいかん時間だ。なのに、おま

え、自宅でいけ好かない義兄と嫌々会話してる。変だなあ。それっておかしくないか？」

俺はちらつと横目で義妹の様子を見た。

密希は拗ねた子供のように……まあ、まだ子供に違いないが、「むうー」と口を尖らせて反抗的態度を示した。

「おかしくないよー。密希、ちゃんとママに許可を貰って学校休んだんだからねー。んー。違うかなー。今日はママから連絡が入ったから、急いで早退したんだよー。陽影おにいちゃんが戻ってくるから、すぐに帰ってきなさいってー。ママは優しいからねー。だから密希はちゃんとルールを守ってここにいるんだよー。優等生だからー」

「おいおい……」

俺の帰宅に合わせて授業をサボらせたというのか？ 密希よりも光理さんの方が非常識的価値観の持ち主だぞ。そんな母親で大丈夫なのか？

「学校はきつちり行つとかないと、あとで理不尽な苦勞を強いられるぞ。これは俺の実体験からの忠告だ。授業をサボると次からきつくなるし、かつたるくるなるし、何よりテストで大変なことになるからな」

柄にもなく説教する俺。

「はい、ちゃんとかわかってるんだよー。密希、しっかり勉強してるしー、成績良いからー、一日ぐらい授業を受けなくても大丈夫なんだねー。それよりも、おにいちゃんとの会話を大切にしたいんだよー。あと、あとー。密希はおにいちゃんをいけ好かないなんて思っていないだからねー。嫌々お話をしてるんじゃないんだからねー。ほんとに仲良くなりたいたいだよー。密希、あんまし仲良しのお友達いないしー……。男の人とかとあんましお話したことないからー」

「そうか……」

俺は内心で反省した。邪推もいいところである。密希は純粹に義

兄と仲良くなりたいたいと思っっているのだ。母親から命令されたから……ではなく、本当の意味で家族の絆を結びたいと切望している。それに、友達が少ないという告白も胸に響いた。

密希に友達が少ないのは当然であり、必然である。友達にいたくなる要素を持っていない。欠けている。完成された美少女ゆえに欠陥人間。そんな存在と純粋な動機で友達関係を結びたいと思う人間こそ変わり者と言わねばならないだろう。それほど、特別な美少女という存在は一般人に認められない。差別の対象にしなければならない。最悪の場合、虐待されてしまう。いや、もう既に虐待中である可能性もある。本人が気づいていないだけで……。

俺は啞えタバコのまま唇を噛み、天井へ視線を逃した。

子供のイジメは怖い。限度を知らないから歯止めが効かず、手加減を知らないから容赦しない。しかも、集団で一人を攻撃するから、虐待は際限なく続き、誰一人として罪の意識を覚えず、徹底的に追い込む。俺もイジメていた側だったからよくわかる。そして、イジメられていた側だからよくわかるのだ。

イジメの最終形は死である。

死こそがイジメの終焉。

誰にとつても良い結果を得られないのに、誰も最悪を想像しない。そんな想像力がない。世の中には、可哀想なほどに頭の悪い愚か者が、予想以上に多く存在しているのだ。

「密希、おまえ、学校は楽しいか？」

何だか俺らしくない心配り。

なぜ、俺が急にそんな質問をしたのかわからなかったらしく、密希は目を瞬かせて小首を傾げた。でも、すぐに無邪気に笑い、明確に頷いた。

「学校は楽しいんだよー」

「そうか……」

一安心である。

穢れない笑顔を見せていられる間は大丈夫だ。イジメられてはい

ない。少なくとも、本人にその自覚はない。

俺は徐に、啜っていたタバコを灰皿に押しつけ、なすりつけて揉み消した。肺内に溜めていた紫煙を吐き散らかし、膝上に零れた灰を手で払う。

「なあ、密希。この後、暇な体か？」

唐突に尋ねてみた。

密希は吃驚眼で頷く。

「え？ うん。暇だよー。今日は、おにいちゃんと一緒にいるつもりだからねー」

「友達とかと約束してないか？」

「してないよー」

「そうか、それなら丁度良い。ちょっとばかり俺とお出かけするか」
「お出かけー？」

「ああ。デパートでお買い物だ。買っておきたい物があつてな。そのついでに、って言っちゃなんだが、おまえにも何か買ってやるよ。買い物がてらのデートだな。来るか？」

俺は座椅子から立ち上がり、上着をハンガーから取る。

密希は元気良く手を上げた。

「行くー！ 密希、一緒に行くよー」

俺はテーブルの上から車のキーを取り、財布と携帯電話をポケットに突っ込んだ。

「俺の準備は万端だ。密希は……その格好でいいのか？」

そんな丈の短いスカートを穿いてると、エスカレーターや階段を使用する際に、下から簡単に覗かれてしまう。そう注意したいのは山々なのだが、義妹の危機感のなさを見ると何も言えなくなる。痴漢対策に無頓着なのかもしれない。でも、俺に覗かれた時は、盛大に恥ずかしがってたっけか……。

「うん、密希も準備万端なんだよー。ちゃんと余所行きのお洋服だからねー。これ、可愛いでしょー、おにいちゃん？」

「ああ。確かに可愛いけどな……」

俺が仏頂面で肯定すると、密希はにへーっと嬉しそうに相好を崩した。

出かける前にキッチンへ顔を出して、少し帰りが遅くなるかもしれない、と光理さんに告げておいた。

楽しんでらっしゃいと言われ、何だか尻がむず痒くなったけど、悪い気はしなかった。

俺は愛車のジャガーに密希を乗せ、都内で今一番人気のデパートへと向かった。

【7・小野寺紗枝】

この車はどこへ向かっているのだろう、という疑問が浮かんだ。けれど、同乗者の中に名門校の女子中学生が混じっているので行き先が地獄でないことは明らかであり、運転席に座っているモアイ男の低俗なセクハラ発言にさえ目を瞑れば快適なドライブと言えなくもなかったから、目的地に到着するまで後部座席で大人しくしていようと思ひ、口から迸りそうになる罵声を飲み込んで窓の外へと視線を向けた。

「おい、おまえ、小野寺……紗枝とかいう名前だったか？ 見てくればそこそこ良いんだから、そんな無愛想な顔して外なんか見てんなよ。テンションが盛り下がるだろ」

「……………」
鼓膜に優しくない粗野な声が聞こえてきたが、空耳だろう、と聞き流す。モアイが喋れるわけがない。いや、助手席に座っている制服姿の女子が腹話術を用いて喋っている可能性が僅かにある。

「おまえ、どこの学校だったっけ？」

「……………」

「おい、西川さんを見無視するな」

隣りに座っている目つきの悪い金髪の男子が私の脇腹を肘で小突いて返事を促してきた。

見かけ通り無礼な男子である。彼は一応なりとも人間の形を成しているが、それは外見の形状だけに限定した視覚的錯覚であって、服越しにはあっても女子の身体に気安く触れてはいけない獣の類いだ。気を許せば、その瞬間に捕食されてしまうだろう。

「小野寺さんは就職なさっています」

助手席の女子が代わりに答えた。囁くような、というよりも栄養失調のひよこが死に際の一鳴きを零したような弱々しい声だった。

彼女の言った通り、私は現在、某有名ファーストフード店の正社員

として働く身である。高校一年生の冬、母親から突如として言い渡された中途退学命令と就職命令により働かざるを得なくなったのだ。でも、その境遇を不幸だとは思っていない。母子家庭の貧困を嘆いてもしょうがない。事故死した父親を恨む筋合いの話でもない。自棄になって道を踏み外す蛮勇もない。病気がちな母親を手助けしなければならぬ。何より、自分が快適な生活を営む努力は惜しまない。だから、この四ヶ月、一生懸命に働いた。

しかし、時には生き抜きが必要だろう。働き詰めでは、心身共に疲労が鬱積して、あらゆる方向へと噴出してしまふ危険性がある。ゆえに、労働に対する金銭以外での報酬を欲したのだ。

私は夕暮れの高層ビル群に向けていた視線を、隣りの金髪男へと移した。

「もう一度、確認しておくけれど、本当に大迫先輩は来るのでしょうかね？」

「へっ？ 大迫なんて奴は知ら……」

「勿論、大迫は来るさ。なあ？」

「え、は、はい。そうです。そうでしたね、西川さん」

へらへらと答える金髪男。

「今日は京桜大学ラグビー部が主宰する合コンだからな。当然、大迫も参加する。当たり前だ。下らんことを訊くな」

モアイが不愉快そうに言った。

大迫利一とは高校生時代の私が敬慕していた先輩の名前である。成績優秀、容姿端麗、しかも後輩に対して面倒見が良く、そばにいと楽しませてくれるサーブス精神の権化。まさに理想の恋人像を地で行く存在だった。必然的に憧れ、叶わぬ想いを寄せた男子……。その先輩も参加する合コンなのだ。つまり、それこそ私が見知らぬ人間の車に同乗している理由である。

しかし、若干の不安要素もなくはない。

合コンとは、下司な男子の邪悪な欲求を満たすために、穢れなき女子を誑かして射止める狩猟行為の別称である。それを理解してい

ながら参加する女子は、欲求不満で火照った身体を持って余している淫乱女と言わねばならない。もしくは、後日に金銭や貴金属などの貢ぎ物を獲得するべく、自ら射止められに行く強欲女だ。中には社会的な異性との出会いを求めて参加する純粋な女子も稀に存在するらしいが、そういう世間知らずはその勘違いを利用され、女性を冒瀆する卑猥なゲームを強要され、前後不覚に陥るまで飲酒を強制された挙句、性欲解消の道具として使い捨てられるのがオチである。要するに、合コンに参加する女子を悪意をもって分別すると、貞操を奪わせて利益を獲得するか、もしくは貞操を汚されて泣きを見るか、その二種類に分けられるのだ。それら悪例と私を同一視されては敵わないが、男子の目には同じ獲物として映ってしまふのかもしれない。とにかく、合コンに参加する場合は、自身の安全を自ら確保するべきだし、誰かに保証を求めて自己責任を回避するべきではない。私は今回の合コンに参加するに当たって、下調べを怠らなかつた。確かに西川不二彦は京桜大学の二年生であり、ラグビー部で大迫利一の先輩でもあった。今回の合コンに彼が参加するか否かの最終確認は取れなかつたけど、もし不参加だったとしても、夕食代とカラオケ代を奢ってもらえるのだから文句は言わない。女子中学生も参加する合コンなので、貞操の心配は杞憂に終わるだろう。

「おまえ、大迫と仲良しなのか？」

モアイが運転中にもかかわらず巨顔を捻って後部座席を見た。

「あまり親しくないわ。単なる憧れの先輩だもの。高校に行つた時に何度かお話をした程度の付き合いよ」

「へえ、それじゃ、別に付き合ってるってわけじゃねえんだな？」

嘲笑に近い笑いがモアイ顔の下半分を覆った。

眼球の洗浄を今すぐ希望したい衝動に駆られる表情である。極上の色眼鏡を装着することで嘔吐感は緩和できるだろうが、残念ながら所持していなかった。

「付き合っていたら、貴方たちを介して連絡のやり取りをする必要はないでしょう？ 大迫先輩から直接聞けばいいのだから」

「そりゃそうだ」

運転中なのに巨顔を仰け反らせて哄笑するモアイ。

顔の重みでシートが潰れないか心配にならないのだろうか？

モアイは耳障りな笑いを収めると、再び私を見て意味ありげに口の端を歪めた。

「それじゃ、今夜開催されるラグビー部の合コンにおまえが参加しなくても、大迫は全く気にしないってわけだな？」

引っかかる問いだ。

不安がよぎる。

「大迫先輩は私が参加することを知っているのだから、私が姿を現さなければ心配するに決まっているでしょう」

少々声を荒らげて不安の払拭を図る。

「おかしなことを言わないで！」

「可笑しいか？ 確かに可笑しいよな」

くくく、と喉で笑うモアイ。

いひひ、と笑いを同調させる金髪男。

そして、今まで石像と化したように前を見たまま微動だにしない女子中学生が振り向いて一言。

「ごめんなさい」

意味不明の謝罪。

否、私の脳は現状の認識を拒否した。

同乗している二名の男子を見て、それから助手席の女子中学生を見る。

モアイ男は無駄な筋肉で隆起した肩を大きく上下させながら笑っていた。

金髪男は下品な薄笑いを顔の全面に貼りつけ、抱えていたバッグの中身を探り始めた。

女子中学生は絶望的に致命的な謝意を相貌に宿らせていたが、もう言葉は紡がなかった。

私は咄嗟にドアを開けようと手を伸ばした。だが、がちっという

音がしてロックが掛かり、無理矢理の脱出が不可能になったことを知らされた。

車の走行スピードが目に見えて増していく。

法定速度を無視してまで逃がさないつもりらしい。

突如、目の前が真っ暗になった。

私は騙されたのだ、と自覚した時には既に抵抗のしようがなく、頭に布袋のような物を被せられ、腕を背中側に捻じり上げられて、シートに組み伏せられていた。

「色嶺の代用品としては数段レベルが落ちるけどよ、まあ明日食うご馳走の前菜程度にやなりそうだな」

「そつすね。あ、こいつ、俺が先に食っちゃってもいいっすか？

この前、西川さんが先に食ったでしょ？」

「おう、そうだな。いいぞ。でも、中に出すなよ」

「え、なんでつすか？」

「馬鹿野郎！俺が次に使う時、気持ち悪いじゃねえか。それに、万が一にも孕ませちゃったら、後々面倒なことになりかねねえだろ。それくらい察しろ」

「おおー。経験者のお言葉ってやつっすね」

「おうよ」

分厚い布を通して聞こえてくる男どもの野卑な会話と笑い声。

女子中学生の囁り泣く声。

状況は絶望的。

貞操は風前の灯。

あとは、もう、彼らの奇跡的な改心を願いつつ、運命に身を任せ
るしかなかった。

【 8 ・ 天園陽影 】

デパートに到着した俺たちは、すぐに目的地へ直行せず、デパ地下にて今流行りのスイーツなどを買い食いしながら、ぶらぶらと適当に歩き回った。

現在一文なしの俺だったが、出かける前に光理さんがこつそりと十数万円入った封筒を手渡してくれたので、金の心配はしなくて済む。しかし俺は、そんな物を素直に受け取る性格の持ち主じゃないけど、「密希ちゃんを楽しませてあげてね」と言われては、大人しく受け取らざるを得ないだろう。まあ、とにかく、彼女には大感謝である。

俺たちは午後三時過ぎまでデパ地下をうろつき、夕食の買い出しを目的とした主婦が急増してくる頃を見計らって上の階へと移動した。

本屋と音楽ショップを軽く流し、夏に備えての水着コーナーとやらを横目に、目的地であるジュエリーショップに足を踏み入れる。

「おにいちゃん、宝石買ったー？」

密希が訝しげに俺を見た。なぜに、誰に、どんな物を購入するのか興味津々みたいだ。彼女の表情がそう物語っている。

彼女の肩に手をかけて、俺はショーウィンドーに並べられている色とりどりの宝石類を指で差した。

「欲しい物があったら言えよ。何でも好きなのを買ってやるからさ」「えっ、でも……」

密希の顔に動揺が走った。

まあ、無理もない。ケース内に飾られている指輪や首飾りは、一万、二万で買える安物などではなく、百万単位の高額商品であり、中には七桁に達する超高額商品まで陳列されているのだ。自由に選べと言われて平静を保てるわけではない。「はい、これ、頂戴」と指

を差す馬鹿女ではない証明だろう。

「にゃー。こんなの無理なんだよー。高すぎるんだよー。おにいちゃん、密希をからかっているのかなー？」

密希は膨れっ面を作った。

「一切からかってない。本気で好きなのを買ってやるって言ってるんだよ。密希が欲しいと思った物を選べばいい。ほら、これなんかどうだ？」

俺はケース内の中央で存在感を示しているエメラルドのペンダントを指差した。

密希は両手を前に出してパタパタと左右に振った。

「だ、駄目なんだよー。こんな高いのはー」

「高いか？ 結構お手頃な値段だよ」

品物と値札を見比べながら評する。

何カラットあるのか不明だ。俺の鑑定眼では正確な判定ができない。でも、これだけ巨大で三百万なら安いんじゃないかと思う。うーん、でも、少々品位に欠けるか？ 石ばかりが存在を主張していてバランスが悪いようにも思える。

それよりも……。

「こっちの首飾りは玲佳にぴったりだな」

ケース内でひときわ存在感を放つブルーのペンダントをガラス越しに品定めしながら、俺は小声で呟いた。

天然サファイアで、派手さはなく、地味過ぎない。気品を感じさせるセンスの良いデザイン。値段は………。ちこーつと高いが、玲佳への出費なら許容範囲内だ。どうせ親父が稼いだ後ろ暗い金だし。

俺は店員を呼び寄せて、このサファイアの首飾りを購入するのでケースから出して見せて欲しい、と頼んだ。最終確認の為である。

言われた店員は一瞬、耳を疑うような素振りを見せたが、俺が黒いカードを手渡すとすぐに営業スマイルを浮かべて要求に従った。

まあ、一介の学生がお手軽に購入できる品物ではないので、そういう反応もやむを得ない。

更に俺はケース内に視線を走らせ、ルビーのペンダントとダイヤのイヤリング、そして、トパーズのブローチを購入した。

「おにいちゃん、そんなに高い物を一杯買っちゃってー……お金、大丈夫なのー？」

スナック菓子を買うようなノリで次々に高価な貴金属を包装させる義兄を見て、心配そうな声を出す密希。

現金で買うわけではない。

「ああ、大丈夫。気にするな」

俺は軽く答えた。そして、店員が持ってきた品物入りの紙袋とカードを受け取る。

俺たちは颯爽と店を後にした。

その後、屋上の茶店でしばらく寛ぎ、頃合を見てデパートを出た。

デパートの地下駐車場でジャガーに乗り込んだ俺は、包装された品物の中から一番小さな物を取り出して密希に渡した。

「ほら、これ。密希にプレゼントだ」

シートベルトを締めていた密希は、膝の上に乗せられた品物を見て目をぱちくり。そして、俺の顔と品物を見比べて、困ったような嬉しいような、複雑な表情を作った。

「これ、さっき買った品物でしょー？」

「ああ、そうだ。それはおまえの分。ついでに買ったみたいで悪いが、一応の記念の品って言うか、何て言うか。まあ、プレゼントだな。本当はおまえが選んでくれりゃ良かったんだが、なんか遠慮してたみたいだから、勝手に似合いそうなやつを選んどいた。たぶん、似合うと思うぞ。開けてみるよ」

ぶっきらぼうに促す。

「うん……、でもー。これって凄く高い物でしょー？ こんなの貰ったりしたらママに怒られちゃうよー。ママって、こういうのには厳しい人だからー。密希、貰えないよー」

「これは安いやつだから大丈夫だ。それに、値段なんか関係ねえ。」

光理さんには黙つとけばバレねえよ。それに、光理さんの分もちやーんと買ってあるから、おまえが怒られることなんてないって。もし怒られるとしても、それは俺であつておまえじゃねえよ。安心して貰つとけ」

「うーん……それも嫌かなー。おにいちゃんがママに怒られるのは絶対に見たくない光景なんだよー。家族は仲良く円満であつて欲しいんだよねー」

本心ではプレゼントの中身が何であるか確認したくてしようがないくせに、密希は拒否を示して品物を返そつとした。

何だかやるせない気分になった。

俺と密希の価値観には大きなズレがある。商品の質が先に立つ俺とは反対に、彼女はまず値段ありきという考え方だ。

そう言えば、最近まで密希たちは極貧生活に喘いでいたんだっけ？俺のように欲しい物を片っ端から買い漁つていく金持ちの姿を見ると、困惑と嫌悪を覚えざるを得ないのかもしれない。

ちよつと早まったか？

しかし、密希も金持ちの家の子になったのだ。俺みたいな道楽息子の真似をしるとは言わないが、欲しい物を躊躇せずに購入する生活に慣れる努力をして欲しい気持ちも若干ある。所持している金は、使わなければ増えていく一方だし、使わないと金が世の中を循環しない。何よりも、馬鹿親父の稼いだどす黒い金など、どんどん無駄遣いするべきなのだ。

「いいから貰つとけよ。おまえがいらないうつて言っんなら、窓から捨てちまうぞ。そんで、もう二度とおまえにはプレゼントを買つてやらない。仲良くもしてやらない。家にも帰つてこない。それでもいいのか？」

脅迫紛いの強要。

「そ、それは駄目なんだよー。おにいちゃんは密希と仲良くしてくれなきゃ困るんだよー。嫌なんだよー。うーん。それじゃ、しょうがないかなー。貰つちゃおうかなー。貰うしかないよねー。捨てち

やうのは勿体ないしー。帰ってこないのは絶対嫌だからー。じゃあ貰うよー。ありがとー、おにいちゃん」

密希は満面の笑みを浮かべ、小さな頭をぺこつと下げた。

お礼を言えるのは良いことだ。礼儀礼節を弁えた女の子は、今時、稀少価値が高い。光理さんの躰の賜物だろう。

「中身、確認してみろよ」

「うん、開けちゃうねー。うーんとー……」

密希はがさがさと包装を解き、ジュエリーケースを手の平の上に乗せ、そつと蓋を開けた。中身をこつそり覗き見るように、顔を寄せている。

「あーっ、可愛いブローチだねー。ウサギさんのブローチ！」

嬉しそうに声を上げながら、ブローチを手に取り、色々な角度から眺めている。

密希にプレゼントしたのは、トパーズをあしらった兎のブローチである。ぽつちやり顔の兎はなかなか愛嬌があり、両眼に瞬く宝石も小さくて派手ではない。値段もお手頃価格で、身に着けて学校へ行っても問題ないくらい可愛らしいデザインだ。

「ありがとー、おにいちゃん。これ、大切に作るからねー。今日から毎日身に着けるからー。宝物にするねー」

にこにこ顔で感謝してくれる密希を見ると、俺の心の中で燦っていた「俺に妹なんていねえ」という思いが溶解し消えていくように、そこはかとない不安を覚えた。良い意味での不安。俺のような人間が兄妹愛に似た感情を抱いて和んでいいのか、と疑ってしまう不満。そして、悪い意味で安堵してしまっている俺も同時に存在しているわけで……。自分の心に矛盾を住まわせて平然としていられるほど強い人間じゃない。

こんな時に左右良のアドバイスを得られれば、と思った。

家族的幸福感が忌まわしいわけじゃなく、不幸せである自分に満足していたから。不幸せであるべき自分が愛情を切望するなんて許されないだろう。実に馬鹿馬鹿しい。殺せ。そんな感情は抹殺して

しまえ。

「……………」
「いや、そうじゃなくて。」

落ち着け……。マイナス嗜好は棄てる。

「全く、俺はどうしようもねえ阿呆だ」

口の中で呟き、俺は愛車を発進させた。

【9・小野寺紗枝】

輪姦は執拗を極めた。

私はどこかもわからぬ平屋の一室に連れ込まれ、全裸にされ、ベッドに放り出され、両手を背中中で拘束され、アイマスクで目隠しされ、怪しげな錠剤を飲まされ、猿轡を嚙まされた上で、モアイ男と金髪男によって交互に犯された。

相手が二人だけだったのは救いだが、回数をこなさなければならぬのは酷い苦痛だった。息を吐く余裕すら与えられずに連姦されるのだ。しかも、二人は性欲の解消だけが目的ではない様子であり、射精すると選手交代をして次の凌辱に備えて肉体の休息をとり、再び交代して犯す、それを延々と繰り返したのだ。それが、ただ単調に続くだけであれば淫虐の終了まで心が堪えられたかもしれない。しかし、彼らは手を変え品を変え、体位を変え、場所を変えて、思う存分に楽しみながら私を苛み続けた。

最悪だったのは、奇怪な形状の器具を用いた攻めである。目隠しのせいで定かではないが、それは産婦人科で妊婦に使用する器具だろう。それを、彼らは私の胎内を弄る目的で使用したのだ。拒絶したかったが、猿轡によって発言を封じられていたので、されるがままに内蔵を晒し、未知の快感に悶えるしかなかった。

いつしか時間の感覚は喪失し、何度犯されたのかもわからなくなり、自分が誰でここがどこでなぜこんな目に遭っているのかさえわからなくなっていた。そして、ついに私が肉体的疲労と屈辱的快楽によって抵抗を諦めようとした時、頃合いを見計らったように猿轡が外され、手の拘束も解かれた。最後に目隠しが外された瞬間、撮影機器の存在が網膜を焼いた。女子中学生が凌辱行為の一部始終を撮影していたのだ。

心臓が瞬間停止し、心も凍結した。自分を支えていた全てが崩壊

していった。目出し帽を被った彼らの笑い声が遠くの方で響いていた。これは販売を目的とした美少女輪姦凌辱ショーの撮影会なのだ、と教えられ、私の脳は自殺を試みた。だが、失敗した。

女子中学生は泣きじゃくって陳謝したが、撮影機器を手放そうとはしなかった。

それからの攻めは苛烈を極めた。

彼らの歪曲した征服欲と倒錯した支配欲を充足させ、同時に猥褻画像としての商品価値を高める為には、従属しての奉仕や恭順しての共同作業は不必要とされ、暴虐に対する悪罵を交えた必死の抵抗と魂の底から絞り出した助命嘆願の哀訴を連呼しながらの被虐こそが必要とされた。無論、それを言葉としてではなく、肉体に直接教え込まれた。そして、何より重要視されたのは、私の反抗心を萎えさせずに悪足掻きさせながら、肉体的快樂で狂わせることだった。

それは、まさに生き地獄だった。

俺たちはデパートから自宅に直帰せず、お台場に新しく開館した水族館へ行き、お子様や恋人たちに混じってイルカショーを観覧した。

義妹とはいえ、とてつもない美少女とのデートは俺を激しく興奮させ、ある種の倒錯した欲望を程よく満足させてくれた。無論、その鬼畜じみた劣情は億尾にも出さない。デート経験が豊富である風を装って見せていたが、実際には初体験に近く、玲佳以外の女で言うところ……あのクソ生意気な星岬流美と《専属的娼婦》を自称する斑雲愛練の二名とそれぞれ買ひ物がてらのデートを数回した経験だけなので、俺は可愛い女の子とどう接すれば良いのか戸惑い、苦悩し、混乱し、帰宅した時には精神的疲労によってくたくたの状態だった。

自宅に帰り着いたのは夕飯時であり、丁度、光理さんが料理を作り終えた直後だったので、タイミングとしてはバッチリだった。

しかし、俺は酷く不機嫌だった。その原因はデートによる疲労にあっただけ、イルカショーを見ている際に、イルカのぶちまけてくれた水飛沫がスコールのごとく俺をずぶ濡れにして下さったからでもあり、愛車の運転席が濡れてしまったせいでもあった。

本来なら、ずぶ濡れになった瞬間に責任者を呼びつけ、土下座させて謝らせた上で水害を弁償させるところだが、密希が一緒ゆえに醜態を晒すわけにもいかず、ぐつと我慢の子。イルカが飛び跳ねる姿を見て無邪気に手を叩き、バスケットボールを使用した芸を見て歓声を上げて褒め称える義妹の姿を見てしまっただけは、気分を削ぐようなマネはできなかった。まあ、不機嫌とは言っても、負の激情を行動に直結するレベルではない。数回舌打ちを連打した程度である。まあ、内心ではクソなイルカを数十回虐殺していたが……。それを密希が読み取れるわけではない。それに、マイナスの感情は、家に入

った途端に綺麗さっぱり霧散してしまった。キッチンから良い匂いが漂ってきたからである。

「シチューですか？」

リビングのドアをくぐり、ダイニングからキッチンを覗き込んで尋ねると、エプロン姿の光理さんがお玉片手に頷いた。

「お帰りなさい、陽影君。密希ちゃんもお帰り。デートは楽しかった？」

「うん。すっごく楽しかったよー。お買い物した後、おにいちゃんが密希の好きな所に連れて行ってくれるって言ったから、お台場に来た新しい水族館に行っただよー。それで、イルカさんたちのシヨウを見たんだよー。可愛かったよー。賢かったんだよー。でも、おにいちゃんやイルカさんに水を浴びせられてご機嫌斜めだったよー。今も、ちよつとむつととしてる感じかなー」

「そつでもねえよ」

軽く答えながらも、俺は意外さを禁じ得なかった。感受性の弱そうな密希が俺の内側から滲み出す微妙な苛立ちを読み取っていたらしい。逐一、顔色を窺うような素振りを見せてはいたが、内面の変化を敏感に感じ取っていたとは……。

「二人とも疲れたでしょう？ お夕食の前に、お風呂に入っちゃいなさい。その間に準備し終えちゃいますからね」

光理さんはお玉を指揮棒のように振り、シチューの汁を飛ばしながら言った。

「そつだな。先に風呂に入るか……。そんじゃ、密希が先に入れよ」俺は密希に一番風呂を勧めた。

「えっ、いいのかなー。密希が先に入っちゃってもー。妹なんだよー？」

「いいさ。俺はこいつのことがあるからな」

俺は手の中に忍ばせた小包みを密希に見せながら言った。

密希は頷いた。

「わかったよー。先にお風呂に入るねー」

密希はぺたぺたと素足を鳴らして、キッチンから出ていった。さて、どう切り出したものか……。プレゼントは渡すタイミングが大切だ。ぶつきらばうに差し出すのも一つのやり方だが、光理さん相手にガッツな手法は用いたくない。俺のやり方では駄目だ。だが、俺らしくないやり方って何だ？ 不躰ではなくて、その逆。小洒落た台詞を吐き、微笑みを持って状況を彩り、心を偽って馴れ馴れしく振舞うわけか？

そんなことできねえよ……。

俺は俺らしく、俺であるべきだ。

俺はキッチン内を忙しく動き回っている光理さんに無言で歩み寄り、断りなく、前置きもなく、いきなり肩を掴んだ。

光理さんは相当に驚いたらしく、びくっと肩を振るわせ、体を捻るようにしてこっちを向いた。顔を引き攣らせている。

「ど、どうしたのかしら、陽影君。いきなり肩を掴んだりしたら吃驚するじゃない」

そりゃ、驚くか……。

もしかしたら、女として身の危険を感じたのかもしれない。密希は風呂に入っていて当分出てこないだろうし、俺は自他共に認知されている変人なのだ。万が一を考えなかったと言えば嘘になるだろう。俺も彼女に何も感じないほどの木石じゃない。それどころか、陰湿で根暗な最低野郎だ。でも、俺はあの糞親父のような好色漢ではないから、相手の合意を得られないまま性行為に及ぶことはあり得ない。そう断言できる。

俺はすぐさま光理さんの肩から手を離し、リボンをあしらった小包を差し出した。

「これ」

無愛想で無粋な手法だけど、こんな風にしかできない。

目の前に差し出された物を見て、光理さんは三秒ほど硬直した。

でも、すぐにプレゼントだと認識してくれたようで、にこーっと美貌を蕩け崩した。

「これを私に？ きゃーっ、陽影君、ありがとう。男の子からプレゼントを貰うなんて何年ぶりかしら。うふふっ、嬉しいなあ。開けてもいい？ 開けちゃっわよお。何かしら……、楽しみだなあ」
わくわくした気持ちを全く隠さず、小娘のようににはしゃいで、白晳を紅潮させ、光理さんは器用に小包を解いた。そして、目を三倍の大きさに見開く。

「あら、イヤリング？ これ、ダイヤモンドでしょう？ まあ！
こんな高価な物を私が頂いちゃってもいいのかしら？ 陽影君、今お金持っていないんでしょう？ 大丈夫なの？」

幼女のように跳ね上がって喜ぶ美人さん。同時に、俺の懐具合を心配してくれている。

「その辺は気にしないでいいよ。現金で買ったわけじゃないから。それに、ぶっっちゃけ、光理さんたちのはついでなんだ。ほら、これ」

別の小包みを紙袋の中から出して見せて、片眉を上下に動かした。
「あら、それ、恋人さんに？ でも、ついででも嬉しいわよ。ありがとう、陽影君。抱き着いてキスしてあげたいくらいよ」

「遠慮しときます」

苦笑気味に即拒否。

「あらあら、恥ずかしがらなくてもいいのに。家族なんですからね」
無邪気な笑みを浮かべる光理さんに、俺は照れて見せるしかない。
仏頂面や不景気面は、この場面に相応しくなかった。

リビングの大テーブルに料理を運んで並べるのを手伝いながら、俺は光理さんが注いでくれたビールを飲んでた。食事は密希が風呂から出て、更に俺が入浴し終えるまでお預けだけど、ビールは先に飲んでもいいと許可してくれたのだ。そんな小さな心遣いがあるがたい。

四杯目のビールを頼もうとしたところで、パジャマ姿の義妹が現れた。

「あー、おにいちゃん、お酒なんか飲んでー。いけないんだよー。

未成年はお酒飲んじや駄目なんだからねー」

開口一番の批判。

「冗談半分とはいえ俺には欠かせない飲酒を注意されたので、密希の髪の毛をくしゃくしゃつとしてやった。

ちよつと髪が湿っぽかった。

「きゃーん、おにいちゃん！ 駄目なんだよー。まだ、ちゃんと乾いてないんだからー」

慌てて髪を押さえてバスタオルで包み、義兄の唐突な乱暴に抗議する密希は、常識外れなほど可憐で、冗談抜きに可愛らしく、水玉模様のパジャマ姿も倒錯的魅力を醸し出していて、問答無用に興奮を掻き立てられた。

ある意味、官能的ですらある。

非常識なくらいに理性的であろうと心掛けている俺をここまで狂わせるんだから、一般男子であれば獣浴に負けて凶行に及んでいただろう。だが、まあ、俺は大丈夫だ。年上、年下、綺麗、可愛い、妖艶、萌え萌え、その全てに影響されない変人だから。間違いは犯さない。

「もうすぐ二十歳だから許されるんだよ。それに、俺は中学二年の頃から酒を飲んでいるんだぜ？ 今更止められねえよ」

そう言い残して、俺はキッチンを出た。ビールの程好いアルコールによって浮ついた身体を巧みに操り、自室へと戻って着替えを用意し、風呂場へと向かう。

実家の風呂で入浴するのも何年かぶりだ。

この家にはバスルームが三箇所備わっている。一箇所は俺の部屋の隣りに位置するユニットバス、もう一箇所は地下に設置されたサウナ付きの檜風呂、最後の二箇所は俺が向かっている風呂であり、この家でも最大で最上で最高級のシステムバスだ。

一家に三箇所の風呂……。頭悪すぎである。

風呂に到着した。

入り口を開けるとただっ広い脱衣場があり、等身大の鏡と化粧台が備えつけられていて、その横に最新型のマッサージチェアが置いてあった。なぜ、マッサージチェアが？ 脳を揺さぶる疑問。前に住んでた時には置いてなかったと思うが……。まさか、光理さんが？ ジジイみたくこれに座って？ おいおい、想像したくないぞ。いや、臆測で判断するのはよそう。馬鹿親父が購入した物かもしれない。そうであってくれ。

俺は手早く服を脱いで浴室に入った。

浴室内に変化はなかった。デタラメに広くて軽くテニスができそうな洗い場。同様に浴槽もでかい。意味なくでかい。無駄にでかい。特注の湯殿は大きな楕円形で、数色にライトアップすることができ、当然のようにジャグジー付き、小さな子供なら泳げるほど広々としている。金持ちの無駄な道楽と言えよう。でも、手足を伸ばして湯に浸かれる点は評価しなければならない。その一点だけは気に入っている。この風呂にのんびり浸かりながら、ウイスキーをきゅーっ と一杯やる……。極楽である。至福の一時ってやつだ。

「密希のやつ、ユニットバスの方に入ったんだな……」

俺は大理石の床が全く濡れていないのを確かめて嘆息した。

この無駄に贅を尽くした風呂の使用に抵抗を感じているのか？ まさか、気後れしているのか？ それとも、贅沢な暮らしに馴染めないのか？ 何にしても、折角のゴージャス風呂を使わないのは勿体ないと言っしかない。現在ある物は有効活用するべきだ。金も物も余っているのだから、率先して贅沢すべきなのだ。金持ちに慣れる。そうしないと、何もかもが本当の意味で無駄になってしまう。

だが、まあ、人間は贅沢には簡単に慣れると言うから、密希も一年経てば金の使い方を覚えるだろう。心配は要らない。

俺はざつと体を洗い、なみなみと湯を湛えた浴槽に十分間くらい浸かって風呂を出た。

ウイスキー片手に長風呂を楽しみたいところだが、密希たちを待たせては悪い。

パジャマ姿になってリビングへ行くと、二人が同時に振り返り、似通ったリアクションを取った。蔑みや侮り、嘲りの要素は感じられない。好意に満ちた表情が迎えてくれている。なぜか、異様に照れ臭かった。

「陽影君も座って。お夕飯を頂きましょう」

光理さんに促されるまま、俺は密希の隣りに腰を降ろした。

「はい、おにいちゃん。ビール飲むでしょー？ コップ、持って下さいなー」

気を利かせてくれたのか、密希がジョッキを手渡してくれて、危なっかしい手つきでビールを注いでくれた。

なんだかな……。酷い勘違いをしまいそうだ。

可愛い美少女がお酒を注いでくれて、目の前には可愛らしい美女が作ってくれた温かい料理が並んでいる。申し分ないお持て成し。

こりゃ、駄目人間養成所だな、と状況を分析した。こんな至れり尽せりの生活が毎日続いたら、一ヶ月経たずに感性がぶち壊されちまう。アイデンティティーの崩壊を招くのは避けられないだろう。でも、不快ではない。嫌じゃない。気分が良い。すこぶる心地好い。

たぶん、こういうのが俺の理想なんだろう。

きつと、どこかで希望していたのだ。

本当の家族でこんな風にできたら、俺はもっとマトモな人格を形成できていたに違いない。だけど、現実には現実として受け止めるべきであり、現状が理想に近いなら、それを維持できるように守っていくべきだ。プラス思考で斑なくポジティブに生きる……。それが俺の命題であり、宿題であり、課題だった。

俺は鶏肉の唐揚げを一口頬張り、次いでビールジョッキをくいと傾け、一気に半分くらいを飲み干した。

「っーふー。んめー」

意識せず、自然と声が漏れる。ビールも旨いが唐揚げも旨い。肉それ自体に醤油系の味付けがなされていて、香ばしく味わい深い。絶品だった。

この状況下では、いつの間にか、俺の表情が微笑みから笑顔に変化してしまっても仕方がない。上機嫌に食事をして己を自覚している。嗚呼、この幸せに首までどっぷり浸かって生きていくのも悪くないよな、と一瞬思ってしまったくらい誘惑は甘く、それを拒否するには心が潤いを求めて乾き切っていた。

「このシチュー、凄く旨いですね。光理さんのお得意料理ですか？」俺はビールからウイスキーに切り替えつつ尋ねた。密希に、要領を得ない手つきではあるが、酒を作ってもらおう。

光理さんはやりわりと春の木漏れ日のような笑みを浮かべて首を振った。

「シチューが得意ってわけじゃないのよ。お料理全般が得意なの。銀座の小料理屋にお勤めしてたことがあるから。特に得意なのは日本料理ね。こう見えて、ちゃんと調理師免許も持ってるんですからね。だから、陽影君、何か食べたい物があつたら遠慮せずに言つてね。注文には応じますよ」

「凄いな……」

俺は手放して称賛した。

「陽影君の大好物は何かな？」

「ああ、そういうのは訊かないで、光理さんの思い通りに作つてよ。俺って際限なく贅沢者だから、好物って訊かれても、フカヒレとかフォアグラとか馬鹿な物ばっかしか思いつかないからね」

「あー。それは、ちよつと感じ悪いわよね」

「だろ？ だから、光理さんの好きなようにやってよ。テーブルに出された食いもんは何でも美味しく頂くからさ」

俺はそう言つて、唐揚げをもう一口食べた。

「はい、おにいちゃん。お酒作つたよー」

密希がマドラーで中身を掻き混ぜながらグラスを差し出した。口ツクだから、氷とウイスキーの割合などで味は左右されない。不味く作るなど不可能だ。

満面の笑顔と共にグラスを手渡され、俺は軽くグラスを揺らして

口につけた。

うん、悪くない。少し濃い気もするが、氷が溶けてくれば程好い感じになるだろう。

「どうですかー？ 美味しいかなー。ちょこーっと濃かったかなー？」

「ああ。僅かに濃いな。次は、ほんの少しウイスキーを少な目にしてくれよ」

「わかりましたー」

頷き、密希は自らも料理に箸を伸ばした。

こんな風に家族で食卓を囲んで、和気藹々と夕食を摂るなんて何年ぶりだろうか。俺の記憶にはそんな暖かい記録は刻まれていない。思い出もない。あったとしても、それは物心つく前の出来事だろう。糞親父が女遊びに狂っておらず、良き父親を演じていた頃。そんな遠い日のこと。心の最奥に刻まれているのかもしれない。

俺はその頃の記憶を思い起こそうとして、遠い記録を探り、思い出の汚泥をさらったが、すぐに諦めた。

時間の無駄だ。

取り戻せない幸せなど、思い出せたところで何の意味もない。惨めな気持ちに拍車をかけるだけだ。切なさで苦悩するのは最悪に堪らない。下らない感傷に浸ってないで、目の前にある幸せを堪能するべきだろう。前向きになろうとしても、すぐにネガティブになっちまうのが俺の欠点だ。気をつけなければなるまい。

「なあ、密希って明日は学校だろ？ 今日ハサボリだけど、明日はちゃんと行けよ。あんまりサボり過ぎると学校がつまらなくなつて俺みたいな駄目人間の仲間入りだぞ」

「えー。違うよー。密希の学校は、明日はお休みなんだよー。学園の創立日ってやつー」

密希が口をモグつかせつつ、スプーンを俺の顔に突きつけて自慢げに言った。

ジェスチャーが大袈裟だ。女の子としてはしたくないような気もするが、可愛いから許すしかない。美人とか美少女の行為全般は、ほぼ許されて然るべきなのだ。

しかし、許さない人がいた。

「こら！ 密希ちゃん、お行儀が悪いですよ。口に入れたスプーンでお兄ちゃんを指し示してはいけません。人を指す時は、スプーンを置いて指差しなさい。いいですね？」

「はい」

光理さんの注意は正しいが、注意する部分が若干ズレてないか？人を指差す行為は、失礼だと思っただが……。まあ、気にするまい。

密希はスプーンを置き、人差し指を俺の顔に突きつけた。素直な良い子である。

「つてことで、明日はお休みなんだよー」

「そうか、そりゃ良かったな」

「でも……明日はお友達とお約束があつて、学校に行かなきゃならないんだよー」

「へえ……。男か？」

何となしに訊いてみた。

密希ほど飛び抜けた美少女なら、学校の男が放っておくわけない。学校どころか、周辺の男どもが群がり寄ってきて当然である。付き合っている男の一人や二人、いや、両の指に余るほど存在してもおかしくはない。

しかし、密希はきやらきやらと笑って、俺の肩をとんと叩いた。

「いやだー、おにいちゃん。密希、男のお友達なんていないんだよー。密希の通ってる学校は女子学園だしー。校則厳しいしー。だから、男の子にはあんまし会わないんだよねー。それに、ちよつと怖いかなー」

なるほど、女学園か……。それなら、男に免疫がないのも頷ける。俺の顔色を必要以上に窺う理由もわかる。母子家庭という環境にも

問題があるようだし……。

「好きな男とかいないのか？」

「いないよー。いるわけないよー。密希、あんまし恋愛とかに感心ないしー。学校の規則で男女交際は禁止されてるから、もし好きな人がいても駄目なんだねー。先生に見つかつたら即退学なんだよー。上級生で退学になつちやつた人がいるからー。それくらい厳しい学校だからー。男の子と仲良くするのも厳禁なんだよー」

「へえ……そりゃ堪らねーな。俺だつたら三日で退学だぞ」

「うわあー。おにいちゃんて悪い人だつたんだねー。もしかして、退学になるよーなえつちなことしてたのー？」

「そんな質問には積極的に答えらんねーな。でも、退学にならなかつたんだから、悪事は働いてないんじゃないかな」

風守玲佳との関係を男女交際と表現するなら、俺は中学生の一年目から停学処分を受けるハメになっていただろう。いや、まあ、それについては、雲の上から学校側に「お咎め無用」の通達がなされていたのだろう……。その前に、中学校を退学になる生徒など存在しない。退学と表現するよりは、放校もしくは転校と表現した方が正確だろう。俺は中学二年生の時、放校処分ギリギリで踏み止まった実績を持っている。風守のちょんまげ当主から稽古という名の厳しいお叱りも受けたし……。

およそ、密希の通っている学校は、私立の名門中学校なのだろう。そうでなければ話が成り立たない。

俺は酒を飲むピッチをセーブしながら、密希から光理さんへと視線を移した。頬に強い視線を感じたからだ。

「？」

どうしました、と無言で訊く。

光理さんの笑みが深まった。好奇心に輝く瞳が、俺の目を射ている。

何だか、とんでもない質問をされてしまいそうな予感。痛い腹を探られそうな。

そんなの迷惑でしかない。

しかし、今の俺のテンションなら、どんな質問にも答えてしまいたい。そして、このタイミングだからこそ、光理さんの攻撃なのだろう。だが、彼女の口から放たれた質問は、俺の心を抉るような攻撃的性質を宿してはいなかった。

「陽影君で、今、付き合ってる女の子、いるのかな？」

ありがちな質問に拍子抜けさせられた。

「……………」

三秒ほど停止。

答えられないからではなくて、答えたくないからではなくて、答えが見つからないからでもない。返答は確定していたし、迷いも一切なく、すらりと口から放たれるはずの質問だった。けれど、言葉は口の中で間誤付いてしまった。それは、誰をもって付き合っている女とするか、という刹那の戸惑い。本来であれば、一辺の曇りもなく俺の心に映し出されるであろう風守玲佳の顔が、色嶺左右良という特別な存在と重なり合ってスパークし、声を発しようとした喉を動揺させてしまったらしい。

なぜ、左右良の顔を咄嗟に思い浮かべたのかは謎だ。自分のことなのにわからない。いや、無意識では左右良を付き合っている女と認識しているのかもしれない。うーん、マズイ。そりゃ、良くない。即座に認識を修正しなければ……………。

「いるよ」

辛うじて平静を保ち、返事をした。何気ない口調を用いたつもりである。

「あー、いるのね。それはそうよね。陽影君の年齢なら、付き合ってる女の子の一人や二人いて当然よね」

光理さんは大袈裟に驚いて、密希に意味ありげな嫌らしい笑みを向けた。

「付き合ってる女の子がいるんですって。残念ねー、密希ちゃん。もし、陽影君がフリーだったら密希ちゃんにもチャンスがあったか

もしれないのにねえ」

うふふっ、と笑ってからかう。

密希は目に見えて動転した。

「な、何言ってるのかなー、ママはー！ 密希とおにいちゃんは兄妹なんだよー。義理の兄妹だから血は繋がってないけどー。付き合ったりするのは駄目だと思っただねー。み、密希は、悪いことするのは駄目だと思っから、悪いことしたくないんだよー」

密希の狼狽ぶりは面白過ぎるレベルに達していた。慌てて両手をバタバタさせ、顔を紅潮させて叫ぶ。その様子は一見の価値があった。単なる冗談なのだから、さらっと受け流せばいいのに。

軽い冗談でこの有様なのだから、俺が密希に不適切な関係を迫ったとしたらどれほどの反応を示してくれるか、ちょっとだけ試してみたい気もする。キスで顔から火を吹く可能性すらある。キスだけなら兄妹でも許される気がするし……。そんなわけないか？ まあ、キスしようとしても、彼女以上に俺が動揺してしまい、唇同士が重ならない可能性が大だ。俺って、キス経験が三回しかないから。彼女の側でリードしてくれれば問題ないが、それはそれで嫌だった。「冗談よ、じよーだん。密希ちゃんたら本気にしちゃって。お顔を真っ赤にして、可愛いわねー」

「んもー。ママったらー」

「ごめんごめん」

光理さんはぺろっと小さく舌を出して、お茶目に謝った。そして、俺を見る。

「それで、陽影君の彼女ってどんな女の子なのかな？ 訊いてもいいかしら？」

嫌だったら深く追求するつもりはない、と光理さんは目で語っていたが、恋人を隠し立てするほど俺は秘密主義者じゃない。

俺について知られちゃマズイ情報は、中学二年生の時に起こした凌辱事件ぐらいだ。そこから話題をズラしておけば、俺などどこにでもいる陰険男子学生と同じである。多少、マイナス志向が強過ぎ

る感はあるが……。

「別に、構いませんよ」

俺は簡単に応じたが、咄嗟に対象人物を玲佳から左右良へと変更した。

やはり、いくら家族になった相手とはいえ、玲佳と俺の関係について話すのは早過ぎるような気がする。俺の実際の両親にも関係してくる話だし、ひいては《姫城一族》の内情に関わる話なのだ。それを一から説明するのは面倒である。

左右良については何の憂いもなく話せるし、何を突っ込まれても平然と対処できるだろう。これは特定の人間を限定しての質問ではない。左右良の話をして間違いいではないはずだ。

「同じ大学のクラスメイトだよ。名前は色嶺左右良。歳は俺より一つ上だけど、まあ同級生みたいなもんだね。本人はお姉さんぶってるけど。すんごく頭の良い女だよ」

「しきみねさゆらさん……。さゆらって、ちょっと珍しい名前ね。どんな字を書くの？」

「ああ、えーっと……。ひだり、みぎ、よい、って書いて左右良。

本人はかなり真剣に嫌がつてるみたいだけど、俺は良い名前だと思うな。ちなみに、左右良の兄貴の名前は、上、下、良い、って書いて、かずよし。上下良」

「へえ……。面白いわね」

光理さんは感心させられたみたいに、何度も頷きながら呟いた。

この人、名前には思い入れが強いらしい。密希の名前といい、自分の名前といい、人名に何かしらの意味を持たせたいのかもしれない。俺の名前も、悪くないって言ってくれたし。

「左右良、上下良、と来たら次は前後良。そして、天地良って手もあるわね……。うーん」

首を捻りながら、そんなことを言う。

そりゃ、いくらなんでも酷い、と思ったが、怖かったので黙っておく。どこまで本気が表情からは判断できない。そんな変な名前を

つけられる子供の身にもなつて欲しい。俺は自分の名前に病的なまでのコンプレックスを持っているのだから。

「どうしたの、おにいちゃん？」

密希が体を寄せ、顔を覗き込んできた。お互いの肩がくつつきそうな距離になる。

「ん？」

俺はウイスキーの入ったグラスを溢さないように気遣いつつ、上体を逸らせて義妹との距離を維持した。美少女との不用意な肉体的接触は邪悪な思考の温床になる。意識してお互いの距離を保たねばなるまい。

密希は不思議そうな顔をしていた。肩が触れ合う距離への接近に他意はないのだろう。ただ、顔を覗き込んだだけ。しかし、俺には苦痛だ。背德的抵抗感を覚えざるを得ない。既に家族と認識している密希と、まだ一人の異性としてしか見れない俺。その差である。認識のズレは何気ない行動から明らかになってくる。家族観の相違ってやつだろう。

くそつ、またネガティブな感傷に捕らわれそうになっちまった。

俺は堪らず、グラス内のウイスキーを一気に呷った。

「おにいちゃん、急に難しい顔しちゃって……大丈夫かなー？」

密希は寄り目にして訊いてきた。じいーつと俺の目を見据え、内心の動きを読み取るうとする。

プレッシャー攻撃か？

「いや……。何でもない。ちつと、よそごとを考えていたんだ。気にすんな」

「むーっ。それならいいけどねー」

密希は俺の目から視線を移動させずに読心を図るが、そんな高度な能力を持っているわけないので、俺が微笑みかけると顔を桜色に染めて目を逸らし、ソファアに座り直した。

「左右良さんて、綺麗な人？」

名前に興味を持った光理さん、今度は容姿に興味を示したらしい。

さて、どう返答しよう。

俺の乏しい語彙と表現能力では、《美人さん》の一言で片付いてしまうが、左右良の外見を上手く言い表わしているとは言い難い。理知的な美人さん、きりつとした美人さん、カッコイイ美人のお姉さん、社長秘書か女弁護士みたいな美人さん……。どの表現も《美人さん》という言葉を使用している。我ながら情けない。文学部の名折れだな。

俺は迷った挙句、「まあ、綺麗なお姉さんだね」と最低レベルの表現を用いた。

「綺麗な女の子に決まってるわよね。陽影君が選んだ相手ですもの。もし良かったら、今度、私に紹介してね。密希ちゃんとは会いたくないだろうけど、私は陽影君の恋人さんに興味があるから」

「ああ、構わないよ……。って左右良を？」

思わぬ話の展開に、思わずグラスを取り落としそうになった。幸いにして中身は氷だけになっていたから、床にぶちまけても大惨事にはならなかったが、咄嗟にバランスを保ってグラスを持ち直したので、テーブルと床を汚さずに済んだ。

マズイ……。この話の流れはマズイ。非常にマズイ。左右良をここに連れてきて光理さんに紹介すると、その時点で恋人と認定されてしまいかねない。認知されてしまうのは確実だ。二人の理解度から推察するに、左右良を一人の女友達ではなく、俺の恋人と認識しているのは明白である。それを、そのまま鵜呑みにされると、後々に面倒を巻き起こしかねない。

嗚呼……。どうして俺は咄嗟に事実を歪める言葉を吐いてしまったのだろう。なぜ、左右良の名を挙げてしまったのだろう。きっちり玲佳の名前を言っとけば、こんなピンチに陥らずに済んだだろうに。

我知らず、羞恥を感じたのか？

俺は早いうちに誤解を訂正し、認識を改正しておこうと思い、口を開きかけたのだけど、横槍を突っ込まれた。

「あー、ママ、それは違うんだよー。密希はおにいちゃんの恋人さんに会っても何ともないんだよー。むしろ、会ってお話したいと思ってるんだよー。嫉妬とか、焼き餅とかの感情は一切ないんだからねー！」

「あらあら、本当にそうかしら。嫉妬してないって言いながら、すっかり嫉妬しちゃうってるんじゃないの？ 密希ちゃんは、念願のおにいちゃんができたのに、一番仲良くしてもらえないなんて嫌なんでしょう？ 甘えん坊さんだもんね？ だから、他の女の子に負けないように頑張るのよ」

「むーっ……」

密希は焼き魚の身をほぐしながら、光理さんにからかわれていたが、なぜか黙ったままで言い返しはしなかった。

凶星だったようだ。つまり、嫉妬しているということ。色嶺左右良に焼き餅を焼いているのだ。どうしてだろう。義兄妹だから、そういう感情は駄目なのではないのか。いや、密希は異性としてではなく、純粹に近い肉親として、仲の良い兄妹として、俺を独占したいだけなのか？ その辺りの心情が俺には理解できない。

「もう、ママはー！」

密希はにやにや顔の母親にかちんと来たのか、つんと顔を背けてソファーから勢い良く立ち上がり、俺の腕を掴んだ。

「おにいちゃん、お部屋に戻ろー。意地悪なママは放つといてー！」
「あらあら。積極的ね、密希ちゃん」

二人でお部屋に戻って何をするのかしら、と光理さんの小悪魔的な瞳がからかう。

そんなんじゃないよー、と言う目で母親を睨む密希。

仲の良い親子である。親子よりも親密な友人関係という感じ。お互いに何でも腹を割って話し合える仲なのかもしれない。無条件で羨ましくなってしまうような関係だ。俺にはそんな相手が存在しないから。

「あ、密希、ちょっと待ってるって。もう少し飲みたいからさ」

俺は尻からソファーに根っこを生やしたみたいに動こうとせず、密希に引つ張られても微動だにしないで、グラスに新しく酒を注ぐうとした。

そのウイスキーのボトルを横から引つ手繰って、義妹はもう一度思いきり俺の腕を引つ張った。

「お酒はお部屋で飲めばいいんだよー。密希が氷とか持つていくからー」

義妹にぐいぐい引かれ、俺は仕方なしに立ち上がった。困惑を表情にして光理さんに助けを求めると、密希の願いを聞いてあげて、と無言のお言葉。口ではからかいながらも、肝心な部分では娘の思い通りにさせる優しさ。良い母親だよな、光理さんは。

「わかったから、そんなに引つ張るな」

リビングから連行される際に、光理さんへ軽くグラスを掲げて見せる。

光理さんも調子を合わせるようにひらひらと手を振って、「おやすみなさい、陽影君」と言った。だから、俺も挨拶を返そうとしたが、言葉を紡ぎ出す前に視界から彼女の姿は失われてしまった。リビングのドアが小さく音を立てて閉まる。何だか気持ちの悪いもやもやが心の片隅に残った。

考えてみると、誰かと《おやすみ》の挨拶を交わした記憶がない。十年前か、十五年前に一度あったか？ いや、全く記憶にない。思いつくと脳内データを探っても、記録を見つけ出す為に必要な記憶の扉を開く鍵が探し出せないのだ。鍵はどこだ？ 俺を見捨てた母親が消息を断つと同時に、心の奥底から奪っていったのか？ それとも、単に俺が忘却しただけか？ まあ、《おやすみ》の挨拶一つでここまで暗い気分になれる人間もそうそういないに違いない。

「やれやれ、本当に俺は……」

自嘲気味に呟いた。

「んー？ どうしたのかなー、おにいちゃん。また難しい顔してる

よー。そーゆー顔は怖いから止めて欲しいんだねー」

「そうか、悪い。気をつけてるんだけどな」

俺は部屋に戻り、座椅子に胡座を掻いて、密希にお酌をしてもら
いながらテレビを觀賞し、下らない会話を楽しんだ。

今日一日でお互いを理解し合うのは不可能だし、家族として心の
距離を縮めるのも無理があるけど、それなりに密希という女の子を
知ることはできた。内面までは窺い知れなくとも、表層を装う人格
はわかった気がした。そして、俺のことも少しだけ話した。左右良
や玲佳についても、である。

色嶺左右良は大学に入学してからの友達であり、一番身近な女性
は風守玲佳であることを、姫城一族における天園家の立場と風守家
の役割を解説しながら、きつちりと説明した。誤解は早々に修正し
ておかないと、後々に大災害となって自分の身に降りかかってくる
危険があるのだ。誤魔化しや嘘は偽物の家族相手にも吐きたくない
だから、酒の勢いを借りて事実を明かした。

密希は何とも言えない複雑な表情を作ったが、弁解する俺を非難
したりはしなかった。

「あー。だから、プレゼントを二つ余分に買ったんだねー？」

そう言っつて、納得顔で頷いてくれた。

もしかしたら、馬鹿な嘘を吐いた俺を氣遣つてくれたのかもしれ
ない。

午前零時を回った辺りで密希が自室へ戻っていった。その際に、
「おやすみなさいー」と言われたけど、俺はウイスキーの入ったグ
ラスを目の高さに掲げただけで挨拶を返さなかった。その理由は、
光理さんにおやすみを言えなかったのに、密希にだけ言うのは不公
平に思えたからだ。こういうことはきつちりと境界線を引いておか
なければ、俺の内面にわだかまっつているもやもやが益々大きく育っ
てしまう。

ごめんな、二人とも。

今日一日、俺はどこが駄目で、どれくらい駄目で、どう駄目だったのかを思い返し、どう喋れば良かったのか、どう聞けば良かったのか、どう行動すれば良かったのか、ほんの数分間だけ反省した。そして、ベッドに横たわる。

明日からはちゃんとしよう。義理の兄として。義理の息子として。男として人間として。

せめて、人並みに優しくなれば、俺の逆方向に落ち窪んでいこうとする心の壁も落下速度を減じてくれるだろうから。

もっと社交的になれば、俺の生活も明るく彩られるはずなのだ。

今日までできなかったから、明日からはちゃんとしたい。

そう切望していつも眠る。

変わらない俺。

変わらない俺。

変わるうとしない俺。

おやすみなさい。

第二章『壊れる日常』

【1・天園陽影】

体を乱暴に揺さ振られ、無理からに目覚めさせられた。

快眠状態からの強制的覚醒ゆえに爽やかな気分で起床できるはずもなく、俺は強烈な不機嫌さを携えて、ベッドに上半身を起こした。「あ？　なんだ？」

これ以上ない機嫌の悪さを声音に宿らせ、暴虐な睡眠妨害者を睨みつける。

「おにいちゃん、おはよー……」

これ以上ない怯えた声。

ベッドの端に腰掛け、俺を潤んだ瞳で見つめている美少女。そのおどおどした態度は肉食獣を前にした小動物であり、彼女の項垂れる姿を見た俺に、内心に高まった不快感のボルテージを初期段階まで押し下げる努力を強いた。

俺は百トン近い鉛を吊り下げられたように重く感じられる瞼を力技で抉じ開け、まだ現在の自分が置かれている状況を理解していない脳にシヨックを与えるべく、強く頭を振る。

えーっと、ここは……俺の部屋だ。実家の自室。

そうだ、俺は実家に帰ってきていたんだ。

目の前にいる女の子は、義理の妹になった人物。名前は密希。玲佳じゃなくて、密希が俺を起こしたらしい。

こんな乱暴な仕種で起こされるのは初めてだ。叩き起こされた、という表現がピッタリである。だけど、怒れない。気安く感情をぶつけるには、密希はまだ他人だった。それに、感情的になるのは俺のスタイルじゃない。

「ああ……うん……。悪いが、タバコ……取ってくんねえか」

俺がベッドの上で胡座を掻き、髪の毛を掻き回しながら頼むと、密希は慌てた動作でテーブルの上を探り、タバコとライターを見つけて出し、手渡してくれた。

「さんきゅ」

俺はタバコを一本抜き取り、口に咥えて火をつけ、大きく煙を肺に吸い込み、ニコチンを体内に取り込んだ。そして、紫煙を吐き出すと、ようやく脳が眠りから覚め、心に電源が入った。

「おはよう、密希。こんな朝っぱらから、どうした？ 今日学校、休みなんだろう？」

言いながら、ベッド脇に設置されている時計に目をやる。

現在の時刻は、午前九時十分。

六時間くらい眠っただろうか。昨夜、いつまで起きていたか定かではないが、明け方まで飲んでいたわけではない。多少、アルコールが残っているようで、脳味噌がずっしりと重くて手足がだるい。でも、深酒はしていない。元々酒には強いのだ。けれど、飲むペーすがちよつとばかり速すぎたのだろう。いつものように朝起きたら綺麗さっぱりアルコールが抜け、爽やかな朝の空気を肺一杯に吸い込んで今日も一日頑張ろう、という具合にはならなかった。あと二時間は眠る必要がある。

「おにいちゃん、怒ってるー？」

密希は不安げに顔を覗き込んできた。

勿論、怒っている、とは言わない。

「いや、怒ってねえよ。ちよつと気分がすぐれないだけだ。昨日の酒が残ってるのかな」

「うーん。おにいちゃんは凄くたくさんお酒飲んでたからねー。二日酔いになっちゃっても仕方ないんだよ。密希は、おにいちゃんと一杯お話ができて嬉しかったけどねー」

「そうか。そんで……どうしたんだ？ こんな朝早くに俺を起こしたからには、何か大切な用事があるんだろ？」

俺は立膝の上に肘を乗せる体勢でタバコを吹かし、ゆっくりとした口調で訊いた。

「うーん。用事っていうかー、ちよつとしたお願いがあるんだよー」
密希は哀願口調で言った。

「お願い？　どんなだ？　言ってみろよ」

啞えタバコのまま話を進めるように促すと、密希は口をモグつかせて躊躇い、眉を八の字にして不安な心情を表した。切なさを感じさせる表情。俺の腐れきった心の琴線に触れるような……。

俺は優しく微笑んでみせた。そうしなければいけないような気がした。

すると、密希は保証を得たと感じたのか、おずおずと話を切り出した。

「あのねー。今日、密希はお友達に会いに、学校に行かなきゃいけないんだよー」

「そうか……そーいや、昨夜、そんなような話をしたっけな。聞いた記憶があるよ」

俺は思い出して頷いた。

よく見れば、密希は可愛らしい制服を着ていた。プリーツの入った真っ白いスカート。胸の部分にエンブレムがあしらわれた濃紺のジャケット。同色のリボン。咄嗟にどこの学校の制服か識別できなかったが、人目を引くお洒落なデザインから推察するに、かなりのお嬢様学校だろう。記憶にはある制服だが……思い出せない。この近辺の学校だろうか？

「それで、学校に行かなきゃならない密希のお願いって何だ？　まさかとは思うが、学校まで車で送っていけ、って言うんじゃないかな？　そんなふざけたお願いのせいで無理から起こされたってんなら、マジで怒るかもしんねえよ」

俺は僅かに眼光を陰しくした。

密希はぶんぶんと手を左右に振った。

「ちっ、違うよー、そうじゃなくてー。んー……。違わないかもしれないけどー。それだけじゃないんだねー。密希、学校に行かなきゃなんないんだけどー、あんまし行きたくないんだよー。お友達はクラスメイトだけどー、仲良しの子じゃないからー……。ちよっと不安かなーって思ってるー。その子、あんまし評判の良い子じゃない

からねー」

「だから？」

「だから、一人じゃ心細いからー……、一緒について来て欲しんだよー」

「行きたくなけりゃ行かなきゃいいんだ。仲良くないって言うんなら尚更、行く必要なんてないぞ。放つとけばいい。そんな奴、放つとけよ」

はつきり言えば、朝っぱらから行動するのは億劫なのである。でも、本音を言うのは憚られるので、常識的な理由をつけて諦めさせようと試みた。俺の良し悪しを基準にして判断しても正しい結果は導き出せないが、好きでもないクラスメイトの誘いに乗って嫌々学校へ行く意味があるのかどうか。むしろ、無駄な時間を消費するだけだと思う。

「それとも、行かなきゃなんねえような緊急事態なのか？」

「うーん……。密希には良くわかんないんだよ。理由とか聞いてないしー。でも、その子、凄く困ってたみたいだったし……。密希が行かないとー、怒られちゃうみたな感じだったから……。仕方ないかなーって思ったんだよ。密希、お友達が少ないから、仲良くなれる子とは仲良くしたいんだよねー。だから、おにいちゃん、一緒に来て欲しいんだよー。お願いだよー」

「どうしても？」

「どうしてもだよー」

密希は大きく頷いた。

これほど強い頼みを無碍に拒絶するほど、俺の心は狭くない。相手が身内でなくて全くどうでもいい赤の他人だったら、簡単に突っ撥ねていただろう。身内であったとしても、密希以外の、例えば左右良とか玲佳や光理さんが相手だったら、なんのканのと理由をつけて拒否していたに違いない。でも、他ならぬ義理の妹の懇願ゆえに、叶えてやってもいいかな、と思った。

なぜだか、たった一日の偽家族生活によって、義妹の存在が俺の

中で特別なものへと昇華したらしい。どうしてなのか理由は不明だ。それを考えたりはしない。突き詰めていくと、俺にとって都合の悪い解答が導き出されてしまいそうだったから。

「わかったよ。一緒に行つてやるよ」

俺は気安く答えて手を伸ばし、密希の栗色の髪の毛をくしゃくしゃと掻き乱してやった。

「きゃーん、もー。駄目だよー、おにいちゃん。せつかくセツトした髪がー！」

密希は義兄の手から逃れるようにベッドから離れ、乱れても艶やかな髪の毛を手で撫でつけた。怒っているようできて、俺の不躰なスキンシップを喜んでるようだ。恨みがましい目で睨むが、すぐに笑顔になる。

「おにいちゃん、ありがとー。密希のお願い聞いてくれてー。もしかしたら、断られちゃうんじゃないかなーって思ってたんだよー」

密希は抱き着く勢いで感謝を表明した。

「大切な義妹に何か遭つたら大変だからな」

俺は心にもない台詞を吐き、灰皿に手を伸ばしてタバコの火を揉み消した。そして、ベッドから降りて大欠伸をする。

「んじゃ、俺はちゃつとシャワー浴びてくるから、少し待つてくれよ」

「はい。了解しましたー。それじゃ、密希はおにいちゃん用の朝ご飯を用意しておくからねー。シャワーから出たら、キッチンに来て下さいねー」

「わかった」

手をひらひらと振つて了解を示し、俺は自室の隣りに備えつけてられているユニットバスへと向かった。

熱いシャワーを浴びて僅かに残っていた眠気と酒成分を体外へ追い払い、次いで冷水を浴びて肌を引き締める。あとは、少しだけ身嗜みを整え、余所行きの服を身に着けてキッチンへと向かった。

本日の服装は、ダークレッドの上下スーツに黒いシャツ、ネクタイは締めず、変わりに銀細工のチェーンを身に着けた。

我ながら、これほど着衣に気合を入れるのも久しぶりだ。入学式以来だろう。でも、結局は素材の問題である。どれほど高級な衣服で着飾っても容姿の醜美に大きく影響を及ぼすことはないし、内面から滲み出る陰湿な邪気が中和されることもない。

あー……。ここまであえて触れてこなかったが、俺は格好の良い人間とは言い難い容姿の持ち主だ。長身で肉付きが良く、重心が低くて体重も並ではない。いわゆる相撲取り体型。小学生の頃は《汚デブ》という蔑称で呼ばれていたし、中学生の頃は《陰険デブ》と陰口を叩かれていた。高校生の頃には、支配階級の上位に立っていることを自覚した俺を名指して罵れる度胸の持ち主など存在しなかったが、それでも俺の歪んだ性格と緩んだ体型を嫌悪し、嘲笑する視線は存在し続けた。まあ、それが俺の人間性を左右させる要因にはならなかったのだけど……。

俺がキツチンに入っていくと、サラダを大皿に盛りつけていた密希がこちらを振り向いて、啞然と口を開いた。そのまま十秒ほど硬直する。

格好つけたデブに相当のショックを受けたようだ。

「ん、どうした？ この格好、変かな？」

褒められるとは思っていなかったもので、どんな反応をされても不機嫌にはならない。俺は軽い調子で評価を求めた。

「あーっー……」

評価不可能らしい。

密希は何か言いたげな表情で首を横に振り、手に持っていたサラダボールをテーブルの上に放り出して、ちょこちょこ小走りに近寄ってきた。そして、下から上へと舐めるように繁々と俺を観察した。だが、値踏みするようないやらしい視線ではない。

「んーと、か、貫禄があるかなー。怖いような格好良いようなー。まるでお洒落したお相撲さんだねー」

それって好評価なのか？

「この格好で出歩いて大丈夫かな？ おまえ、一緒にいて恥ずかしくないか？」

今ならジーンズに着替えることも可能であると告げる。

「んーと……恥ずかしいわけじゃないよー。でも、ちょーつと色が派手っていうかー、怖いっていうかー。サングラス掛けたら映画に出てくる悪者さんみたいだよー。でも、でも、変じゃないんだよー。今日はそれくらいの格好の方が好都合かもしれないんだねー」

好都合？ 何に対して？ まあいい。この服装での同行を拒否されなかったので、衣装チェンジは不要と判断しよう。

「よしよし、そんじゃ朝飯を食べよう」

俺は義妹の頭をひと撫でて、キッチンのテーブルに着いた。

「あー、お飲み物は何にしますかー？ 牛乳かなー？ それとも、珈琲？ 紅茶もあるんだよー」

「冷たい紅茶」

「はい」

密希は身軽な動作で冷蔵庫の前へ移動し、紅茶の入ったペットボトルを取り出した。大き目のコップに目一杯注いで手渡してくれる。俺は礼も述べずに、テーブル上に並べられた朝食を胃袋へと詰め込み始めた。

今朝のメニューは、サーモンのムニエルにプレーンオムレツ、コーンスープとガーリックトースト、トマトとレタスのサラダ、という品揃えだ。洋食風である。

密希はもう食べたのだろうか。向かいの席に座り、両手で頬杖をついて、にこにこしながらこちらを眺めているが、彼女の前には料理が並んでいない。

「おまえはもう食べたのか？」

オムレツにフォークを刺しつつ訊いてみた。

密希は眉を寄せ、申し訳なさそうに頷いた。

「ママがお出かけする前に、一緒に食べちゃったんだよー。本当は

おにいちゃんも一緒について思ってたけどー、全然起きてくれなかったからー。熟睡状態だったからー。ごめんねー、おにいちゃん」

「いや、別にいいさ」

軽く答えただけど、ほんの僅かに胸が痛んだ。今朝まで感じなかった種類の不思議な感覚だ。しかし、それも一瞬の不満。

「光理さん、出かけてるのか？」

「うん、そうだよー。ママは町内会の会合で最近大忙しなんだよー。密希たちは引越してきたばかりだからー、仲間外れにされないように頑張ってるんだねー」

「へえ……、そりゃご苦労様だな」

俺は感心して呟いたが、内心には毒を滴らせた。

友好的な近所付き合いなど馬鹿げている。無駄骨だ。表面を取り繕って、周囲に愛想良くしたところで何のメリットも生まれない。

このご時世である。まして、ここら一体は高級住宅地なのだ。横の連帯など全くあり得ない。ご近所付き合いなど不可能。お隣りさん同士が楽しげに会話している場面に遭遇した例がない。むしろ、逆だ。性質の悪い中年女が、まことしやかにデタラメ話を吹き散らかし、黒い噂を汚泥のごとく垂れ流すのだ。そんな腐れた御近所様とお付き合いして何がどうなるのだろう。光理さんは何を目的にして町内会などに参加しているのだろう。俺はそんな活動に見向きもしなかった。だけど、本人の希望ならば仕方がない。上流階級を気取っているご近所連中の目の敵にされ、意地悪されるのは彼女だ。

俺はふつと息を吐いた。

「この朝飯を作ったの、密希か？」

「そうだよー」

密希はテーブル上を一瞥して、得意げな表情を作った。

「へー、凄いじゃんか。おまえ、まだ十四歳だろ？ その若さで料理上手って言ったら、たいしたもんだぞ。今時の女の子が作る料理なんて、コンビニやデパ地下でお惣菜を買ってきて、皿に移し替え

て、さあ召し上がれって具合だからな。ちゃんど食材を切る作業から始められる中学生なんてそうそういない。おまえってレア度の高い美少女だな」

お世辞抜きで褒めてやった。

密希の顔がにへーっと緩む。

「おにいちゃん、美味しいかなー？」

「ああ、星二つくらいやってもいいな」

「えへへーん、星二つー」

密希は照れ笑いして、体をくねらせた。

「もつとたくさん食べたかったら、お替わり一杯あるよー」

その申し出を俺は優しく、しかしきつぱりと断った。さすがに朝一番から胃袋満タンまで詰め込むつもりはない。食いしん坊ではないから、腹六分目で十分である。

「ごちそうさま」

テーブルの上に並べられていた料理を全て食い尽くし、俺は手を合わせて礼儀正しく義妹への感謝の言葉を唱えた。

皿洗いは二人で手分けして行い、手早く後片付けを済ませた。時間に余裕がなくなり始めたからである。待ち合わせの時間が刻々と迫っているらしい。密希は自分なりに急いでいる様子だったが、作業テンポが俺の三分の一ぐらいスローなので、その分だけ時間が余計にかかってしまう。だが、その辺は許容範囲の内だ。俺のようにどんな作業にも合理性を求め、動作の全てに意味を持たせなければ気が済まない人間と、密希のようにただ皿を綺麗にしようとしているだけの女の子を比較しても意味がない。まして、同じ成果が要求される土壇場でもない。比較自体が間違いなのだ。単に、俺が密希の三倍働けばいいだけ。それだけだった。

「よーし。出かけるとするか」

「レッツらゴー！」

密希の意味不明の号令と共に、玄関を出て車庫へ向かい、愛車のジャガーに乗り込む。

俺の控え目な意見としては、やたらと目立つジャガーで女子中学校に乗り入れる行為に抵抗を感じなくもなかったが、代車が国産の軽自動車しかなかったので仕方がなかった。高級国産車はともかく、軽自動車に乗るには俺の美意識があまりにも邪魔だった……と言っても、リムジンとかは下品過ぎて生理的に受けつけない。

俺は愛車を発進させると、幾つかの交差点を通過し、無意識のままに自宅マンションを目指した。そして、マンション近くに差しかった所で、助手席に座ってぼんやりと外の景色を眺めている密希に目をやった。

「それで、おまえの学校ってどこだ？」

実は、今の俺は、目的地不明のまま運転している状態なのだ。

それを知った密希は、ぎょっとして俺の顔を凝視した。

「どこ行ってくつて……。行き先を知らないで運転してたのかなー？信じらんないなー。時間ない感じなんだよー。もし遅れて怒られたらー、おにいちゃんが密希の代わりに謝るんだからねー」

密希は頬を膨らせて怒っているが、そんな姿も可愛くて、つい微笑んでしまう。俺と違って感情表現が豊富だから、もっと色々な表情を浮かばせてやりたくなるのだ。脇の下を擦って笑い転げる姿とか、軽く虐めて泣く姿とか、あと本気で怒った顔も見たい。でも、それらは一歩間違つと危ない結果を招く危険性を秘めているので要自粛だ。

変な想像をしかけた脳をリセットして本題に戻す。

「それで、どこなんだ？ 早く指示しないとどんどん真つ直ぐ走っちゃうぞ。首都高に乗るのならすぐに言わねえと……。あつと、もう間に合わねえか。次の入り口まで行かねえと駄目だな」

スピードを落とし、密希の返答を待つ。

「白岐学園だよー。密希は、白岐学園中等部の生徒なんだよー」

「白岐？ あの超が付くぐらいにお嬢様学校って言われている？」

「マニア垂涎の美少女学園か？ 今現在、ぶっ千切りで都内一美少女が多いって噂の？」

俺は驚愕した。

白岐学園とは姫城グループの傘下にある中高一貫制の女子校である。そして、理事長が俺の実母の弟で、理事には天園姓がずらりと顔を並べている学校だ。その情報を俺が知らないなんてあり得ないと思われるだろうが、俺は一族と馴れ合わないスタンスを頑なに固持してきたので、学園の制服どころか叔父の顔も知らない有様であり、義妹がそこへ通っていると聞かされても一般男子と同様に「へえ、そりゃ凄いな」と驚くことしかできなかった。

しかし……義妹が着ている制服は白岐学園中等部のものだったのか。毎日、自宅マンション前の道路を登下校する白岐学園の生徒たちの姿を目撃しているのだから、見覚えがあつて当然である。

「うん、そつだよー。噂とかは密希よく知らないけどー、おにいちゃんか思い浮かべてる学校のことだよー。たぶんねー」

「了解した。白岐学園ならここから目と鼻の先だ。あと十分もかからずに到着だな」

俺は信号の手前で右にウインカーを出し、駅前方面に進路を変更した。

この周辺の道は走り慣れているので道に迷う心配はない。なにせ、駅前には俺の暮らしているマンションがあるのだ。言わば、生活エリア内である。そして、白岐学園は俺の自宅マンションから自転車で通えるくらい近くに位置している。だから、密希は実家から通うよりも、俺のマンションから通った方が数段便利で合理的だろう。

「この裏っ側に俺の暮らしてるマンションがあるぞ。ほら、あそこだ。あのごついやつ」

自宅マンションから道二つ分を隔てた道路を走行しながら指差して教えてやると、密希はシートベルトを引き千切らなばかりに身を乗り出してフロントガラス越しに眺めた。

「うわー。おにいちゃんて凄いな所に住んでるんだねー。そつだよねー。お金持ちさんだからー、あんなマンションも買えるんだねー」

「おまえだって、もう金持ちの家の子だろ」

「……………」

密希はシートに身を預け、沈黙と共に何とも表現できない複雑な表情を浮かべた。あえて言うなら、不安と不満と否定と肯定をこちや混ぜにして困惑のスパイスを振りかけたような顔……。まだ金持ちの家の娘になった実感が湧かないのだろう。派手な生活を忌諱してみたいだし……。今まで金で苦労してきたらしいから、その反動で贅沢三昧の豪遊生活を味わっていてもおかしくないのに、二人は逆に質実剛健な暮らしをしている。それが悪いわけではなく、俺は素晴らしいと評価しているが、質素過ぎるのもどうかと思うのだ。金は使つてこそ意味がある。溜め込んでも死後の世界には持ち去れないのだから。

「密希、おにいちゃんのマンションから通えばー、毎日もつとゆっくりと寝てられるのになー。あそこからなら徒歩でも通えるでしょー？ 密希、今、電車通学だからー、朝とか大変なんだよー。早起きもだけどー、家から駅までと駅から学校までいつも走らなきゃならないしー。低血圧な身体だから朝は不得意でー、いつもふらふらなんだよー。あと、電車の中には痴漢とかいて大変だしー……。昔、一回だけ痴漢に遭つたんだよー。凄く嫌な思い出だよー。お尻触られてー、きゃーって叫んじゃつたんだねー。お蔭で駅員さんに事情とか訊かれて大変だったんだよー。痴漢も嫌だけどー、そっちも嫌だったなー」

密希が嫌そうに眉をひそめて言った。本当に嫌な体験だったのだろう。

「痴漢か……。そりゃ災難だな。でも、一回だけつてのは驚きだ。密希ぐらい可愛ければ、頻繁に痴漢されてもおかしくないからな。それとも、痴漢用の特別対策プランとかを実践してるのか？」

「んー。そういうのはしてないかなー。一応、女の子の多くいる車両に乗ったりー、女性専用車両に乗ったりしてるけどー。でも、それ以外には意識して対策を練って実行しているわけじゃないんだよ

「そうか」

俺は頷いた。そして、ブレーキを踏んだ。

場所は、白岐学園の正門前。

さすがに、このまま正門からジャガーを乗り入れるほど俺は非常識者ではないし、度胸満点でもない。どこかの駐車スペースに停めるべきだと理解している。路上駐車をする案は、切符を切られる可能性が高過ぎるので却下。レッカー移動なんかされたら洒落にならない。過去に一度レッカー移動された経験があり、その際、愛車を傷つけられて酷く落ち込んだのだ。でも、俺は過去の失敗を繰り返さない男である。

「駐車場とかないのか？」

密希はあごに手を当てて考えるポーズ。

「うーん。校舎の裏っ側に職員専用の駐車場があったと思うけど……。おにいちゃんが使っちゃって大丈夫なのかなー。先生に怒られたりしないかなー。しないかなー？ 休みだしー。大丈夫だよー」
不安なのはわかるが、俺に訊いてどうする。

「裏っ側ね。確か、でっかい駐車場があったか？ 俺って、この学校の周辺には近寄らないんだよな。だから、記憶が曖昧なんだ。白岐学園に用事なんてないしな。おっと！ 休日でも警備員は常駐してんだな」

俺は愛車を学園の敷地内に進入させ、百台以上駐車できそうなスペースを有する大駐車場へと移動させながら、バックミラーに映るいかつい警備員の姿を見て呟いた。

警備員が大きく手を振りながら駆け寄ってくる……。何か言ってるみたいだが全然聞こえない。もしかすると、一般人の駐車は認められてないのかもしれない。でも、休校日で閑古鳥の鳴いている駐車場を有効利用して何がいけないのか。一応、学園に用事があったら来ているわけだし、学園に在籍する現役の生徒も同乗してるのだ。咎められるいわれはない……と思う。

駐車場のど真ん中に愛車を停止。

エンジンを切る。

そして、車を降りて鍵を掛けた。

そんな俺の腕を、走り寄ってきた警備員が思いきり掴んだ。

痛てえ。何しやがる。その汚い手を離しやがれ、と心の中で罵るが、表情は平然と無表情を保持した。

「何？」

極北に吹き荒ぶブリザード紛いの声音で訊く。

無礼者相手に友好的対応は不可能だ。

「ちよつと、あんた。今日は学校が休みで出勤してる教職員が少ないからつて、生徒を自動車で送り迎えするのは校則違反だぞ」

警備員の怒鳴りつけるような大声。

その言葉の真偽を確認するべく密希を見る。

「そうなのか、密希？」

密希は罪の意識を表情にして首肯した。

「仕方のないやつだな、おまえは……。そついう校則はあらかじめ教えておいてくれねえと、俺が迷惑するだろ。迷惑して怒ったら、おまえは悲しいだろ？ 怒鳴られたくないだろ？ それとも、怒られたくてワザとやってるのか？」

「そ、そんなことしないよー。密希、おにいちゃんに怒られたくないんだよー」

密希はしゅんと頂垂れた。

反省する美少女。

見応えある姿。

その姿に心を痛めたのか、警備員が今日に限って特別に駐車する許可をくれた。

「今回だけは見逃してやるが、次に来る時は規則を守るようにな」
いちいち釘を刺された。

乱暴に腕を掴まれ、耳元で喚かれたので、酷く不愉快な思いをしたけど、ここで警備員と口論して無駄に時間をロスするわけにはい

かない。それに、密希に無様な姿は見せられなかった。

「手を放してくれねえか？」

俺は警備員の顔を冷酷な眼光で突き刺し、毅然とした口調で要求した。

警備員は反射的に何か怒鳴ろうとしたようだが、歯を食い縛っただけで何も言わなかった。いかつい顔をびくびく引き攣らせつつ手を離す。

俺たちは平和的解決に至った。彼は大人ってわけだ。

「おにいちゃん、行こーよー」

なぜだか慌て気味の密希にぐいぐいと手を引かれ、校舎へ向かって歩き出す。

「おいおい、そんなに急ぐな。まだ時間には余裕があるだろ。慌ても疲れるだけだぞ」

「もつっ！ 違うよー、おにいちゃん。時間とかじゃなくてー。警備員さんと揉め事を起こすのは良くないと思うんだよー。おにいちゃんは今だけかもしれないけどー、密希は学校に来る度に顔を合わせてるんだからねー。もしも要注意人物としてブラックリストとかに載ったりしたらー、密希困っちゃうんだよー。密希は優等生をしてるんだからー、おにいちゃんにも協力して欲しいんだよー。あー、でも、迷惑って言うてるんじゃないからねー。今日、一緒に来てくれたことには感謝してるんだよー。大感激で大感謝なんだねー」

「そうか……、悪かったよ」

俺は少しだけ反省した。

確かに学園内で騒動を起こすと、密希に多大な迷惑をかけてしまう。義理の兄として慎むべきだ。警備員ならまだいいが、教職員とは絶対にイザコザを起こしてはいけない。きつちりと肝に銘じておかなければなるまい。

「それで、さっきの話、密希はどうしたいんだ？」

俺は唐突に訊いた。

密希は話題が急に戻って戸惑ったようで、半疑問形の顔を作る。

「さっきってー、どのさつきかなー？」

おっと、話が通じていない。一方通行の会話。まあ、俺としてはどの《さつき》でもいいのだ。密希が話し易い話題をチョイスしてくれば、そのまま会話を続けるつもり。でも、訊かれたら、こっちが選ばなければならぬ。

えーっと、何を聞き出そうとしていたんだっけ？

ああ、そうか。密希が俺のマンションから通学したいと言っていた件の確認だ。その意思の有無を確かめたかったのだ。

「俺のマンションから通いたいって言ってただろ？ あれって本気で言ってるのか？ 冗談か？ その意思確認がしたかったんだ」

「むうー」

密希は視線を足元に落として、僅かばかり悩むような素振りを見せたが、すぐに顔を上げてにこーっと微笑んだ。

「密希は本気だよー。やっぱり朝早く起きなくてもいいのは最高だもんねー。それに電車通学も大変だからー。低血圧だからー。痴漢も怖いしー。でも、でも、本当に重要なのはー、おにいちゃんと一緒に暮らすことなんだよー。それが一番の理由かなー」

「そうか。おまえがそう言うんなら、俺は別に嫌とは言わない。でも、そうすると、光理さんが独りぼちになっちゃうぞ。それはマズいじゃねえか？ 唯一の本当の家族は大切にしなくちゃ駄目だぞ。俺が忠告できる筋の話じゃねえってのは承知してるけど、光理さんは馬鹿親父と違って良い人だから、悲しませないように熟慮して結論を出すんだ」

俺は、らしくない忠告をした。言っていて、自分でも気分が悪くなる台詞だった。だけど、本心でもあった。

密希はお気楽顔で「にゃははー」と高らかに笑い、大袈裟な身振りで否定した。

「ママは一人だって大丈夫だよー。平気だよー。ご近所付き合いか町内会に忙しい感じだしー、おにいちゃんのパパさんだってほんのたまに帰ってくるからねー。それに、ママ自身が、おにいちゃん

と仲良く生活できるように頑張りなさいー、って言ってたからー、絶対に反対しないと思うんだよー」

「……………」
密希は母親の言葉を正しく理解していないようだ。光理さんが言いたかったのは、俺が悠々自適なマンション生活を放棄して実家に戻るように説得しなさい、ということだろう。家族は一つ屋根の下で生活するべきだ、と言うのが彼女の持論らしい……。俺もその考えには大賛成だったが、俺自身の家族は完全に崩壊して修復不能だったので、今となっては完全なる夢だ。真の理想は既に達成不能。

でも、この偽り家族なら

理想の家族ごっこを偽物である彼女たちと演じる選択肢……。

はっ、馬鹿馬鹿しい！ そんなものは、笑えない喜劇よりも性質が悪い。泣けない悲劇だ。俺は家族という虚ろな集合体を、完全に完璧に見切っている。絶望している。思い切っている。断ち切っている。だから、家庭など必要としない。だが、密希が俺との共同生活を望むなら、応えるに吝かではない。

いや、俺の意思とは別次元で問題は山積している……。例を挙げると、俺のマンションはだだっ広いスイートルームなので、一緒に暮らすとプライベートな空間がない。血の繋がらない若い男女が同じ屋根の下で生活するのは問題だ。俺は積極的に関係を深めようとはしないが、状況と状態次第では何が起こるか分からない。密希は掛け値なしに可愛い、郡を抜く美少女なのだ。もしも彼女の側から何かしらの接触を求めてきた時に、俺は拒絶できるかどうか。まあ、玲佳も同居しているので禁断の果実を食う愚は犯さないだろうが……。うーん、難しい問題だ。問題だらけだ。

ふと密希の制服の胸元に視線を移すと、そこには昨日買い与えたトパースのブローチがきらきらと輝いていた。

律儀な奴だ。

「ん？ どうしたのかなー？ 急に黙っちゃってー、何か変だよー」

「いや……、何でもない」

俺は首を横に振り、内心に山積みされた問題をそっくりそのまま棚上げした。

「それについては、家に帰ってから光理さんを交えて相談しよう。俺たち二人だけで結論を出すのはマズイ。いいな、密希？」

「おにいちゃんの言う通りにするよー」

密希は良い子だからねー、と小悪魔的笑顔を浮かべて言う義妹。不安にさせられる笑みだった。

俺は問題を先延ばしにする自分の不甲斐なさに情けなさを覚えたが、即座に感情を立て直し、別の注意を促した。

「密希、そのブローチは隠していた方が賢明だぞ。万が一、教師に見つかったら、没収されちまうかもしれないからね」

「はーい」

密希は素直にブローチを外してポケットの中にしまい込んだ。

【2・小野寺紗枝】

朝の陽射しがカーテンの隙間から室内を薄く照らし始めた頃、私はようやく過酷な攻めから解放された。そして、シャワーはおろか下着の着用すら許可されぬまま自宅近くの公園まで車で送られ、服を抱えた全裸状態で放り出された。

去り際、西川が言った。

「今日の朝十一時までには白岐学園中等部の四階にある視聴覚室に来い。来なきゃネットで晒し者だぞ。わかってるよな？」

「わかりたくないわよ……」

口の中で呟く。

しかし、無視できない。

私は込み上げてくる嗚咽を堪えながら公園の公衆トイレに駆け込み、個室の中で服を身に着け、帰宅時に母親に見咎められた時の用心のために、乱れた髪や汚れた顔を水道水で洗い清め、着衣の乱れを正した。

凌辱された自分を自宅には持ち帰らない。病弱な母親を心配させる要素は、この場で排除しなければならない。どれほど辛くても笑顔で対応する。

そう気持ちを無理に切り換えてトイレから出ようとし、私は個室へと駆け戻った。胃から熱い塊がせり上がってくる。背筋が震え、鳥肌が立ち、涙と鼻水が垂れ落ちる。潰れそうな心臓。壊れそうな心。私は便座に抱き着くような体勢で激しく嘔吐した。胃の内容物を吐き出しながら泣いた。生臭い白濁液を口と鼻から逆流させながら号泣した。頭が真っ白になるまで泣き喚いた。でも、誰にも気づかれないくらいの小声でしか泣けなかった。

どれくらい便座を抱き続けていたのだろう。

気づくと、トイレの外から犬の鳴き声や談笑する人間たちの声が

聞こえていた。

結構な時間、眠ってしまったらしい。

私は便器の蓋を閉めて吐瀉物を流し、女子トイレに誰もいないことを確認してから個室を出て、洗面台で顔を洗った。そして、泣き腫らした顔をさり気なく髪の毛で隠しつつ公衆トイレを後にし、足早に自宅へと帰った。

母親はまだ眠っている時間らしく、ドアに備えつけられているベルが音高く鳴っても起きてこなかった。母親は勘が良いので、明らかに訳あり状態の娘を目の当たりにすれば、何に遭ったのか即座に看破してしまうだろう。それだけは避けねばならない。

私は安堵の溜め息を吐いた。朝帰りした言い訳を色々と考えていたのだけど、それが無駄に終わって良かった。この青天の霹靂だけは絶対に知られてはならない。隠蔽し、抹消し、抹殺しなければならぬ。

自室へ駆け込んで置き時計を見れば、既に午前九時二十分。眠って体力の回復を図る時間的余裕はない。眠る意思もない。休息は心に負荷をかけ過ぎる。気持ちが悪くて死んでしまう。だから、睡眠は不要。戦いに備えて怨讐の念を練るだけでいい。

この状況から逆転するには、撮影された輪姦画像の記録物を廃棄して、尚且つ彼らを殺害するしかない。徹底的に対処しなければ脅迫は続くだろうし、私の心にも安息は訪れない。輪姦に関わった全員の死のみが全てを解決してくれるのだ。

私はお風呂でシャワーを浴びて体内まで念入りに洗浄し、全身に回った毒素を排出して心機一転を図った。だけど、憎悪と悔恨の情念だけは洗い流さない。冷静に殺人を犯すための意志は揺るがせないのだ。

置き時計を見ると、午後十時三十分。

もう時間がない。

すぐさま動き易い服装に着替え、小学校の林間学校にて使用した包丁を台所の奥底から探し出してバッグに詰め、ビニール袋やタオ

ル、ウエットティッシュなども用意して完全犯罪の準備を整える。

仕事場には母親の体調が思わしくなく、看病しなければならないことを理由にして、本日の欠勤を連絡しておく。

もう迷いはない。

私はバッグを背負い、原付きの鍵を手にした。

運命のせいにはしない。

彼らのせいにもしない。

彼女のせいでもない。

私の不用意な合コン参加が原因なのだ。

この汚辱は自らの手で晴らす。

あとは行くのみ。

【3・天園陽影】

俺たちは運動場を大きく迂回して正門の前まで移動し、そこから中等部の校舎に入った。

中等部の校舎は、通称《H校舎》と呼ばれているそうだ。上空から観ると、校舎がアルファベットのH形なのだという。ちなみに、高等部の校舎は学園内の中央に位置し、《I校舎》と呼ばれているらしい。理由は同じだろう。

密希は下駄箱で自分の上履きに履き替えた。

俺は来賓用の安っぽいスリッパである。

事務室で身分確認とか入園許可の手続きを行うのかと思いきや、完全な素通りで、何のチェックもされなかった。セキュリティ怠慢だと思っただが、学園の創立記念日なので事務員も教員も警備員も最小限の人数に絞り込んでいるのかもしれない。今日登校しているのは、運動部の部員だけみたいだし……。

「それで、おまえの教室ってどこだ？」

「んー、密希のクラスは六階の二年A組だけどー、今から行くのは特別教室が集まっている四階なんだよー。視聴覚室なんだねー。そこが待ち合わせの場所なんだよー」

「四階ね……」

軽く舌打ち。

階段を上るのがかかったるいし、俺の体型では膝に負担がかかる。

「エレベーターとかある？」

「あるよー、でも、生徒は使用禁止なんだよー。おにいちゃん、楽しようとしちゃ駄目ですよー。若者は階段を使わなくちゃー」

「そっちな……」

今更、嫌だから帰るとは言えない。

俺と密希は肩を並べて、玄関を上がって左手に位置する階段まで歩いた。

すると、上の階から一人の女の子が駆け下りてきた。そして、俺たち二人を見るなりきよとんとした。そりゃまあ、見目の悪い男が最高に可愛い女生徒を連れて校舎内を歩いてりゃ驚きもするだろう。何せ、ここは女の園。学園の職員を除き、美少年だろうと美男子だろうと男性の存在は許されない場所である。

さて、弁解をするべきか否か……。

俺が逡巡していると、女の子の方から親しげに話しかけてきた。

「密希、どーしたんだよ。今日は休校日だよ。部活やってないあんたが、何しに来たの？」

「んー、ちよつとねー、訳ありな感じなんだよー……」

「訳ありね。んで、そっちの男の人は？」

ちらつと俺の方を窺い、品定めするような色を瞳に宿したが、敵意は感じなかった。多少の警戒感を含んではいるが、密希と一緒にいる点を考慮して、表層的には友好的態度を保ってくれているのだろう。

「この人は、密希のおにいちゃんだよー。陽影っていうお名前なのー。太陽の陽に、影踏み影だよー」

密希が自慢げに俺を紹介する。

刹那、女の子は頬を引き攣らせて内心の驚愕を表現したが、すぐさま表情を取り繕った。

「へーえ、密希のお兄さんか……。あんた、お兄さんがいたんだ？」

ちよつと驚きだなあ。でも、色んな意味であんたのお兄さんって感じだよ。見た目は全然似てないけどね。まあ、何にしても初めましてだね、陽影お兄さん」

女の子はぺこりと頭を下げて、この年頃の女の子にしては珍しく礼儀正しい挨拶をした。

「あたしは密希と同じ、二年A組の生徒。名前は黒門さやか。黒門でも、さやかでも、好きに呼んでくれて構わないからね、陽影お兄さん。宜しくう！」

「さやかちゃんか……。良い名前だね」

俺は苗字じゃなく、名前で呼ぶことにした。大した理由はない。

《さやか》という名前の響きが気に入ったからである。また、黒門さん、と呼ぶのは他人行儀だろう。それに、俺は初対面の相手を名前で呼び捨てるほど無礼な人間ではない。まあ、俺は今まで年下の女の子と接する機会が全くなかったので、どう応対していいかわからなかったからでもある。

さやかちゃんは文句なく可愛い。美少女揃いで有名な白岐学園だが、その中でもかなりの上位に位置する容姿の持ち主だろう。しかし、彼女は一般的に言われる美少女ではない。美少年という表現の方が適切だと思う。ボーイッシュなのだ。目鼻立ちは勿論整っている。髪は短く、細身で筋肉質の体躯。意志の強そうな引き締まった目元をしている。現在身に着けている物が、ゼッケン付きのランニングシャツに短パンなので、より男の子っぽく見えてしまうのかもしれない。部活がどうか言っていたから、さやかちゃんはきつと陸上部の部員なのだろう。髪を伸ばせばかなりレベルの高い美少女になるのに……、少し勿体ない気がした。

「ん？」

さやかちゃんは怪訝そうに首を傾げる。陰険そうなデブ男の無遠慮な観察眼に気づいて頬を一瞬硬くしたが、無理のない微笑み顔を作って無害をアピールすると、安心したように微笑み返してきた。

性格は悪くないようだ。

「それで、どんな訳ありで、物好きにも休日登校なんかしたんだ？ 保護者同伴てのはあんたららしいけど、同時にちよつと変だよ。何か悪さして先生に呼び出し食らったんじゃないだろ？ それとも、悪事に手を染めて、お兄さんごと呼び出されたとかか？」

「ち、違うんだよー。密希、悪いことなんてしてないんだよー。先生も関係ないしー。そうじゃなくてー。密希を呼び出したのは重道さんだよー。同じクラスの重道忍さん。今日、どうしても学校に来て欲しいって頼まれちゃったからー、仕方なく休日登校したんだよー。本心では嫌だったけどねー」

「重道？ あいつに呼び出されたのか？ そりゃ危ないよ、密希。危険の匂いがぶんぶんする。お兄さんも呼び出されたの？」

「違うよー。おにいちゃんには、密希と一緒に来て欲しいって頼んだんだよー。重道さんって色々と良くない噂があつてー、心細かったからー、無理にお願いしたんだよー」

「なるほどね。本当の意味での保護者だね」

さやかちゃんは納得して幾度か頷き、両手を腰に当てて難しい顔をした。

「そういうことなら、あたしも一緒に行つてやるよ。怪しげなことに密希を巻き込むのは許せないし、こそこそと悪巧みするなんて陰湿で感じ悪いから、あたしが思いっきり文句言つてやるよ。お兄さんも、女の子に怒鳴つたり暴力振るつたりできないでしょ？ それとも可愛い女の子を殴れちゃう人？」

両目を細めて顔を寄せ、俺の人間性を測ろうとするさやかちゃん。さて、どう答えるべきか……。

正直言つと、俺は平気で女の子を殴れるタイプの最低人間だ。全く、一切、良心の仮借なく、平等に、誰でも公平に、グーで殴れてしまうひとでなしである。老若男女を差別しない。決断さえしてしまえば、人殺しも躊躇なく行えるだろう。他人の痛みに対して、何も感じず、何も心に響かないから。人がましい優しさは俺の表層部分に宿るだけであり、内面は空っぽなのだ。空虚。空白地帯。核もなければ芯もない。薄っぺらな人間。だけど、そうであるがゆえに、何にでも確信を求め、合理性を求め、人間であるうともがき苦しみ、最良の選択肢をチョイスしようと思乱してしまう。

だがしかし、今この場で、さやかちゃんの問いに首肯することはできなかつた。最良の選択肢は、首を横に振ることである。

「いや、女の子を殴つたりしたら男として終わりだろ。美少女が相手であれば人として失格だよ。そういう役割は、気の強そうな君に任せるよ。しかし、その重道って女の子、そんなにヤバイ子なの？ そんな問題のある女の子が白岐学園に在籍しているなんて信じら

れないな。腐ったミカンは、のべつ幕なしに排除するっていうのが学園の方針なんだろ、確か。危ない噂が立つような生徒を野放しになんてするかな？」

「先生たちも手が出せないみたいなんだよね。何か悪さしてる確固たる証拠があるわけじゃないみたいだし……」

さやかちゃんは引き締まった細腕を束ねて、深刻そうに顔をしかめた。

「それに、悪い噂って言っても、噂は噂でしかなくて、実際には本当かどうか定かじゃないみたいだし、実害を被ったって子がいるかどうかもわからないんだよ。余程の屈辱的被害を受けて、公にされたくないから泣き寝入りしてるだけかもしれないけどさ。まあ、大っぴらにできない悪さしてるのは間違いないだろうーね」

さやかちゃんは忌々しげに言った。

「密希は一度現場を見てるんだよー」

密希は俺の手を引っ張って階段を上がりながら、ちよつと言い難そうに、でも、はっきりと言った。

「先週、お台場のデパートで密希がお買い物してる時にー、重道さんが男の子と仲良く一緒に歩いてるところを目撃しちゃったんだよー。その時は声をかけなかったけど……。密希が驚いた以上にー、重道さんの方が驚いてたみたいなんだよー。今日呼ばれたのもそれに関係したことなんじゃないかなー」

緊張を感じさせない口調で密希が言った。

俺が同行しているので安心し切っているのだろう。信頼がもたらした余裕ってやつか？

「へーえ。男連れのところを目撃したのか……。どんな男だった？ さやかちゃんが訊いた。

「んーと……。背が高くてー、短い金髪でー、ちよつと目つきが怖かったかなー。密希のタイプじゃなかったよー」

「ふーん。男絡みのトラブルに密希が巻き込まれたってことかな。

どーだろう。その辺りは教室に行ってみりゃわかるか……」

「教室じゃなくてー、視聴覚室なんだよー」

「……………」

余計悪いだろ、と目で語るさやかちゃん。

俺も同感だ。呼び出しの場所が一般教室ではなくて、視聴覚室を選んでいる時点で、相手側がろくでもない計画を立てているとわかる。理由は簡単。大きな声を出しても、悲鳴を上げられても、外部に声が漏れる心配をしなくていいからだ。

大声を出すようなシチュエーションとなると……危険が目白押しだろう。口喧嘩ならまだしも、取っ組み合いのケンカとか、集団でのリンチとか、更に性質の悪い暴力も想像可能である。視聴覚室での凶行つてのは、俺が中学二年生の時に実践し、見事に成功しているので、密室の危険性を軽視するわけにはいかない。非力な女の子が実行できる最悪は、ナイフなどの凶器を用いる殺人行為か。その程度なら、油断さえしなければ、俺の力で守ってやれる。さやかちゃんという《人間の盾》もあることだし……。集団での虐待という線も捨て難いが、まあ、最悪の結果は回避できると思う。

この時点での俺は、まだ事態を樂觀視していた。

【4・小野寺紗枝】

白岐学園の正門を通り過ぎ、金網に四方を囲われたテニスコートも素通りして、その先に位置するコンビニの駐車場へと原付きを乗り入れた。

建物の陰に停車し、エンジンを切り、キーを抜き、ヘルメットを脱ぐ。そして、殺意に昂ぶる気持ちを抑えるべく、私は小さく深呼吸をした。

大丈夫、不自然な行動はしていない。

なんだか、犯罪者に転身した気分だ。いや、殺意に身を任せて行動を開始している時点で既に準犯罪者なのだろう。

私はゆっくりと原付きから離れ、コンビニの監視カメラに顔が映らないようにさり気なく背中を向けながら歩道まで移動し、なるべく自身を人目に晒さないよう注意を払いつつ来た道を逆走した。

いくら創立記念日とはいえ、白岐学園は都内でも有数のお嬢様学校なので、防犯対策には万全を期しているだろう。西川は正門から堂々と侵入できると言っていたが、現実はそのままで甘くない。部外者が学園の敷地に一步でも踏み込めば、その瞬間、警棒を携えたいかつい警備員が群を成して駆けつけ、教訓という名の暴力を叩き込まれ、血塗れで病院送りにされ、退院後に不法侵入で警察行きになること間違いなしだ。それゆえに、正門もしくは裏門からの侵入は止めておいた方が無難である。ただ、だからと言って、学園の広大な敷地を取り囲む鉄柵を攀じ登るのは論外だ。鉄柵には等間隔で監視カメラが設置されているし、対侵入者用のセンサーが取りつけられている可能性もある。敷地内への侵入には細心の注意を払うべきだろう。

しかし、どうすれば侵入できるのやら。

西川たちはどのようにして中等部の校舎まで入るつもりなのだろう。私には警備員や教職員に見咎められない自信がない。でも、ここ

で手をこまねいていても始まらないことは確かなので、何かしらの方法を考えねばならない。

さて、どうしたものか……。

ふと前方に目をやると、学園関係者用の駐車場が見えた。当然、今日は休校日なので、広大な駐車スペースは閑古鳥の巢と化している。出入り口の監視小屋に警備員らしき人影が一名ほど見えるが、それ以外の障害はなさそうだ。あの出入り口のゲートさえくぐってしまえば、あとは中等部の校舎まではスムーズに移動できるだろう。学校が休みだから警備も手薄になっているのだろうか？ だとしたら、とんだ怠慢だ。学園全体の警備意識を即座に改善すべきである。しかし、今の私にとっては好都合なので、抗議行動を起こしたりはしない。

私は一般人のふりをして歩道をゆっくりと進みながら、監視小屋の警備員が持ち場を離れる隙を突こうと、彼の行動を観察した。

二分経過……。

警備員は微動だにしない。

真面目な男である。

まさに警備員の鏡だが、今の私にとっては目的達成の障害でしかない。

五分経過……。

私は駐車場の出入り口前で携帯電話を使用しているフリをしながらチャンスを待つ。

十分経過……。

焦れてきた。

こうなったら自棄になって、捕獲されるのを覚悟で強行突破を図ろうか、と思い始めた時、駐車場に一台の車が入っていった。黒い外国産の高級車だ。しかも、警備員が大声で制止を求めているのに、

完全無視して駐車場の中央へ車を移動させ、我が物顔で駐車してしまつた。

どう考えても無断駐車である。

当然、警備員は烈火のごとく怒り、拳を振り上げて怒鳴り散らし、不法駐車の外産車へと駆け寄つていく。

世の中には平気でルールを破る愚者が存在する。そして、そういう人物に限つて裕福な家庭に生まれ育っているのだ。これは偏見ではない。眼前で起こっている紛れもない事実である。

だが……。警備員は一名だけ。その一名が持ち場を離れた。

これこそ渡りに船。今、侵入者に対する監視の目はない。

この隙を突かず、何を突く？

私は走つた。

鉄柵の影に身を隠しながらの移動は、平日であればたちどころに発見されてしまう愚行だが、今日に限つては見咎める者はない。

駐車場を抜けて体育館の裏に辿り着いた。

ここまで来ればしめたものだ。あとは情報に基づいて視聴覚室へ向かうだけである。

私は体育館から隣りに位置する室内温水プール施設へと移動し、その通用口から高等部校舎内に侵入した。校庭やグラウンドからは運動部の部員のものらしき掛け声が響いてくるが、校舎内部に生徒や教職員の姿はない。もう足音を忍ばせる必要はなさそうだ。もし生徒と鉢合わせしても、私服登校した在校生を装えば何の問題もなく凌げるだろう。ただ一点、土足であることを見咎められると面倒なので、この校舎の下駄箱へと寄り道し、誰の物かも知れない上履きを適当に拝借して履き替え、自分の靴はビニール袋に入れてバッグにしまつた。

高等部の校舎から中等部の校舎へ通じる渡り廊下は一階の一箇所だけにしか存在しないみたいなので、私は早歩きで廊下を突き進み、中庭に人目のないことを確認して中等部校舎へと移動した。

下駄箱のすぐ近くにある階段を目指して小走りに急ぐ。そこを四階まで駆け上れば目的地の視聴覚室（輪姦会場）に到着である。

しかし、それを目の前にして私は立ち止まった。

下駄箱の方から女子と男子の話し声が聞こえてきたからだ。

男子禁制の女子学園になぜ？ 男子教員か警備員が生徒と一緒に校舎内へ入ってきた？ それとも……。

一瞬、私を凌辱したモアイ男と金髪男の仲間かとも疑ったが、そういう雰囲気ではない。その会話に淫虐の場へ赴く者の緊張感が一切ないのだ。妖気も邪気も孕んでいない。ピクニックにでも行くような気楽さだ。

私は柱の影に隠れて様子を窺う。

下駄箱から姿を現したのは、二十歳くらいの恰幅の良い男子と、制服を着用した華奢だが他に類を見ない飛びつきりの美少女だった。二人は兄妹……には見えない。容姿のレベルに差があり過ぎるので、恋人同士でもない。どういう関係なのだろう。もしかしたら、さつき駐車場に外国産の高級車を乗り入れた人物かもしれない。こんな時だが、彼らの素性に興味が湧いた。

二人は下駄箱から階段へ向かう。上の階に用事があるらしい。

何という幸運なのだろう。彼らは私を先導してくれる紛うことなき来賓なのだ。後について行けば、何の違和感もなく、誰にも見咎められずに、四階まで辿り着けるに違いない。

すると突然、二人が階段の下で立ち止まった。どうやら、知り合いが上の階から下りてきたらしい。何やら厳しい口調で会話する三人。そして、三人とも階段を上り始める。

空耳かもしれないが、『視聴覚室』という単語が会話に織り込まれていたような……。

私は訝しみながらも、三人の後を追って階段を上がるうとして

「待て」

唐突に背後から声をかけられ、肩を鷲掴みにされた。

【5・天園陽影】

視聴覚室は四階廊下の一番奥だ。

特別教室が四階という中途半端な階に集中しているのは酷く不便だと思つたが、さやかちゃんの説明によると、「上の階からも下の階からも同条件にある完璧な位置設定だと思つよ。特別教室が最上階だったら、一階に教室のある生徒は、授業のたんびに六階分の階段を駆け上がつて、授業後には六階分を駆け下りなきゃなんないんだよ。それつて不公平でしょ？ 生徒会の役員とか軽音楽部やブラバンの部員とか、この四階の特別教室を利用する生徒から文句が出たつていう話も聞いたことないしさ。それに、あたしら運動部の人間にとつては良い運動になるしね」ということらしい。

「さやかちゃんは体力自慢だもんねー」

密希がからかうと、さやかちゃんは拳を振り上げて殴るポーズをした。

「こらつ。あたしのことをスポーツしか能のない脳味噌空っぽ女みたいに言つな。お兄さんの印象が悪くなるだろっ！」

「にははははー」

密希は大笑いである。

友達同士の会話つてやつですか。

見えていて微笑ましいと同時に、鬱陶しくもあり、羨ましくもあつた。俺が高校生だった頃は、軽口を叩き合える気心の知れた友人なんていなかったから。友人ではなく、加虐対象なら二名ほど存在したが……。

密希は学校に親しい友達がいないと言つていたくせに、ちゃんと下らない冗談を言い合える気の置けない仲間がいるじゃないか。

若干の不満に心を苛まれた。

そんな負の感情を押し殺し、階段前から廊下全体を見渡す。

四階は酷く静まり返つていた。

創立記念日であり、特別教室しかないフロアだから、人気がないのは当たり前かもしれないけど、妙に薄ら寒い雰囲気か漂っている。美術部や吹奏楽部の部員が一人や二人いてもいいのに、廃校舎か墓場のような。

不自然じゃないか？

周囲を警戒しつつ、俺は二人の美少女と廊下の突き当たりまで歩いていった。

【6・小野寺紗枝】

肩を掴んだのは西川不二彦だった。

私は無礼な手を振り解こうともがく。

しかし、西川に後ろから抱き着かれ、筋肉隆々の腕を首に巻きつけられ、野球グラブみたいな手の平で口を塞がれ、そのモアイの巨顔を頬に密着されて睨みつけられた。

「声を出すな。奴らに見つかったら洒落にならねえ。いいな？」

厳しく言い聞かせるような口調。尋常ではない眼光。逆らえば首の骨を押し折られかねない雰囲気。

私は頷くしかない。

西川は私を一睨みしてから拘束を解き、階段を上がっていく三人の男女へ視線を移した。そして、鋭い舌打ちを二度響かせる。

「くそつ、どうなつてやがる。なんで天園のクソツタレが綾瀬密希と一緒に来てるんだ？ あいつ、風守玲佳の他に色嶺だけじゃ飽き足らず、白岐一の美少女にまで手を出してやがったのか？ 畜生が

！ わけがわかんねえぞ。これじゃ計画がおじやんだ！ それどころか……ちつ！」

喉の奥で噛み殺すような声で吐き捨てるモアイ。

およそ、制服姿の美少女が今回の輪姦対象者なのだろう。だが、あの相撲レスラーの同行は彼の想定になかったらしい。一応の知人らしいが犯罪仲間ではないようだ。それどころか、彼に積年の恨みをいだいている感がある。だから、顔を見られてはマズイのだろう。ハプニングに対する戸惑いと苛立ちがモアイの表情を彩っていた。

しかし、それは私にとっても予想外の展開である。不確定分子の介入は輪姦関係者の速やかなる抹殺を妨げるだけでなく、完全犯罪の達成を阻害しかねない。標的が三人なら上手く隙を突いて殺害できなくもないだろうが、包丁一本で六人の人間を瞬時に皆殺しにするのは不可能だろう。

ここでモアイだけでも殺してしまおうか？

萌芽する殺意。

背負っているバッグの中に忍ばせてある包丁を何気ない動作で取り出し、モアイの意識が異分子へと向けられている隙に、みぞおち部分を抉り上げるように突き刺す。即死は確定。脳の命令が手足に伝達されさえすれば、反撃を受けずに殺害できるだろう。

突然の反抗と唐突なる死の来訪に驚愕するモアイの顔を想像する。その滑稽な死に様を思い浮かべる。甘美なる妄想。必ずや心地好い達成感に包まれるだろう。

飽和する殺意。

バッグのファスナーに手をかける。

だが、実行には移せなかった。

「どうにか視聴覚室に先回りして、完全撤収しねえとマズイぞ……」
そう言つて、西川が私の襟首を引っ張ったのだ。

「おい、小野寺、呆けつと突っ立ってんじゃねえ！ 奴らの後について行くぞ」

「うわうっ！ ちょ……あぶなっ！」

いきなりだったので私は転倒しそうになったが、西川に力づくで抱き起こされ、引き摺られるようにして階段を上らされた。

【7・天園陽影】

俺たちは視聴覚室の前に立った。

「重道さん、待ってるかなー」

密希が不安を微塵も感じさせないお気楽調子で言った。

「あんたって子は……」

呆れ顔のさやかちゃん。でも、彼女も危機感に欠けている。護衛者としての俺を信頼しているのだろう。迷惑な話だが、悪い気分でもない。男は誰しもがヒーロー願望を持っているってわけだ。

さあ入ろう、という段になって、俺はあることに気づいた。

スライド式ドアの上部分に位置するすりガラス。そこに、顔の形をした影が映っていたのだ。

ありや何だ？ なぜ、そんな所に人影が？

疑問が胸を突く。

その人影は、ドアの陰に隠れているつもりらしく、俺たちが入室するのを息を殺して待ち構えている様子だ。

何かの罠か？ 単なるビックリイベントか？

いや、これは……。致命傷を生じさせる危険の匂いがある。

まさに、今、密希の手がドアを開こうとして

止めねば！

俺はその手を鷲掴みにし、強引に引き戻させた。ドアが開いた瞬間、災厄が形となって義妹を襲う。それを察知しながら傍観する立場に、俺は立っていないかった。

どうして、という不思議顔で俺を見る密希。

「どしたの？」

さやかちゃんも怪訝そうに訊いてきた。

俺は人差し指を唇に当て、「しーっ」と沈黙を促し、後ろに下がっているようにジェスチャーで指示した。

こちらの意図を察していない様子の二人は、それでも廊下の窓際

まで下がった。

さて。

ドアの向こうで待ち構えている人間は、一体何を企んでいるのだろうか。入りざまに、「わっ！」と驚かそうとでもいうのか？ その程度なら良い。俺の出る幕じゃない。だが、入りざまにナイフを突き出されれば、回避するのは不可能だろう。知らずに入った密希は、無抵抗で刺されてしまう。さやかちゃんを先に入らせて安全確認をする、という手法もあるが……。この状況では、俺が被検体になるしかないか。

俺は決断し、覚悟を決め、防御体勢を整えながらドアを引き開けた。

一步踏み込む。

不意に、横合いから人が跳びかかってきた。

紛れもない襲撃。悪意と害意に満ちた攻撃意思。

予想通りの展開だった。

威嚇ではない。明白な暴力行為。

しかし……。こいつ、結構速いな。

もしも強襲という形ではなく、真っ向から正々堂々挑まれていたら、たぶん俺に勝ち目はなかっただろう。それくらい速く、鋭い襲撃だった。まあ、俺にスピードがないだけ、という噂がなきにしもあらずだが……。おっと、そんな無駄な思考を働かせている余裕はないようだ。

襲撃者が俺に体をぶつけつつ、肩に何か硬い物を押しつけてくる。

「！」

背筋に悪寒が走った。

こりゃヤバイ。

ナイフとか包丁の類いではないが、それよりも性質の悪い武器だ。相手が一撃即死の凶器を所持していると判断し、俺は応対の仕方を検討する。

凶器を所持していた時点で優しい対処はできない。風守家のちょ

んまげ侍野郎に習った必殺技を試しても良いが、殺人犯になりたくなかったので却下。突き出された凶器を回避し、その手を掴んで捻り上げ、凶器を落とさせ……おっと、脳内でシュミレーションしている場合じゃねえ！

俺は咄嗟に相手の武器を持つ方の手首を掴み、思いきり捻り上げた。そして、ここで初めて、相手が男であることを確認した。

背が高くて目つきの悪い金髪男。

なるほど、そういうことか、と納得。

俺は瞬時に状況を認識した。

容赦する必要はない。手心はなし。手加減する必要のない相手。

こりゃ手間要らずだな。

俺はそいつの手首を捻りながら、自由な方の腕で渾身の肘打ちを顔面に叩き込み、その勢いのままに体を巻きつけるようにして硬い床に叩きつけた。

「ぐえっ！」

醜い呻き声を上げる金髪男。

その手から武器を奪い取る。

スタンガンだった。

なんて物騒な野郎だ。こんなガキが、これほど危険な武器を所持しているとは……世も末である。こいつは、こんな物で密希を襲う予定だったのか？ ビリツと一撃、即行動不能。あとは何でもし放題、好き勝手にやり放題というわけだ。

「たたく、このクソガキは！」

俺はサッカー選手のように、目一杯の真心を込めて、全体重を乗っけて、そいつのアゴ先を思いきり蹴りつけた。

正真正銘のペナルティキックである。

鈍い衝撃。

少し狙いが外れ、下唇の辺りを蹴ってしまったが、その辺はご愛嬌。数本の歯と鮮血が飛び散っただけだ。殺しちやいないし、半殺しでもない。単に気絶させただけ。汚れた床の後始末は、こいつの

責任においてやってもらおう。

あ、こいつ、高校生だと思うが、その年齢に反して前歯の全てを差し歯にするハメになるだろうな。でも、同情はしない。こいつが馬鹿なだけだ。

俺は気絶した金髪男を跨いで視聴覚室の中に踏み入った。

部屋の中には女の子が一人いた。祈るようなポーズで体を硬直させ、倒れた男を呆然と見つめている。

この子が密希を呼び出したという重道忍だろう。なかなかの顔立ち。美少女と言える容姿だが、密希やさやかちゃんよりも二ランクほど劣るし、顔面蒼白で酷く引き攣っているので、今はお世辞にも可愛いとは褒められなかった。まあ、ぱっと見はどこにでもいる今の女の子である。

「君が忍ちゃんかい？」

意識して穏やかな口調を用いる。ここで、この子を怯えさせてもしょうがない。この笑えない襲撃の話を書くためには、落ち着かせることが先決だろう。

しかし、忍ちゃんからの返答は得られなかった。彼女は一度俺を見て、すぐに視線を逸らし、次いでガタガタと体を震わせ始めた。

「君は、密希をここに呼び出した重道忍ちゃんだろ？ それとも、人違いかな？」

俺が密希たちを振り返って訊くと、二人は同時に頷いた。

「それで、密希をここに誘い込んで、この大ぶりのスタンガンで痺れさせて、何をしようとしたんだ？ いや、答えてくれなくてもいい。この部屋に用意されてる怪しげな玩具類を見れば、容易に想像できるからね」

俺は室内を見回しながら苦笑した。

撮影用機材、白い麻縄、皮製の拘束具、九尾の鞭、薬品類など……何を目的にして持ち込んだのか想像に難くないが、怒りよりも呆れてしまう物ばかりだ。しかし、その全てが密希に対して使用

されようとしていたとなると呆れているだけでは済まされないと、黙って見過ごすつもりもない。たとえ相手が可愛い女の子であっても、密希の義兄として怒る責任と義務がある、ような気がする。

「本当にどうしようか……」

俺は困惑して呟き、再度二人に目を向けた。

「女の子を殴っちゃマズイよね？」

「人として失格なんでしょ？」

さやかちゃんが即座に答えてくれた。

そりゃそうか。ここで忍ちゃんを殴ったとしても言い訳は立つし、俺は罪悪感に苛まれないだろう。床に転がっている金髪男と同様に、手加減なしで殴り倒せる。サッカーボールのように彼女の頭を蹴りまくれる。暴力行為に躊躇はしない。でも、密希たちに与える印象は最低である。それは、結果として最悪だ。この場合、さやかちゃんにバトンタッチして、俺は傍観者を決め込むべきだろう。

俺は、さやかちゃんと密希を前に押しやって、教室の壁際へ一歩下がった。

さやかちゃんは相当頭に血が昇っているらしく、怒りに顔を紅潮させ、拳を震わせながら忍ちゃんを睨みつけた。

「あんた、どういうつもりで密希を呼び出したんだよ。これは、マジで洒落になんないよ。密希をそこに転がってるクズ男にレイプさせるつもりだったんでしょ？ 犯させて、撮って、脅すつもりだったんでしょ？ 最悪だな。最低だよ、あんた！」

さやかちゃんは鋭い口調で詰め寄った。

よくもまあ他人のことでそこまで怒りを露わにできるものだ。もし彼女がレイプ未遂に遭っても俺は激怒しない。できない。本当に他人事という認識しかないだろうから。

密希は視聴覚室の入り口で立ち尽くしている。何も言わない。何も言えない。騙されたと知り、衝撃を受けたのだろう。友人じゃないとはいえない、クラスメイトに裏切られるのは相当ショックなはずだ。

それは、俺にも理解できる。玲佳を陥れて辱めた時、その光景を俺は特等席で見物していたのだ。だから、どれほどの衝撃を受けるのか想像するに易い。密希は未遂で済んだけど、玲佳は完全な被害者になったのだ。心に絶望を刻み、理想を喪失し、瞬間的に自殺を選択してしまっただけの地獄を見たのである。だけど、結果の差違はあれども、裏切られた想いは同じだろうから、人を信じた結末がこれなら、言葉を失って棒立ちになって当然だった。

「何とか言いなさいよ。なんで密希を酷い目に遭わせようとしたの？ 密希に何か恨みでもあるの？ 黙ってないでさあ！」

さやかちゃんは斬りつけるように質問した。

忍ちゃんはぐらつと体を揺らし、膝から崩れ落ちるようにして床に突っ伏した。そして、「ごめんないごめんなさい」と繰り返し始める。

でも、謝って済む問題じゃねえぞ。

「謝るのは後でもできるでしょーが！ 理由を話さないよ。こんなことした理由を！」

俺の気持ちを代弁する台詞を、さやかちゃんが叫んでくれた。

忍ちゃんは頭を揺すって泣きじゃくる。

「しょうがなかったの。私、脅されてて……。どうしても手伝わなくちゃならなくて……。綾瀬さんに恨みがあったんじゃないの。本当よ！ 今日脅されて、無理矢理に呼び出されたの！」

忍ちゃんは泣き叫ぶように弁解した。

ああ、なるほど、と納得した。

つまり、忍ちゃんも被害者なわけだ。この野口という男にレイプされ、その様子を撮影され、脅迫されて、仕方なく協力せざるを得なかったのだ。少し可哀想な気もするし、だからと言って、密希を同じ犠牲者に引き込むのは間違っている。だが、それよりも何よりも、忍ちゃんを殴らなくてよかった。

俺は胸を撫で下ろした。

「脅された？ なんでよ？ どうして、あんたがこの男に脅されな

きやなんないの？」

おいおい、さやかちゃん、それは訊いちゃいけないよ。従わざるを得なかった理由は、彼女の言葉から察してあげないと。

「それは……」

忍ちゃんが涙声で打ち分けるより速く、俺は彼女を制して、さやかちゃんの肩に手をかけた。そして、無言で首を左右に振る。

「……………」

舌打ちこそしたが、止めた理由は理解しているようで、さやかちゃんは小さく頷いた。

ある程度は察しているのだろう。

「大丈夫か、密希？」

俺は立ち尽くしたまま一言も喋らない義妹に優しく声をかけた。

「うん……」

力ない返事だけど、答えられるだけマシだ。心に致命傷を被ってはいない。

「それじゃ帰るか。用事は済ませたし、もうすることもなさそうだしな……。それとも、婦女暴行未遂で警察に届け出る？」

被害届である。

これは、れっきとした犯罪だ。警察は即座に学園へと駆けつけるだろう。名門女子学園で起こった事件だけに、大騒ぎになること請け合いだ。マスコミがこぞって取材に来るに違いない。誰も得をしないかもしれない選択肢だけど、常識的に判断すれば、警察に連絡するのが最良の解決法である。

「あの、ま、待って下さい。警察を呼ぶのは……許して下さい」

忍ちゃんが弱々しい、哀れを誘う頼りなさで言った。

「勝手なこと言わないでよ」

さやかちゃんは厳しく吐き捨てるが、その声は小さかった。

ことが公になれば、金髪男が警察のご厄介になるのは当然だとしても、同じ加害者の側に立っていた忍ちゃんもお咎めを受けるに違いない。自分も金髪男の被害者ですと弁解したところで、犯行に協

力した時点で純粋な被害者ではなくなっているのだ。もし自分が被害を受けた時に警察を頼っていけば、こんな状況に陥らずに済んだはずである。忍ちゃんはレイプ被害者として好奇の視線に晒される恥辱と苦痛に耐えなければならなかっただろうけど、口の悪い者には傷モノと陰口を叩かれただろうけど、罪を問われる立場ではなかったのだから。

家族やクラスメイトにレイプされたことを知られるのが嫌で、犯罪者側に立つ以外の選択肢を捨てざるを得なかったのか？ 俺は女じゃないから断定的な意見は述べられない。でも、彼女は選ぶ道を誤ったと思う。

「しょうがねえな。君の言う通り、警察沙汰は止めとこう。面倒臭いし、警察に色々訊かれるのは俺や密希にとっても迷惑だからね。さやかちゃんもそうだろう？ だから、今日のこの出来事はなかったってことでいいね？ 君は密希を毘にかけて八メ撮りしようっていう笑えない計画に協力してないし、学校にも来なかった。俺も密希も、ここに転がってる金髪野郎とは会ってないし、蹴ってもいない。さやかちゃんは真面目に部活動に励んでいた……ってことで、丸く収めよう。反対意見はあるかい？」

後腐れがないように認識を一致させておく必要があるんで俺が確認すると、思わぬ人物が反対の声を上げた。

「あるよ！ 大反対だよ！」

さやかちゃんが声を荒げた。腰に手を添えて俺をきゅつと睨んでくる。

「そんな風に、今日、何もなかったなんてできないよ。あたしはやだ！ この男は許せないし、重道さんも許せないよ。妹が酷い目に遭いそうだったってゆーのに、お兄さんは怒りが込み上げてこないの？」

「……………」

怒りなど込み上げてこなかった。そりゃ多少、憤ったのは確かだし、微量の怒りを自覚しないでもなかったが、それは、義兄として

怒らなくてはならない、という一般的感情に照らし合わせてみての自己暗示であって、怒つとした方がお兄さんぽいよな、という計算が働いたゆえの感情矯正だ。実際に被害を受けなかった密希のため、感情的になる必要を覚えない。精神的苦痛を味わった分は、きつちりと支払ってもらった。これ以上話を拗らせて、他人事にならずぶと巻き込まれていくのは得策ではない。警察沙汰や教師を呼ぶとかしたければ、俺たちに火の粉がかからないようにやって欲しいものである。

だから、丸め込む。

「さやかちゃん、これ以上忍ちゃんを追い込むのは可哀想だよ。今の一件がなけりゃ、彼女も被害者なんだろうし、自分から望んで協力したわけじゃなさそうだ。自分がどれほどの非道に手を貸そうとしていたのかは理解してないみたいだけど、あとで冷静になって思い返せば、自分の選んだ道がどれだけ愚かしいものだったか気づくはずだ。今、俺たちが罵って泣かせることに意味はないよ。警察沙汰も可哀想だ。この金髪は除外して、だけど」

「でも、それじゃ、お兄さんはどうしようっていうの？」

そう訊きながらも、さやかちゃんは何かを諦めたように溜め息を吐いた。

俺は肩を竦めてみせる。

「どうもしないよ。何もなかったように帰宅するだけ。金髪野郎も忍ちゃんも好きにすりゃいい。責任を取りたきゃ自分で勝手に取れってことだ。救急車を呼んでこいつを病院に連れて行くもよし、放っておいて家に帰るのもよし、忍ちゃんの好きにすればいい」

俺は無責任な提案を薄情な口調で述べた。

さやかちゃんは難しい顔をして、「うーん」と唸ったけど異論はないようだ。

密希は……。

「おにいちゃん、重道さんを助けてあげないのー？ 可哀想だよー」
義妹が意味不明の戯言を口走った。

おいおい、何を言ってくれちゃってるんだ、密希ちゃん。俺に何を期待してるんだ？ まさか、忍ちゃんがこれ以後脅されないように、俺に骨を折れと？ 声を荒げて問いたくなる。

その厚意にどんな意味がある？

その行為に何の利益がある？

「……………」

俺は無茶を言う義妹を見、次いで忍ちゃんを見た。

密希は不満気な顔で俺を見据えている。どうして俺が救済活動に消極的なのか理解できないらしい。

忍ちゃんは半ば諦めを伴った絶望的表情に涙を浮かべていたが、ほんの僅かな希望を宿した瞳で縋るように俺を見つめている。

堪らねえな。思わず笑ってしまいうくらいの危機的シチュエーションだ。なぜか俺が追い詰められている。二人とも、もしくは三人全員が、人助けなどという善行を俺に期待している。俺が良いことをする？ はっ、馬鹿馬鹿しい！ 冗談じゃないぜ、おい。お笑い種だ。救済したところで、俺が得をする要素はゼロ。利益など生じない。むしろ、精神的苦痛を考慮すれば、大きなマイナスだろう。俺の捻くれた思考回路がショートしかねない。だが……狂っている状態が正常であるはずの俺が、左右良のアドバイスがないこの状況で、義妹の頼みに応えてやりたい、などという本来有り得ない選択肢を選ぼうとしていることに気づく。最低の選択肢なのに、スポットライトを浴びて輝いて見える。最低が最良に思える錯覚。錯乱状態で錯誤しているのか？

ああ、くそっ！ どうすりゃいいんだ？

本心では決断しているのに、表層を覆う感情が偽善行為だと喚き散らして、俺の決意を鈍らせようとする。

三人の視線が痛い。痛い。痛い。

逃げちまうか？

いいや、そりゃ駄目だろ……。

敵前逃亡は死刑、とは左右良がよく口にする言葉だが、今の俺に

も当て嵌まるよな……きつと。

もう覚悟を決めるしかない。今、最善と思える道を選べ。

「ほんと、しょーがねえな。わかったよ、密希。俺が一肌脱いで、今日か明日にでもこの金髪男の家に乱入して、忍ちゃんが脅されている原因を取り除いて、完膚なきまでに問題を解消してやるよ。そうしてやりや良いんだろ？」

俺は自嘲的で自虐的な引き攣り笑いを口許に貼りつけて言った。

密希は跳びつくように両手を俺の腕に絡みつけて歓声を上げた。

「ありがとー、おにいちゃん。やっぱり優しいんだねー」

「……………」

優しさなど皆無。好評価してもらえて嬉しいが、率先してやる気はない。あくまでも仕方なしだ。

だが、一度口にした約束は必ず実行しなければなるまい。

「それじゃ、今日のところは家に帰ろう。さやかちゃんは部活に戻って、忍ちゃんは帰宅する。いいね？」

俺は三人の美少女に強く言い聞かせるように告げた。

「えっ？ 助けてやるんじゃないの？」

さやかちゃんが不審げに声を上げた。

俺は微笑む。

「助けてあげる意思はあるよ。でも、今すぐ何かができるってわけじゃない。ちーっと作戦を立てる必要があるし、この金髪男が今日の失敗で懲りて、心を入れ替えて真人間に立ち返る可能性が億に一つあるかもしれない。そういう猶予も必要なのさ。それに、密希とさやかちゃんは、これ以上、こいつに関わらせたくないんだよ」

俺はつま先で金髪男の脇腹を突つきながら言った。

すると、黙ったまま俺の話聞いていた忍ちゃんが、おっかなびっくり口を開いた。

「あ、あの……私、助けてもらえるのは嬉しいし……。ありがとうございます。……でも、わた……私……あの……」

「ん？」

「私たちが帰って、野口君一人をここに残して大丈夫なんでしょうか？ それに……他の……」

「放つときゃいいじゃん。こんなレイプ魔なんか。先生に見つかって、警察に捕まっちゃえばいいんだよ」

「さやかちゃんが吐き捨てるように言った。」

その意見には賛成。

「でも……、野口君が警察に捕まったりしたら、私……」

口籠もりながらも必死な忍ちゃん。野口という金髪男が捕まれば、自分も道連れにされ、レイプされたことや、その一部始終を撮影されたことも明るみに出してしまい、家族にもバレてしまうと心配しているのだ。

「ごもつともな不安である。」

「安心しなよ、忍ちゃん。この金髪が警察に捕まったところで、自分の悪行をぶちまけるようなマネはしないさ。そんなことすれば、自分の罪が重くなってしまうんだからね。超名門女子学園に不法侵入しただけでも大問題なんだよ。怪我して気絶してたとしても、この怪しげな小道具類を見りゃ、一発で変態の烙印を捺されるだろ。そんなにリスクを冒してまで君を苦しめようとは思わないさ。大丈夫、保証するよ」

それに、金髪男が逆上して忍ちゃんに危害を加えようとしても、

二、三日は病院のベッドから抜け出せないはずだ。

「ってことで、今日のところは解散しよう。忍ちゃんには今晚電話するから、ケータイの番号教えといてね。あ、別にやましい企みがあつてケータイの番号を訊くわけじゃないから、そこんとこ宜しく」

「はい……。わかりました」

忍ちゃんは弱々しく頷いた。

まだ混乱気味だが、多少なりとも俺を信頼しようとする努力している様子だ。きつと、彼女の人格を形成する根幹部分は、素直で真面目な普通の女の子なのだろう。

俺たちは廊下に出た。

「大丈夫かなー？」

倒れたままの金髪男を残すことに不安を覚えるのか、密希が心配げな声を出した。

「大丈夫って、何が？」

密希は俺に問うたのだろうが、応えたのはさやかちゃんである。

「あの野口っていう人、あのまま放つといたら死んじゃうんじゃないかなー」

「それならそれでいいじゃん。あんな馬鹿は死んじゃっても誰も悲しまないよ」

結構酷いことを平然で言う娘だ。人死にを理解できないぐらい想像力が乏しいのかもしれない。それとも、単に捻くれているだけか。何にしろ、密希とは正反対の性格だ。

「おにいちゃん、大丈夫かなー？」

「心配すんな。殺しちやいねえよ。死なすほど強く蹴ってねえ。歯が数本折れて、気持ち良く気絶してるだけさ」

しばらくは病院のベッドから起きられないだろうけど、と心の中で付け加える。

あと、病院にも自力で行ってもらうしかない。救急車など呼んでやらない。

「そんじゃ、あたしは部活に戻るから、また明日会おうね、密希。お兄さんもね！」

さやかちゃんのは心のスイッチを切り替えたように屈託のない笑顔を浮かべて、手を振りながら階段へと駆け出した。

その軽快な足音からして、階段を物凄いスピードで下りているようだ。部活動を抜け出してたんだから、慌てて戻るのも無理ないか。先輩とかに肅清されなければいいが……。

そんなさやかちゃんに続いて、忍ちゃんも俺たちの前に歩み出て、深く深く頭を下げた。

「今日は本当にごめんなさい。綾瀬さん、それにお兄さんも」

「いーよー。密希は全然気にしてないからー。今日から重道さんと

お友達になれると思えばー、逆に嬉しいくらいなんだねー。結果として何も悪いことなんてないんだよー」

密希の穢れなき満面の笑みを見て、忍ちゃんは顔をくしゃっと歪めて涙ぐんだ。何か言おうとして、口を数度開閉するが、戦慄くだけで言葉は何も出てこず、代わりに目尻から涙が溢れ出した。最後にもう一度ぺこりと頭を下げ、彼女は踵を返した。小走りに廊下を進み、階段を駆け下りていく。

やれやれ、とんだ学校訪問になってしまったものだ。家を出た当初はこんな大事になるなんて予想だにできなかったが、密希の身に及ぼうとしていた悲惨な被害を防いだのだから、結果としては最良だと言える。忍ちゃんを助ける約束なんかをしてしまったのは極めて不本意だし、迷惑でしかなかったが、連休中はどうせ暇だし、失敗したところで咎められる筋合いのない他人事なので、さして重荷でもなかった。

人助けとは、正義の味方を気取った道化者の選択する愚行である。いわゆる英雄願望。それは能天気な幸せ者の特権だが、それを他人任せにする身勝手さは殺人級の重罪だろう。

密希はお気楽極楽にクラスメイトを助けようとしたが、それを自力で行わずに俺を頼るのは卑怯である。俺が助けることによって本人も助けた気になる……などという馬鹿げた論理が成立して良いわけがない。まず密希は自分自身で救済を試みて、その結果が失敗であつた時に初めて俺を頼るのが順序としては正しいはずだ。だが、今日は時間的余裕と状況的選択権の自由が利かなかったから、俺は承諾せざるを得なかった。突っぱねられなかった。そう考えなければ、俺が人助けなどを頼まれて、「はい、承知しました」と請け負うわけがないのだ。義妹の頼みだから断り切れなかったとか、我知らず忍ちゃんに同情してたとか、素の感情を露わにしたらみんなに嫌われてしまうから妥協したとか、そんなことは絶対にあり得ない。あつて堪るか。俺は善人じゃねえ。

「おにいちゃん、帰らないのー？」

視聴覚室の前に突っ立ったまま身じろぎもせず、物思いに耽る義兄を、密希は不思議そうな顔で見上げていた。

いかんいかん、下らん思考に惑わされて、心ここにあらずの状態に陥っていたらしい。白昼、前触れもなく棒立ちになり、仏頂面で物思いに耽る変な人間、と密希に誤解されては敵わない。

「おう、帰ろうか」

なるたけ平静を装いつつ、俺は歩き出す。

「おにいちゃん、なんか変なんだよー」

密希は怪訝そうに呟いたが、それ以上深く突っ込まずに、すつと俺の手を握って横に並んだ。

脳がオーバーヒートしてるジャンキーと認識されずに済んだようだ。まあ、変わり者と認識されているのは間違いない。実際、それは間違いではないし。

俺たちはそのまま階段前まで歩いていった。

そこで俺は立ち止まった。

「どうしたのー？」

顔を見上げて首を傾げる密希。

急停止したことに驚いている様子だ。

「ちつと、ここで待っててくれ」

俺はそう告げて手を放してもらい、階段横のトイレに駆け込んだ。無論、男子トイレである。朝起きてから一度も放尿しておらず、実はさつきから尿意を我慢していたのだ。でも、まさか女子学園内に男子トイレが存在するとは予想していなかった。実家に戻るまで我慢しないと駄目か、と膀胱を酷使していたけど、目が男子トイレを捕捉してしまっただけは使用しないわけにはいかないだろう。

俺は密希をトイレの前に待たせておいて、急いで中へ入り、小用の便器の前に立った。

「ふう、やれやれ……」

生理的欲求を開放しようとして

ストップをかけられた。
ポケット内の携帯電話がけたたましい音を響かせ始めたからである。

ちっ、あと二、三分待てねえのか、と思っただが、着メロが記憶にある人物のものだったので仕方なく小用を諦めて個室に入った。個室内であれば、話をしながらゆっくりと用が足せるし、不自然な体勢を取らずに済む。

しかし、一番奥の個室はドアが閉まっっていて、鍵の部分が赤く使用中の表示に変わっていた。

誰かが使用しているらしい。

なんだ、このフロア、誰もいないってわけじゃねえのかよ。

俺は奥から二番目の個室に入り、ズボンと下着を降ろし、便座に腰を降ろして、ケータイの通話ボタンを押した。

「どうした、左右良？」

「ういーっす、陽影君。一日ぶりだねーっ。元気にしてたかな？」
相手は色嶺左右良である。相も変わらずテンションが高い。密希に優るとも劣らないレベルである。二人が揃ったら……そう思うと背筋が凍りつく。

「ああ、まあまあっつところだな……」

俺は隣りの使用者に配慮して、心持ち小声で答えた。

すると、携帯電話越しに拍手の音が聞こえてきた。

「すごいぞーっ。その口調から察するに、新しい家族との対面はつづがなく済んだんだね。もしかして、大成功だったのかな？ ンーでも、その前に、一つ尋ねてもいいかな？ いいや、是非とも聞かせて欲しいんだよ。今、きみがどこで電話を受けているのかを。何だかやけに声が反響してる感じじゃん。エコーが物凄いよ。そこって、トンネルの中とか？ それとも、トイレとかお風呂かな？ まさか、意表を突いて、コンテナの中に閉じ込められている、っていう可能性もありだけど……どう？ 正解は？」

「トイレだ」

「なーんだ……コンテナじゃないんだ。つまんないなあ。でも、そうすると、もしかしたら、私つては酷くタイミンクの悪い時を見計らって電話しちゃってる？　もしそうなら、一度切って、おしっこが終わったくらいにかけ直すよ。邪魔しちゃう悪いから。あ、うちだったら……」

「いや、大丈夫だ。もう切らなくてもいい。何せ、現在、その行為の真っ最中だ」

気だるげに告白。

かなり下品だが、左右良相手ならば許されるだろう。

「うわあ、それ、品位に欠ける話だよお」

左右良はくすくすと笑った。

「でもさあ、陽影君。そこ、実家じゃないよね？　そこまで声が反響するくらいに結構容量の大きいトイレだから、公衆トイレかな？

いや、違うねっ。うー、どこだろう。本当にコンテナの中じゃないんだよね？　わかんないぞっ！　もう！　教えてよ、陽影君。

きみが今どこで何をしているのかをさ。あ、でも、トイレで用を足している、っていう解答はなしだよ」

「ここは学校だ。ちよつと訳ありで、義妹の通ってる学校に連れて来られちゃったんだ。何をしてるんだと訊かれれば、学校のトイレの個室で小便をしながら色嶺左右良からの電話に出てるって答えるしかねえよ。でも、何をしていたかと訊かれたら、可愛い義妹を襲おうとした強姦魔を、軽く叩きのめしてやった、って答えなきゃなんねえな」

俺はさつき起こった事件を、極めて簡潔に省略して教えた。

その途中、隣りの個室からドンという打撃音が聞こえてきた。壁打ちによる警告。ちよつと大きな声で喋って迷惑をかけてしまっただろうか。少しポリウムを落とす。

一通り話を聞き終えた左右良は、「うわあ、すごいねえ。そんなことが遭ったんだ」と興味深そうな溜め息を漏らした。

「なんか、すっげー面白そうな話じゃん。その話、詳しく語って聞

かせてくれると嬉しいなあ。興味深いっていうか、好奇心を擽られて大笑いしそうだよ。できれば、きみが実家に帰り着いたシーンから、そのトイレで私からの電話を受けるまでのエピソードを、臨場感溢れる語りと人間味に満ちた情感を込めて話して欲しんだぞっ」

無茶な要求をしてきた。

「うーん、いや、今はちつとマズイ。ゆっくりお喋りしてる場合じゃねえし、落ち着ける場所でもない。隣りの個室にはお客さんが入ってるからベラベラ喋ってちゃ迷惑だろうし、トイレの外に義妹を待たせてるからな。今は駄目だ。あとで俺の方から連絡入れるから、その時に話してやるよ。それに、左右良に相談したい問題っていうか、助言して欲しい厄介ごともある。だから、しばらくの間、待機していてくれ。いいか？」

「うい。おっけーだよ、陽影君。私は一生涯でも、きみからの連絡を待つてるからね」

「おう、待つててくれ」

俺は通話を解除して、携帯電話をポケットにしまった。そして、水を流し、個室を出る。

隣りの個室はまだ使用中だ。
腹でも下してやがるのか？

まあ、俺の知ったこっちゃない。

トイレから出ると、密希が抱き着かん勢いで駆け寄ってきた。予想外に待たされた為か、唇を噛み締めるようにして瞳を酷く潤ませ、上目遣いに睨んでくる。何だか涙を堪えているような、感情の爆発を抑えつけているような感じた。

ちよっと長話し過ぎただろうか。時間にして十分も費やしてないと思うが……。密希にしてみると、かなり長く待たされたように感じたのかもしれない。

「だけど、普通泣くか？ 泣くくらい怒るか？」

「遅いよー、おにいちゃん！」

まるで密希らしくないか細い声。

「ああ、悪かった。ごめんよ。友達から、ケータイに連絡が入って、つい長話をしちゃったんだ」

一応の弁解。

「……………」

密希は無言だったけど、義兄の弁解を聞き入れ、許してくれたよ。うだ。淡く唇を綻ばせ、腕に両手を絡めてきた。

「さて、帰りますか、妹君様」

俺がお道化た風に言つと、密希はにっこりと微笑んで頷いた。

しかし、その刹那

「きゃあああ！」

この《H校舎》の四階フロアー全体にこだました凄まじい悲鳴。

その声は、廊下の窓ガラスを震わせながら乱反射し、俺たちの鼓膜を乱打した。

密希の身体がびくつと痙攣する。

それを、掴まれていた腕が感じ取った。

「ちっ」

俺は鋭く舌打ちした。そして、振り返る。

案の定、悲鳴の発生源は視聴覚室の前だった。そこに、書類の束を胸元に抱えて立ち尽くしている女の子が一名、ドアを開けたままの姿勢で硬直している。

その女の子が悲鳴を上げた理由は容易に想像できたが、それゆえに俺たちは逃走を許されなかった。

発見されてしまったのであれば、作戦を変更せざるを得ない。

まず職員室から当直の先生を呼んで事件の経緯を説明し、警察沙汰にするかどうかの判断を仰ぐ必要があるだろう。そして、忍ぢゃんについては……正直に話すしかないだろう。そう諦めつつ、俺は視聴覚室へ走った。

密希も後をついてきた。

俺は石像のように硬直している女の子の横に駆け寄り、「どうし

たの？」と我ながら情けなくなるような言葉をかけた。

「あ、あ……あれ……」

少女は言葉に成らない声を発しながら、視聴覚室の内部を指差した。

俺は少女の肩口から首を差し込むようにして室内を覗く。そして、数秒間内部の光景を網膜に焼きつけ、鋭く舌打ちをした。

冗談として笑い飛ばすしかない致命的現実が目に見える形となって完成されていた。完成しながら失敗していた。もう洒落では済まされない間違い。記憶との違い。

どこで選択肢を間違えたんだ？

わからない。

俺は室内を凝視したまま石造と化している少女の肩を掴み、体ごと彼女の視線を室内から俺へと向けさせた。そして、正気づかせるように大きく揺さ振る。

「大丈夫？」

「………な、中に人が、男の人が……」

少女はうわ言のように呟く。

「ほら、しっかり！」

軽く彼女の頬を叩いて言う。

「君は職員室に行つて、誰でもいいから大人を呼んでくるんだ。いいね？」

「わ、わかりました！」

俺が強い口調で命令すると、少女の目に正常な光が宿り、強い意思を伴って綺麗に瞬いた。そして、彼女は放たれた矢のごとく駆け出していった。

どうやら、芯の強い女の子のようだ。

「おにいちゃん、どうしたのかなー？ 野口っていう人、大丈夫なんですよー？」

密希は心配そうに言って、教室の中を覗き込もうとした。それを妨げる。

これは、女の子が見てはいけないものだ。何より、密希は見ない方がいい。

「密希も、あの女の子と一緒に先生を呼びに行け！　ここは俺に任せろ！」

「でも……、おにいちゃん……」

「いいから、行けっつて！」

叱るように怒鳴りつける。

びくつと肩を震わせる密希。

俺のただならない雰囲気にも多少驚いたようだが、義妹は小さく頷いて走り出した。

「良い子だ」

階段へと消える義妹の後ろ姿を見送りつつ、俺は優しく呟いた。

そして、もう一度、視聴覚室の内部に視線を戻す。首に縄を巻きつけて横たわっている金髪男へと。

彼の首に巻きついている白い麻縄。

半開きの口から覗く赤黒い舌。

びくりとも動かない身体。

「さて、どうすればいいのかな……」

自問し、即時、自答した。

「そうだな」

数多く存在する選択肢の中から、俺が選んだのは……選ぶ必要性を感じたのは

「……………」

俺は決断した。

【 8・小野寺紗枝】

血色のスーツを身に着けた相撲レスラーっぽい男と、制服姿の類い稀な美少女、ゼッケン付きランニングシャツと短パン姿の美少女という三人組みが、私たちよりも先に四階視聴覚室の前に辿り着いてしまった。

エレベーターを使用すれば彼らより速く四階まで移動できると西川が主張し、その案に従ったのだが、エレベーター乗り場までの距離を計算に入れていなかったらしい。そこまでの往復距離を全力疾走しただけであり、体力と時間を無駄に消費しただけだった。その結果として、モアイの頭の中身は空だ、と証明されたのは不幸中の幸いである。結局、階段を使用して彼らの後を追い駆け、この後の展開を手をこまねいて傍観するしかなかった。

さて、どうなるのやら……。

制服姿の美少女が視聴覚室のドアに手をかけるが、相撲レスラーがそれを制し、女子二人を下がらせて、自らがドアに手をかけた。

万が一の危険を考慮して女子の安全を確保しつつ、自らが危険に身を晒すとは、なかなかに見所のある男子だ。彼の爪の垢を煎じて、モアイの口へ流し込みたい。できれば、その中に猛毒を混入させて、ドアが開かれ、相撲レスラーが視聴覚室に踏み込んだ。

それと同時に、金髪男がドアの陰から飛び出し、相撲レスラーに襲いかかったようだ。どうやら不意討ちは失敗に終わったみたいだ。

小さな悲鳴を上げる女子二名。
争う物音。

そして、女子二名の歓声。

視聴覚室の中の出来事を直接見ることはできないが、勝負の結果は明白だった。

私と西川は思わず顔を見合わせる。

予想外の展開である。

「リミッタ解除のスタンガンを持って行くせに、デブ一人ぶちのめせねえのかよ、あいつは……。使えねえ奴だぜ」

西川が舌打ち混じりに呟いた。

遠巻きに事態を観察しての情報なので、実際に何が起こったのかは定かではないが、綾瀬密希という美少女の捕獲に失敗し、逆に撃退されてしまったようだ。

完全なる想定外。……。ここで大声を発して西川の存在を知らせ、金髪男もろとも痛めつけさせ、警察に突き出さないことを条件に忌まわしい輪姦画像を消去させ、その上で警察に突き出して罪を償わせる。そうすれば、完全犯罪計画を実行せず、この手を血で染めずに問題を解決できる。

そう、被害者はそのまま被害者であるべきだ。復讐者を経て犯罪者へと転身してはいけない。

一縷の希望が決断を強いた。

私はモアイ男の手を振り払って悲鳴を上げ、彼らに助けを求めようとした。

大きく口を開いて存在を示そうとした。

しかし、次の、西川の呟きが私の行動を思い留まらせた。

「ちっ、あいつはもう駄目だ。重道もな。あの現場を押さえられちゃ言い訳できねえだろ。くそっ、仕方ねえな……。おい、小野寺、とっさとトンスラするぞ」

「えっ、トンスラ？　でも、彼らは仲間なのでしょ？　見捨てるつもりなの？」

「ああいう使えない馬鹿は切り捨てるしかねえよ。放っというて逃げるんだ」

モアイは口を歪めて言った。

はい、そうですか、とは受け入れられない提案だった。

ついカッとして、私は彼の胸倉を掴む。

「ちよっと！　冗談ではないわよ！　私を映したテープはどうなる

の？ 警察に回収されたら、私がレイプの被害に遭ったことが家族にバレてしまうわ！」

「けっ！ おまえのことなんて知るかよ。まあ、あの時のテープは俺ん家にあるから、おまえの誠意いかんによつては処分してやらんでもねえけどよ。どうせ、あいつらが警察に捕まったら、おまえのことも喋っちまうだろ。そしたら、おまえは輪姦被害者として世間の晒し者だ。ぐはは、残念だったな」

「お、お互い様でしょう！ そつちは輪姦の首謀者として晒し者になるのよ！」

「俺がか？ 俺は晒し者なんかにならねえよ。なにせ、奴らの弱みをたんまり握ってつからな。警察の取り調べで名前を出されて、捕まる心配なんてねえんだ」

西川は喉で笑い、力づくで私の手を振り払って逃げ出そうとした。輪姦の首謀者が、自分だけ逃走を図ろうとしている。仲間が警察に逮捕されても、裏切られない確信があるのだろう。しかし、そう都合良く逃がすわけにはいかない。地獄に落ちるのであれば、死なばもろとも。関係者全員を道連れだ。

「逃げたら大声を出すわよ！」

私が警告すると、モアイは階段へと向かう足を止め、鬼の形相で振り返り、拳を握り締め、険しい眼光で睨んできた。

「ここでデカイ声を出せば、おまえも警察行きだぞ。そしたら、完全にレイプ被害者だ。それでもいいのか？」

「どうせバレるなら、貴方も道連れよ！ 自分だけ助かるうなんて許さないわ！」

私は覚悟を固めてにやっつと笑う。

「そうしたらどうなるかしらね。私は母親を心配させないようにならねえと変わらない笑顔を振り撒くだけで丸く収まるでしょうけど、貴方はこの先の人生を性犯罪の前科者として生きて行くことになるでしょうね。まさに自業自得よ。良い気味だわ」

「このクソ女っ！」

低い雄叫びと共に、モアイが拳を振り被って殴りかかってきた。

私は咄嗟に顔を庇うが、狙われたのは腹部であり、回避行動も防御行動も取らなかつたため、強烈な一撃を食らってしまった。

一瞬、意識が飛んだ。込み上げてくる激痛と嘔吐感に思わず蹲ってしまふ。内蔵が圧迫されたせいで呼吸ができない。声も出せない。「おまえは、まだ自分の立場がよくわかってねえみてーだな。馬鹿なのか？俺はな、警察に捕まるんだったら、持つてるエロ動画の全てをネットに流すぜ。帰ったら即刻速攻でだ。そしたら、おまえはネットで晒し者だ。そうなりたいのか？」

モアイは私の髪の毛を鷲掴みにし、上体を屈めて巨顔を近づけ、上から覗き込むようにして言った。

この際、レイプ被害者であることを母親に知られるのは仕方がない。しかし、インターネットで晒し者にされてはマズイ。それを母親が知れば、シヨックのあまり気死してしまいかねないから。

それでは、どうする？

西川の勝ち逃げを許す？

やり逃げを許す？

私は泣き寝入り？

いや、そんな理不尽が許されて良いわけがない。過ちは糾されなければならぬ。犠牲者が泣きを見て犯罪者が高笑いすることなど、絶対にあつてはならないのだ。

私はモアイの手を振り払い、視聴覚室へと走ろうとした。

「このドグソが！」

背後から蹴られた。

その勢いで私は前方へつんのめり、水泳の飛び込みのような格好で廊下に倒れ伏した。バッグがクッションの役割を果たしてくれたので背中がダメージはなかつたが、転倒した弾みで顔を強打し、その衝撃で軽い脳震盪を起こしてしまった。更に、追い撃ちとして脇腹に靴のつま先が食い込む。そして、頭を踏みつけられた。

痛みと悔しさで涙が溢れてくる。

心が挫けて起き上がれない。
喉が震えて悲鳴すら出せない。
情けなさで死にたくなつた。

「このクソ女が……。半殺しにされなきゃわかんねえみてーだな。いいだろう。今日は一日中、徹底的に髑り倒して、ひーひー泣き喚かせてやる。覚悟しとくんだな。言つとくが、次に声を出そうとしやがったら、気絶するまで腹を蹴りまくるぞ。わかつたか？ わかつたら、大人しく俺の車までついて来やがれ」
襟首を掴まれ、階段側へと引き摺られていく。
腕力では敵わない。抵抗は無意味。

この瞬間、暴力に勝るものはない、と私は悟つた。
平和的な解決は不可能。現時点で私が選ぶことのできる選択肢は二つしかない。隷属するか、反攻するか、である。

そして、私は既に選択していた。
そう、暴力で状況の打開を図るのだ。つまり、当初の予定通り、凶器によって強制的に問題を解決させるのである。

イチかバチかの皆殺し。
私は手探りでバッグのファスナーを掴み、ゆっくりと下げた。
西川は気づいていない。
バッグの中身を探る。
タオル。
ウエットティッシュ。

着替え類。
靴。
包丁。
ビンゴ！

自分の手を傷つけないように注意を払いつつ包丁を取り出そうとして

ガラリ。

視聴覚室のドアが開いた。

「ちっ！ 奴らが出てきやがった！」

モアイは忌々しげに舌打ちし、私の身体を抱え上げるようにして、真横に丁度あったトイレの中へ逃げ込んだ。しかも、そこは男子トイレだった。

廊下から男女の会話が聞こえてくる。

用心のためか、モアイは私共々一番奥の個室に入り、しっかりと内鍵を掛けた。そうしておいて、私の首に太い腕を巻きつけ、手の平で口を覆った。

「声を出しやがったら、おまえの細っちい首の骨を押し折るからな！」

耳元で囁かれた。

もう助けを求める気などなかったので、私は従順に頷く。そうしながら、手にしていた包丁を悟られぬように取り出した。

廊下の話し声が大きくなってきた。

トイレの前で立ち話？　そこで警察を待つつもり？

それは好都合だ。

モアイを刺殺した後、トイレから飛び出して相撲レスラーを不意打ちで殺害してしまえば、残り三名の女子など容易に皆殺しできるだろう。まずは手首を返して背後のモアイの腹部に包丁を突き立て、茫然とする彼を振り返って微笑みかけ、息絶えるまで刺し続けてやるろう。

そう思って包丁を振り被った刹那、何者かがトイレの中に入ってきた。

思わず攻撃を寸止めた。逃げ場のない状況で苦鳴を上げられたら万事休すだ。

私は飽和する殺意を懸命に隠し、モアイに察知されないように、念の為に凶器を引いた。

たぶん、入ってきたのは相撲レスラーだろう。金髪男や他の女子とは考え難い。

しかし、なぜこのタイミングで？

どうして私の邪魔をする？

私を殺人犯にさせない神様の配慮か？

何にしても、相当に予想外の展開だった。

意識を個室の外へ向ける。

相撲レスラーは危機的状态だったらしく、焦り気味の足音に続き、慌ててチャックを下げる音が聞こえてきた。だが、彼の放尿を妨げるように携帯電話の着メロが鳴り響いた。勿論、音を立てたのは、私の携帯電話ではないし、モアイの物でもない。

電話を無視して尿意の解消を優先させるのかと思いきや、何を思ったか相撲レスラーは私たちの隠れている一番奥の個室の前に立ち、ドアを開けようとした。だが、鍵が掛かっているので開くわけがない。「なんだ、このフロア、誰もいないってわけじゃねえのか」と彼は呟いた。金髪男の仲間が使用しているとは考えなかったようだ。あまり想像力が豊かな人間ではないらしい。彼は隣りの個室へと駆け込んでいった。

衣擦れの音。

放尿する微かな音。

そして、彼は電話に出た。

「どうした、左右良？」

その人名を聞いたモアイの身体がびくつと反応した。首を絞めつける腕に力が込められ、私の呼吸を困難にする。左右良という人物に余程の思い入れがあるのだろう。私にも思い入れがある名前だ。なぜなら、彼女の代役として私は輪姦の犠牲者に選ばれたのだから。相撲レスラーは電話の相手に、自分の置かれている状況を説明し、更に視聴覚室での一幕を簡単に物語った。

その内容に、私は驚かされた。なんと、彼らは警察を呼んでおらず、しかも気絶した金髪男を視聴覚室に放置したまま帰宅するといふのだ。何を意図した行為なのか、私には想像できない。しかし、警察沙汰にしないのは願ったり叶ったりである。今日のところはモアイと共に逃走を図り、殺害計画を仕切り直すべきだろう。

私は逆手に握り締めていた包丁をしまおうとして、背後のバッグを探った。だが、その動作がモアイの注意を引いてしまい、包丁を持つていることを見咎められてしまった。当然のごとく、包丁を持つている手の手首を掴まれ、物凄い力で捻り上げられた。

激痛で悲鳴を上げそうになっても必死に堪える。攻撃意思のなさをアピールするべく包丁を落とすこともできない。もう殺意はないのに、それを表現できない。

首に巻きつけられた腕に物凄い力が加わり、頰骨が軋む。

苦しさのあまりにモアイの剛腕をタップするが、包丁での攻撃を恐れてか無視された。

苦しい。息苦しい。呼吸が困難。意識を保つことも困難。朦朧として包丁を落としてしまいそうだ。どうにかしてモアイの腕を引き剥がそうとし、私は爪を立てたが、更に、腕に力が込められただけだった。

目の前が暗くなってきた……。

絞め殺される、と思った。

もう形振り構ってられない。

私は足を振り上げて個室の壁を蹴りつけた。
ドン。

刹那、隣りの個室の話し声が止まった。

同時にモアイの腕から力が抜ける。

包丁を握る手が解放された。

咄嗟に振り被り、突き立てた。遮二無二、五回、六回と突き刺した。

モアイは呻き声を発し、包丁を掴み取ろうとしたが、その手を斬りつけられると凶器の奪取を諦め、私の首の骨を押し折るべく力を込めてきた。

「この……クソ女があ……」

モアイの呻くような叫び。

しかし、その声は隣りの個室から聞こえてきた水を流す音に掻き

消された。

その間も、十回、十一回と連続して刺し続ける。

隣の個室のドアが開く音がして足音が遠ざかっていく。

洗面台で手を洗う音。

トイレ内から私たち以外の人間の気配がなくなっても、外から物凄いい悲鳴が聞こえてきても、構わず執拗に刺しまくる。

ついに私の首を絞めていた腕から力が抜け、床のタイルにだらりと垂れ下がった。

私はモアイの膝上から逃れ、前のめりに倒れてくる巨体を振り返って押さえ、あらゆる負の感情を包丁の刃先に集約させ、心臓目掛けて突き出した。

血が飛散し、肉が弾け、肋骨が露出しても刺し続けた。

ぐちゃぐちゃになっても刺し続けた。

パトカーのサイレンが聞こえても刺し続けた。

周囲がバタバタと騒がしくなっても刺し続けた。

個室のドアが乱暴にノックされても、それでも私は刺し続けた。

【9・天園陽影】

白岐学園は大騒ぎになっていた。

休校日だというのに人でごった返している。

情報を聞きつけた生徒や近隣の住民、マスコミ関係者、それとただの野次馬が学園の外周を取り囲み、どうにかして事件現場であるところの《H校舎》に入り込めないものかと警察官の隙を窺っている。

実際、警察関係者以外で校舎に入ってきたのは、学校の教職員くらいのもので、部外者の進入は一切許可されなかった。まあ、俺の目から見ると警察も教師も部外者だったが。

驚いたのは、犠牲者が金髪男だけではなく、あの元ラグビー部で俺と因縁の深い西川不二彦もトイレで惨殺されたことである。金髪男と西川はレイプ仲間だったようだ。そっちの方の犯人は既に逮捕されているそうで、どうも忍ちゃんと同じレイプ被害者が犯行に及んだらしい。しかも、俺がトイレで携帯電話を通じて左右良と喋っている時に、である。あのドンという音は、犯人と西川が争っている際に立ったものなのだろう。まあ、レイプ魔が被害者に惨殺されるのは自業自得の典型なので同情はしない。俺や左右良にとっては、厄介者が一人減って良かった、と思える程度の出来事であった。

しかし、この騒動、どうにかして何もかもなかったことにできないものか、と刑事さんに囲まれた状態で三秒ほど祈った。だが、神も仏も信じていない俺の願いを叶えてくれる者はいなかった。せめて、一時間くらい時間を巻き戻して欲しかったが、そんな超能力は所有していなかったし、勉強机の引き出しにタイムマシンを備えていなかったたので、現実を受け入れざるを得なかった。

俺と密希は強制的に事情聴取された。そして、事件の主要人物と判明するとすぐさま警察署に連行された。だが、金髪男を殺害した

犯人と断定されたわけではない。俺たち以外にも、今日、学園内に
一歩でも足を踏み入れた者はことごとく取調べを受け、重要人物と
判断されると同じように連行されたのだ。

さやかちゃん、忍ちゃんは勿論のこと、駐車場にいた警備員の男
までも警察署に連れて来られていたのには驚かされた。

警察署内での私語は厳禁らしいので、忍ちゃんにこんな最低の事
態に陥ってしまったことへの謝罪と慰めの言葉をかけてあげられな
かった。狭い廊下ですれ違った際に、視線を交わした程度だ。ただ
それだけだったけど、思っていたほどには落ち込んでいる様子はな
く、むしろ、ことが明るみに出て清々し、全てを吹っ切ったみたい
に晴々とした表情をしていた。その辺りは、心のスイッチの切り替
えが巧みな女の子らしさってやつだろう。色眼鏡で見られる覚悟を
決めたのだ。大した肝っ玉の持ち主である。

もしも俺が彼女の立場だったら、この事件に関係した人間全てを
標的にし、将来きつちりと復讐するための計画表に名前を刻んでい
たと思う。心が捻じ曲がっているから、物事をポジティブに捉えら
れないのだ。こんな事件に巻き込まれた自分の境遇に納得がいかず、
原因を作った密希や忍ちゃん、諸悪の権化である西川不二彦と野口
という金髪男に対して強烈な苛立ちを感じているのが現状なのだ。
苛立ちというよりは憤怒と表現した方が正解かもしれない。

警察署内の取調室にて、俺はこつてりと絞られた。昼から夜まで
休憩を挟んで五時間近く、今日朝起きてから学園で死体を発見する
までの過程とその経緯を余す所なく、根掘り葉掘り、マントルに穴
を穿つくらいしつこく聞き出された。同じ質問を幾度となく繰り返
され、少なからず反発心と反抗心を覚えたが、想定範囲内だった
し、俺は殺人事件に遭遇した経験が過去に二度ほどあったので、苦
痛ではあっても我慢の限界は超えなかった。

俺は密希に起こされてから金髪男の死体を発見するまでの出来事
をだらだらと取り止めなく要約せずに話したが、ただ一つ、左右良

から連絡を受けた話をするべきかどうか迷った。電話の内容はともかくとして、俺のアリバイを語る上で左右良の証言は必要不可欠だったが、完全な部外者である彼女に迷惑をかけていいものか躊躇いを覚えたのだ。こういう事件は左右良の大好物であり、彼女の頭脳を持つて当たればたちどころに事件を解決して見せるかもしれない。いや、解決してしまうだろう。それゆえに、俺の置かれた状況では彼女を引つ張り込んだ方が得策だったが、そうであったとしても彼女を関わらせたくなかった。色嶺左右良とは大学の内側だけの関係でいたかったのだ。しかし、結局、迷った末に、彼女とのやり取りも話した。トイレの中で十分近く何をしていたのかと問われれば、彼女とのやり取りを必然的に話さざるを得ないわけだし、俺が嘘を吐いたとしても密希や西川を殺害した女が証言してしまうだろう。バレルような低次元の嘘は吐きたくない。意味のない偽りはみつともないだけでなく、恥辱的屈辱的後悔に直結する愚行だ。俺は愚か者になるくらいなら、犯罪者にされた方がマシなのだ。勿論、犯罪者にされてしまう危険性を排除する意味で真実を語ったのだが……。あとで左右良にはフォローの電話を入れておかなければなるまい。

そんなこんなで事情聴取を終えて、ようやく解放されたのは夜の六時を回った頃であった。

俺と忍ちゃん以外、参考人全員が帰宅を許されていて、俺を待っていた密希を含めても一般人は三名しか残っていなかった。

「全く、とんでもねえ一日だったな……」

そう内心に吐息してしまっくらい疲れる一日だった。

俺は愛車に密希と忍ちゃんを乗せて警察署を出ると、まず駅三分遠くに位置する忍ちゃんの家まで送り届け、その後帰路についた。忍ちゃんは家に帰りたくなさそうな素振りを見せていたけど、現実逃避をしてもいつかは家に戻って家族と顔を合わせなければならぬと俺に説得されて、低テンションの極みを全身で体現しながらも渋々ながらに家の門をくぐった。

忍ちゃんが家族に対して殺人事件における自分の立場をどう弁解するのか、という下司な好奇心がむくむくと頭をもたげてきたが、ある程度は予測可能だったし、想像しても楽しくないので、心のダストシュートに下らない衝動を投棄した。

「色々にご迷惑をおかけしたことをお詫びします。ありがとうございます。ありがとうございました、お兄さん」

そう最後に言ってくれたから、忍ちゃんとの思い出はプラス表示で記憶に残るだろう。

さようなら、忍ちゃん。これからの人生を頑張りなよ。

そう心の中で激励して別れた。

俺の人間性ではあり得ない思い。

昨日から俺は変だ。

それがなぜか可笑しかった。

帰宅して玄関で靴を脱いでいると、キッチンから光理さんが姿を現して、何も言わずに俺たち二人を交互に抱き締めてくれた。

何だか照れ臭かったけど、なぜか癒される感じが悪くなかった。

その後、風呂に入り、食事をし、軽く酒で口を湿らせるが、気の利いた会話は殆どしなかった。

密希は殺人事件に遭遇して酷くショックを受けているらしく、食事を終えると早々に自室に籠ってしまった。

まあ、当たり前前の反応だろう。けるっとしている俺の方がおかしいのだ。

心持ち心配ではあったけど、こんな場合にどんな言葉をかけてやるべきか思考するのが面倒臭かったので放っておいた。優しい言葉など幾らでも思いつくが、それを使用して密希を慰める心優しさを持つていない。彼女を、実の妹のように心配してしまいそうになっている自分に、怒りにも似た腹立たしさを感じているのだ。そういうのは俺のキャラじゃねえ。弱っている今だからこそ、このままひたすら追い詰めて、心をズタズタに引き裂いて……って、おい、何を考えているんだ俺は？ ダークサイドなハートが非常識な物事の攻撃に晒されて、急激に成長したっていうのか？ 俺の人格の核になっっている狂った獣が勢力を伸ばして、心を八割方乗っ取ったっていうのか？ 《普通》であろうと日々もがいていたのに、この一ヶ月間の努力を無にしているのか？

いや、いいわけがねえ。

後悔する選択肢を選ぶな、と左右良にも釘を刺されている。

「殺人事件の詳細については明日にでも拝聴させてもらうとして、今はきみの精神状態が心配なんだよ。きみの心はバランスを失ってるよね。ぐらぐら大きく揺らいで足元が覚束なくなってるよね？」

陽影君、きみ自身は気づいていないみたいだけど、それって非常に

危険な状態だよ。きみの新しい家族にとつても歓迎できない非常事態だ。何かしらのきっかけさえあれば、きみは確実に間違いを犯してしまう。義妹さんに口じゃ言えないようなとんでもない凶行を働いちゃうと思う。それは、誰も望んでない悲劇的結末だよ。私は、加害者になり下がって苦悩するきみの姿なんか絶対に見たくないよ」だから、アルコールを摂取しながら心の再更正を図れ、と言うのだ。

実に左右良らしいアドバイスである。俺が酒に酔って理性を失う危険性など秘めておらず、逆に冷静であろうと努め、理性の権化であり続けることを知っていたの忠告なのだろう。

こうして左右良の忠告を思い返しながら飲んでみると、腹の内側が和らぎ、優しくなれたような気がしてくるから不思議だ。

「自分が狂った人間だ、などと事あるごとに口走るからこそ、自己暗示にかかって鬼畜的暴挙に及んじゃうんだよ。でもさ、結局それって、心の弱さを誤魔化す言い訳でしょ？ きみは自分の弱さを認めたくないから、逆方向に感情を捻っちゃうんだよ。捻れた感情は倒錯的な自我を生み出し、揺るぎない強さを錯覚させてくれる。でも、狂っているきみは強くないよ。強いわけがないんだよ。それを中学時代に玲佳さんから学んでるんだよね？ なのに、また同じ過ちを繰り返すなんてあり得ないよ。きみはお馬鹿さんじゃないから」さつき連絡を取った際に、左右良がかけてくれた言葉である。

俺は馬鹿じゃない。

心を偽るのを止めて、思いを捻らずに素直な気持ちで表現しろ。

義妹が心配であれば、すぐに席を立つて慰めに行くべきだろう。

左右良や玲佳にも一言あるべきじゃねえのか？

忍ちゃんやさやかちゃんも忘れちゃならない。

気になるなら即行動しろ。内心のモヤモヤを払拭する努力を怠るな。

いや、無理か……。いきなりポジティブ思考な人間になれるわけがない。そんな器用じゃねえ。

「きみは肝心な部分で意気地がないんだよねー」

以前、左右良にそう笑われたことがある。

まさに、その通りだ。今の俺がそれである。

行動を起こすための第一歩を踏み出せない精神的引き籠もり。

後ろ向きではないにしても、前を向けない臆病者。

本当に自分が嫌になる。

だけど、俺は俺であり、俺なのだから……地道にやっていくしか
ねえ。

光理さんは俺たちの心情を思いやつてか、事件についてあれこれ
と問い質したりせず、落ち着きのある微笑みと揺るがない優しさで、
俺の酒の相手をしてくれた。

「ちよっと、密希の様子を見てくるから」

俺はそう言い残してリビングを出た。

酒瓶片手の俺を見て、どんな感想を光理さんが持ったかはわからない。
少なくとも呼び止められなかったから、俺の状態を正常だと
判断したのだろう。

密希の部屋の前に立ち、ドアを軽くノックした。

トントン。

「密希、大丈夫か？」

応答を待たずして声をかける。

返答はなかった。だが、すぐに室内から人の動く物音が聞こえ、

ドアが開けられた。

パジャマ姿の密希が顔を覗かせる。

その表情は疲労の色が濃く、瞳に天然色の煌びやかな輝きはな
かった。それでも、彼女は十分に可愛く、同時に儂く、そして可憐で
美麗だった。

「もしかして、眠ってたのを起こしちゃったか？ それなら悪いこ
としちゃったが……」

密希は首を横に振った。

「うっん、寝てなかったよー。眠りたいけどー、目を閉じると色々考えちゃってー、眠れない感じなんだよねー。今日は色々としょっくだったからー」

「大丈夫か？ 駄目なら少しだけ酒飲んでみるか？ アルコールの力を借りて嫌なことを忘れるっていうのは健全じゃねえが、今日みたいな緊急事態なら許されるだろ。眠るための補助薬として少しだけ飲むなら誰も咎めねえと思うぞ」

朗らかな笑みを浮かべて密希を悪の道へと誘ってみた。

未成年者に飲酒を勧める大学生。これって犯罪行為なのだろうか？

「うっん……」

密希はほんの僅かに逡巡したが、さして間を置かずに頷き、俺の部屋についてきた。

グラスと氷、密希の酒を薄めるミネラルウォーターをキッチンに取りに行った際に、光理さんに意味深な目で見つめられたけど、咎められたりはしなかった。

「密希ちゃんのこと、陽影君に任せるわね」

そう言われたような言われなかったような。

よく覚えていない。

覚えていたくなかったから、自ら率先して記憶を消去したのかもしれない。

部屋に戻り、密希を相手にウイスキーを飲む。静かに飲む。さした会話は無い。テレビの音もBGMも何もない静寂の中で、ゆっくりとしたペースで飲み続ける。勿論、事件関係の話題は口にしない。学校に関する話もしない。俺に関する話もない。何も話さない。無言で飲む。

密希は飲酒初体験だったらしくたちどころに酔っ払ったけど、理性を失ってはっちゃけたりせず、時折思い立ったように昔住んでいた街の思い出を話す程度で、一時間も過ぎると完全にアルコールが

回ってフラフラになってしまった。そんな中、一瞬だけ密希の目に正常な光が宿り、真っ直ぐに俺を見据えて、「あの……」と何かを言いかけたが、「うーん、何でもないよ……」と誤魔化すように笑って口を閉ざしてしまった。

形を成さなかった哀訴。

何か話があったけど、上手く換言できなかったのだろう。

「……………」

密希が何を言いたかったのかを俺は承知していた。どんな言葉を与えれば、彼女が安らげるかも理解していた。だが、黙ったままだった。救済しなかった。

更に、三十分が過ぎた。

俺はうつらうつらと舟を漕ぎ始めた密希を抱き上げて、彼女の部屋に運んでやった。ベッドに寝かせ、掛け布団を首下まで引き上げてやる。

なんて無防備な奴なんだ。俺に対して全くの無警戒。まあ、何もしないけど……。

俺は自室へ戻り、ベッドに寝転がった。

そして、瞼を下ろす。視界を閉ざす。

暗闇に浮かび上がるのは事件現場の光景。

金髪男の死体。

魂のない肉体と首に巻きついた麻縄。

久しぶりに見た死体は過去の事件を思い起こさせたが、俺に何の感慨も与えなかった。

もう気持ちの整理はできている。

誤った選択肢を選んではない。

そう断言できる。

俺は後悔しない。俺の後悔などに意味はない。

偽物とはいえ、家族は守る。

偽物だけど家族だから守る。

自分が大切だと思うものを守る。

それで十分だ。

この事件に巻き込まれたのは偶然だ。密希も忍ちゃんも金髪男も西川も悪くない。そう思おう。そう理解しておこう。

忙しくなるであろう明日に備えて眠る。

騒がしくなるであろう明日に備えて眠る。

眠いから眠る……。

おやすみなさい。

第三章『操作開始』 【1・天園陽影】

心地好くも非現実性に満ちた夢が弾けた。

休眠していた身体の電源が入り、脳が起動し始める。少量の酒成分がまだ体内を蝕んでいるようだ。

それにしても……。

「朝です。起きて下さい」

耳を擦る女性の囁き。アルコールに汚染されている脳味噌を更に麻痺させる女神の調べ。

全く眠った気がしなかったが、身体に詰め込んだ酒はあらかた抜けたようだ。不愉快な気だるさが全身を包んでいる。五、六時間は眠っただろう。そんな感じだった。

「目を覚まして下さい」

囁きと共に、生温かい吐息が耳元に吹きかけられる。

俺は目を閉ざした状態のまま体を捻って仰向けになった。

もう大学に行く時間だというのか……。

玲佳は真面目で浮ついたところがなく清楚で物静かで無感動無感情な女だが、二人きりの時だけは多少の人間らしさを見せる。でも、こんな風に熱っぽく誘う起こし方は初めてだ。

だけど、あいつって今、生理でダウンしてるんじゃないっけ？

なんだか脳内が混乱していて、上手く頭が働かない。起動してるけど機能しない。

「おい、朝ですよー。起きろー」

今度はやたらと子供じみた言い方だ。笑ってしまいそうになる。

玲佳が今まで口にしなかった種類の声音。彼女らしくない。

「何時だ？」

瞼が縫い合わされたように固く閉ざされていて、思うように開かず、意識も八割方眠った状態の夢心地だ。口を開いてもしわがれ声しか出てこない。

時間を尋ねると、まだ九時前だった。

何でこんなに早く起こすんだ。大学の講義なんぞ、この眠気に比べればさして重要じゃねえだろ。二、三の講義を素っ飛ばしたところで単位を落とすような俺じゃねえのは玲佳も知ってるくせに。何か恨みでもあるのだろうか。ああ、いや、そりゃ恨みはあるだろう。恨んでも恨み足りないくらい、太平洋が恨みで満たせるくらい、未来永劫に罵声を浴びせかけられても仕方ないくらいの非道を俺はしたのだ。だけど、快眠を妨げるのは反則じゃねえのか？ 姑息な手法での嫌がらせってやつか？ 小さな仕返しからコツコツと、ってことなのか？

そっちがそのつもりなら、俺も実力行使しかねえな。

俺は頭の上ら辺に腰掛けているらしい玲佳の体を両手で拘束し、引き倒すようにして体の上に抱き寄せた。

「きゃっ！」

可愛らしい悲鳴が加虐心を擽る。

倒錯した加虐嗜好が剥き出しになる。

玲佳は僅かながらに抵抗を示したが、力一杯抱き締めてやると諦めたようにぐんにやりと身を任せてきた。

そうそう、初めから素直に従っていればたっぷり可愛がってやるのに、変に抵抗するから俺の加虐心に火をつけちまうんだ。久しぶりに恥ずかしいイジメを加えちゃおうかな、などと不埒な思考を働かせながら、背中に回していた手をゆっくりと服越しに感触を楽しむように撫で降ろし、腰からお尻へと這わせていく。

しかし、両手でお尻の肉をやんわりと掴んだ時、「ん？」と小さくない違和感を覚えた。

この感触は玲佳のお尻とは違うものだ。この、きゅっと引き締まった小ぶりで筋肉質のお尻は、玲佳とは触り心地が違い過ぎる。あいつのは、もっとしっとり手に吸いついてくる感じで、マシユマ口のように柔らかく、それでいて瑞々しい弾力を備えているのだ。

この感じは……誰だ？

まさか、斑雲愛練か？ それとも、星岬流美か？

いや、あいつらとの縁は高校時代に断絶したはずだ。今更、関係を持つわけがない。

そこまで思考したところで、ようやく脳味噌が正常に活動し始め、頭の中がクリアになってきた。

現状を認識。今日は実家に戻って二日目の朝だ。そして、実家には新しい家族の義母と義妹がいる。更に、昨晚、義妹の密希と深酒をしたという事実……。

マズイ。

今、俺がお尻を弄っている相手って……もしかして密希か？ 光理さんじゃないのは確かだ。この感触から言つて、大人の女性のお尻じゃねえ。それはわかる。つまり、必然的に、密希しか残されてねえじゃんか。すなわち、俺は義理の妹にスキンシップを越えた禁断の外道行為を働いてるわけであり、このまま続行すると、俗に言う近親相姦を犯しちまうことになるのだ。それはいくらなんでもヤバイ。日頃、俺の理性はダイヤモンドよりも硬いとかほざいてるくせに、このざまはなんだ。寝惚けてたなんていう言い訳が通用すると思うな。あれほど忠告してくれた左右良に、どの面下げて会えていうんだ？ だけど、心の断罪に反して体は禁断の果实を貪り続け、一方の手を太腿に、もう一方の手は再度、腰から背中へ、そのまま首筋を滑らせて髪の毛へと持っていった。

「ん？」

そこで、またもや気づく。

この女の子は密希でもない。

義妹は校則を遵守して髪を伸ばせないでいる。でも、肩に掛かる程度の長さはあるのだ。しかし、この子はショートカットと言つてもいいくらいの短髪だ。さらさらの髪質で凄く手触りが良いけど密希じゃない。

全体を触った感じを総合的に捉えて分析してみると、体は華奢で筋肉質、手足はスラリとしていて弾力に富み、髪はショート。まる

でスポーツ選手のような体つきだ。

スポーツ選手？

陸上の選手？

陸上部員？

つまり、この女の子は黒門さやかだ。

「もしかして……さやかちゃん？」

恐る恐る確認すると、彼女はくすくすと笑い、耳元で「当たり前」と言った。

あーあ、当たっちゃった。

俺は今日初めて目を開いた。

目の前には小さな肩。タンクトップの上に薄手の上着を羽織っているけど、さつき弄った時に大きく肌蹴たらしく、小麦色の肌が剥き出しになっていた。思わず齧りつきたくなくなるほど瑞々しい肩だ。視線を横にずらせば、産毛の生えたうなじと艶やかなキューティクルを纏った短髪が目に入った。

さやかちゃんは俺の肩口に頭を乗せるような形で、身動き一つせずに体を預けていたが、俺が助平ジジイ紛いのセクハラ行為を止めて手を離し、拘束を解くと、ゆっくりと体勢を立て直してベッドの端に横座りになり、きゅつと俺を睨みつけた。怒っているようできて笑っているような、恨みがましいような、何とも言えない複雑な表情だった。だが、泣いたり逃げ出したりしないところを見ると、セクハラ行為に嫌悪を覚えてはいないようだ。

少し安堵した。

とにかく一言謝っておく必要を感じた。

だけど、開こうとした俺の口を、さやかちゃんは人差し指で押さえた。

「謝らなくてもいいよ、陽影お兄さん。いきなり抱き寄せられてお尻とか触りまくられたのには正直吃驚したけど、嫌な触り方じゃなかったし、優しい感じだったからね。それに、ちょっとだけ気持ち良かったかも。元はと言えば、あたしが悪戯して、勘違いさせちゃ

ったのが原因だからね。触られるくらいしようがないよ」

そう言って、さやかちゃんは軽い調子でケラケラと笑う。

そんな簡単に済ませて良い問題なのか、と思わないでもなかったが、せつかく許してくれると言っているのだから余計な口を挟んで話をややこしくするつもりはない。

今時の女の子って貞操観念とかないのか、と若干の憤り。

「お兄さん、一体誰と間違えたの？」

仰向けの俺を覗き込むようにして、さやかちゃんが小悪魔顔で訊いてきた。

「密希かな？ それとも恋人さん？ お兄さん、恋人さん持ちなんでしょ？ それとも、あたしだとわかってて触ったのかな？」

にんまりと笑って言う美少女。

「君だと気づいたのは本当に最後の最後だよ。あと一歩気づくのが遅きや、とんでもねえことしてたかもな。危ねえよ。まあ、最初のうちは君の言う通り恋人さんだと思いついて触ったんだけど、感觸が子供過ぎるから、もしかして密希じゃねえのかって……すっげー慌てたよ。だけど、髪型で気づいたんだ。さやかちゃんじゃないかなってね」

「あのまま最後までやつちやいたかった？」

口元にいやらしい笑みを形作って、両眼を艶っぽく色づかせて訊いてきた。

なぜそんな質問をするのだろう。実に答え難い。中学生の戯言で掻き乱される俺の心。密希とは違った意味で厄介な女の子だ。全く

……。

「その質問には答えられないな。でも、俺って年上とか年下は、どうも恋愛対象にできない体質みたいだから、理性を保っている間は何もしないと思うよ」

「ふーん。お兄さんて年下は駄目なのか」

さやかちゃんはなぜか急につまらなそうに表情を曇らせ、そそくさとベッドから降りた。そして、寝転んだままの俺の手を引っ

張って起こそうとした。

「さあ、起きてよ、お兄さん。密希のやつが待ちくたびれてるよ」
俺は引かれるままに体を起こし、一つ欠伸をした。ごろりと横に転がってベッドの端に腰掛ける。

体調は悪くない。眠気も粗方消えた。タバコを一本吸いたいたいところだが、先にシャワーを浴びることにしよう。

「ようやく起きてくれたね。おはよ」

「ああ、おはよう。わざわざ起こしに来てくれてありがとう。手間をかせさせちまったね。変なこととしてごめんな。謝るよ」

「いえいえ、あたしは何とも思っただけです。ご安心下さい」

さやかちゃんはお上品ぶった仕種で許してくれた。

その口調が彼女の性質にそぐわなくて笑ってしまいそうになる。

だけど、彼女も白岐学園に通う超お嬢様なのだから上品な言葉遣いをしてても可笑しくはない。掛け値なしに美少女だし。

「密希は？」

「あいつならキッチンで朝食を作ってる。今日の朝ご飯は和風だよー、とか言っただけで随分と張り切ってたね」

「そうか。それじゃ、俺はシャワーを浴びてくるから、君はキッチンに行っただけよ」

俺はベッドを降りて着替えを持ち、部屋から出かけて立ち止まった。そして、首だけでさやかちゃんを振り返る。

「それとも、一緒に入る？」

「何言っただか、お兄さんは……。冗談も相手を選んで言わないと大慌てしちゃうよ。もし、あたしが一緒に入るって言ったらどうするつもりなの？」

「そりゃ……困るな」

俺は溜め息混じりに呟いた。

「でしょ？」

にっこり顔の美少女。

「……………」

なんだかなあ。

さやかちゃんは小悪魔的なからかいが好きな女の子らしい。俺が急に腕を掴んで風呂へ引き摺り込んでも余裕をかませるのだろうか。そんなことを考えながらユニットバスへと移動した。手早くシャワーを浴びて、キッチンに向かう。

ドアを開けてキッチンに入ると、お玉片手に大鍋と格闘していた密希がくるっとこっちを振り返り、満面の笑みを見せた。

「おはよー、おにいちゃん」

「ああ、おはよう」

「昨日は色々心配してもらっちゃってー、気を使わせちゃってー、色々迷惑かけちゃったけどー、もう密希は大丈夫だからねー。ありがとー、おにいちゃん」

「そうか……良かったよ」

俺は僅かな言葉と微笑みで応じた。

密希の表情を一目見て、事件のシヨックから立ち直っていると知れた。穢れなき無垢な笑顔は偽れるもんじゃない。純度百パーセント超えの天然美少女を傷つけるには、たかが強姦魔二名の死だけでは弱過ぎる。その程度では、もし傷ついたとしても自然治癒してしまっただろう。一晩経てば全ての悪夢を払拭し、負の感情を反転切り替える術が先天的能力として備わっているのだ。俺が心配する必要はない。

俺はテーブルの席に着いた。

テーブル上には、さやかちゃんの言葉通り、純和風の料理が並べられていた。

ブリの煮付けに納豆、お新香……。これぞ、日本人の求める朝食だと思わせる品々である。

「さやかちゃん、おにいちゃんにご飯をよそってあげてー。密希は今、お味噌汁から手が放せないのー」

鍋の中身をお玉でグルグルと掻き回しながら密希が叫んだ。

さやかちゃんは俺の隣りの椅子に座りかけていたが、「しようがないなあ」とぼやきながらもテキパキと炊飯ジャーを開き、茶碗に白米をよそって俺に手渡してくれた。

「はい、召し上がれっ」

「ありがとう」

俺はご飯片手にブリの煮付けへと箸を伸ばした。タレのよく沁みたブリはとても美味そうだ。一欠けら箸で摘まみ口へ運ぶ。次いでご飯をかき込み咀嚼する。うん、旨い。密希は掛け値なしに料理上手だ。いいお嫁さんになるだろう。内心で太鼓判を押してやった。

俺はひたすらにテーブル上の料理を口の中に掻き込んでいく。

さやかちゃんはテーブルに肘をつき、両手で頬杖をついて、俺の食事している姿を眺めている。見ていて面白い姿なのだろうか。わからない。やけに楽しそうな顔で見つめてくる。

気にしないでおこう。

「はい、おにいちゃん。お味噌汁できたよー。たくさん食べて下さいねー」

密希が漆塗りのお椀に、なみなみと味噌汁を注いで、俺の前にずっと押しやった。殺人級の笑顔で。

どうやら、朝っぱらから腹一杯食べさせるつもりらしい。

俺としては、朝は腹四分目くらいで十分なのだが……。文句は言えない。せっかく作ってくれた料理を残すのは最悪だ。だから、ひたすら掻き込み、飲み込み、咀嚼する。がつつと食らう。食い尽くす。

そんな俺の姿を二人の美少女が熱心に見つめている。じーっと観察するように。手の動きや口の動きを見定めて分析するかのよう。穴が開くほど。でも、俺は苦痛を感じない。食事する姿を觀賞されても気にしない。日常的に、玲佳や左右良のような美人さんと一緒に食事をしているから。

「おまえたちは朝飯食べねえの？」

俺はテーブル上の料理を粗方片したところで、緑茶を啜りながら、

二人のどちらともなく訊いてみた。

今時の若者は朝飯を食べる習慣がないらしい。二人ともまさしく今時の若者だ。その例に漏れないだろう、と思ったのだが。

二人は同時に首を左右に振った。

「あたしは家で食べてきたんだよ」

「密希はママと一緒に食べたよ」

なるほど、納得。

そう言えば、光理さんの姿が見えない。今日も朝から町内会の集まりだかに参加しているのだろう。ご苦労なことである。

「本当はー、おにいちゃんも一緒につてママが起こしに行つたんだけどー、ぐっすり寝ちゃつてー、全然目を覚まさなかつたつてー。おにいちゃんはお寝坊さんだよねー」

「……………」

反論したい気分だが、無意味で無駄な労力は使わない。それよりも、さつきから気になっていることがあり、それを問い質さなければならぬ義務感に苛まれていた。

「それよりも、おまえらつて今日は学校のある日だろ？ いいのか、こんな所でのんびりと俺が飯食つてる様子を眺めてたりして？」

「あはは。お兄さん、何言つてんのっ！ 昨日、殺人事件が遭つたばっかなんだよ。授業なんかあるわけないじゃん。あたしたち、白岐のお嬢様だよ？ 繊細な心の持ち主なんだよ。昨日の今日じゃ立ち直れないつて。あはは」

君は死体を見てないから笑つてられるんだぞ、と内心で突っ込んだが、面倒なので言葉にはしなかった。

「それじゃ、おまえらの学校は、昨日からゴールデンウィークが始まつたようなもんじゃねえか」

俺はタバコを一本抜き出して、口に啞えながら呆れた声を発した。すると、さやかちゃんは機嫌を損ねたみたいに顔をしかめて、小さく頭を振った。

「もっ、お兄さんは全然わかつてないなあ」

「なにが？」

「そりゃ、事件に関係ない生徒は休みが伸びたから嬉しいかもしれないけどさあ。あたしたちは事件の当事者なわけでしょ？ 警察の取調べとかで忙しくて遊びに行く暇なんてないよ、きつと。ただでさえ家族に邪推されてうんざり気味なのに……。マスコミも生徒の家を片っ端から取材してるみたいだしさあ。それに、警察の人からは事件が解決するまで勝手に出歩かないで、常に居場所を明確にしておけって言われてムカムカしてるんだよ！」

「えっ、さやかちゃん、刑事さんにそんな忠告受けたの？」

少し驚いた。

俺は言われてない。つまり、さやかちゃんが現在の有力な容疑者ということか。

「お兄さんは言われなかったの？」

さやかちゃんは目を見開いて、頭の天辺から声を放つ勢いで叫び、テーブル上に上半身を乗り出した。

お行儀が悪いよ、さやかちゃん。

「ちょっと、何それ！ それじゃ、あたしが犯人ってこと？ 犯人扱いされてるってゆーの？ 冗談じゃないよ！ 洒落になってないよ！」

さやかちゃんは唾を飛ばして喚いた。

「あー、落ち着いてよー。大丈夫だよー。刑事さんに居場所を明らかにしておきなさいって言われたのはー、密希もなんだよー」

お気楽な調子で言う密希。

警察に容疑者扱いされているかもしれないのに、不安も不満も不審も感じさせない晴れやかさ。心配しているこっちの気ががくーつと抜けそうになる。

まあ、そういう気質が密希の魅力の一つであり、長所の一つでもあるわけだが……。

「なんだよ、密希も忠告されたのか。二人が言われてるのに、俺には何もなしって言うのはちょっと寂しいな。仲間外れっつーか、容

疑者と疑われてなくてつまんねえっつーか」

「何言つてんの、お兄さん。馬鹿なことほざいてると怒るよ!」

さやかちゃんはテーブルを叩き、不快な感情を表現した。

「ごめん」

俺はすぐに謝罪した。

確かに愚かで暢気な言葉だった。二人の気持ちを考慮すれば、かなり軽率な発言だったかもしれない。だが、実際のところ、密希とさやかちゃんが警察から居場所を明確にしておけと釘を刺されたのは、最近の若者が身勝手に無責任で行動パターンが読めないから、という理由があつたからだろう。逆に、俺は良識ある大人として扱われているから忠告されなかつたに違いない。

俺の意見を二人に説明してやると、密希は「そっかー」と納得したが、さやかちゃんは「あたしは注意されなきゃわからないような馬鹿女じゃないのにつ!」と憤慨した。

「でも、君は今、ここに遊びに来てるじゃないか。自宅待機を言い渡されてるのに出歩いちまつてるのは問題ありじゃないかな。刺された釘を引っこ抜くようなマネをしてると刑事さんに叱られるかもよ」

俺は軽く突っ込みを入れてみた。

さやかちゃんはムツと唇を尖らせて言い返す。

「お兄さんと密希は、同じ事件の関係者だから良いんだよ。ちゃーんと連絡が取れる場所だし、親にもキツチリここに來るつて教えといたからね。文句を言われるようなことはしてないんだよ」

「まあ、そうだな。居場所がわかりや問題ないつて言うんなら、ケイタイを持ってりや、どこをほつつき歩いてても咎められねえつていう理屈だよな。それに、密希もさやかちゃんも実際には容疑者の一人ではあつても、殺人犯とは思われてないんじゃないかな。精々、重要参考人程度の扱いだと思つよ。俺の方が逆にヤバイくらいさ」

「そつなの? お兄さん、ヤバイ感じ?」

「おにいちゃん……」

二人が心配そうに見つめる。

「はは……。可愛い女の子に、憂いを込めた目で見つめられるのは嫌いじゃない。だけど、切ない視線を向けられるのは好きじゃない。不用意に前向きになって逆風に立ち向かおう、などという全くもって俺らしくない昂揚感を生じさせてしまいたい。そんな意味のない熱情など必要ない。俺は俺だ。俺にとって最も都合の良い選択肢を適確に選び、合理的な道を歩むことこそが大切なのだ。道を見誤ってはいけない。」

「今現在の殺人犯有力候補は、俺と忍ちゃんだよ。昨日、最後まで残されて、微に入り細に入り事情聴取された二人だ。そう考えるのが正しい。一応、俺と忍ちゃんには金髪男を殺害する動機があるわけだし、西川不二彦を刺し殺した女の子と密希はともかく、他の人々には殺人を犯す理由なんてないだろうからね。でも、まあ、そこんところは、今日からの取調べでハッキリさせて行くんだと思うよ。容疑者全員のアリバイ調べとか色々……ね。」

そう言っつて、俺は箸を置いた。

「ごちそうさま。美味しかったぞ、密希」

「にははー、ちょっと照れちゃうかなー」

食事の後片付けは密希とさやかちゃんの二人が引き受けてくれると言っつので、俺は食後の一服を吸うことにした。

エプロン姿の美少女二人が流し台に向かってる姿を眺めながらの喫煙は素晴らしく旨かった。ここに、アルコールが絡めば最高なのだが、朝っぱらからの飲酒にはさすがの俺も駄目人間ぶりを感じざる得ないので、想像するに留めておいた。速いピッチで一本目のタバコを灰にして、もう一本取り出そうと手を伸ばす。

ピンポン。

不意に、来客を告げるチャイムの音が鳴り響いた。

「あれー？ こんな朝早くにー、お客さんかなー？」

密希は小首を傾げながら、泡塗れの手を水で洗い流し、エプロンで拭っつて玄関へ行こうとした。

俺はそれを止めた。

「密希、俺が応対するから、おまえは洗い物を片付けちゃって」

どうせ警察の人間だろうから、と俺は内心で溜め息。

こんな朝早くから熱心に活動しているのは、郵便屋か警察くらいのもんだ。

「きつと、警察だよ！」

さやかちゃんは大皿をスポンジで擦りながら、不味い物でも食べたような顔と口調で言った。

密希は眉を寄せ、不安そうに俺の顔を見たが、頷いて流し台の前に戻った。

よしよし、聞き分けの良い子だ。

俺は、のそりとした動作で椅子から立ち上がり、啜えタバコのみま、灰皿を片手に玄関へと向かった。

本心では、朝から警察の相手などしたくはなかった。事件の関係者であり、容疑者の一人であり、重要参考人の一人である俺には、警察の捜査に協力する義務があるのだろうが、心が捻じ曲がっているから素直に応じる気になれない。むしろ、反発して非協力的に振舞い、事件を混乱させてやりたくなる。けれども、密希やさやかちゃんのことを考えると、俺が対応せざるを得ない。義兄として、義妹を事件の矢面に立たせるわけにはいかないから。

「どちら様ですか？」

仏頂面でドアを開け、愛想のない声を出す。

どうせドアの外には、いかつい中年男の私服警官が立っているのだろう、と予想していたのだが……。開けて吃驚玉手箱。実際に立っていたのは、三十歳くらいの綺麗なお姉さんだった。

「あれね……。えつと……。どちら様？」

俺が仏頂面を意識して和ませつつ尋ねると、お姉さんは口許に笑みを湛えて名乗った。

「警視庁捜査一課の立花鈴檜という者です」

警察手帳を顔の前に翳すようにして示した。

へえ、と俺は無表情に感心した。刑事の中には、こんな女性もいるのか。まるで、テレビ番組の刑事モノに登場しそうな美人刑事だ。きりりとした気高さを感じさせる一方で、厳しさの中にも一抹の女性らしさを思わせる柔らかさが備わっている。背はそれほど高くないが、姿勢が良いのでスラリとしてカツコイイ。びしっと身に着けた若草色のスーツがとてもよく似合っていた。たぶん、学生時代から優等生として周囲の人々に認められていた口だろう。生徒会長的な雰囲気のある人だ。文句なしに俺の好きなタイプだった。

「朝早くお邪魔して申し訳ありません」

鈴檜さんは謝意を言葉にし、口許の微笑みを深めたが、本心からの言葉じゃないのは俺の表情を冷静に観察する眼光でわかる。

密かなる不快感。俺の啞えタバコが悪いのかもしれないが、それはそれ。友好的である必要はないにしても、形だけの礼儀正しさと挑まれると故意に反発したくなるってもんだ。

「朝から事情聴取ですか？」

我ながら大人気ないな、と思うくらいに極北を突く声。

鈴檜さんは僅かに怯んだ様子で、笑みを強張らせた。

その顔を見て、俺は少し溜飲を下げた。そして、反省した。

いかんいかん。美人さん相手に礼を失するような態度は、俺のスタイルじゃねえ。この女は敵じゃねえんだから、対立を生む原因となる言動は控えるべきだ。むしろ、友好的に接して味方につけるべきだろう。何にしても合理性重視だ。俺にとって最高に都合の良い選択肢を正確に選ばなければならない。つまり、この女刑事に心象良く映るべく、仏頂面を改めて微笑んで見せろ、ということ。

俺が表情を改善すると、鈴檜さんは一瞬戸惑い、次に安堵の表情を浮かべ、すぐに元の事務的的微笑み顔を取り繕った。その刹那の変化は、何とも面白くて見応えがあった。

「すみませんが、少しだけお時間をいただけないでしょうか。貴方は、天園陽影さんですよね？」

堅苦しい口調で確認された。

「その通り、俺は陽影ですよ。でも、こんな朝早くから事情聴取ですか？ 俺としては、昨日みたいに長時間椅子に縛りつけられて、周囲をいかつい刑事さんに囲まれて、警察署の取調室に缶詰めにされるってのは、もう正直、ウンザリなんですけどね」

丸っきりの本音を冗談めかして告げる。

鈴檜さんは苦笑した。

「今日は警察署に来ていただかなくても宜しいですよ。ほんの少しだけ時間を割いて、私と一緒に来ていただければ十分なのです。それに、今日は私一人ですから、あまりご不快な思いをさせることはないと思います」

「それってつまり、俺と貴女で一对一のデートってことですか？」

俺が冗談ぽく尋ねる。

鈴檜さんはくすつと笑った。

「デートですか……。そんなお気楽なものではないと思いますが、白岐学園へ向かうまでの時間をデートと呼んでも差し支えはありません。移動中にお喋りする程度であれば、という条件付ですけど」

「ああ、なるほど。白岐学園に……。つまり、現場検証に立ち会ってことですか？」

「いえ、現場検証は既に終わっています。今日は、貴方の証言を基にした実況見分です。しかし、どうしても拒否したいのであれば、無理強いはいしません」

鈴檜さんは俺の表情を窺うようにして言った。

要は、俺を殺人現場へ引っ張っていき、昨日散々聞き出した情報を確認したいのだろう。迷惑極まりない申し出である。即座に断りたい。警察権力に協力を強制されるのは仕方ないにしても、拒否権を与えられた上での申し出は不快なだけじゃなく極めて不本意だ。いつそ犯人扱いしてくれた方がまだ割り切れるのだが……。まあ、この場合は承諾しておこう。刑事とはいえ、美人さんの頼みはなるべく叶えてあげたいし、数分間だけでもデートできる権利は放棄せず

に行使したい。それに、この人は外見とは異なり心が脆そうだ。ちくちくイジメて楽しむのも面白そうである。

「いいですよ。ご一緒しましょう」

「ありがとうございます。ご協力感謝します」

今度こそ憚りのない安堵の笑みを浮かべて、感謝の意を表す鈴檜さん。

刑事という種類の人間は、容疑者に対してもっと毅然としているべきじゃないかと思う。迂闊な内面の表現は相手に付け入る隙を与えるだけでなく、相手を突け上げらせる結果を招く。そして、それが調査の大きな弊害となってしまうのだ。俺の眼から見ると、彼女はあまりにも無防備過ぎる。

この女は手玉に取り易そうだ、と俺は判断した。

世の中、弱みを見せた者の負けだ。そういう人間は敗北者の列に加わるしかない。鈴檜さんには悪いけど、この後、どんな酷い扱いを受けても諦めてもらうしかない。まあ、何か悪さをしようってわけじゃない。反対に、捜査に協力して事件の解決に貢献してやろうという気持ちになり始めている。そうすれば、上手い具合に犯人を捕まえられるかもしれない。とにかく、俺はこの事件を手っ取り早く解決して欲しいのだ。ただそれだけだ。

「んじゃ、ちつと待って下さい。服を着替えてきます」

俺はそう言っただけを向け、首だけ捻じって女刑事を見た。

「一緒に行くのは、俺だけでいいんですか？ 今、密希とさやかちゃんやんが家の中にいますよ。事件の経過を現場で再現したいのなら、二人も連れていった方がいいんじゃないですか？」

「いえ、今日は貴方一人で十分です。義妹さんとさやかちゃん……えー、誰でしたか……。そうそう、黒門さやかさんですね。二人は現在容疑者から除外されているのです。重要参考人ではありませんが、アリバイや動機を云々する以前に、二人が殺人を行うのは不可能であったと捜査本部は判断しています。一方、貴方は……」

「俺には金髪男の殺害が可能だった、と判断されたわけですね？」

「ええ、その通りです」

見事に肯定された。

「わかりました。とにかく、着替えてくるので少し待って下さい」
俺はそう言い残してキッチンへ戻り、待っていた二人に状況を説明し、大人しく家で留守番しているように言い含めた。

密希は素直に頷いたが、さやかちゃんは不服そうに頬を膨らせる。
「なんだかなー。つまんないなあ。今日は一日中、お兄さんと遊ぶつもりで来たってゆーのにさあ！」

文句たらたら。

「帰ってきたら幾らでも相手してあげるから、大人しく留守番してよ。いいね、さやかちゃん？」

「ちえっ、わかったよ」

不満げではあったものの、聞き分けのない駄々っ子じゃないので、さやかちゃんは舌打ちしつつも首肯した。

俺は自室に戻ってジャケットを引っ張り出し、袖を通しながらケータイとタバコをポケットに入れて玄関へと急いだ。

それにしても、さやかちゃんは朝一番に何をするつもりで来た訪したのだろうか。密希とどこかへ出かけるつもりだったのか。単に、遊びに来ただけか。家にゲーム機の類いなんてあったっけ？ 一瞬、そんな疑問が浮かんだが、すぐに消えた。

【2・色嶺左右良】

ジリジリジリ……。

目覚まし時計のベルが控え目に起床時刻を告げている。
即座に反応。

枕で目覚まし時計を押さえつけるようにしておいて、手探りでベルを停止させ、私は芋虫のごとくベッドから這い出し、眠い目を擦りつつカーテンを引き開けた。窓も全開にして清々しい朝の空気をアパートの室内に取り入れ、大きく深呼吸をして脳味噌に新鮮な酸素を送り込む。昨夜は、白岐学園で発生した殺人事件についてあれこれ考えを巡らせている間に時を無益に消費してしまい、思考を切り上げて眠りについたのが朝方だったので、現在も若干の寝不足感到に苛まれていた。

「左右良さん、おはようございます。今日も一日、精一杯、頑張りますようにね」

大欠伸をしながら朝の挨拶。

「うい、左右良さん、おはよー」

返事をしつつベッドメイクをし、枕カバーを交換して、一度カーテンを閉ざしておいてバスルームへと向かう。

「左右良さん、今朝の目覚めは爽快でしたか？」

パジャマを脱ぎながらの質問。

「んー、少し眠いよお。昨夜の無駄なシンキングタイムが身体に祟ったみたい。ヘモグロビンが酸欠気味かな。あと三時間くらい眠れぱすつきり爽やかな目覚めを感じられると思うよ」

眠い目を擦りながらの返答。

「それは駄目なのですよ、左右良さん。いくら眠くても人間は朝起きるのが常識です。しかも、怠惰は乙女の肌にダメージを与えますよ。それに、だらしのない女は陽影君に嫌われちゃいますよ」

「うー。でも、寝不足は肌荒れの元凶っていう噂じゃん。きつと、

脳味噌とか内臓にも悪影響だよ」

「こらこら、左右良さん、愚図つてないで便座に座りなさいな。我慢は便秘の元で、膀胱炎も併発して、辛い泌尿器科通いになっちゃいますよ」

「うい」

私は下着も脱ぎ捨て、全裸になってからどすんと便座に腰を降ろした。

生理的欲求を解放し、ほーっと一息吐く。

そうして体内の毒素を全て放出してから歯を磨き、シャワーを浴びて軽く身を清め、身繕いをして部屋に戻った。

再びカーテンを開ける。

射し込む朝日。

アパートの前の道路にストーカーの姿はない。もう西川不二彦が私に付き纏うことはない。身の危険に怯える日々は続くが、身近な脅威はとりあえず解消された。なぜなら、昨日、彼は刺殺され、存在自体がなくなってしまったからである。

「ラッキーですね、左右良さん」

「うい。これで、私が《殺陣ドミノ》を誘発させる必要もなくなつたわけだね。色々と下準備をしてきたけど、無駄になっちゃって残念かな」

「でも、左右良さん、《殺陣ドミノ》の誘発は殺人幫助及び殺人教唆の罪に問われる危険性が満載の計画だったのですよ。それを考慮すれば、西川不二彦の死は勿怪の幸いなのです」

「うー。左右良さんは生真面目だなあ。邪魔な人間は速やかに排除しないと、明るい未来計画が台無しにされちゃって、悲惨な末路を辿るハメになっちゃうんだよ。穢れのない乙女な体を台無しにされちゃう危険が目白押しなんだよ」

「そうですねえ。賛同できない意見なのです。間接的にでも殺人を犯したら、陽影君に真の笑顔で求婚できないでしょ？ 後悔必至の愚かしい計画を実行しなくて済んで良かったんじゃないですか

「？」

「うー。それはそうかも……」

計画案を廃棄すると共に大反省。

「それにしても、左右良さん、今日は特に陽影君からの連絡が待ち遠しいですね」

「うい、そうだよね。殺人事件の詳細な話を聞かせてもらおう約束だもんね。左右良さんのちっちゃい胸が好奇心でドキドキのワクワクなんだよ。もしかしたら、サイズが一回り大きくなってるかも」

ささやかな膨らみに両手を添えて報告。でも、実感はない。幻想と願望の二重螺旋。奇蹟を信じて胸部の急激な成長を切望。

「それは自虐的表現なのですよ」
自己に強く反省を促す。

「胸のサイズがコンプレックスなの、左右良さん？」

更に自虐的質問をして自爆。

「うー。スカートの話題ほど嫌じゃないけど、率先して話題に興じたくはないのですよ」

「この話題に限っては、自虐と自爆は同義語だもんね」

結論が出たところで話題を変更。

お腹が空いたので、朝食についての質問をする。

「さーて、左右良さん、朝ご飯は何にしますか？ 順当にお味噌汁と納豆かけご飯ですか？ それとも少し奮発して焼き魚にしますか？ 昨夜の残り物の銀鱈の粕漬けがありますよ」

「んーん……。そうだね。銀鱈も良いけど、二日続けてはちよつと厳しいから、今朝はお洒落にフレンチトーストなんかどう？ 女の子っぽい感じじゃないかな？」

同じ品の連荘を拒否して雰囲気重視した案を提示。

「了解です、左右良さん」

名案に感心して即承諾。

朝食の準備に取りかかる。

フライパンに多めのバターを敷き、珈琲牛乳に浸した二枚の食パンを解き玉子に絡めてから乗せた。

甘い香りが室内に充満する。煙たいので換気扇のスイッチをオン。同時にフレンチトーストを引っ繰り返す。そして、お皿を用意し、メイプルシロップとミントティーを冷蔵庫から取り出してテーブルに準備した。

フレンチトーストの完成。

空っぽ胃袋の歓声。

刺激を受ける食の感性。

齧りつきたくなる衝動を管制。

フライパンからお皿にフレンチトーストを移し、テーブルへと運んで、クツシヨンの上にお尻を落とす。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

とろりとしたプディング状のトーストをフォークで抉り取り、ぱくつと一口。

「おいひいですね、左右良さん」

「うい、デリシヤスだよね」

このプリンのな触感が堪らない。喉越しも良く、消化にも優しい。最高の朝食である。でも、若干、カロリーは高め……。

「こんなのを毎朝食べてたら、一週間で三キログラム増なのですよ、左右良さん。気をつけて下さい」

警告含みの注意。

「うー。でも、美味しい物はがつつ食いたいなあ。ケーキとかクッキーもバクバク食べたいっす」

「食の欲求を満たすことに比例して、左右良さんのスレンダーな体がブクブク太っちゃいますよ。そうになると、陽影君に嫌われちゃいます。それでもいいのですか？」

警鐘を鳴らして注意を喚起。

「それはデンジャラスだね。でも、陽影君と同じ体型になるのは悪

くないかも。身も心も同調させて、仲間意識を妄りに増大させれば、冷たい彼の心にも熱い情念が点火しちゃう可能性があるんだよ」

「そっかなあ。この世には同族憎悪という不吉な言葉が存在するのですよ、左右良さん」

「ひっっ」

とにかく朝食終了。

さっと後片付けをして大学へ行く準備にかかる。

まだ連休期間に入っていないので、当然のように本日も大学の授業はある。ただ、陽影君は事件の関係で来ないだろうから、今日は非常に味気ない一日になる予感で胸が一杯だった。自主休校しても良かったのだが、自分の稼いだお金で勉強しているわけではないので、ズル休みはできない。

「それじゃ、左右良さん、大学へ行きますか」

「おっけー、れっつあんどごーだよっ！」

私はバッグを肩にかけて玄関へと向かった。

【3・天園陽影】

鈴檜さんは俺を助手席に乗せて車を発進させた。

車種はポルシェ。純白色のボディがやたらと目立つ、刑事にあるまじきオーブンカーだ。そこから、何となしにこの人の性格が窺える。およそ、見栄っ張りで負けず嫌い。世間一般の人が認識する刑事の型枠に嵌められるのに耐えられず、ワザと常識的刑事像から逸脱して見せているのだらう。そして、それに対しての陰口を叩かれたくないから仕事に一生懸命なのだ。

そう俺は分析した。

きつと、恋人などいないし、友達も少ないだらう。警察仲間から白眼視されている可能性もある。だが、それは全て俺の勝手な想像だ。本当のところは不明。全部、どうでもいい他人事だ。俺の知ったこつちやねえ。

「天園さん、私に対する質問はありませんか？」

ポルシェを発進させると、すぐに鈴檜さんが訊いてきた。

それは、どんな意味においての《質問》なのだらう、と俺は内心に戸惑い、返答に窮した。

「質問ですか？ 俺が貴女に？」

「はい。事件に関しての質問が色々とあるのではありませんか？ 警察の思い描いている犯人像や現段階で最も有力な容疑者は誰なのか、また、なぜ義妹さんが容疑者のリストから外されたのかなど……何でも訊いて下さって構いませんよ。中にはお答えできない質問もあります」

前方を見て運転しながら言っつて、鈴檜さんは口の端をきゅつと上げた。沈黙はお好きじゃないらしい。

「うーん、そうですね……。許可をいただけるのなら遠慮せずに質問しますが、その前に、まず俺を天園と苗字で呼ぶのは止めて下さい。できれば、陽影って呼んで欲しいですね」

「構いませんよ、陽影君。それでは、私のことも鈴檜と呼びますか？ 私は何と呼ばれようとも全く気にしませんから、「ご自由に」へえ……好きなように呼んでいいんですか、と俺は内心で毒を滴らせた。

名前にコンプレックスを持ってない人間が酷く羨ましい。この嫉妬に似た感情は、幾年月を経ても払拭できない。どうしても羨望してしまう。俺が自分の名前を好きになる日など今後一切、絶対に訪れないだろうから。

くそつ、ネガティブな感情は絶えず制御しておかなければ……。

俺は一秒も用いずに精神状態を矯正し、内側へ向かう感情の流れをストップさせた。

「それじゃ、お言葉に甘えて俺も鈴檜さんと呼ばせてもらいます。では、鈴檜さん、俺からの質問です。貴女には現在付き合ってる男の人がいますか？」

最初に会心の一撃を加えて相手の出鼻を挫き、会話の主導権を握ってしまえば、あとは自分専用の引出しのように相手の情報を聞き出せるだろう。冗談めかさずにさらりと尋ねるところがポイントである。相手が動揺すること請け合いだ。

しかし、予想に反して鈴檜さんは動揺の色を一切見せなかった。それどころか、横目で冷たい視線を突き刺してきて、口角に蔑むような笑みを形作る。

やべえ、しくじった。

相手の出鼻を挫くどころか、俺の方が自ら地雷を踏んで爆死してしまったようである。

こりゃ取り繕うのが大変だぞ、と内心で焦っていると、鈴檜さんは急に表情を変じさせ、くすくすと笑い始めた。

「いきなりプライベートな質問をするのはルールに反します。それに、初対面の警察関係者にする質問ではありませんよ」

「すいません。失礼しました。俺のこと、軽蔑しましたか？」

軽蔑されたなら、されたで別に構わない。女刑事に嫌われようが、

蔑まれようが、俺は気にしない。でも、そうでなかったら、俺はもう一步深く踏み込むつもりである。だから、確認した。

鈴檜さんは「いいえ」と答えた。

「先程、私は白岐学園に到着するまでの時間をデートと解釈しても構わない、と言ってしまいましたから、陽影君が私のプライベートに関する質問をしても軽蔑しません。それでも、質問の内容によっては答えられないものもあります。ちなみに、貴方の質問に対する答えは《いいえ》です」

「そうですか……」

何でもない風を装って応じる。だけど、内心では微妙に動揺していた。先制パンチを与えるどころか自分の方がダメージを負っていると自覚しちまっている。

くっ、やるじゃねーか、この女。俺を欺いて一撃し、反転離脱後にフォローするとは……味なマネをしてくれる。ライトカウンターってやつだ。面白い女である。実に面白い。先程の評価を改めなければなるまい。組し易い女だと思ったが、逆にかなりの強者だったようだ。一筋縄ではいかないタイプ。刑事としての才能には不安要素があるけど、一人の女としては面白い。

「少し意外ですね。鈴檜さんほど綺麗な女性なら、周囲の男が一秒たりとも放っておいてくれないと思います。そうじゃないんですか？ やっぱり、仕事が忙し過ぎて恋愛にかまけてる時間がないんですか？」

「あら、ありがとうございます。綺麗なんて言われたのは何年ぶりでしょうね……。大学在学以来でしょうか」

鈴檜さんは再び横目で俺の方を見たが、さっきのような冷たい視線ではなく、好意を含んだ友好的視線だった。

褒められて満更でもない様子だ。

「しかし、私の仕事では外見など殆ど重要視されませんから、職場で容姿についての評価を述べる者はいませんね。恋愛とは縁遠い仕事ですし、捜査一課という部署は本当に忙しい仕事場ですから、私

的な時間を作る暇など全くありませんよ。同僚を恋愛対象として選ぶこともできませんが、私は二度と警察関係者と恋愛する気持ちはありません」

台詞の最後の方で愚痴っぽく呟いて、鈴檜さんはブレーキを乱暴に踏んだ。

赤信号だったからだ。

俺は前につんのめりそうになり、両足を踏ん張った。

どうやら、鈴檜さんは過去に警察関係者と恋仲になり、辛酸を舐めた経験があるようだ。ちよつと興味をそえられる話である。どんな経験をしたのかを突っ込んで聞き出したい欲求に駆られるが、お互いに不愉快な思いはしたくないので止めておいた。思い出したい過去をほじくられるのは俺も嫌だから。自分がされて嫌な行為を他人に強いる人間は、馬鹿のレッテルを貼られても仕方がないだろう。

勿論、俺は馬鹿じゃない。

「警察組織ってところは、男の人の方が割合的に多いんでしょう？中には言い寄ってくる男とかいないんですか？」

「いませんね。皆無ではありませんが、忘年会や新年会などのイベント時を除けば、言い寄ってくる男性などいませんよ。職務中に関係を迫るのは、ただのセクハラ行為です。この私を相手にそこまで無茶をする男性はいません。もし、そんな不埒な警察官がいたら、即時、裁判沙汰ですね」

鈴檜さんは冗談っぽく言った。

確かに彼女の言う通りだ。女刑事を相手にセクハラ行為を働くのは、無謀を通り越して無能と言わねばなるまい。警視総監くらい地位が高ければ権威を傘にしてどうにでもできるだろうが、下っ端の刑事では自爆行為に等しいだろう。法を守る側の人間が安易な情欲から法を犯す側に転身するのは、大馬鹿者以外の何者でもない。まあ、俺には関係ない話だ。

「なら、俺が鈴檜さんに言い寄るのはいいってことですよね？」

「……悪くはありません。しかし、私の立場としては応じられませんが。なにせ貴方は容疑者です。当然、容疑者との色恋沙汰はご法度です。貴方がアプローチするのは自由ですし、それを止める権利を私は持っていません。けれど、私の側に応じる意思がない以上、無益な行為だと思えます」

堅い口調で釘を刺された。

「真面目なんですね」

「真面目ですよ。私は何事に対しても常に真剣に取り組んでいます。いけませんか？」

鈴橋さんはつつけんどんな口調で訊いてきた。そして、青信号になるや否や、アクセルをぐーっと踏み込んでポルシェを急発進させる。

体全体にGがかかり、背中がシートに押しつけられた。

《真面目》というキーワードは、彼女にとって褒め言葉にならないらしい。

これからは気をつけて発言しよう。そう俺は心持ち反省した。

しかし、鈴橋さんの機嫌は一向に直らなかつた。

五分ほど無言で車を走らせ、そして白岐学園の荘厳なシルエツトを視界に捉えるところに車が差しかかると、横目でじろりと睨んできた。

「第一、陽影君には現在ちゃんとした恋人がいるでしょう。二心は許されざる背信行為です。不実です。不貞です。不浄です」

鈴橋さんは一オクターブ低い声で言った。

おっと、警察の情報収集能力を甘く見ていた。俺の交友関係など一日で洗いざらい調べ尽くされているわけだ。こりゃ参った。しくじった。十分前に時間を巻き戻して、彼女との会話を始めからやり直せないだろうか。

無理だな……。俺は魔法使いじゃねえし、タイムマシンも持つてねえ。

「すみません、冗談です。貴女に言い寄るっていう発言は軽い冗談ですから、どうか忘れて下さい」

とにかく、前言撤回である。そして、同時に謝罪して許しを乞う。本心では全く謝る気などなく、怒りたいなら勝手に怒っとけ、と言いつ放ちたかったのだが、自分が容疑者で相手が刑事という関係上、心象を悪くする発言は慎まねばならない。

鈴檜さんは無言無表情のまま車で走らせ続け、白岐学園の敷地内に入り込んだ。裏に位置する駐車場までは移動せず、正門から直接校内に進入し、《H校舎》の玄関前に停車させる。警察の特権というやつだろう。

ズルイぞ。ちゃんと駐車場に停めるべきじゃねえのか？

「さあ、行きましょう」

鈴檜さんはポリシエから降りてドアをロックすると、さっきまでの不機嫌さをどこかに放擲してしまったかのような朗らかさで俺を促した。

「どうしたのですか、陽影君。先程の暴言は全く気にしていませんのでご安心を。あの程度で腹を立てるほど私は狭量ではありませんよ」

「……………」

俺は仏頂面に笑みが滲み出ぬように奥歯を噛み締めた。

一度ならず二度までも俺にダメージを与えやがった。振りが長い分、さすがの俺もぐらつかざるを得ない。良い攻撃だ。褒めてやろう。本当に面白い女である。俺を弄って遊んでやがるのか？ それとも、無意識の攻撃なのか？ 俺は大人の女と付き合った経験がないから正確な分析ができない。反撃していいものかどうか……。だが、美人さんはどいつもこいつも一癖あるやつばかりだ、と過去の経験から理解している。玲佳や愛練、流美に左右良……。みんな曲者揃いだ。

俺たちは玄関口で来賓用のスリッパに履き替えて四階の視聴覚室

へと向かった。

先に鈴檜さん、それに半歩遅れて俺が続く。

階段を上る際、俺の目線の真ん前に丁度彼女のお尻があつて危険な衝動に心を脅かされかけた。だが、素早く頭から振り払って正気を保った。

この人、何気にスタイルが良い。股下が長いつて言うか、腰の位置が高いつて言うか、足が長く見える抜群のプロポーションを誇っている。胸とお尻にボリュームがないから雑誌のグラビアには向いてないが、ファッションモデル体型と言えるだろう。俺は自分自身がデブだから、交際相手に対するスタイルの許容範囲も広いつもりである。女性の外見に文句など吐かない。そんな資格はない。性格さえ良ければ外見など二の次なのだ。

まあ、身近な女が美人に越したことはないし、現に玲佳はぶつ千切りの美女だ。数少ない親友の左右良もかなりの美人さんだし……。もしかして俺つて、面食いか？

四階まで上がり、階段のすぐ横に位置するトイレの前に差しかった所で、鈴檜さんは徐に立ち止まった。

男子トイレの前である。

「このトイレの中で貴方は十分程度、恋人と携帯電話でやり取りをしていたのですね？」

女刑事はスーツのポケットから小さな手帳を取り出して、指でぺらぺらと捲りながら確認してきた。

俺は「はい」と答えた。

どうやら、この人は左右良を恋人だと勘違いしているようだ。やはり、警察の力では風守玲佳のところまでは辿り着けなかったらしい。だが、訂正する必要性を覚えなかつたので、すつと流した。

「えー、その際に貴方がこのトイレから一步たりとも外に出てないことは、色嶺さんと小野寺さんの証言から証明されています。同時に、トイレの前で待っていた義妹さんの証言もあります。それゆえ、

貴方のアリバイは証明された、と言っていていいでしょう」

「そうなんですか？ それじゃ、俺は容疑者つてわけじゃないんですね？」

「はい。完全に容疑者のリストから除外されたとは言えませんが、今のところは限りなく白に近い灰色という位置付けです。陽影君より、義妹さんの方が黒に近い灰色ですよ。そして、西川不二彦を殺害した小野寺紗枝も同様です。彼女は野口竜一郎の殺害に一切関与していないようです」

鈴檜さんは事務的な口調で言つて、男子トイレの前から視聴覚室へと歩き出した。

俺も並んで歩く。

「それつて、密希のアリバイが曖昧だからですよね？」

鈴檜さんは首肯した。

「その通りです。義妹さんには殺人を犯す動機があり、犯行に及ぶ時間的余裕もあり、完璧なアリバイもありません。もう一度、関係者全員の証言を洗い直して再検証してみる必要があります、現段階で誰が怪しいなどと軽々しく言えませんが、義妹さんのアリバイは極めて脆弱です。その時、男子トイレの前から移動せずに貴方を待っていた、ということ証明できていないのです」

少し申し訳なさそうに言う鈴檜さん。

つまり、密希のアリバイがあやふやで犯行時刻に何をしていたのかわからない以上、俺のアリバイも中途半端というわけだ。西川を刺し殺した小野寺という女や、携帯電話越しに話していた左右良が俺の身の潔白をどのように証明してくれたのかはわからないが、今の俺にはアリバイなんかないと捉えておいた方が無難だろう。白に近かろうが、黒に近かろうが、灰色は灰色だ。この先どう変色していくのかわかったもんじゃねえ。

視聴覚室の前に差しかった所で、俺はふと思いついた。

「そう言えば、さっき鈴檜さんは、密希とさやかちゃんは今現在容

疑者から外れてる、って言ってましたけど、あれって嘘だったんですか？」

女刑事の言葉に矛盾を見つけ、俺の口調は固く尖る。

鈴檜さんは視聴覚室のスライド式ドアに手をかけたところで動作を止めて、俺の方を見て「いいえ」と答えた。そして、困ったような表情を作った。

「実際、容疑者筆頭という立場ではありませんよ。それは事実です。その理由を、これから順を追って説明していきます」

鈴檜さんはドアを開けた。

「このドアの陰に被害者が身を隠していて、義妹さんを急襲しようとしたのですね？」

「そうです。本人は隠れていたつもりらしいけど、廊下からは……俺の目には丸見えでしたよ。ちょっと笑っちゃいました」

俺はドアのすりガラスを指差して言った。

「なるほど。すりガラスに人影が映っていたので危険を察知したわけですか」

鈴檜さんは小さく鼻を鳴らして言った。

「それで、ドアを開けて中に入り、飛びかかってきた被害者と格闘になり、貴方が一方的に叩きのめしたということですか？」

「そうです」

「では、それを再現してみてください」

鈴檜さんとはんでもない要求をしてきた。

「再現ですか？ どうやって？」

「私が被害者の野口竜一郎を演じますから、貴方はご自分の行動を再現して下さい。被害者の行動を逐一指示していただければ、私はそれに従います」

「なるほど。金髪男との格闘を再現して、容疑者の証言に信憑性があるかどうかを確かめようってわけですね。わかりました。それなら、鈴檜さんはドアの陰から飛び出して、俺に掴みかかってきて下さい」

鈴檜さんは頷いて、ドアの向こう側に身を隠した。

俺は一步後ろへ下がり、一呼吸置いて視聴覚室に踏み込んだ。すうと空気が流れて、鈴檜さんが接近してきた。

ほう……、と俺は感心した。身のこなしが武道を嗜む者特有のしなやかさを備えている。まるで、流水に遊ぶ柳の葉のごとく。金髪男など比較にならない美しい動作だ。

彼女の手が俺の体に触れ、ダンスをするように肩に添えられた。そして、次の指示を待つように俺の目を見る。

「それで？」

「……金髪男はスタンガンを装備していて、それを俺の肩に押しつけてきたんです」

「こんな感じで、ですか？」

鈴檜さんは手帳をスタンガンに見立てて、俺の肩に押しつけてきた。

「そうです、そんな感じですよ」

俺は微笑む。

「両足を踏ん張って、歯を食い縛って下さい。舌を噛まないようにいいですか？」

「えっ？」

彼女が聞き返すより早く、俺は体を密着させ、手首を掴んで捻じり、手帳を落とさせた。勿論、十分に手加減してである。

「そんなもって、金髪野郎の顔面に肘打ちをぶち込んでやったんです」

そう言いながら、俺は肘打ちの真似だけして、彼女の頭を右腕で抱え込み、そーっと壊れ物を扱う要領で体を床に押し倒した。そして、にやりといやらしく笑って見せる。

そこで初めて鈴檜さんの瞳に警戒の色が宿った。

まあ、大抵の女性は、男に組み伏せられて自由を奪われ、邪な笑みを見せられれば身の危険を感じるだろう。女刑事として例外ではない。

「どういつつもり……ですか？」

それでも、まだ穏やかな笑みを保つ余裕があるようだ。肝が据わっている。それとも、俺という人間を信用しているのだろうか。もしそうなら大きな過ちである。俺の人間性を見誤っている。

その切れ長の眼は節穴なのか？

「私をここで強姦するつもりですか？」

鈴檜さんは真っ直ぐに俺の目を見据えて訊いてきた。

良い目をしている。俺が玲佳を欺いて馬鹿な野獣どもに襲わせた時、引き倒されたあいつも今の鈴檜さんのような眼をしていた。毅然として一点の曇りもなく、何者にも穢されない美しさと気高さ。

「はい、と答えたら、鈴檜さんはどうしますか？　ここは完全防音の視聴覚室です。ドアを閉めれば外に音は漏れない。俺は鈴檜さんみたいな凜とした美人さんを滅茶苦茶に犯すのを生き甲斐にしてる鬼畜男だし、この状況を作るきっかけは貴女の不用意なスキンシップにあります。貴女みたいな美人さんに抱き着かれて何も感じないほど、俺は無神経な男じゃないですからね」

俺は鼻と鼻が触れ合うくらい顔を近づけて囁いた。

鈴檜さんは意志の強そうな眉をきゅつと寄せ、若干の不安に彩られた瞳で俺を睨んだ。もしかしたら俺が本気なのではないか、と思いは始めているのだろう。信じたい気持ちと疑う気持ちがフィフティフィフティ。

そんな鈴檜さんの目に見える動揺が、俺に仄暗い満足感を与えてくれた。

この人は、ごく平常な情感を持つ普通人だ。いきなり押し倒されて俺を信じられなくなっている。これが自然且つ普通の反応だ。

「もし貴方が本気ならば、私に抵抗の手段はありません。腕力では敵わないでしょうし、大声で助けを求めたところで外部に音は漏れません。誰かが偶然この部屋を訪れる可能性もないと考えるべきでしょう。残念ながら、今の私には逃げる術がありません。貴方の成すがまま、されるがままになるしかないでしょうね。でも、その後、

貴方は確実に暴行傷害で逮捕されます。それでもいいのですか、陽影君？」

俺は邪な薄笑いを改め、持ち前の仏頂面を回復させた。そして、足を使ってドアを閉め、二人だけの密室を作る。

パタンという音を立ててドアが閉まるのを聞いて、鈴檜さんの顔が強張った。勢いをつけて体を振り、俺の腕から逃れようともがく。必死に暴れる。死に物狂いで抵抗する。

まあ、こんなもんだらう。

どれだけ心強く気張って見せていても、この状況に追い詰められれば抵抗する。玲佳のように信じ続けられない。ごく他愛ない《実験》だったが、鈴檜さんは俺の予想範囲内に収まる程度の人間だ、と判明した。それがわかっただけで満足だった。

俺は体を離し、凌辱に備えて体を硬直させる女刑事を自由にした。手を貸して立たせ、床に落ちていた手帳を拾って手渡す。

「何もしませんよ。俺は理性に従って生きる人間ですから、感情に支配されて凶行に及ぶような外道じゃないんです」

「で、でも、こんな無礼……許されませんよっ！ 未遂とはいえ、刑事を押し倒すなど許せません……」

鈴檜さんは首筋まで桜色に染めて俺を睨みつけた。

本気で怒っているようだ。まあ、怒って当然である。

俺はひたすら謝罪するしかない。

「すみません。鈴檜さんが金髪男との格闘を再現しろって言ったから、それを忠実に実行したんですよ。本当なら、床に叩きつけて顔を蹴りつけるんですが、貴女を実際に蹴るわけにはいかないので、ちよつと悪戯を」

「……悪戯では済まされないとこです、本当ならっ！ 暴行未遂の現行犯で逮捕されても文句を言えないところなのです！ ドアを閉められた時、私がどんな気持ちでいたか想像できないのですか？」

「……………」

想像できた。その上で反応を確かめるべく実行したのだ。予想を

裏切つて欲しいと願いながら。残念な結果に終わったけど……。

鈴檜さんは大きく溜め息を吐いた。

「本当に、本来なら絶対に許さないとところですが、今回だけは大局に見ましよう。貴方が悪意を持ってやったのではないと信じます。実際に、体のどこかに触られたわけではありませんからね。貴方は事件を再現しただけ、私は押し倒されたと勘違いしただけ。ただそれだけ……ということにしておきます」

したたか矜持を傷つけられて憤懣やるかたなし、という心情を体現しながらも、鈴檜さんは渋々という感じで許してくれた。彼女は乱れた精神状態の鎮静化を図るように三度肩で呼吸した。負の感情をコントロールする術を身につけているようだ。手にした手帳に視線を落とす彼女には、もう動揺は感じられなかった。

「話を戻しましょう。えー……貴方が野口竜一郎を床に叩きつけた後、顔面を蹴りつけて気絶させたのは事実ですね？」

「そうです。紛れもない事実です。昨日、警察署の取調室でもちゃんと話しました」

「しかし、その際、被害者の前歯七本が折れ、下顎の骨にヒビが入っています。少しやり過ぎたではありませんか？」

「……………」

俺は無言で鈴檜さんを睨んだ。彼女がそんな言葉を吐くとは予想できなかっただけに、酷く裏切られた気分を味わわねばならなかった。

「どうしたのですか？」

突然黙り込んだ俺に不審をいだいたのが、鈴檜さんは不思議そうに訊きしてきた。

どうしたもこうしたもねえ。あんた、今、自分が押し倒されて散々怒つただろ！ そのくせ、密希を暴行しようとし、撮影しようとし、脅迫しようとしたかもしれない人間の肩を痛めつけちゃ駄目って言うのか？ 俺の反撃に対して批判するのはおかしいだろ。俺は義兄として激怒する権利を当然所有しているし、報復する権利も所

有しているはずだ。女刑事に咎められる筋合いはない。義妹が犯られる前に、義兄が殴っただけである。スタンガンなどを装備した変質者相手に手加減など不必要。しばらく変態活動できないように気絶させたのだ。結果的に歯とアゴに多少の怪我を負ったかもしれないが、その程度で済んで良かったじゃねえか。うははは。

そう内心に怒鳴り散らす、言葉にも表情にもしない。無駄な表現は体力と精神力を浪費するだけだ。だから、俺は反省しているフリをする。

「ちよつとばかり、やり過ぎたかもしれませんね」

眉を寄せて頭を掻いて見せる。

鈴檜さんは腰に手を当てて大きく頷いた。

「反省して下さい。当たり所が悪ければ致命傷になっていてもおかしくない怪我だったのですから。幸いにして気絶するに留まり、貴方は殺人犯にならずに済みました。しかし、これはれっきとした暴行傷害です。訴えられれば、逮捕されてしまうところでしたよ」

「警察沙汰にはならないという確信があったからこそ、俺は手加減なくあいつをぶちのめしたんですけどね。奴がどんな屑人間だったか、警察もちゃんと把握してるんでしょ？」

「それは把握しています。西川不二彦と野口竜一郎は複数の女性を暴行し、その一部始終を撮影して口封じし、他の女性を誘い出す役割を強制させていました。それは許されません。私個人の意見としては、殺されたところで自業自得だと思います。しかし、私は警察関係者であり、法を守らせる側の人間です。野口竜一郎がどれほど極悪非道の人間失格であっても、怪我を負わせたら傷害の容疑で逮捕し、殺害したのであれば殺人犯として逮捕しなければなりません」

「……………」
俺は反論の言葉を何も紡がなかった。

刑事を相手に口論しても意味はない。

「貴方の気持ちかわからないのではありません。それは理解して下さい。私も家族を襲う輩相手に冷静な対処ができるとは思っていま

せん。きつと過剰な暴力を振るってしまおうでしょう。だから、貴方をこれ以上責めたりはしません」

鈴檜さんは余計な言葉を補足して、俺をウンザリさせた。

そんなことは言われなくても理解している。フオローなど俺には不必要。ただ許せないのは、金髪男に振るった暴力を彼女がいちいち咎めたことだ。その後の会話など問題ではない。

「それでは、実況見分を再開しましょう」

鈴檜さんは背中とお尻をはたきつつ表情を改めた。

「陽影君、貴方は被害者を気絶させた後、彼の協力者である重道忍さんを説得し、彼女の弱みとなっている記録映像類の奪還及び廃棄を手助けすると約束したのですね？」

「まあ、簡単に言えばそういうことです」

「その後、気絶している被害者を放置したままで退室し、その場に同行していた黒門さやかさんと被害者の身を案じていた重道忍さんを帰宅させたのですね？」

「えっと……まあ、忍ちゃんを帰宅させたのは鈴檜さんの言う通りですが、さやかちゃんは部活に戻ったと思いますよ。練習の途中で抜け出してきたみたいですから」

俺が情報を訂正すると、鈴檜さんは手帳をぺらぺらと捲り返し、

素早く視線を走らせて二度頷いた。

「はい、そうですね。その通りです。貴方の記憶は正確です。黒門さんは部活動の練習を抜け出していたために、運動場へ戻った際、部長から厳しく叱られたそうです」

ああ、やっぱり、さやかちゃんは先輩に怒られちゃったのか……。付き合わせちゃまって悪いことしたかな。でも、あの時、さやかちゃんは自分から率先してついて来たんだから、同情するに値しないか。

「あの後、忍ちゃんは帰宅したんですか？」

「それは確認できませんでした。本人は帰宅したと証言しています。それを証明する者がいないのです。彼女の両親は共働きなので、帰りが深夜なのです。だから、犯行時刻のアリバイはありません」

「それじゃ、忍ちゃんが最有力の容疑者なんですか？」

「いいえ。彼女にも犯行は不可能なので、今現在の時点では容疑者から外されています。その理由は、貴方の義妹さんと同様です」

「その理由とは何ですか？」

俺は即座に訊いた。それが一番の関心事である。理由を知りたいから鈴檜さんについて来たのだ。

しかし、彼女は「その前に……」と言って、俺を部屋の中央に導いた。

「貴方は重道さんと黒門さんの二人を帰した後、自分たちも帰宅しようとなりました。ですが、途中で尿意を催して階段横のトイレに駆け込んだのでしたね？ 義妹さんを外で待たせたまま、十分ほどトイレの中で過ごした？」

「そうです」

俺は首肯した。

「男子トイレの一番奥の個室が使用中だったので、その隣りの個室を使用し、その最中、隣りから壁を強く叩く音が聞こえてきたのですね？ そして、トイレから出た刹那に悲鳴を聞き、視聴覚室に戻ってみると、野口竜一郎が死んでいたと？」

「まあ、そんなところです。トイレの中では、まさか隣りで西川さんが刺されてると思わなかったですよ。悲鳴とか話し声なんかは全くなかったですからね。あとはトイレを出た直後の悲鳴ですが……。悲鳴が聞こえたから振り返って見ると、女の子が棒立ちになっ
ていて、最初は金髪男が気絶してるのを発見されちまったのかと思
ったんです。でも、行って確かめると、奴が死んでたんです」

「えー……」

その時の金髪男の姿を再現して見せるべく、俺は黒板の下に移動して壁に寄りかかるように腰を降ろし、両足を前に投げ出した。そして、アゴを引き、項垂れるような形で頭を前のめりにする。

「こんな感じですか。この状態で、黒板の上から伸びる白いヒモが首

に巻きつけられていました。誰がどう見ても首吊り死体でしたね」

「ふむふむ、わかりました。ありがとうございます。大体、全員の証言と一致しますね」

「大体……ですか？」

気になる言い方だったので俺は聞きなおした。

大体ということは、一部の証言が食い違っているわけである。その違い……どう違う？

「大体です。第一発見者である生徒会長の無堂百合子さんの証言は、どうも曖昧で正確性に欠けているのです。随分とシヨックを受けていたようですから、記憶が不確かであつても仕方ありません。しかし、そうなると、彼女自身のアリバイが不完全になってしまうのです。犯行時刻、彼女は隣の生徒会室で資料の整理をしていたそうですが、それを証明してくれる人物はいませんでした」

「へえ、あの子、生徒会長さんだったんですか……」

あの時、この部屋の前で立ち尽くしていた女の子の姿を思い起こして、俺は相槌を打った。

よく覚えてないが、割と整った顔立ちの勤勉そうな女の子だった気がする。眼鏡を掛けてたっけ？ うーん、生徒会長ね。まあ、どうでもいい。思い出す意味はない。

「では、先程の質問にお答えしましょう」

鈴檜さんがいきなりそんなことを言うので、俺は首を傾げた。

質問て何だっけ？

少し思考する。えーっと、んー……思い出した。密希が容疑者から外されている理由だ。それを知る為に、俺は鈴檜さんに付き随っているのだ。

「聞かせて下さい」

「では、まず黒板の上を見て下さい」

そう言つて鈴檜さんが指差した辺りを、俺は見上げた。

黒板の上。

正確に表現するなら、黒板の右上角に固定されているフック部分

である。

「犯人はあの金具に麻縄を掛けて被害者を首吊り状態に仕立てたのです。しかし、位置がかなり高く、背の低い女性は手を伸ばしても届かないでしょう。この教室には台になりそうな机や椅子の類いがありません。金具に麻縄を掛けて六十キロ以上ある男性を吊り上げるには、背が高く腕力が強くなければなりません。それを踏まえると、貴方の義妹さんや黒門さんのような女の子を容疑者から除外せざるを得ませでした」

「確かに、平均的な背格好の女子中学生が届く高さじゃないですね。手が届いたとしても、首吊り状態にするのは腕力的に困難でしょう……。つてことは、その条件を満たす人物は、大柄で力持ちな女生徒か、休日出勤していた教師か、校舎の外にいた警備員か、もしくは……この俺ですか？」

俺は苦笑を口許に貼りつけて言った。

「本件の殺人を犯すだけの肉体を所有しているという点だけを考慮すれば、貴方の言う通りでしょう。しかし……」

言いよどんで唇を噛み、鈴檜さんは手帳に目をやった。書いてあるメモを見たというより、俺から視線を逃がした感じだ。

彼女が飲み込んだ言葉など容易に想像できる。たぶん、殺害動機とアリバイの有無、身体的条件、その三つを全て満たしている人物がいない、と言いたかったのだろう。

「警察が現時点で犯人の有力候補として目星をつけているのは誰なんでしょうか？」

返答を拒否されると予測しながらも訊いてみた。

案の定、「お教えすることはできません」という返答だった。

まあ、当然の答えである。

しばらくの間、鈴檜さんは視聴覚室内を見回しながら何か思索するようにアゴを撫でていたが、持っていた手帳をポケットにしまい、表情を柔らかく崩した。厳格な女刑事から綺麗なお姉さんに変じた

ような感じだ。見ていたテレビ番組が突然切り替わったかのように、彼女の雰囲気を変質した。

公私の切り替えを行ったってことだろうか？ 俺にはわからない。「外に出ましよう」

そう短く告げて、鈴檜さんはドアへと歩き出した。

「実況見分は終わりですか？」

無造作にドアを開いて廊下に出ていく鈴檜さんの後を慌てて追い、その背中に向かって訊いてみた。

彼女は俺の問いには答えず、廊下の階段側を指差した。男子トイレのある辺りだ。

「？」

彼女の意図がわからず、俺は言葉での補足を待つ。

「陽影君、昨日使用した男子トイレの前まで行ってもらえませんか？」

「いいですけど……」

俺は仏頂面にシワを刻みながらも、文句を言わずに、理由も聞かずに廊下を走った。男子トイレ前に到着し、中へ入ろうとして呼び止められる。

「中には入らなくてもいいのです。そこから私の方を見て下さい」
「……………」

俺は言われた通りにした。鈴檜さんが何をやりたいのか、何を調べたくてこんな要求をしたのか、意図が何なのかを理解できたのだ。昨日、犯行時刻に、この場所にいたのは密希である。そして、鈴檜さんの位置にいたのは、生徒会長の無堂百合子という名前の女の子だ。二人の位置関係で、お互いの存在に気づかないことがあり得るのかどうか、もしくは視聴覚室に入って殺人を犯す人間を見過ごしてしまふことがあるのかどうか、それを試してみたいのだろう。

だが、実際問題として、それを調べるのは不可能だ。

要は、証言者の言葉を信じるか、信じないか、その二つしかない。言葉の信憑性の問題である。それをわかっているからか、鈴檜さん

は殆ど間を置かずに、こつちに駆け寄ってきた。

「何かわかりましたか？」

訊いてみたが、鈴檜さんは曖昧な笑みを浮かべるのみ。今度はこの場から、視聴覚室の方を見て数秒間考える仕種をする。

「義妹さんはこの壁に寄りかかって貴方がトイレから出てくるのを十分間じつと待っていたようですが、その間一度も廊下の左右に目を向けなかったそうです。トイレの中に気を取られていて、無堂さんが生徒会室から出てきたことも、視聴覚室に入ろうとしたことにも全く気づかなかったそうです。一方、無堂さんは生徒会室を出た際に、男子トイレの中を覗き込んでいる義妹さんの姿を確認します。何をしているのだろう、と訝しんだそうですが……。無堂さんはそのまま視聴覚室へ入ろうとし、ドアを開けて死体を発見するに至り、悲鳴を上げたわけです」

「何かおかしなところがあるんですか？」

「いいえ……」

再び曖昧な笑みを浮かべる鈴檜さん。

そういう微妙な表情をされると、色々とマイナス方向に思考が傾いてしまうので、気分が悪くなる。口を濁すくらいならビシビシと厳しい突っ込みを入れて欲しい。疑問点を明確に示して欲しい。俺の洞察力、推理力などたかが知れているが、迅速な事件解決を望む者として、多少なりとも協力したいのだ。そして、こんな事件、とつとと終わらせたい。

「今日のところは十分ですよ」

「そうですか……」

もう一度、視聴覚室の方を一瞥してから、鈴檜さんは階段を下りていった。

俺もそれに倣う。

「俺って役に立ちましたか？」

なんだか彼女を押し倒しただけで終わったみたいと感じ、全然役に立ってないような気がしたので、恐る恐る確認してみた。

鈴檜さんは破顔した。

「それはもう。とても参考になりました。ご協力感謝しています」
明快な返事。

多少なりとも役に立ったのであれば、朝っぱらから白岐学園に来た甲斐もある。口だけの感謝だとしても、ありがたいお言葉だ。

その後、鈴檜さんは昼食に誘ってくれたが、密希たちを家で待たせている身だったので、後ろ髪を引かれつつも丁重にお断りした。純白のポルシェで実家まで送ってもらい、「それではまた明日」と言い残して走り去っていく彼女の車を見送る。

「また明日も来るってことかよ……。迷惑極まりねえな」
俺は愚痴っぽく呟き、自宅の門をくぐった。

【4・色嶺左右良】

午前の授業を軽くこなし、数名の不届き者による昼休み時間を利用しての援助交際の誘いを素気無く拒絶しておき、私はお昼ご飯を食べるために京桜大学で一番大きい学食である《東元食堂》へと向かった。

本日は陽影君が来ていないので、六人がけのテーブルで一人ぼっちの食事をする予定なのだが、私は家族を失って以来（兄は存命）一度として孤独を苦にしたためしかなかった。それに、食堂内は結構混雑しており、おしくらまんじゅう状態で、しかも酷く賑やかしいから、人恋しさで心身を凍えさす心配はなかった。

私は学食入り口に設置されている自動販売機でオムライスとクラムチャウダーの食券を購入した。そして、ランチ待ちで行列を成す学生たちの最後尾に並び、五分かけて品物と食券を交換した。

混雑する学食内で空いているテーブルを探すか、どこもかしこも人間で埋め尽くされ、各テーブルに一つ、二つの空席はあれど、全て相席覚悟だったので、どうしたものかと立ち尽くしてしまった。私は、陽影君を含めた周囲の人間から、人懐っこくフレンドリーで厚かましくて物怖じしない性格だと思われているが、根底の人格は根暗な臆病者なのだ。何らかの明確な目的がある場合は躊躇なく行動に移れるけど、現在のような取るに足らない些細な目的の場合は二の足を踏んでしまう。最悪の場合、立ったままで食事をしても構わない、くらいに思っている。

これじゃ、陽影君のネガティブさを批判できないな、と思った。すると、奥の方から軽薄極まりない声がかげられた。

「おい、色嶺さん！ こっち空いてるぜ！ 一緒に飯食おうよ」
その声の主は、クラスメイトの大迫利一だった。

「左右良さん、大迫君が呼んでますが、一緒にお昼ご飯を食べる意思はありますか？」

私は呼びかけに即答せず、曖昧に小首を傾げておいて、自問した。「んー、どうしよつか。大迫君は悪い人間じゃないけど、あの西川さんの第一の下僕だった男の子だよ。ほいほいと誘いに乗って、暗がりとか空き部屋とかに連れ込まれちゃ敵わないっすよ。せつかくストーリーカーの魔の手から逃れられたんだから、新たなストーリーカーに変身しそうな人間に近づくのは極力避けるべきだと思うな」

自答して注意を喚起。

「うー、でも、この場でランチを抱えて立ち尽くしてたら、あつという間にお昼休みが終了してしまうのですよ。次の授業をサボってランチを食べるつもりなのですか？ それに、大迫君は軽薄男だけど、強姦魔じゃないのです。それどころか、モアイの魔手から左右良さんを逃がしてくれた英雄なのですよ。その辺を考慮して答えを出すべきだと思います」

「そうかな？ 大丈夫かな？ 左右良さんの楽観論を無条件で過信しちゃうよ。もし何か遭ったら、左右良さんのせいだからね！ それでもいい？」

他人任せで責任回避。でも、結局は自己責任。愚かしい独り芝居。それを自覚しながらも確認する。

「どんとこーいですよ、左右良さん。よくよく見てみると、大迫君は女の子連れなのです。それに、彼はレイプ被害者が起こした殺人事件の犠牲者と親しい仲間だったので、昨日の今日で左右良さんをナンパすることもないと思うのですよ」

胸を叩いて保証した。

「ほんとだ。可愛い女の子と一緒にテーブルに座ってるね。ん？ でも、それって単なる相席かもしれないじゃん」

「あうー。その可能性には思い至らなかつたのです。迂闊でしたね。左右良さんは、もしかすると混乱しちゃってます。いつもの明敏な洞察力が惰眠を貪っているのです。西川不二彦の死で気を抜いて、浮かれ調子になっているのかもしれないですね」

「それは危ないねえ」

そんな不毛な会話を学食の壁相手にしていると、大迫が大きなジエスチャーで手招きをした。

「おい、色嶺さん、どうしたんだよ？ 座る席がないんだろ？ さつさとこっちに来て！ 飯の時間が終わっちゃうぞ」

大声で呼び寄せられた。

行き来する学生たちの邪魔になり、あまり突っ立ったままではいられないので、早急に示された厚意に対する返事を協議する。

「どうしますか、左右良さん？ 控え目な意見を言わせてもらえば、素直に大迫君の厚意を受けちゃうべきだと思いますよ」

私は外見的に目立つ女だ。そこに卑猥な噂が加わり、注目度は五倍増し。更に独り言を壁に向かってぶつぶつ呟いていけば、必然的に注目度は十倍増し。ゆえに、長時間の現状維持は注目的になる悪因となるだろう。既に周囲の視線が肌に痛い。

「左右良さん、ここは脆弱な心臓にいはらの鞭を打って、獅子の檻に飛び込んだじゃいましょう。西川さんとカラオケするよりは危険じゃないと思うのです」

「そうだよな。大迫君は紳士だから、唐突におっぱいとか触って一万円投げつけて、おつりはいらねえぞ、とか言ったりしないよね」

「そんな外道は、悲鳴を上げて強制猥褻の現行犯にしてやれば、翌日から大学からいなくなるのですよ。だから、左右良さんは安心して食事をして下さい」

「おっけー」

私はランチを乗せたプレートを高く持ち上げ、行き交う学生の合間を縫うように奥のテーブルへと移動した。

「おっす、色嶺さん」

大迫は隣りの席の椅子を引き、ここに座れとアゴをしゃくっておいて、チョップするみたいに右手を上げて挨拶してきた。

それへ同じポーズで応え、私は引いてもらった椅子に腰掛けた。

大迫は相席している女の子を紹介しなかった。どうやら知人じゃないらしい。

「大迫君、昨日はありがとう」

まずは感謝の言葉を述べて、昨日の出来事を思い出させ、ナンパ行為への予防線を張る。

大迫は軽薄ではない笑みを浮かべ、幅広い肩を竦めた。

「西川さんの強引さは目に余るもんがあつたからな。元ラグビー部の後輩としては、先輩の横暴を見過ごせなかつたんだ」

そこで大迫は大きく溜め息を吐いた。

「しっかし……まさか、刺し殺されちまうなんてな……」

「あの人、白岐学園の女の子をレイプして、脅迫してたらしいじゃん。自業自得だよ」

冷たく言つて、私はオムライスを一口頬張つた。

「そりゃそうだけだよ」

「大迫君は、彼がレイプの常習者だったの、知らなかつたんだ？」

実はレイプ仲間だったんじゃないのか、と下司の勘繰りをする、大迫は唇を斜め下へと歪曲させて渋面を作り、即座に否定した。

「知るわけねーよ。知つてたら縁を断絶してたさ。俺は無理矢理に女を押し倒すつてのが好きじゃねーからな」

「ふーん。まあ、信じてあげるよ」

私は笑顔を向けて、簡単に納得してみせた。大迫が顔色一つ変えずに平然と嘘を吐ける男じゃないことは承知済みである。そして、彼はレイプをしてまで肉体的快樂を得ようとするクズ男でもない。品行方正ではないが、太陽の下で大手を振つて歩ける人間だ。

大迫は半分ほど残つていた丼物をがつと掻き込み、水をがぶつと飲んでほーつと吐息した。

「西川さんはなんでレイプなんかしたのかね。ラグビー部の中でも女に人気のある有名人だったから、その辺をふらついている女に適当に声をかけりゃ何人でもついて来ただろうに……。しかも、よりもよつて白岐学園のお嬢様なんかを……。最終的にヤバイことになるのは、ちよつと考えりゃわかりそうなもんだぞ」

「モアイの脳味噌じゃ、そこまで想像できなかつたんだろうね。き

つと、レイプした女の子の弱みを握って、絶対にバレない自信があつたんじゃないかな。レイプの光景を撮影したりしてさ」

「そうかもな……」

納得する大迫。

私はクラムチャウダーをひと啜りして舌鼓を打った。学食ながらに美味だ。

大迫は井と箸を置き、真横から私の顔をじつと見据えた。

「なあ、色嶺さん。天園のやつ、昨日の事件に巻き込まれたのか？」

その辺の話、聞いてねーかな？」

意外な質問をされ、私は機敏な動きを見せていたスプーンを停止した。

「うい、マジだよ。でも、大迫君がどうしてそれを知ってるのかな？ 陽影君から事件の話聞いたわけじゃないよね？」

「そんなわきゃねーよ。たとえ俺が事件のことを訊いたとしても、あの無愛想な天園は絶対に口を割らないって。そうだろ？」

「まあね。じゃあ、どうして？」

「俺が西川さんと親しい関係にあつたことで、昨日の夕飯時に警察から電話がかかってきてな。色々と訊かれたんだ。主に西川さんと天園のことだけど、色嶺さんのことも少し訊かれたぞ」

「ふーん」

警察の質問事項から陽影君の関与を連想したのだろう。脳味噌に全くシワのない想像力ゼロの馬鹿者ってわけじゃないようだ。まあ、明応大学と並んで私立大学の双璧と称されるこの京桜大学にストリートで入学できる学力があるのだから、低能無知であるはずはない。「まさかとは思うけど、天園が西川さんをぶっ殺したのかな？」

軽薄男が冗談ぽく言った。

二、三発引っぱたいてやろうかと思つたが、ぐつと堪えて睨みつけるだけに留める。

「朝のニュースだと、西川不二彦を殺害したのは未成年の女の子で、もう一人の犠牲者は自殺の可能性が高いつて話だよ」

「そうなのか？ 俺、ニユースとか見ないから、全然知らねーんだよ。天園から直接に事件のこと、聞いてねーの？」

「まだ。でも、今日中に聞かせてもらおう約束だよ」

「もし良ければ、明日にでも天園から聞いた話を俺にも聞かせてくれねーか？」

応じられない要求だった。

あっかんべー、と舌を出して拒否する。

「良くないから駄目。明日からゴールデンウィークだもん。私がきみと会う必然性はないし、陽影君の事件談をきみに報告する義務なんて皆無だよ」

「釣れねーな」

「私を釣れるのは天園陽影君ただ一人なんだよ。それを肝に銘じて欲しいな」

「十万払っても？」

「……………」

無言で睨みつけてやった。

しかし、効果なし。

大迫はへらへら笑いを浮かべ、無遠慮に私の肩に手を置いた。

「今度、ラグビー部のメンバーで合コンやるんだけど、色嶺さん、参加してくんねえ？ ラグビー部の一年に頼まれちゃってさ。奴ら、相当溜まってるみてーなんだよね。本番なしでも一晩で結構稼げると思っぜ。どうだ？」

「……………」

悪気のない笑顔を向けられ、私は絶句した。

冗談でも笑えない誘いだし、真剣な誘いであれば最悪の勘違いだ。私を商売女と思い込んでいる。ラグビー部の馬鹿者どもは仕方ないにしても、この男は……ストーリーカーでないだけに、西川よりも性質が悪い。

「ふざけるなっ！」

私は手加減なしに、大迫の左足脛部分を蹴飛ばしてやった。

【5・小野寺紗枝】

拘留所生活が始まった。

室内は狭くて空調に難があり、トイレは小さな衝立一枚で仕切られて廊下からほぼ丸見えの状態であり、更に寢床がベッドではなく布団だった。でも、私は犯罪者だから贅沢は言わない。最悪の環境ではないが、ご飯の不味さを抜きにしても、我慢できるギリギリの線である。家に帰って母親と対面する勇氣はないので、ここの生活に慣れるしかない。レイプ被害者であり、レイプ加害者を殺害した犯人でもある私には、もう帰る場所などどこにもないのだ。まあ、簡易裁判の後に更正施設へ強制収容される身なので、少なくとも数年間は自宅に戻りたくとも戻れないだろう。それが不幸中の幸いかどうかはまだ不明だ。

取り調べは朝から夜まで、途中に何度か休憩を挟みながら行われるそうだ。

だが、何も喋らないつもりである。

現行犯逮捕だったので、モアイを白岐学園の男子トイレ内で刺殺したことだけは昨日の取り調べにおいて素直に認めしたが、犯行に至る経緯や動機などは完全に黙秘した。当然、一昨晚の輪姦劇については何も語っていない。無論、首を吊られて絞殺された野口という金髪男や、私が輪姦される光景の一部始終を録画していた重道という白岐学園の生徒についても、いくら質問されようが一切口を開かない。

もう他人のことなどどうでもいい。

私は何も間違いを犯してないのだ、と証明されれば、それだけで十分だ。本当に私は何も悪いことをしてないのだから。単に自分の尊厳を守っただけ。結果として殺人犯の汚名を被ることになったが、それは相手の自業自得であって、被害者である私が非難されるいわ

れはないだろう。虐げられていた者が反撃したら罪に問われて罰せられるなど、理不尽の極みと言うしかない。だから、私の主張が認められるまでは黙秘を続けるつもりだ。

刑事のいない取調室で質素な昼食を終えてぼんやりしていると、何の前触れもなくドアが開き、レディスーツを格好良く着こなした三十歳前後の女性が入ってきた。非常に綺麗な人だが、目つきの鋭さから察するに、雑用係ではなく女刑事だろう。外見からして有能そう。今朝までの取り調べ相手だった壮年の男性刑事とは迫力が天地ほどに違っている。

「私は警視庁捜査一課の立花鈴檜です。小野寺紗枝さん、昨日から黙秘を貫いているそうですね」

立花は微かな笑みを口の端に刻んで名を名乗り、正面の折り畳み椅子に腰を降ろした。

それを無視する。視線すら合わせない。

「今から一方的に三つだけ質問します。返答するかどうかは貴女の自由です。宜しいですか？」

私の返事を待つかのように、しばらく間が置かれた。

勿論、返事などしない。不可視の糸で上下の唇を縫い合わせ、頑なに無視をする。

立花は年下の女に無礼を働かれても、さして気にした様子もなく、質問に移った。

「貴女が白岐学園H校舎四階の男子トイレにて西川不二彦を殺害したのは、いつでしょうか？ 隣の個室に天園陽影君が入る前か、彼が個室で携帯電話を用いた会話をしている間か、それとも彼がトイレから出た後でしょうか？」

あの相撲レスラーは天園陽影という名前らしい。天園姓を持つからには、姫城一族に連なる天園家の男子なのだろう。なるほど、高級外国車を乗り回せるわけだ。そして、立花の質問に答えるのであれば、彼がトイレから出る直前に刺殺した、である。

でも、私は答えなかった。

数分間の沈黙。

「宜しい。それでは次の質問です。貴女は女生徒の悲鳴を聞きまし
たか？ 陽影君がトイレを出た直後に響き渡ったそうですが」

その悲鳴は確かに聞いた。モアイと揉み合っている最中だったが、
あの凄まじい悲鳴を聞き逃すのは無理だ。およそ、あの声の主が金
髪男の死体の第一発見者なのだろう。

でも、私は返事をしなかった。

再度、数分間の沈黙。

「宜しい。それでは最後の質問です。隣りの個室に入っていた天園
陽影君は、十分ほど携帯電話を用いて会話していたそうですが、そ
の途中、一度たりともトイレから出ませんでしたか？ 別人が喋っ
ていた可能性や何かしらのトリックを用いて個室内にいるフリをし
ていた可能性はありませんか？」

おかしな質問だった。

警察は天園陽影という名の相撲レスラーを、金髪男を殺害した有
力な容疑者と見ているのだろうか。

確かに、あの時は話し声しか聞こえておらず、実際に彼の顔を確
認したわけではないし、あの声の主が相撲レスラーのものとは断言
できないので、誰が喋っていたのかは不明確だ。しかし、彼がトイ
レをこっそり出入りしていたとは考え難い。なにせ、絶え間なく携
帯電話を用いて誰かと会話していたのだ。十分間、ずっと喋りつぱ
なしだったのだ。その間、私とモアイは隣りの個室に注意を払いな
がら息を潜めている必要があったのだ。どんなトリックを用いたと
しても偽るのは無理だと思う。だから、彼は犯人ではない。

でも、赤の他人のアリバイを証明してあげる義理なんてないので、
私は沈黙を守った。

立花は真つ直ぐに私の目を見据えた。

「何も答えていただけませんか？」

一切返答しない私の強情さに呆れたのか、そう言って立花は小さ

く溜め息を吐いた。

私は視線を外して灰色の床へと落とす。

「貴女は西川不二彦の殺害を認めていると聞きました。その上で黙秘しているとか。理由は何でしょうか？」

この女刑事、同性なのに私の気持ちを理解できないらしい。恐竜並みに鈍感なのか、故意に無神経者を装っているのか、それとも刑事という職種が彼女の精神に悪影響を与えているのか、その言動からは定かではないが極めて不愉快だった。

それに、質問は三つだと自ら言ったはずだ。でも、これで四つ目の質問である。

数も数えられないのか？

「野口、西川の両名に強姦されたことを認めたくないのですか？」

それについては、撮影者であった重道忍と西川の住居から発見された保存映像にてある程度の事情は把握しているので、口を閉ざす意味はないと思いますが……。いえ、貴女の受けた被害は同じ女性として同情に値します。しかし、事件の解決に非協力的であることは無関係なのではありませんか？」

レイプ被害者に対する心的配慮など皆無。警察は事件さえ解決できれば、事件に関わった人間がどんな思いをしようと知ったことではないのだろう。その憤りを言葉にして吐き出せば、私への対応が多少なりとも改善されるかもしれないが、遮眼帯を着けて事件解決しか目指していない刑事なんかとコミュニケーションを取るつもりなどないので、何も言葉を紡がないでおいた。

「集団強姦に関わったのは西川不二彦と野口竜一郎、そして被害者でもある重道忍の三名だけです。他にもいたのであれば教えてください」

私はモアイの仲間について何も知らない。あの重道という白岐学園中等部の女生徒がレイプ被害者だったことも初耳なのだ。私をレイプした男子は二人だが、もしかすると大迫利一も仲間なのかもしれない……。

でも、何も答えなかった。

何の情報も得られないと悟ったのだろう。立花は無言で席を立ち、ドアの前に立った。

「明日、事件現場で実況見分を行います。その際にはご協力をお願いします」

そう言い残して美人女刑事は取調室から出ていった。

そして、それと入れ替わるように男性刑事が入ってくる。

午後の尋問が始まるのだ……。

なぜに女性刑事ではないのだろう、と思いながら、私は黙秘の決意を新たにした。

【6・天園陽影】

帰宅して玄関で靴を脱いでいると、元氣一杯の中学生二人がリビングから飛び出してきて、俺を家の中に引つ張り込んだ。そして、靴を揃えるいとまも与えぬ勢いでリビングに連れ込み、ソファアに座れと促す。

気づけば、俺はテレビゲームのコントローラーを握らされ、インターネットの対戦格闘ゲームで闘わされていた。

「あーっと、ちよつと待って。タバコを吸わせてよ。一服したら遊んでやるから」

お願いしてみたが、コントローラーを手放す許可を貰えず、さやかちゃんにタバコを啜えさせられ、密希に火をつけてもらった。

ソファアに寝転がってのんびりするつもりが、どこの誰ともわからない謎の人物と必死になって対戦するハメになっている。

やってらんねーよ、とは思うが、義妹とその友達と一緒に大はしゃぎしてる様子を見ると、途中で投げ出すこともできない。

二人は本当に楽しそう。ゲームをやっているのは俺なのに、横で観覧している二人の方が興奮している。

「うおつ、そこだ！ やっちゃんえ！ あーもう！ 何してんの、お兄さん！」

そんな風に耳元で叫ぶさやかちゃんに辟易しながらも闘い。

「あー、おにいちゃん遅いんだよー。そこはもつとキュツて動いてー、にゅーって逃げてー、ドーンて攻めなきやー」

などと擬音混じりで助言してくる密希の可愛い声を聞き流しながら敵を駆逐していった。

こうして文句も言わずに遊んでやってる俺って、もしかして凄まじく優しいんじゃないかねえの、と自己満足。今日は朝から極上の人格を保っている。保ち続けている。良い調子だ。捻じ曲がった心は現在休眠中。誰が見ても良いお兄さんぶり。この調子で行けば、俺はお人

好しになれるかもしれないねえぞ、と馬鹿な予測を立てた。

ひとしきりゲームで盛り上がり、俺が力尽きてソファに倒れ込むと、二人は昼食を運んできた。

メニューはサンドイッチ。

お手製らしく、形は不格好で売り物のように見栄えが良くなかったけど、味は独特のスパイスが効いていて結構美味かった。

三人で仲良くお食事。

その時になって、二人はようやく事件について尋ねてきた。犯人のこと、容疑者の顔ぶれ、自分たちの立場など、俺が知っているはずもない質問を立て続けにぶつけてくる。

「俺にはわかんねえし、刑事さんも教えちゃくんなかったよ」

「えー、本当にー？」

疑いの眼差しを向けてくる義妹。

「もしかして、お兄さんはあたしらを心配させないように隠し事してんじゃないの？」

さやかちゃんにも疑惑の視線を刺される始末だ。

まあ、確かに二人を心配させたくない気持ちはあるが、完全にドンマリを決め込むつもりはない。安心感に繋がる情報は積極的に開示するべきだろう。

俺は現在、警察が二人を容疑者リストから外していることを簡単に話した。でも、その理由は説明しないでおいた。

自分が犯人扱いされてないと知り、二人はホッと胸を撫で下ろした。不安材料が消えたことで、年齢に相応しい笑顔を弾けさせる二人の美少女。実に魅力的であり、観賞し甲斐がある。見ていて気分が良い。不安な気持ちを紛らわせるためにテレビゲームで空騒ぎしている姿より、数段健全な笑顔だと思う。だけど、ここから更にもう一段階テンションを上げるのは勘弁して欲しかった。

食事を終えて後片付けを済ませると、二人はどこかへ遊びに連れ

ていけと声を揃えておねだりを始めた。

おいおい、少しくらいゆっくりさせてくれよ、と疲れた風を装って嘆いて見せると、「えーっ」とあからさまな不満声を上げる二人。「それじゃ、一時間だけ大人しくしてあげてあげるから、その後で遊びに連れてってよ、お兄さん。いいでしょ？」

さやかちゃんが一方的に午後の計画を立案し、密希が賛成を表明した。

「それでいいよねー？」

そう凄まじければ、俺は首を縦に振るだけの人形になるしかない。三人の中で二人の意見が一致したら、もう一人はその意見に従わざる得ないだろう。それが民主主義ってもんだ。

そんなこんなで、なるたけ一時間という休憩時間を有効活用するべく、俺は自室へ退き、ベッドに寝転がりながらぼんやりとタバコを吹かすことにした。

よくよく思い返してみると、今日は目を覚ましてから今まで孤独を楽しむ時間が僅かながらもなかった。それは、非常に珍しいことである。孤独に慣れ親しみ、他者との共存を厭う俺には、年下の女の子を二人も相手にして充実した一日を過ごすなど絶対に不可能なのだ。死ぬほどの苦痛なのだ。はつきり言って辛い。心の負担が大き過ぎる。逃げ出したい。引き籠もりたい。自宅マンションに帰ってしまいたい。二人の要求など素気無く突っぱねて、このままベッドでゴロゴロしていたい。

だけど、そうすることに躊躇いを覚える自分に気づいている。

密希とさやかちゃんの落ち込む顔、悲しむ顔、失望する顔を見たくない。そう心のどこかで思ってしまったている。

なぜ、そんな下らない感傷を覚えるのだろう。理由がわからない。でも、原因は明確だった。

二人のお願いを無碍にしないのは、色嶺左右良のアドバイスに影響されているからである。

「もし誰かと一緒に過ごして一瞬でも心楽しい気分浸ったなら、きみはその相手を大切にすべきだよ。今こうやって私と会話をし、て、ほんの僅かでも安息感や充実感を自覚してくれば、この会話にも意味が生まれるし、同時に私も嬉しいかな。それで、きみが玲佳さんにいただいている感情とは別のものを私から感じ取ってくれば幸いだよ。いや、私以外でも、共有して心地好さを覚えられる相手を見つけたら、その人物を大切に扱ってあげるといいよ。そうすれば、きみの内部で空回りし続けている歯車のズレを上手く噛み合わせる整備員の役割を担ってくれるかもしれないから。その結果、歪んだ人格を改善させられるんじゃないかな。そして、私こそがその役目を担いたんだよ、陽影君。あはは、可笑的い？ 愚かしくはないよね？」

出会って間もない頃の左右良に言われた台詞。それが俺の捻じ曲がった心を強制的に矯正してくれているのだ。

「全く……」

孤独は楽ちんだけど、密希たちと騒ぐのも悪くない。そう思い始めてる自分に仄かな苛立ちを感じる。矛盾した思考を処理できない無能に対しての戸惑い。こんな変な状態にあり、感情を持て余しているのに、笑いが込み上げてくる自分に呆れてしまう。

困った時の左右良頼みってことで、携帯電話に連絡を入れてみようかと思っただが、電話したらしたで彼女に事件の一部始終を根掘り葉掘り訊かれるだろう。そうしたら話さないわけにはいかない。昨日、そう約束してしまったような気がする。

「別に、事件のことを話すのが嫌なわけじゃねえけどさ……」

左右良は事件を解決するべく、全知全能を総動員するに違いない。嬉々として事件の謎に挑むはずだ。あいつは難問を解く行為自体に愉悦を感じる女なのだ。そして、何よりも、困っている俺を放っておくわけがない。

「そうすりゃ、こんな事件なんざ即座に解決しちまうかもな……」

たぶん、左右良の知能をもって当たれば、こんな事件など簡単に

解決させられるだろう。食事の片手間にでも片付けられる事件かもしれない。しかし、そんな有能で便利な親友を俺は頼らない。故意に頼らない。警察によって不自由な生活を強いられているのに頼ろうとしない。頼りたくない。俺にとって色嶺左右良は、大学生活を楽しむ上で最も重要なファクターではあるけど、ひとたび大学を離れば赤の他人、テリトリー違いの異次元人だ。日常生活まで干渉されたくない。どれほど優秀なカウンセラーでありアドバイザーであつても嫌なのだ。嫌いじゃないし、邪魔でもないが、大学外での馴れ合いを俺のひん曲がつた心が拒絶するのである。これは密希たちに向けられている心情とは大きく異なっているものだ。何が違うのかは自分でも理解不能なので説明できないが……。

「あーあ、面倒臭えなあ」

ベッドの上で仰向けに寝そべり、タバコを啜えながらしみじみとぼやく。

このまま眠ってしまったら、二人との約束に応じなくて済むかもしれない……などという小学生紛いのサボタージュ方法を脳内で起案するが、二秒で心のゴミ箱に放り込んだ。

「約束を守れなくて、ごめん。でも、寝ちゃってたんだからしょうがねえだろ」

そう謝って二人が許してくれるだろうか。

いや、許すとか許されないとか、俺に関係あるのか？ 別に、二人に嫌われてもいいじゃねえか。生来、俺は一人の時間に慣れ親しんできたんだ。孤独を愛する男なのだ。密希が悲しもうが、さやかに嫌われようが、知ったこっちゃねえよ……とか考えている自分がいる。

俺って本当に進歩がねえよな。

同じ問題をグダグダと思い悩み、行ったり来りの堂々巡りを繰り返してる。

これじゃ、単なる馬鹿だ。

唾棄すべき愚か者。

見下げ果てた屑人間。

欠陥人間の極み。

「左右良から見ると、俺ってすっげー滑稽なんだろうな……」

自虐的に吹き、俺はくつくつくつと喉で笑った。

その時、突然、テーブルががたがたと振動し始めて、俺の意識を自虐の海から一本釣りにした。

一瞬、地震かと身構えるが、テーブル以外は揺れてない。それどころか、ブーンブーンと怪しげな機械音が連動して聞こえてくる。

「なんだ、ケータイか……」

バイブモードにしたままテーブルの上に放り出してたのだ。すっぱり忘れていた。俺はテーブル上に散乱しているポテトチップや裂きイカなどのおつまみ類を手で掻き分け、ゴミ山の中に埋もれていた携帯電話をサルベージし、通話ボタンを押した。

「俺だ」

相手が誰なのかはわかっていたので、短くそう告げた。

「ういーっす、陽影君。きみを世界で二番目に愛している美人で優しいお姉さんだよーっ。元気にしてたかな？」

「……………」

何言ってるんだか。

「ん？ どうしたの、陽影君？ 返事がないぞっ。まさか、私が誰だか判別不能だなんていう冗談を吐いたりしないよね？ きみと共に育んだ一ヶ月間の愛の結晶にかけて、そんな冗談を吐くことだけは許さないんだよ」

「俺たちや愛なんか育んじやいねえだろ。まあ、友情は築いたかもしんねえけどな」

「うい。釣れない言葉だけど、きみは正しいよ。あはは。悲しいかな、私の一ヶ月間に及ぶ涙ぐましい努力は、友情などという薄っぺらな装飾にしか成らなかつたんだよね。はあっっ。盛大な溜め息が漏れちゃうよ、ほんと。きみに言われるまでもなく理解してるけどさ。ひとりの愛もなく、ひとひらの恋も生じない心の持ち主……」

攻略し甲斐のある鉄壁の城塞だけど、ここまで正攻法が通じないと……私でも泣きたくなるってもんだよ、陽影君

携帯電話越しに聞こえてくる涙声。

でも、どうせブラフだろう。

ダウト、と叫んでやるるか。

「愛とか恋とかはどうでもいい。どうしたんだ、左右良？」

俺はぶっきらぼうに話を促した。

向こうの気配が仄かに揺らぐ。

あれ、本当に泣いてたのか……と俺に一瞬思わせておいて、「なははは」という軽快な笑い声を耳に打ちつけてきやがった。

「あはは。きみは本当に釣れない男だよ。優しさの欠片も感じさせない極北の王子様って感じかな。吐き出す声質がブリザードのように冷たくて、さすがの左右良さんも凍え死んじゃうってもんだ。うー。でも、あんまし無駄事をべらべらと話し続けるときみを不愉快にしちゃうだけだから、すぐさま本題に入るよ。んー、でも、その前に一言、余計な話題を切り出してもいい？」

「別にかまわねえよ。左右良が無意味な話をした記憶なんてねえからな。何か話があるなら遠慮せずに切り出せよ」

「うい。ありがと、陽影君。そんじゃ、ずばっと切り出させてもらっちゃおう。これは私からのお願いみたいなもんだよ」

「お願い？」

俺は驚きのあまり素っ頓狂な声を発してしまった。

「うい。変かな？ 正確に表現するなら、私からきみに相談事があるんだよね」

「左右良が俺に相談？」

俺はしたたかに面喰らって、再び素っ頓狂な声を上げてしまった。左右良の口から予想だにしない台詞が飛び出したのだから動揺するのにも無理ないだろう。

俺に相談？ 今までこっちから一方的に相談を持ちかけたことは多々あれど、その逆は皆無。そもそも、左右良は他人に助言を求め

るような人間じゃない、そう思っていた。誰かに頼るくらいなら自分で解決するし、自分の力でどうしようもない問題は諦めるし、そんな問題など存在しない。そういう女だとばかり思っていたが……見誤っていたのか？

「どんな相談だ？」

物凄く興味を引かれ、俺はすぐさま尋ねた。

ケータイの向こうから何やらカチャカチャと音が聞こえた。小さな金属音だ。

「うーむむ。相談の内容は、まだ話せないよお。電話口で軽々しく話せる問題じゃないからね。できれば、連休中に一度会って直接話したいよ。その際に、きみが私のアパートに出向いてくれたらすごく嬉しいけどなあ……そこまで高望みしちゃう駄目だよな？ 本心を言っちゃえば、一分一秒でも早くきみに会って相談したい欲求に駆られて心狂わんばかりの状態なんだよ。でも、家族の団欒を邪魔しちゃう悪いもんね。大袈裟だけど、現在の私は今のきみと同じで結構追い詰められてるのかも」

「おいおい、何だっけ言うんだ。大丈夫なのか、左右良？」

俺は堪らず訊いた。

「うい。まだまだ大丈夫だと思うけどね。でも、間違いなく危機的状況に陥ってるんだよ。直接的被害を受けるレベルに至るまでにはもう少し時間の猶予があるんじゃないかな。こうしてアパート内に籠って身の安全を図ってる限り……っていう条件の下でね」

「左右良……本当に大丈夫なのか？ 何か変だぞ。俺の助けが必要なのか？」

「うい。必要だよ。近々、間違いなく必要になる。でも、今は私よりもきみの方がお尻に火がついているんじゃないのかな？ お姉さんはすごく心配してるんだよ。心配で心配で昨晚もよく眠れなかつたくらいだよ。だから、事件の詳細な話を聞かせてよ。それで、きみの悩みを共有させて欲しい」

ケータイの向こうで左右良はせがんだ。

「それって単に、左右良が事件の話を聞きたいってだけのことじゃねえのか？」

冷たく問うてみる。

十中八九、左右良は白岐学園で起こった殺人事件の内容に興味を抱き、俺の口を通して情報を得たいのだ。退屈な連休中の暇潰しが見つかった、と心の中で喜んでいいのかもしれない。さっき言っていた相談とやらも、事件の話を引き出すための前振りかもしれないのだ。

しかし、左右良は何も答えずに数秒間の沈黙を守った。

「どうした？」

「んもう、心外だぞっ！ 私は心の底からきみの身を案じてるのにっ！ 天地天命に誓って、事件の話が聞きたいってだけじゃないよ。まあ、確かに、事件には興味津々だけどさ……。でも、私の頭脳で犯人を暴き立てて、きみの役に立ちたいんだよ。それを信じてよ、陽影君！」

哀願するような左右良の声。

「信じてるさ」

俺は穏やかに応じた。

「ありがと。じゃあ、事件について詳しく話してくれるんだね？」

「まあ、しょうがねえな……」

俺は一度話を区切り、新しいタバコに火をつけてから語り始めた。実家に帰ってから今日の出来事まで。事件後の警察の動き。俺たちの置かれている現在の状況。一つ一つ順を追って話し、なるべく客観的であるように物語っていく。

その間、左右良は全く合いの手を入れず、黙ったままで俺の語るに任せていた。そして、一通り聞き終えたところでようやく「なるほど」と呟いた。

「なるほどって何だよ、左右良。その言い方だと、犯人が誰だか判明したみたいに聞こえるぞ」

俺は思わず声を荒げた。

まさかとは思うが、この程度の情報で犯人の目星がついてしまったというのか？ そんなの常人の頭脳ではあり得ない。色嶺左右良という女が常人の物差しで測れない知能の持ち主であることくらい理解していたが、これは少し度が過ぎているだろう。

まあ、警察に先んじて犯人を特定できたのなら素晴らしいお手柄だが……。

しかし、左右良の返答を得るまで、二十秒ほど間が開いた。しかも、返ってきた言葉は、「んー、もう少し時間が欲しいかな……」という長考要求だった。

「うー、えっと……明日また連絡を入れるよ。じゃあねーっ、おやすみっ！」

左右良は慌てた感じに言って、一方的に通話を切った。

何なんだ、一体。犯人がわかったかのような、思わせぶりな態度を取りやがって……。

俺は手にしていた携帯電話をテーブルの上に放り、あらかた灰になったタバコを灰皿に捻じりつけた。

まあいい。左右良は左右良の好きにすればいいのだ。俺は俺で最善と思える選択肢に殉じ、その道をひたすら突き進むだけである。

迷いはない。

惑いもない。

憂いもない。

ただ前進するだけだ。

「さて、一応の気分転換はできたな。そろそろ一時間でとこだし、ワガママ娘二人組の相手をしてやるとするか」

俺は自分に言い聞かせるような独り言を呟き、ベッドから跳ね起きた。

もし俺の望む結果を得られなくても、最善を尽くしたのであれば、最悪の結末には至らないだろう。なけなしの努力が報われないのは、あまりに哀しい。いくら俺が最低の駄目人間であっても救いは必要だ。このままずっと運命に疎外され続ければ、俺はきつと……。

いや、この物語は最高の結末を迎えるだろう。
そうなって欲しい。
俺は生まれて始めて形のない偶像に願った。

第四章 『迷走の果てに見えるもの』 【1・天園陽影】

ジリジリジリ……という目覚し時計の絶叫が俺の眠りを妨げた。
ふう……久しぶりに完全快眠。

誰にも眠りを邪魔されず、目覚めを強要されない素晴らしい素晴らしさを大いに噛み締め、心地好い気だるさを全身に感じながら、右腕を伸ばし目覚し時計のスイッチを切る。

現在、午前十一時半。

昨夜は随分と夜遅くまで酒を飲んで大騒ぎした記憶がある。確か、眠ったのは明け方の五時頃だ。それまでは、さやかちゃんと中学教育についてあれこれ討論していたような気がする。密希は午前三時頃、焼酎にノックアウトされて私室へ強制退去。光理さんに至っては、それよりも先にリタイアしてしまった。逆に、さやかちゃんは中学生のくせに随分と酒に強かった。さすが体育会系。女三人の中で一番はっちゃけていたのに、最後まで酔い潰れずに俺の相手をしてくれた。肝臓の丈夫な子である。将来、大酒飲みになる可能性がかなり高い。今のうちから健康に留意するべきだろう。まあ、俺のように極端に早いピッチで飲んでいたわけじゃないから、今日明日に身体を壊す心配はないと思うが。

「さて……」

体を起こそうと思い、うつ伏せから横向きになったところで、俺は体を硬直させた。

「冗談だろ？」

声にならない言葉が、喉から飛び出して口内を乱反射した。

声を出したら即死……。そんな光景が目の前にあった。

俺の十八年間歩んできた人生の中でも、数えるほどしかない絶体絶命のピンチ。

やべえ、マジでやべえよ。

俺は安っぽいドラマのワンシーンのように手の甲で両目を「こじこ

しと擦り、これが夢でありますように、と祈ってから再確認した。

ああ、現実だ。

もう一度寝て起きたら全てが夢にすり替わってないだろうか、と現実の改竄を切望するが、それは単なる責任回避の逃避行為でしかなかった。

逃げ場はない。

狼狽する俺。

「どうすつか？」

俺は自嘲気味に呟いて吐息した。

目の前に……いや、俺のすぐ隣りに横たわり、規則正しい寝息を立てている女の子は、どう見直しても黒門さやかでしかない。可愛らしい白い下着姿で眠っている彼女を見ると、俺が何かしらの淫行に及んでしまったかもしれないと予想させるに十分だ。全裸でないのがせめてもの救いである。最悪の行為には及んでない、と思っていた……。小麦色の瑞々しい肌にそれらしい汚れは見られないし、乱暴を働かれた痕もない。シーツも綺麗なままだ。大丈夫、俺は潔白である。ただ単に同じベッドで寝ていただけだ。

ああ、そうだ……。

ようやく俺は昨夜のやり取りを思い出した。

そう言えば、さやかちゃんは泥酔するあまり、自分から俺のベッドに潜り込んできたんだっけ。最初はリビングのソファで寝るとか言っただけに、何だかんだと理由をつけて俺の部屋に押し入り、密希の部屋へ行けという俺の命令に耳を貸さず抱き着いてきやがったのだ。それなら俺がリビングで寝ると言っと、「別に何かするんじゃないから一緒に寝てもいいでしょ？」お願いだよ、お兄さん」と潤んだ瞳で懇願し、渋々承諾させられたのである。

そういう経緯。

さやかちゃんは酒癖の悪い小悪魔だ。酔っ払うと人肌が恋しくなるらしい。俺の体は抱き枕か、というくらい不用意に体を密着させてくる。しかも、かなり大胆に。俺に対して完全に無警戒。やりた

い盛りの大学生に無防備な体を晒してぐーぐー寝てられるのだから、
たいしたものだ。まあ、密希の兄だから信用しているのだろうが……
、今時の女子中学生は本当に厄介である。どうぞ悪戯して下さい
と言っているようなものだぞ。

熟睡してるみたいだし、ちよつと触ってみるか？

俺は邪な衝動に身を任せ、体を横へ滑らせて、さやかちゃんの背
中に腹が触れるくらい近寄り、両手を伸ばしてやんわりと抱き締め
た。昨日の朝も抱き締めたけど、あの時は服越しの感触しか確かめ
られなかった。今の彼女は下着姿だから、ほぼ生身の感触を直に感
じ取ることができる。

「これって犯罪行為に片足突っ込んでるよな……」

そう理解していつつ、すべすべの太腿と柔らかい腹部に片方ず
つ手を這わせていく。玲佳とはまた一味違う肌触り。それだけで昂
ぶる下半身。眠っている女子中学生の体を本人の了解なしに触って
性的興奮を覚えている。俺って完全な野獣だ。朝から性欲に身体を
支配されている。

このまま下着を脱がして押し倒しちまうか？

でも、ぐつと堪える。理性が獣性を上回って鬼畜的淫行を抑制し
た。そして、手を離そうとした刹那、さやかちゃんの体が震えた。

「さやかちゃん、起きてるの？」

返事はない。

しかし、直後に太腿の筋肉が引き締まり、お腹が淡く波打ったの
で、眠っていないと判明した。手の平に彼女の緊張が伝わってくる。
やっぱり、直接肌に触るのはマズイか……。いくら同じベッドを使
用していても、単なるスキンシップと弁解するのは難しい状態だ。
強制猥褻だと訴えられたらアウト。相手はまだ中学生なのだから。

ちよつとだけ年下の女の子の感触を味わいたかっただけなのに、
と助平ジジイの言い訳じみた戯言を内心にのたまいつつも、俺はさ
やかちゃんの体から手を離れた。

「あれ、止めちゃうんだ？」

背を向けるような形で寝ていたさやかちゃんは、手が離れるや否や拍子抜けしたような声を上げ、ぐるりと体を転がして真正面から俺を見た。その顔は酷くしかめられていて凄く辛そう。嫌悪感を堪えているみたいに引き歪んでいる。せつかくの美少女顔が台無し。だが、俺がその原因を作った張本人だとすると大問題だった。

「どうしたの？ もしかして、俺、昨日の夜、何かした？」
怖々と尋ねてみた。

緊迫感が背筋を上下。息を呑む音。凍える良心。罪悪感が十三階段の一步目を踏み出す準備をした。

答えは「いいえ」だった。

安堵感が体内にじんわりと広がっていく。

「そうか……」

やはり俺の身は潔白だった。

理性が性欲に屈することはない。まして、女子中学生相手に間違いなど起こすわけがない。

「そんじゃ、なんでそんなに辛そうなの？」

「頭が痛い……気持ち悪い……身体が重くてだるくて……辛い……」

「……」
さやかちゃんは額を押さえながら、呻くように言った。

かなり苦しそうである。診るまでもなく重度の二日酔いだ。十四歳の身であれだけ酒をかつ食らえば、二日酔いになって当然だろう。でも、まあ、水分を多く摂って横になっていれば、そのうち良くなる。

「水、持って来てあげるよ」

俺がそう言ってベッドから起きようとすると、唐突に手首を掴まれた。

「さっきの続きはしないの？」

二日酔いでうーうー唸ってるくせに、小悪魔な顔で訊いてくる小娘。

本当に……困った子である。

「しないよ。さつきも何かしようってわけじゃなかったんだ。ちょっと触ってみただけ。さやかちゃんの肌ってスベスベしてて触り心地好さそうだったからね」

「ついつい悪戯しちゃった？」

「触っただけだよ」

「えっちな感じだったよ。今だって、あたしのお尻に硬いもの押しつけてるしさ。戦闘準備オツケーって感じじゃん」

「……………」

二日連続のセクハラ。

言い逃れ不可能。

訴えられたら即有罪決定。

性犯罪者の仲間入り。

天園の家名に汚泥。

すなわち、人生の終焉。

そんなの嫌だから、裁判沙汰になる前に土下座して謝るか？ いや、その前に下半身の昂ぶりを鎮めねば……。っていうか、即座に密着させた体を離すべきだろう。

「でも、まあ、許したげるよ、お兄さん。あたしが酔っ払ってお兄さんの布団に潜り込んだ自業自得だもんね。あははは」

軽快な笑い声。

訴えられずに済みそうだ。

「お触りついでおっぱいとか揉んどく？ さすがに、えっちするのは困るけど、裸見せるくらいなら、慰謝料ゼロ円の無料サービスだよ。あはは」

完全にからかわれていた。

その程度で動揺する俺。

「……………病人は大人しくしてなよ」

何とか平静を装うとするが、声が裏返ってしまった。

無様だ……………。

「顔が真っ赤だよ、お兄さん」

追撃され、羞恥で気絶しそうになったが、辛うじて踏み止まり、反撃する。

「水、いらなの？」

「あ、欲しい！」

さやかちゃんは一転して顔を引き歪め、シートに突っ伏した。そして、掴んでいた手を放してくれた。でも、からかいは止めてくれない。

「もしも、あたしが将来すんごく美人になって、密希やお兄さんの恋人さんよりも魅力的になったら、結婚してくれる？」

完全な冗談口調だった。

だから、俺も冗談で応じる。

「そうだね。二、三年経つても君の意志が揺るがなかったら結婚の可能性ありかな。でも、俺みたいなデブと結婚したいの？」

「お兄さんは大金持ちだから、結婚すれば家族に楽させてあげられるでしょ？」

さやかちゃんはシートから顔を上げ、少し真剣味を帯びさせて言った。

「家族のために自分が人身御供になるってわけ？ ふーん、今時の女子中学生にしては利己主義じゃないんだね。感心感心」

「あたしは家族思いなんだよ。他の馬鹿女と一緒にしちゃいけないよ、お兄さん」

「しないから、これ以上、俺をからかわないで欲しいね」

「あははは、駄目駄目。駄目だよ、お兄さん。遊びたい盛りの子に自制を求めるのは無意味だよ。あたしの悪戯心に火がついちやっただから、常識とか良心を抜きにして全力疾走するよ」

小悪魔なスプリンターである。

「勘弁して……」

俺が髪を掻き回すのを見て、さやかちゃんはいーっと悪戯っぽく笑った。

「仕方ないなあ。今日はこれくらいで許してあげるよ、お兄さん」

そう言い残して、さやかちゃんは再びベッドのシーツに顔を埋めた。

気分が悪いのは本当らしい。ミネラルウォーターよりもスポーツドリンクの方がベターだろう。

「何か飲むものを取って来てやるよ。ちょっと待っててね。あと、その格好を密希に見られると場所的にマズイから、掛け布団を被つといて。それともう一つ、俺たちが一緒のベッドで寝たことは秘密だぞ。密希には内緒にしておいてくれよな。酷い誤解を招く可能性が高いからね。いい？俺はリビングで寝たつてことで宜しく」

俺が強く念を押すと、さやかちゃんは少し微笑んでものわかり良く頷いた。

彼女も余計なことをベラベラ喋つて、密希との仲に亀裂を生じさせる愚は犯したくないのだろう。ちゃんとわかっているから安心して、という表情で、部屋から出ていく俺に手を振った。

俺は廊下を歩きながら考える。

実家に帰って来てからの俺は変だ。いや、変なのは生まれつきだが、逆の意味で変になっている。それは、つまり正常な状態なのだけど、心が正常になると平行して異性に対する性的欲求が急上昇しているようだ。年齢制限なし、状況判断力なし、自己制御不能。可愛い女の子なら義理の妹やその友達にも邪な感情をいたく非理性的野獣。好きとか嫌いではなく、単純な食い気。

「俺、欲求不満なのかな？」

今まで、俺が性欲に屈した例はない。俺の言いなりである玲佳を性的欲求の捌け口に利用したことはないし、娼婦を自称する愛練の誘惑にも負けなかった。肉欲を持って余して危険な妄想に耽る日もたまにはあるが、基本的には自慰で済ませる。例外は玲佳の側から誘惑してきた時だけだ。今、無性に女を抱きたいとか、溜まった欲望を放出したいわけじゃないから、深刻に悩む必要はないのだろうけど、この先いきなり誰かを押し倒して蛮行に及んでしまいかねない

のなら、理性をより強く律していかなければならぬだろう。万が一の時は左右良に相談すればいいし、究極に追い詰められた時は玲佳の所へ直行すれば欲求は解消される。

しかし、一週間ちよつと性エネルギーをチャージしただけでこんな状態に陥るとは……。俺って堪え性のない男なんだな、と今更ながらに気づかされた。まあ、密希やさやかちゃんの度を越えたスキャンシップにさえ気をつけていれば、淫行に及ぶ心配はないだろう。昨晚から今朝にかけて、美味しそうな獲物を腕に抱え込みながら、ギリギリの線で理性を保ち続けられたのだから、今晚以降も安心していい……はずだ。

俺がリビングを抜けてキッチンに入ると、エプロン姿の密希が満面の笑顔と共に駆け寄ってきた。

「おにいちゃん、おはよー」

「ああ、おはよう」

軽く応じながら冷蔵庫を開け、清涼飲料水入りのペットボトルを取り出してラッパ飲みした。ごくごくと一気に半分ぐらい飲む。体内に水分が染み渡っていく感覚が心地良い。

「あーっ、おにいちゃん、ペットボトルに直接お口をつけてー。お行儀悪いんだよー」

密希が非難がましい声で叫ぶので、俺はさらさらの髪の毛をクシヤクシヤつと掻き回してやった。

「きゃーん、もおーっ！ おにいちゃんたらー。酷いんだよー。綺麗に梳かしてあるのにー！」

悲鳴を上げながらも手を払いのけず、逃げようともしない密希。だから、ついでに頭を撫でてやった。にへーっとならう義妹。

俺はさやかちゃんの為のコップを手に取り、もう一口ラッパ飲みしてから、密希の顔を覗き込んだ。

義妹の体調を目測する。

「さやかちゃんは二日酔いで苦しそうだったけど、おまえは平気な

のか？」

「んー。へーきかなー。ちょっとだけ身体がだるいだけでー。密希はへっちゃんなんだよー。こんなのに比べたらー、生理の方が何倍も辛いんだよー」

にこーつと満面に笑みを浮かべるが、急に顔を真っ赤にして目を逸らし、恥ずかしそうに身を掠った。

たぶん、生理という言葉を用いてしまったことに恥じらいを覚えているのだろう。そういう羞恥心は大切にしたい。今時の女の子のように、恥知らずで常識知らずな脳なしの愚か者になって欲しくないのだ。

密希はごによごによと口の中で何か言い、不自然なくらい大きな身振りで何かを否定し、俺の前から流し台へと逃げ出した。

すんげー可愛い。俺の心を律する鋼の理性を溶かし、工業排水として流してしまっくらしいの愛らしさ。思いきり抱き締めたくなる可憐さ。この美少女を自分だけのものにしてしまいたい狂おしさ。その全てが俺を惑わせる。

優しく抱き締める程度なら許されるんじゃないかねえの？ 家族の絆を

深めるスキンシップってことで……駄目か？

「駄目に決まってるな……」

自嘲的苦笑。

「んー？ 何か言ったかなー、おにいちゃん？」

「いや、別に。さやかちゃんが俺の部屋で寝てるから、後で介抱してやってよ。重度の二日酔いで死にそうな感じなんだ。定期的に水分補給を心掛けて」

「はい。了解しましたー。って、あれねー、さやかちゃんてお家に帰ったんじゃないんだねー。おにいちゃんのお部屋にいたのー？」

「ああ」

俺はさやかちゃんへのセクハラ行為を億尾にも出さないように細心の注意を払いながら、滑らかに返事をした。

「ふーん」

密希は疑惑を抱かず、素直に俺の言葉を受け止め、何ら邪推せず
に納得したようだ。

「そんじゃ、頼んだぞ。俺、ちつと出かけてくるから」

「んにゃー？ おにいちゃん、今日も朝からお出かけするのー？」

密希は振り返って言った。

「ああ、ちつとばかしな」

「どこに行くか訊いてもいいかなー？ それとも訊いたら怒るかな
ー？」

密希が顔色を窺うような上目遣いで訊いてきた。俺の微細な表情
の変化を見逃すまいとする視線は、最初に会った時から変わらない。
おどおどしてる感じ。いつなんどき俺が不機嫌になるかを恐れてい
るのだろう。

「いいけど、遊びに行くわけじゃねえよ。警察に顔出しとこうって
思ってるだけだ。いち容疑者としての義務だな」

冗談めかして言っているが、ちゃんと意図しての行動である。

「警察うー？」

浮かない顔の密希。

それへ軽く手を上げて、俺はキッチンを後にし、自室に戻った。

コップとペットボトルをテーブルの上に置き、布団に包まるさや
かちゃんの様子を診る。

「さやかちゃん、水分を摂ると少し気分が楽になるよ」

声をかけるが反応がない。

顔を覗き込んでみると、安らかな寝息を立てながら眠っていた。

額に細かい汗が滲んでいる。髪の毛が汗で貼りついていて少し色っ
ぱく見えた。初めて体験する二日酔いは酷く辛いだろうけど、俺が
できるのは清涼飲料水を持って来てやることだけである。

あとの世話は密希に任せた。

【2・色嶺左右良】

連休初日の朝。

目覚まし時計の助けを借りずに早起きをし、布団から出るのを拒否する身体に鞭打ってベッドを降り、カーテンと窓をを全開にして室内の換気をした。

本日も快晴。

絶好の行楽日和。

自然と身体に活力が漲ってくる。

「左右良さん、おはよ」

「おはようございます、左右良さん。今朝は随分と早起きですね。どうしたんですか？ 今日からゴールデンウィークなので、布団の中で愚図つても、誰からも非難されないのですよ。どうせ予定とかないですし。あ、それとも、もしかして、三文の徳をゲットする狙いですか？ 美容と健康のためっていう返答は在り来たり過ぎるから却下なのです」

健康優良児的な生活に満足しつつも、自らの行動に疑問を抱き、理由を自問する。

「違つよ、左右良さん。確かに美容と健康を心掛けた行動だし、三文の徳をゲットしたいけど、それだけの理由じゃないんだよ。今日は洗濯と掃除を念入りにするって決めてたでしょ？ そのための早起きなんだよ。忘れちゃった？」

ベッドメイクを直しながら自答。

「うー、申し訳ありません、左右良さん。寝不足なので記憶喪失気味なのです。冷たい飲み物が熱いシャワーで脳味噌を活性化して下さい。そうすれば身体が正常に起動すると思うのですよ」

「うい。そんじゃ、シャワーを浴びてから朝ご飯を食べて、それから掃除と洗濯に取りかかる」

私はカーテンを引いてから服を脱ぎ、トイレを使ってシャワーを

浴び、すっきり身体を目覚めさせておいて朝食の準備に取りかかった。

とは言っても、朝ご飯は昨夜の残り物の青魚のつみれ汁を白飯にぶっかけたものなので、一分もかけずに完成。ざざーっ喉に流し込み、朝食は終了。

洗濯物を全自動洗濯機に放り込んで洗剤を投入し、スイッチを入れておいて、ぱっぱと朝食の後片付けをする。その流れでキッチンスペースの掃除をし、室内に掃除機をかけ、窓ガラスを拭き、ユニットバスも綺麗に洗浄した。一通りの掃除を終える頃には洗濯も終わっているの、あとは洗濯物を干すだけである。しかし、外に干すと必ずと言って良いくらいの確率で下着類を盗まれてしまうので、下着だけは室内にロープを張って干した。

予定していた作業は終了した。

労働後にはエネルギー補給と疲労回復を図るべく、濃い目に淹れた緑茶と赤福（三重県名産の和菓子）でほっーと一息入れる。そして、ぼんやりと壁紙を見つめながら、陽影君は何をしているだろう、と想像してみる。

「陽影君はお寝坊さんだから、まだ眠ってるんじゃない？ いつも起こしてくれてる玲佳さんがいないしさ。彼の義妹さんは事件のことで混乱してるだろうから、他人の起床時間なんかにかまけてられないと思うんだよ」

これは過去のデータと情報分析から導き出した現実的な予想である。陽影君の義妹さんの性格は不明だが、一般的な女子中学生はシヨックを受けて当然であり、自室に閉じ籠って現実逃避に勤しんでいてもおかしくないだろう。しかし、義妹さんは殺人事件を他人事のように平然とやり過ごせる肝っ玉を持っているかもしれないから断定はできない。

「事件の捜査に協力してるかもしれないですよ、左右良さん」
これも真つ当な予想である。常日頃は自分を鬼畜だ狂人だ反社会

的大学生だと言っているけど、根幹部分の彼は非常に優しくて面倒見が良い善人なので、苦悩する義妹を見過ごすことなどでできず、自ら率先して警察に協力して《正しい結末》へと導こうとし、事件の解決を図るかもしれない。

そこで反論する。

「んー……でもさあ、白岐学園で起こった事件で、陽影君の望ましい結末へと向かう可能性の方が高いんじゃないかなあ。昨夜、陽影君から事件のことを一通り聞いたら、事件の犯人、簡単に判明しちやっただじゃん」

「うー、そうですね。左右良さんの類い稀な推理力を発揮するまでもなく、すらっと犯人が判明しちゃいましたよね」

自己の才能を称賛しながらも、想い人の苦悩と苦勞を察して同情。「だから、陽影君は警察に非協力的だと思うの？」

「それは事件を担当してる刑事さんの能力に左右されるですよ」

「あー、そっかー。そうだね。でも、それって左右のどっちに振れても色々な弊害が生じちゃわないかな？ 刑事さんが有能なら左右良さんと同じ道筋を辿って同じ結論に到達しちゃうだろうし、無能なら間違った筋道を暴走して同じ結論に行き着いちゃうと思うんだよ。そう思わない？」

「思います。思うから大問題なのですよ。はあ……」

切なさ混じりの溜め息を吐いて赤福を一切れ口へ運ぶ。舌を刺す強烈な甘味が口内を支配。それを洗い流すべく緑茶をずーっとひと啜りする。そして、真っ白い壁紙から天井へ視線を移動させた。

「左右良さん、ここでこうして天井を見上げて無意味な会話をしていても埒が明かないので、陽影君に電話もしくはメールしてみますか？ 昨夜のこともあるし」

「うー。でも、さすがの左右良さんも何て答えたらいいのかわかんないんだよ。これって、かなりデリケートな問題だしさ。ズバリ犯人の名前を告げて、藪蛇になっちゃったらフォロワー不可能でしょ？ 陽影君に嫌われないように、左右良さんは慎重な対応を心掛けて

欲しいんだよ」

「うい、わかつてますよ」

全身を用いた溜め息。

「はあ……。これって難しい問題なのです。もし左右良さんが警察側の人間だったら、もう事件は解決してるのですよ」

「正しい結末？」

「うー。そうじゃなくて、つい間違えて事件の真相を暴いてしまいそうなのです」

「うわあ……。左右良さん、それは最悪だよ」

悲惨な末路が目の前に浮かぶ。

「んもう！ 左右良さん、マイナス思考は即座に廃棄して下さい。せつかくのゴールデンウイークなんだから、こんなせせこましい部屋に閉じ籠って独り言を呟いてないで、ぱーっと外へ繰り出しましょうー！」

テーブルを手の平で叩いて自虐的思考を強制的に切り上げ、即刻外出を提案。

「何しに？」

「あう……」

訊かれて口籠もる。

孤独は苦にならないが、一人遊びは不得意なのだ。時間を有効に使えない。暇を持って余してしまう面白味のない人間。こうして家事を終えてしまえば、もう後はテーブルに向かってぼーっと物思いに耽るくらいしかやることがない。誰かと遊ぶにしても、私には陽影君一人しか友達がいないのだ。

とにかく間食した食器を片付け、ベッドの端に腰掛けて、真面目に本日の過ごし方を考える。

「買い物とかしに行く？」

無能宣言覚悟で安易な提案。

「おっと、左右良さん、それは却下させて下さい。事件の経過が気になって、買い物も純粋に楽しめないと思うのです」

「そうだね……」

その時、ふと、昨日の昼食時に学食で大迫と交わした言葉を思い出した。

ラグビー部の連中は今朝から合コンなのだ。

勿論、私には何も関係ないが……。

「左右良さん、本日の予定は決まりましたか？　まさか大迫君の口車に乗ってラグビー部の合コンに参加しちゃうのですか？」

「何言ってるの、左右良さん！　そんなの参加しないよ。セックスすることしか頭のない連中と一緒に過ごすなんて、生理日に空腹の鮫しかいない水槽で全裸ダイビングするようなもんじゃん」

「ちゃんと身の危険を認識してるならいいのですが、左右良さんは時たま幼稚園児でも危険とわかる選択肢を選ぶから、ハラハラしちゃうのですよ。入学式の日の事件も、無茶を承知でラグビー部のお馬鹿さんたちに食ってかかったでしょ？　陽影君が間に割って入ってくれなかったら、左右良さんは拉致監禁されてラグビー部の野獣たちに代わる代わる犯されてたところですよ。わかっているのですか？」

「うー。確かに、あの時はついカツとなって、情けなくも軽率な行動に及んじやったよ。深くふかーく反省してるし、陽影君には大感謝だよ。でも、それは言わない約束じゃん。過去のトラウマが原因なんだもん」

「結果、また自分が傷ついちゃったら、過去の教訓が意味を成さないのですよ。不用意な強がりや相手の嗜虐心に火を灯す危険性があることを忘れちゃ駄目なのです」

「わかってるもん……」

項垂れて反省。

自制心の鍛錬が必須。

しかし、今は本日の予定を考えることに集中するべきだ。

「左右良さん、どうしますか？」

「うーんと……陽影君からの電話を自宅まで待たせてことで、どうか

な？ 外出してラグビー部の連中と鉢合わせしたら、先日の悲劇が

二倍増しで襲いかかってくるような気がする」

「うい、そうだね」

無難な案に落ち着いた。

【3・天園陽影】

シャワーを浴びてざっと体を洗い、適度に身嗜みを整えてから外出した。

目的地は白岐学園である。

愛車を駆って混雑する都内の道を行く途中、携帯電話で鈴檜さんに連絡を入れてみると、彼女も白岐学園に向かっているとのこと。しかも、今日は黒に近い灰色の容疑者を召集していると言う。

「俺も、その集会に参加してもいいですか？」

拒否されても強引に押しかけるぞ、という気迫を込めて訊くと、鈴檜さんは携帯電話の向こうで「むむむ……」と唸り、一呼吸を置いて許可してくれた。

「昨日の別れ際に、私の方から約束してしまいましたからね……仕方がありません。ですが、許可するのは貴方一人です。義妹さんの同行はご遠慮願います」

「勿論、わかってます。密希は連れてきてませんから安心して下さい」

そんなやり取りをした十数分後、俺は白岐学園の駐車場に愛車を停めた。

ただっ広い駐車場のド真ん中。一昨日停めた場所と同じ位置。

今日は警備員に注意されなかった。それどころか、俺が車を降りると小走りに近づいて来て、あれこれと捜査の進み具合を探ってきた。やがった。どうしようもなく鬱陶しくて迷惑な男である。

警備員なら、脇目を振らずに周囲を警戒してる。話しかけてくるな。いいから、あっちへ行け。俺に構うな。

俺は適当に警備員をあしらって《H校舎》へと向かった。その途中、運動場に差しかかった所で、陸上部員らしき数人の女の子がトラックに沿ってランニングしている姿を発見し、小さく溜め息を吐

いた。

部活動がある日なのに、さやかちゃんはサボったらしい。昨日の会話の中で、「連休中は部活、休みなんだよ」などと言ってたくせに……。あの小娘、嘘を吐きやがった。

いや、今日はまだゴールデンウィークに入ってなかったっけ？
連休は明日からだっけ？

頭の中でカレンダーを広げる。

いいや、今日が連休の初日だ。

つまり、さやかちゃんの発言は嘘。

まあ、一緒に騒ぎたい一心で嘘を吐いたのだろうけど、部活動を休むのは良くないと思う。無断欠席なら尚更悪い。俺がそんな説教をするなど笑止極まりないが、家に帰ったらキツクお灸を据えておく必要があるだろう。でも、きつと、帰宅する頃には、そのことを忘却していると思う……。

俺が《H校舎》の玄関に入って来客用のスリッパに履き替えていると、後ろから制服姿の女の子が横を駆け抜けていき、階段の手前で立ち止まった。そして、こちらを振り返る。

「貴方は確か……あの時の……」

少女は眼鏡の奥の円らな眼を大きく開いて、俺の身なりをじろじろと見た。胡散臭い人物を鑑定する目だ。やや険しい。

俺はなるべく相手に警戒心をいだかせないように、持ち前の仏頂面を和ませ、「やあ」と気さくに挨拶した。

釣られて、彼女も「お、お久しぶりです」と変な返事をした。

「君は確か……生徒会長の無堂さんだったっけ？ 昨日、名前を教えられたけど、記憶が定かじゃねえから……どうかな？」

「あつ、はい。私の名前は無堂百合子です。中等部三年A組です。現在は生徒会長を担っています」

彼女は即座に、折り目正しくきちんと名乗った。

「そうそう、百合子ちゃんだ。無堂百合子ちゃん。思い出したよ。」

君も今日、鈴檜さんに呼び出されたんだね？」

「はい」

百合子ちゃんは意思の強そうな濃い眉をきゅっと寄せ、眉間にシワを深く刻んだ。呼び出されたことに対して不満を持っているようだ。なぜ、生徒会長の私が容疑者扱いされなけりゃならないのよ、と目が語っている。

その気持ち、わからないではない。

「それじゃ、一緒に行こう」

俺が促して歩き出すと、百合子ちゃんは声が聞こえなかったかのように、一人先に階段を駆け上り、途中で足を止めて高みからこっちを見下ろした。

「そんなのんびり調子で歩いていたら、約束の時間に遅刻してしまいます。刑事さんの指定した時刻まで三分しかありません。急がないと間に合いませんよ。集合時間を守る気があるなら貴方も急ぐことです」

そう言って、階段を駆け上がったってしまっただ。

はあ……。百合子ちゃんて凄く真面目な生徒なんだな。元々の性格が真面目なのか、生徒会長ゆえに生真面目であろうとするのか、どっちだろう。どっちにしても、四面四角で付き合い辛い女の子である。もし恋人関係になりでもしたら肩が凝りそうだ。まあ、風守玲佳は彼女よりも糞真面目な女なのだが……。俺にとって空気みたいな存在なので邪魔者扱いしたことはない。

しかし、時間厳守の志がいくら貴いもので、不真面目な俺が心を入れ替えて見習うべき姿勢だとしても、スカートの丈が短過ぎる点を考慮すると優等生のレッテルは貼れない。さっき、百合子ちゃんが階段の上から俺を見下ろした時、スカートの中でギンガムチエツクの可愛いパンツが思いきり自己主張していたのだから。あの場所では、せめてスカートの前を押さえるくらいした方が良く。俺の位置からパンツが丸見えになっていることに彼女は全く気づいていなかったみたいだから、それを責めるつもりはないけど……。逆に、

目の保養になったつーことで礼を述べるべきか？ いやいや、そんなことしようものなら、悲鳴と共に変態呼ばわりされて、ビンタされちまうだろう。

視聴覚室に入ると、十四の瞳が一斉に集中してきて、俺の身体を硬直させた。

七人分の眼力が集束すると絶大な重圧になるんだな、と下らない感想を持った。威圧感が尋常ではない。みんな殺人の容疑者にされかかっているせいで殺気立っていて、他人に配慮する余裕を失っているようだ。

こつちまで苛立つちまいそうだぞ。

室内には知っている顔、初めての顔、合わせ辛い顔、気まずい顔、完全な無表情、それぞれ個々の表情を浮かべていた。

俺は何の表情も浮かべずに、小さく一礼してから部屋の中央で腕組みをしている鈴檜さんに歩み寄っていった。

「みんな揃ってるんですか？」

前置きの挨拶もなく、ぶっきらぼうな物言い。そんな俺の失礼な態度にも、鈴檜さんは眉一つ動かさず、僅かに首肯した。そして、一同を見回してすつと姿勢を正した。

「全員揃いましたね……。それではみなさん、早速始めましょう」

鈴檜さんが凜とした声で言った。

何を始めるのかはわからない。

実況見分か？

他の人たちもわかっていないようだ。みんな不安そうな顔をしている。

「まずは一人一人の身元を確認していきます。情報に誤りがあった場合は即刻訂正して下さい。それでは最初に……天園陽影君、貴方からです」

鈴檜さんは事務的な微笑みを口許に浮かべ、俺を真っ直ぐ見た。

この場で俺についての個人情報を確認するっていうのか？ 他人

の耳があるんだぞ。個人のプライバシーってのは保護されねえのか？ 曲がりなりにも、俺は姫城一族の一員なんだぜ？ それでいいのか、日本警察？

俺がそんなことを内心に吐き散らかしている間に、鈴檜さんは桜色のレディーススーツのポケットから手帳を取り出し、ぺらぺらと捲り返してページを固定した。

「貴方の名前は天園陽影ですね？」

既にわかりきっている事実を再確認され、俺は瞬間的に不愉快の限界を見極めそうになり、慌てて感情の調節機能を酷使した。これがこの女刑事の捜査手法なら、文句を言わず耐えるしかない。思っ存分、好きなだけ確認してもらおうではないか。

俺は自分の感情をプラス方向に矯正した。

鈴檜さんが集めた俺に関する情報は、ほぼ正確なものだった。親父が天園総合病院の院長である上に日本医師連盟の最高位に就いており、母親が《姫城一族》の分家《天園家》の出身であることは勿論、年齢から誕生日、所属大学、知人から見る俺の性格や日々の素行まで、どうでもいい事実を事細かに列挙していった。でも、いまだに色嶺左右良を俺の恋人と認識しているので内心笑ってしまった。風守玲佳の存在まで辿り着くことができなかったらしい。まあ、情報収集の過程で姫城セキュリティシステムの介入があり、玲佳の身元まで辿り着けなかったのだから。でも、俺たちって大学内で結構有名だから、京桜大学の学生に尋ねれば一発で知ることができるんじゃないだろうか。

俺が何も訂正せずにいると、鈴檜さんは満足げに頷いて視線を百合子ちゃんへ向けた。

どうやら、俺の個人情報暴露する嫌がらせは終了したようだ。

「それでは次に、無堂百合子さん」

「はい」

百合子ちゃんはハキハキと返事した。

俺は静かに鈴檜さんの背後へと回り、真正面から無堂百合子を観

察した。

百合子ちゃんの人物像を俺の独断と偏見、二人のやり取りから判断すると以下のようになる。

名前は無堂百合子。年齢は十五歳。白岐学園中等部三年A組。現在、生徒会長として教師、生徒の両方から信頼されているリーダー気質の優等生。成績は極めて優秀であり、常に学年上位をキープしている勤勉家。頑ななまでに正義感が強く思い込みが激しいため、時には反感を買うが、公私共に正道を直進するお嬢さまである。俺が見た彼女の第一印象はそんな感じだ。性格はちよつと気難しめ得手を焼きそう。自分が主導権を握らないと気が済まないだろうと思わせる気の強そうな雰囲気がある。外見は楚々とした美少女。眉がくつきりしていて、唇は薄く、円らな瞳が縁のない眼鏡の奥で強い光を放っている。背は中学生にしてはかなり長身で、鈴檜さんと同じか少し高い背丈だ。アゴを引き、背筋を伸ばし、両足を揃えて真っ直ぐ立つ姿は、文句なく格好良いと言えた。鈴檜さんと同様に、姿勢が良いから立ち振る舞いも美しいのだろう。そう言えば、二人は性格的にも似通った部分があるような気がする。

「次に、重道忍さん。貴女には昨日お会いしているので確認する必要はありません」

「はい、そうですか……」

俺も忍ちゃんとは初対面じゃなかったので、今更観る必要を覚えなかった。でも、再確認しておく。

名前は重道忍。年齢は十四歳。白岐学園中等部二年A組。密希のクラスメイト。平凡で平均的なごく普通の女の子。性格は内向的な自滅型。自分の意見を主張できないので周囲に流され易く、全ての責任を一身に背負わされる幸薄いタイプだ。でも、誰からも良い子と評価される女の子だと思う。死んだ西川不二彦と野口竜一郎に協力して密希を罠に誘い込んだ大馬鹿者だけど、彼女の置かれた立場を考慮すれば、誰もが同情せざるを得ないだろう。俺はもう気にしていない。

「続いて、富士原美空さん」

「はい！ 一年D組富士原美空です。美空ちゃんと呼んで下さい！」

この薄氷を踏んで歩くような緊張感に満たされている部屋の中で、ただ一人場違いなくらい快活に弾けまくり、跳ねまくる、元氣一杯の女の子。名前は富士原美空。年齢は十三歳。白岐学園中等部一年D組。美術部所属。俺の辛い鑑定眼を用いても最上級と評価せねばならない美少女。並みのアイドルとは比較にならないクオリティーの高さを持ち、それを自覚している節がある。密希と並んでも遜色なく、可愛いさのみの勝負なら美空ちゃんに軍配が上がるかもしれない。あくまでも可愛さだけを見比べて、である。総合的の魅力の勝負なら断然に密希の勝ちだ。圧勝だ！ ぶっ千切りだ！ って何を熱くなってるんだ俺は……。全体的な雰囲気は高級なフランス人形って感じ。ロリコン野郎には堪らない容姿だろう。とにかく小柄で、胸もお尻も薄っぺらく、肉感的な要素はゼロ。黄土色の髪をツインテールに束ねている点で二十パーセント魅力アップってところだ。性格は極彩色の天然系。自己中心的で独自の世界観を持ち、他者を巻き込んで自分色に染めようとする極めつけの迷惑者、と容易に予想できた。

「次は、葦澤和音さん」

「……はい、私は葦澤和音です」

目に見えて不機嫌そうな大人の女性が冷たく乾いた声で応えた。

口調にトゲがある。鈴檜さんを……警察関係者を毛嫌いしているのか、一言一言が敵意に満ちている。苛立ちを隠そうとしてない。友好的雰囲気は皆無。俺の好きなタイプじゃねえな、と思った。

名前は葦澤和音。年齢は四十歳。白岐学園中等部美術教師にして美術部顧問。姫城グループの傘下にある都内でも屈指のお嬢様学校の女教師として恥じない品位と風格、知性を感じさせる女性だった。しかし、一方では、厳格に生徒を指導するあまり行き過ぎた体罰や退学強制措置などを行っている、という悪い噂が生徒の間で囁かれ

ているらしい。忍ちゃんもこの女教師に目をつけられていたという。外見は評価し難い。美人ではなく、ズングリムツクリのポツチャリ型。どの学校にでも一人はいるお局タイプだ。

「最後に、小野寺紗枝さん」

「……………」

返事をせずに顔を背けた少女は、一瞬だけ俺と目を合わせ、ちょっと微笑み、忍ちゃんを一瞥してから床に視線を落とした。

名前は小野寺紗枝。年齢は十六歳。彼女は現在、手錠で両腕を拘束されている。なぜならば、西川不二彦を刺殺した犯人だからだ。つまり、事件当日、俺がトイレの個室内で左右良と電話してた時、隣りの個室に西川と入っていた人間なのである。外見は忍ちゃんとタメを張れるくらい的美少女。やつれていなければ、もっと高評価できただろう。気が強そうだが、殺人に手を染める愚かさとは無縁の聡明そうな顔立ち。まあ、それだけ西川が彼女を追い詰めたつてことだ。病弱な母親の懇願を受けて高校を自主退学し、昨年の冬から某有名ファストフード店に勤めていたが、事件の翌日に解雇されたそうだ。

そして、もう一人、小野寺紗枝の手錠から伸びる白い紐の先を握っている青いスーツ姿のヒゲ男がいるけど、およそ彼は鈴檜さんの部下だから寸評は差し控える。

これで全員だ。

現在、警察が殺人犯と見なしている五名の容疑者である。

俺以外は女の子ばかりだ。

この中に、あの金髪男を殺した犯人がいるって言うのか？

お笑い種だ。

警察は何か勘違いしてるぞ。

そんなことを考えていると、前触れなく鈴檜さんがくると振り向いて、背後でこそこそと聞き耳を立てていた俺を咎めるような目で睨んだ。

「陽影君、そんな風に他人の個人情報盗み聞くのは感心できません

んよ。特に、白岐学園の生徒さんたちは中学生という多感な時期なので、それから、いくら貴方が年下好みの好色漢であったとしても、変なちよっかいを出すのは控えるべきでしょう。慎んで下さい」

酷い言われようだった。

なんか、この人、俺のことを凄く誤解している。まるで変質者扱いだ。聞き耳を立てていたのは事実だから非難されても仕方がないが……。でも、まあ、この人にどう思われようと痛くも痒くもないけど、他の女の子たちに初っ端から悪印象を与えられては困る。

ぬう、早くも百合子ちゃんと和音さんが俺に対して軽蔑の眼差しを……。こりゃ、早々に弁解しておかないとワイヤーの切れたエレベーターのようにイメージが急降下しちまいかねないぞ。

「誤解です、鈴檜さん。俺はそんな変質者の人間じゃないですよ。貴女たちのやり取りを聞いていたのは否定しようのない事実ですが、邪な意図があつたわけじゃなくて、この事件に関わつた人間がどんな人物なのか知りたかつただけ、という単純で明快な理由なんです。第一、貴女の情報は姓名や役職ばかりで、メアドとかケータイの番号なんかは話さなかつたじゃないですか」

「はいはい、ちゃんとわかっています。ムキにならないで下さいね、陽影君。そんな風に必死に弁解していると、私の台詞が信憑性を帯びてきてしまいますよ」

「……………」

この女、また俺を畏にかけやがった。しかも、今回は非常に悪質。良識ある刑事のすることじゃねえと思う。ここは一般常識に照らし合わせても激怒していいシチュエーションだろう。不当な中傷を受けた俺には反撃する権利があるはずだ。

でも、俺は肩を大袈裟に竦めて見せるに留めた。三度目だからダメージをかなり軽減できたし、不快感も僅かなものである。人前でコケにされても、そよ風程度だ。

誤解したけりゃ、みんな勝手に誤解してろ。

「そんなことよりも鈴檜さん、今日は何をするつもりなんですか？

容疑者を並べ立てて、俺の偏執的人間性を断罪しようってわけじゃないんでしょ？」

俺は仏頂面で尋ねた。

「そんな面白そうないベントの開催予定はありません」

引き締まった表情が微妙に綻ぶが、完全な笑みには成らず、更に真剣みを帯びた。

「冗談は最小限に留め、早速本題に入りましょう。みなさん、宜しいですね？」

「本題って何ですかあー？」

美空ちゃんが手を上げ、甘ったれた声音で訊いた。みんなの疑問を代弁したのではなく、ただ心に浮かんだ疑問をそのまま口に出しただけだろう。堪え性のない子である。

鈴檜さんの眼に冷やかな霜が降りるのも無理はない。でも、無視はしなかった。

「これから、私が一人一人に対して、事件当日の犯行時刻前後に何をしていたか、を今一度確認していきます。証言の訂正、改正、新たに思い出した出来事などがございましたら遠慮せず仰って下さい。私はみなさんの証言を基に犯人を絞り込む立場なので、その都度厳しく尋問するとは思いますが、どうかご容赦下さい。全ては犯人を逮捕し、この事件を速やかに解決するためです」

「えーっ、そんなの、この前、警察署で散々やったじゃないですかあー。また、同じこと言わなきゃなんないんですかあー？」

ぶー垂れる美空ちゃん。

「富士原さんに私も賛成です。そんなことのために学園へ呼び集められて無益な時間を費やすなど、無意味を過ぎて無駄骨を折る愚行です。これ以上、私には警察にお話してできる情報はありません」

和音さんは苛立たしげにハイヒールの踵部分で床を鳴らしながら、眼光を鋭くして食ってかかった。

「それとも、ここに集められた容疑者と一緒になって事件当時の様子を思い出せば、事件解決の糸口が発見できるとも？」

「糸口が隠されていると思うからこそ、みなさんを召集したのです。菲澤先生、富士原さん、どうかご協力をお願いします」

鈴檜さんは少し間を置き、誰から異議を申し立てないのを確認してから、ゆっくりと話し始めた。

「まず、最初にお断りしておきますが、本日この場に集まって頂いた全員ともに、野口竜一郎が殺害されたと思われる死亡推定時刻のアリバイがありません。全員に野口竜一郎の殺害が可能だったので、おっと、反論は後ほど一人ずつお聞きしますので、今は私の話を聞いて下さい。宜しいですか？ 被害者の死因は麻縄による絞殺です。これは司法解剖の結果から明らかになっています。そして、この殺人は計画性のない突発的なものでしょう。ここにいる天園陽影君の予想不可能な行動により、犯行可能時間は約十分間しかないので、衝動的且つ偶然性の高い、短絡的な犯行と思われる」

そこまで話して、鈴檜さんは人差し指を俺に向けた。

「野口竜一郎が殺害されたのは、義妹さんをレイプされそうになった天園陽影君に気絶させられ、そのまま視聴覚室内に放置されてからの約十分間……正確には十一時五分から十一時十五分の間です。その間、みなさんがどこで何をしていたのか再確認していきます。ちなみに、陽影君は野口竜一郎を気絶させた後、この階の階段横に位置する男子トイレの中にいたそうです。それについては、男子トイレの一番奥の個室に入っていた小野寺さん、そしてトイレの前で待っていた彼の義妹さんが証言しています」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ。この男性の妹さんがトイレの前にいたと言うのなら、必然的に犯人を目撃していなければならぬでしょう？」

堪らずといった感じで、和音さんが話の腰を折った。彼女の意見は正しい。そう考えるのが普通だ。俺でもそう思う。

鈴檜さんは手を上げて彼女を制した。

「いいえ、残念ながら義妹さん……密希さんは犯人の姿を目撃していません。その時の彼女は精神的に酷く動揺していたと思われるの

で、周囲に気を配る余裕がなくても仕方ありません。それゆえに、その時、この《H校舎》の四階にいたみなさんに容疑がかかっているのです。他の階から移動してきて殺人を犯すとなると、絶対にトイレの前で密希さんと顔を合わせてしまえますからね」

鈴檜さんはそう言って笑った。温か味のない冷徹な微笑だった。

「そこで重道さん、まず貴女にお尋ねします。宜しいですか？」

「は、はい。何ですか？ 私、何でも話します。正直に言います。嘘は言いません」

「貴女は陽影君たちと別れた後、真つ直ぐ自宅へ帰ったと証言していますが、そう断言できますか？ 帰ったフリをして、この階に留まっていたということはありますか？ それを証明してくれる人物はいますか？」

「え？ ええつと……。私、ちゃんと家に帰りました。あの後、寄り道しないで帰宅しました。本当です。信じて下さい！」

忍ちゃんは両手を握り締め、必死の形相で訴えた。

「だけど、鈴檜さんは頷きもしない。それどころか、追い詰めるように訊く。」

「証明してくれる人間はいないのですね？」

忍ちゃんは半泣き状態で首を縦に振った。

「あー、そんじゃ、この人が犯人なんですか？」

美空ちゃんが可愛い声で、無神経にも程がある台詞を述べた。

「いいえ、まだ決まったわけではありません。証明できないだけで、真実かどうか定かではないのです」

あくまで、事務的な鈴檜さん。

話の流れが、最初から忍ちゃんにとって悪い方向へと向かっている。

「ちょっと可哀想かな。ここは一つ、救いの手を差し伸べてやるか。密希から、彼女を助けてやって欲しいと頼まれてるし……。このまま犯人扱いされちゃ、彼女があまりにも悲惨すぎる。」

「ちょっと待って下さい」

俺は控え目に手を上げた。

「どうしました、陽影君？」

「忍ちゃんがちゃんと帰宅したことを俺が保証しますよ。あーっと、家には帰ってないかもしれないけど、この《H校舎》の四階から出ていく姿は俺の目で確認しています。その後で、この視聴覚質に戻るためにはトイレの前を通らなきゃならないから、彼女に犯行は不可能です。少なくとも、彼女一人での犯行は無理ですよ」

俺は微妙なニュアンスで言った。

忍ちゃんの単独犯では不可能でも、密希と協力すれば可能である、という意味である。

しかし、あの状況で二人が協力するなど心理的にあり得ない。ゆえに、忍ちゃんは犯人ではない。

鈴檜さんは、それを理解したようだ。

「なるほど……。陽影君が見ていたのですか。その言葉が偽りでなければ、重道さんに犯行は不可能ですね」

彼女は腕組みしながら、その情報は昨日会った際に教えておいて下さい、という非難の目で睨んできた。

逆に、忍ちゃんは半泣き顔をパツと明るい笑顔に変えて、感謝の眼差しを向けてきた。

うーん、別に感謝されたくて弁護したんじゃない。俺はただ密希との約束を守っただけ。感謝したけりゃ、義妹にしてくれ。

そんなことよりも、忍ちゃんは家族の人と上手くやっていけるのだろうか。そっちの方が心配だ。両親や友達からの過剰な同情は、怒られたり、蔑まれたり、憎まれたり、非難されるよりも辛い思いをする場合がある。優しさも時と場合によっては恐ろしい凶器となつて人の心を傷つけるのだ。

まあ、俺がそこまで彼女に心配りをする必要などないか。放っておけ。

鈴檜さんは手帳を開き、小さな鉛筆で細かくメモしてから、今度は百合子ちゃんの方を向いた。

「では、次に無堂百合子さん」

「はい」

短く、だが、はっきりと返事をして百合子ちゃんはすっと一歩前に出た。

鈴檜さんの口許に冷やかでない笑みが浮かぶ。そして、満足そうに頷いた。年齢は違えども似た物同士の二人には、何か通じ合うものを感じるのだろう。どうやら、お互いに好感をいだいたようだ。

「貴女は犯行時刻、一人で生徒会室にいたそうですね。そこで何をしていたのですか？」

「はい。今月、各部に分配する活動予算の報告書を取り纏めたり、新しく創設されたチアリーディング部の特別予算について見直す必要があったので、休校日ではありましたが、朝からずっと生徒会室に詰めてました」

百合子ちゃんは淀みなく答えた。

さすが真面目な生徒会長さんである。受け答えがしっかりしている。

「生徒会長室は、この視聴覚室の隣りでしたよね。その時、貴女は何か不審な物音や怪しい声を聞きませんでしたか？」

「いえ、何も聞きませんでした」

「そうですね。それでは、なぜ、貴女はこの部屋を訪れたのですか？ 理由をお聞かせ下さい」

「それは、生徒会室にある机が全て書類で山積みになって整理し切れなくなってしまったので、その日一日だけでも視聴覚室に置かせてもらおうと思ったからです。まさか、男の人が死んでいるとは想像していませんでした……」

百合子ちゃんは薄い唇を噛み締めて、視線を女刑事から死体が横たわっていた辺りへと向けた。その時の光景を思い起こそうとするかのよう、しばしの間、一点を凝視する。

数秒間の沈黙。

「それからの出来事はあまりよく覚えていません。気づいたら自宅

に戻ってお風呂に入っていた感じなんです……」

百合子ちゃんは若干情けなさそうに微笑み、弱々しい口調で言った。

鈴檜さんはまた腕組みをし、首を傾げて斜めから生徒会長を見据える。

「なるほど、書類をこの部屋へ移動させようとして……。だから、陽影君の証言に、無堂さんが紙の束を抱えて視聴覚室の前で立ち尽くしていた、とあったんですね。よくわかりました。しかし、それでは犯行時刻に貴女が生徒会室にいたという証明にはなりませんよ。第一発見者は貴女ですが、死体を発見する直前から悲鳴を上げる瞬間まで貴女がどこで何をしていたのかは誰にもわかりません。もしかしたら、野口竜一郎を殺害した後、何食わぬ顔をして書類を抱えてドアの前に戻り、悲鳴を上げたのかもしれませんが。無論、単なる仮設であって、貴女を犯人と断定しているわけではありませんが」

「そんな……。十分、犯人扱いしているじゃないですか！」

可能性を示されただけで、百合子ちゃんは心外とばかりに声を荒げた。品行方正な優等生として生きてきた彼女にとって、犯罪者扱いされることは、それが仮定の話であっても我慢できないのだろう。今までいっていた女刑事への好意をドブに捨て去り、新たに芽生えた近親憎悪に全身を奮わせている。ぴくぴくと戦慄く眉毛がちょっと面白かった。

「その時、生徒会室にいたと証明してくれる人物に心当たりはありますか？」

「……………」

百合子ちゃんは血が滲み出るくらい強く唇を噛み締めて視線をさ迷わせた。

しかし、一人でいたのだから、無実を証明してくれる人間など存在するわけではない。つまりアリバイがない。

さて、生徒会長さんはどうする？

「いないようですね」

鈴檜さんに決めつけられ、百合子ちゃんは当惑の面持ちで他の容疑者を見回した。

助けを求めている。救いの手を差し伸べてくれる者を捜している。強気で勝気だった彼女の目から徐々に光が失せ、涙が盛り上がってくる。そして、潤んだ瞳が女刑事を越え、俺に向けられてピタリと止まった。縋るような、哀願するような、哀訴するような眼差し。

ああ……心の声が聞こえる。

さっきは忍ちゃんに助け舟を出したんだから私も助けて欲しい、という声なき叫び。

さて、どうしようかな……。助ける義理なんて全くないし、人助けという言葉は俺の辞書に載ってない。だが、パンチラの報酬を払う必要があるのも事実……か？

「百合子ちゃんは犯人じゃないと思います」

俺は二秒で決断し、助け舟を出した。

鈴檜さんが目を剥いて睨んでくる。

「なぜでしょうか？」

またしても横槍を入れられてお冠のご様子。招待されてもいない傍聴者は口を閉じていなさい、と怒鳴りたいのかもしれない。

「死体を発見した時の百合子ちゃんは石像のように全身を硬直させていました。あの驚き方は演技でできるもんじゃありませんよ。あの声色と顔色を意識して作るのは、ベテラン女優でも難しいと思います、きつと。それに驚いたフリをしたいのであれば、抱えていた書類をワザと落として見せたと思うんですよね。テレビドラマとか漫画だと大抵そうするでしょ？ でも、彼女は書類の束を持ったまま、職員室に教師を呼びに行きました。それって気が動転していたからと言えないですか？」

「そうですね。そう言えなくもないでしょう。それについては陽影君の証言と見解を信じましょう」

鈴檜さんは渋々という感じで手帳に鉛筆を走らせた。

嬉しい台詞だ。何だかんだ言っても、俺の言葉を信じてくれるん

だな。つて、おいおい……俺を信じる？ 信頼？ 信用？ 俺をか？ 笑える冗談だ。あんた、刑事として人を見る目が無いよ。完璧な節穴だ。千里眼どころかナノミクロン眼だ。よく警視庁が雇ってくれたもんだ。俺がその無能さを矯正してやるうか？ ……つて危ねえ危ねえ。思わずネガティブな思考に捕らわれちまうところだったぜ。

俺は心身の両方を同時に統制して、内面を取り繕った。

百合子ちゃんは吃驚眼で俺を凝視し、ほんの少し笑うように口許を綻ばせて、極々小さな聞こえるかどうかの囁き声で「ありがとう」と言った。それは俺の聞き違いではないと思う。隣りに立っている忍ちゃんと和音さんが意外そうに生徒会長を見たから。

ちよつとした満足感を覚えた。

「それでは最後に、富士原美空さんと葦澤和音さん。お二人は事件当時一緒にいたということなので、纏めてお聴きします」

鈴橋さんは気を取り直すように咳払いをしてから、美術部の二人に目をやった。

「はい、了解ですう」

「わかりました……」

当然、元気な返事は美空ちゃん、陰鬱で非協力的な方が和音さんだ。

「お二人は犯行時刻、美術室にてコンクール向けの絵を描いていたということですが、十一時五分から十一時十五分の間、不審な物音や声を聞きませんでしたか？ 美術室はこの視聴覚室の隣りに位置する生徒会室の更に向こう隣りに位置するので、可能性は低いと思います。どうでしょうか？」

「いいえ。私は何も……。その間は読書に集中していたので、部屋の外の出来事など耳に入らない状態でした」

つつけんどんな返事をする和音さん。

「美空ちゃんは朝からずーっと絵を描いていたから、先生と同じでも聞いてませーん。警察の人が来るまで人が殺されちゃったのも気

づかなかったくらいだもん！」

なぜか自慢げな美空ちゃん。

自分を名前で呼び、あまつさえ《ちゃん》付けするなど言語道断許されざる悪行。天に代わって俺が成敗してやりたい衝動に駆られるが、そんな暴挙に出たら美少女虐待の現行犯でしょっぴかれるのは間違えないので、ぐっと堪えた。

「その時間帯に美術室を出た記憶はありますか？」

鈴檜さんが突っ込んで訊いた。

「いいえ。富士原さんが十時頃に一度トイレ休憩をとった以外は、警察の方が来るまで美術室から一歩たりとも出ていません」

和音さんの言葉に美空ちゃんが大きく頷いた。いちいちリアクシヨンのデカイ娘だ。

「そうですね……。よくわかりました」

鈴檜さんは小さく頷き、視線を部屋の隅へと向けた。そこには、ヒゲ面の刑事さんと手錠をかけられた小野寺紗枝の姿があった。

「小野寺さん、結果はどうですか？ 確認は取れましたか？」

何についてか定かではないが、鈴檜さんが訊いた。

紗枝ちゃんは簡単に頷いた。

「同一人物です」

「そうですね」

鈴檜さんは手帳に何かを書き込み、ふっと吐息した。そして、スツと背筋を伸ばすと、一同を見回した。

「それでは、重道さんと無堂さんはもう帰って下さって結構です。で、部屋から出て下さい。小野寺さんも署へ連れ帰って結構です。

葦澤先生と富士原さんには質問すべき事柄が残されているので、もうしばらくお付き合います」

忍ちゃんと百合子ちゃんには聞かせられない質問があるのだろう。

女刑事に言われて、忍ちゃんと百合子ちゃんはホッと安堵の表情半ば強制退室を命じられたも同然なのに、不愉快さの欠片も見せない。逆に、待機を命じられた和音さんと美空ちゃんは、あからさま

な不満顔。

そんじゃ、俺は？

正直、戸惑った。

鈴檜さんは俺に何も指示してくれなかった。好きにしていって
ことか？ それとも、自分の意思で部屋から出て行けって仄めかし
てるのか？ 俺には判断できない。

「あの……鈴檜さん、俺はここに残っていいんですか？」
遠慮がちに訊いてみた。

鈴檜さんは眉間にシワを寄せて何か言いたげな目で刺してきたが、
感受性の鈍い俺には彼女が何を言いたいのか理解できなかった。

諦めるような溜め息が彼女の口から漏れる。

「その判断を私に求められても困ります。今からお二人にする質問
は個人のプライバシーを侵害しかねない種類のもので、お二人
に判断していただくのが妥当でしょう。蕪澤先生、富士原さん、陽
影君の立ち会いを許可しますか？ 私なら許可しませんよ」

「構いません。私には他人に知られて困るような隠し事など存在し
ません」

こともなげに和音さんは快諾してくれた。

美空ちゃんは一瞬だけ表情を曇らせたが、すぐに総天然色の笑顔
を浮かべ、「美空ちゃんもおっけーです」と両腕で頭の上にマル
を形作って明るく叫んだ。

俺は内心で二人に感謝した。

事件を推理して解決に導く意志など皆無だが、事件に関係する話
が二人のプライバシーを暴露する内容だとしても、俺たちの身を守
るために集めておきたいのだ。

忍ちゃんは部屋を出ていく際に、俺に歩み寄り、「天園さんのお
兄さん、また助けてくれてありがとうございます」と頭を下げてい
った。

実に気持ちの良い女の子である。先日続き、俺の中での好感度

ランキングは赤丸急上昇した。

「密希と仲良くしてあげてね」

そう義兄らしくお願いすると、聡明そうな顔に柔らかな微笑みを浮かべて「はい」と答えてくれた。

ああ……密希や美空ちゃんとは異なった意味で《可愛い》女の子だな、と評価した。

百合子ちゃんの方は一瞥もなく、早足で立ち去ってしまった。

何とも対照的な二人である。

そんな二人が廊下へ出ていく様子を、俺は何となしに見送った。

忍ちゃんと百合子ちゃんが去った後、鈴檜さんは手に持っている手帳に視線を落としたきり、なかなか話を切り出そうとしなかった。手帳に記されているメモを読み、質問内容を吟味しているようだ。しかし、五分近く沈黙が続くと、待たされている者としては段々焦れてくる。悪気はないが、つつい足の裏で床を蹴って苛立ちを表現してしまう。でも、俺よりも和音さんの方が先に根を上げた。

「ちよつと、刑事さん。いつまで待たせるおつもりかしら？ 質問があるのなら手っ取り早く済ませてくれませんかね」

和音さんは、俺を真似るようにヒールを床に打ちつけてカツカツと音を鳴らしながら、苛立たしげに声を荒らげた。

「美空ちゃんも先生の意見にさんせーっ！」

手を高々と挙げて賛同する美空ちゃん。

俺も意味なく待たされるのは好きじゃない。

「わかりました。それでは、お二人にお訊きます」

鈴檜さんは手帳から美空ちゃんへと視線を移した。

「率直な質問です。富士原美空さん、貴女は野口竜一郎を殺害するだけの十分な動機を持っていますね？」

事務的声音での質問。しかし、それは単なる質問ではなくて確認。捜査で判明している事実を一応確かめただけ、という感じだった。

美空ちゃんは、一瞬鼻白んで顔を強張らせるが、即座に無邪気な表情を装った。

この美少女に笑顔は必須。でも、頬が引き攣ってるぞ。大丈夫か？
「美空ちゃんは人を殺すよーな動機なんてないもん！ 野口って人なんか知らないもん！ 悪いことなんかしないもん！」

小学生のようなお子様口調で喚く。笑顔だから物凄く変だ。明らかに動揺している。街中を歩いていたら百パーセント不審人物として職務質問される表情だろう。その表情で何も無いと言っても、全

く説得力はなかった。

「変な言いがかりは止めて下さい！」

「言いがかりではありません。証拠は十分に揃っていますよ。野口竜一郎が自宅に所持していたDVDや写真類の中から、貴女が暴行されている様子を撮影した物が多数発見されているのです」

事務的な表情、口調で鈴檜さんが告げると、美空ちゃんの顔から血の気が一気に引き、快晴の空よりも真っ青になった。

見ていて哀れに思える急変。彼女が受けたショックの大きさが手に取るようにわかった。こんな俺でも簡単に読み取れた。

「あ……う……。そっ……。それ……」

最早、言葉を成さない獣じみた呻き声を発するのみ。

美空ちゃんは大粒の涙をボロボロと零し始め、頬やアゴ下をぐしゃぐしゃに汚した。そして、えぐえぐとしゃくりあげながら手の甲で目許をこすり、慰めて欲しい、と全身で表現する。

なるほど、美空ちゃんも忍ちゃんや紗枝ちゃんと同様に乱暴され、撮られ、脅された被害者だったのだ。穢れなき天然色の笑顔を周囲に振り撒いているから全然気づかなかつたが、その心には深く鋭い傷が刻み込まれていたようである。それを露ほどにも感じさせない弾けつぷりには敬意すら覚える。しかし、芯の強い忍ちゃんとは違い、この子は表装を飾って傷ついた心を見せないようにしていただけだったようだ。

まあ、そんな酷い目に遭って力強く笑ってられる気丈な女の子なんて滅多にいないだろう。

和音さんは気がかりそうな視線を哀しみの教え子に送っていたが、駆け寄って介抱しようとはしなかった。

泣きじゃくる美少女の姿を目の当たりにしても、鈴檜さんは心を動かされた様子もなく、無表情のままに言葉を繋いだ。

「貴女には野口竜一郎を殺害するだけの明確な動機があり、実行するだけの時間的余裕があります」

そこで和音さんを見る。

「蕪澤先生と一緒にいたからアリバイがあると仰りたいのでしょうか、お二人が共犯関係にあれば……」

「ちよ……待ちなさいよ！ 共犯というのはどういうことですか！ なぜに私が富士原さんの殺人を手伝わなければならぬの？ 私には殺人を犯すような動機はありませんよ！」

和音さんが掴みかからん勢いで喚く。

「第一、野口なんていう男なんて見たことも聞いたこともないのに！」

「嘘はいけませんね、蕪澤先生。貴女は、入部したての富士原さんから、野口という男に付き纏われて迷惑しているから助けて欲しい、というプライベートな相談を持ちかけられた、と警察の事情聴取で証言しているではありませんか。それゆえ、何のアドバイスもできない間に富士原さんが暴行されてしまったことに対して責任を感じていたのではありませんか？」

だから、美空ちゃんに協力して野口を殺害したのではないかと、と鈴檜さんは勘繰っているらしい。

うーん、その考え方は間違っていないと思うが、所詮は臆測の域を出ない想像だ。その程度で二人を殺人犯と断定するのは無理である。しかし、二人は美術部の部員と顧問であり、休日まで登校して一緒にコンクールに向けての絵を描くぐらいだから、相当に親密な間柄だと察せられる。美しき師弟関係。羨ましい信頼関係。可愛い教え子を救うべく殺人に協力するのは必然なのかもしれない。

「せ、せんせー……。美空ちゃんのこと、警察の人に喋っちゃったの？」

美空ちゃんは絶るような目で訊いたが、和音さんは目を逸らして答えなかった。

ぐらつく師弟関係。俺好みの展開。

「蕪澤先生、事実を仰って下さい」

倒れた負傷者にのしかかって刃物を突き立てるような女刑事。

「……確かに私は相談を受けていました。富士原さんにストーリーカー

行為を働く高校生がいるので、どうにかして追い払って欲しいと言われたのです。他ならぬ美術部員の、しかも将来有望な生徒の頼みならと思いい、色々アドバイスをしました。でも……野口という男は富士原さんを……」

「彼女が暴行され、脅されていた事実を知っていたのですか？」

「いいえ、脅されていたなんて……」

「教え子を酷い目に遭わせた相手に殺意を覚えましたか？」

「すらすらと何気ない口調で鈴檜さんは訊いた。」

「はい……いえ、殺してやりたいくらい憎んだのは確かです。でも、実際に、殺人に手を染めるわけではありません。曲がりなりにも私は教師です。名門白岐学園の教職員なのです。生徒に光ある未来図を示すべき教師が妄りに殺人を犯すなど以ての外です」

きつぱりと和音さんは断言した。

堅い意志を感じさせる言葉だった。

「なるほど。確かに教師としての立場上、犯罪に荷担するのは躊躇われるでしょう。しかし、もしも貴女たちが事件当日、陽影君たちの起こした騒動に気づいていて、こっそりと様子を確認しに行っていたとしたら？ これは単なる仮説ですが……。貴女たちが美術室でコンクール向けの絵を描いていた時、廊下から何やら騒がしい声が聞こえてきたので、様子を見に行きました。どうやら視聴覚室で争いが起こっているようです。しかも、その中の一人が富士原さんを暴行した野口であり、新しい獲物を求めて罾を張り、女生徒に乱暴しようとしていることを知ります。しかし、下手に争いに介入すると、弱みを握られている富士原さんが脅迫されかねません。それゆえに、騒ぎが収まるのを待つことにします。十分ほど間を置いてから視聴覚室へ様子を見に行くと、思いもかけず野口が気絶しているではありませんか。貴女たちはその千載一遇のチャンス을 適確にものにしたのです。そう考えることもできるでしょう？」

「それは何の根拠もない刑事さんの一方的な想像でしょう！」

「こ、殺してないもん！ 美空ちゃんは何人殺しなんかしてないもん

！

大声で否定する二人。

「勿論、これは仮説です。貴女たちを犯人だと断定しているのでは
ありません」

断言するように語っておきながら気休め程度のフォーローしたが、
鈴檜さんの中で二人の位置付けが容疑者の中でも限りなく黒に近い
灰色へと変色したのは間違いない。明らかに彼女は二人を……特に
美空ちゃんを疑っている。犯行動機があり、殺害する時間があり、
アリバイがない。でも、二人を犯人と決定付けるだけの証拠はない
のだろう。

「本当に殺してないもん……。美空ちゃんは悪いことしないもん……
うっ、うぐっ、うわああああん」

ととうとう声を上げて大泣きし始める美空ちゃん。

そりゃ、泣きたくもなるだろう。何の物的証拠もなく、臆測のみ
で犯人扱いされているのだ。しかも、孤立無援。頼りにしていた女
教師は自己保身で頭が一杯。秘密にして欲しい情報をベラベラと喋
られ、誰も信じられなくなっている。

そんな童女じみた慟哭を見せられ、さしもの鈴檜さんも罪悪感に
苛まれたのか、俺に向けてアゴをしゃくった。言葉には出さなかつ
たが、美空ちゃんを介抱して欲しい、という意思表示だろう。

警察っていう組織は正義の集団だから、犯人を逮捕するためなら
容疑者に何をしても許されるらしい。被害者の心傷を抉ってもアフ
ターフォーローなど他人任せなのだろう。いや、単に鈴檜さんが美空
ちゃんのようなタイプの女の子を苦手としているだけなのかもしれ
ない。

そんな役目を俺に押しつけるな、と言いたかった。

さて……どうしよう。俺、人を慰めるの不得意なんだよな。性格
上、暖かい言葉を吐くと虫唾が走るっていうか、良心の許容量を超
えて暴走するっていうか……。他人に分け与える心優しさなど所有
してねえし、他人の痛みに配慮する余裕もねえ。他人がどうなるう

と知ったこつちやねえ。泣きたい奴は泣きやいいし、笑いたい奴は笑やいい。俺に干渉するな……。そう言いたいところだが、ここは意思に反して優しいフリを試してみよう。そうすれば、本当に優しい人間になれるかもしれない。

俺はハンカチを取り出そうと思ってポケットに手を突っ込んだが、すぐに抜き出した。

ハンカチは先日、左右良にプレゼントしちゃったんだ。忘れてた……。新品を携帯しておくべきだった。くっ、不覚。

仕方なく、俺はジャケットの袖を用いて美空ちゃんの濡れそばった頬を拭ってやった。

すると、美空ちゃんは「わああーん」とお子様みたいな声を上げながら俺に抱き着き、両手を背中に回してぎゅーっと締めつけてきた。胸元に顔を擦りつけられたので、ジャケットが涙と鼻水でグシャグシャになってしまった。ただらうが、この状況じゃ何も言えない。仕方なくジャケットを諦め、彼女の肩を抱いて髪を撫でてやると、泣き止むどころか更に激しく声を上げて俺を困惑させてくれた。

うーん、どうすりゃいいんだ？ やっぱ、俺が余計な口を挟んで美空ちゃんと和音さんが犯人じゃないことを証明して見せなきゃなんねえのか？ 俺が？ スッゲー面倒臭えよ。だけど、忍ちゃん、百合子ちゃんと助けておいて、この子だけ放つたらかっというの。は不公平だらう。

「何でこんなことしなきゃなんねえんだ？」

誰にも聞こえないくらい小さくぼやく。

いつ、どこで、何を間違えちゃったのか皆目見当がつかない。選ぶべき選択肢を誤ってしまったようだ……。我道から正道へ徐々に矯正されていく不安感。それに対する反発心と抵抗感。でも、それが《普通》になるための重要なプロセスならば、俺は耐えて受け入れなきゃならないだらう。

「鈴檜さん、この二人が協力して殺人を犯したって言うのは少し浅慮だと思えます」

俺が三度目の横槍を入れると、鈴檜さんは不快がるどころか面白そうに口許を緩め、反論を歓迎するような表情を浮かべた。

まるで安堵するかのような淡い微笑みを浮かべている。

「どうしてでしょうか？」

「理由は簡単。義妹の密希が容疑者から外されたのと同じです。和音さんも美空ちゃんも背が低いでしょ？ 幾ら背伸びしても黒板のフックには届きませんよ。首を絞めた後で首吊り状態にするには、最低でも手を伸ばして黒板の上部に触れるくらい背が高くないと無理です。その条件を二人は満たしてない。だから、容疑者から外れると思います」

二人を弁護する俺に、鈴檜さんは冷笑を見せた。

「いいえ、外れませんよ」

即否定された。

「お二人には犯行が可能です。確かに一人一人の背丈ではフックに届かないかもしれませんが、二人分の背丈が合わされば確実に届きます。いわゆる肩車です。葦澤先生が富士原さんを肩に担いで立ち上げれば、ゆうにフックまで手が届くでしょう」

女刑事は、どうだ反論できまい、という目で俺を射た。

なんだかなあ……、何か話の趣旨が変わってきたような気がする。容疑者のアリバイを再確認する予定だったのに、美空ちゃんたちを犯人に仕立て上げる方向へと逸れてしまっている。

これって、俺が余計な口出しをしたからか？ それとも、始めから二人に目星をつけていたのか？

何だか不愉快な気分になってきたので、らしくもなく俺はムキになった。

「無理ですよ。二人がどう頑張ってもフックに縄を掛けることはできません。肩車なんて不可能なんです」

「どうして断言できるのですか？ 理由を聞かせて頂きたいですね」

「いいですよ。見てて下さい」

もう殆ど子供のケンカ状態である。

やれるもんならやってみろ！ 望むところだ！ 吠え面かくなよ！
かかって来いや！
そんな展開……。

俺は自分が恥ずかしい。彼女は恥ずかしくないのだろうか？ あの様子だと、恥ずかしくないのだろう。俺がどうやって証明するか興味津々といった面持ちである。

俺は内心に溜め息を吐くと、胸に張りついてグズグズと咽び泣く美空ちゃんの耳元へ顔を寄せた。そして囁く。

「美空ちゃん、ちーつと抱き上げるよ。いいね？」

美空ちゃんはベタベタに汚れた顔を上げ、不思議そうに瞬きしたが、こくりと頷いた。

了解を得て俺は両腕を伸ばし、腰を屈めて彼女の膝下と背中 hands を差し込み、お姫様抱っこの要領で一気に抱き上げた。

「きゃう！」

おかしな悲鳴を上げるがお構いなし。両腕にかかる重みを確かめるべく、軽く揺さ振ってみる。

「……四十キロってとこかな。四十五キロもないよね？」

本意じゃねえが、美少女には厳禁の質問をぶつけた。

ビシッと俺の頬に衝撃が走った。

美空ちゃんの鉄拳がめり込んだのだ。

むむっ、やはり怒るか……。美空ちゃんは不摂生してるらしく、華奢な外見に反して結構重い……。それに何と言っても美少女だから……。

しかし、美空ちゃんは全く力を込めてなかったので痛みは全くなかった。殴ったというよりは拳をぐりぐりと押しつけられた感じ。

まあ、一種のコミュニケーションどころ。

「美空ちゃんはそんなに重くないもん！ 三十五キロだもん！ うん、さ、三十キロだよっ！」

美空ちゃんは大きく身を擦って俺の腕から脱出し、自分の足で立つと、三十キロを連呼しながら発言の撤回を求めてきた。体重に関

しての暴言は、悲嘆に暮れる美少女の涙をも止めてしまう効果があるようだ。

嘔吐き娘め……。

抱き上げた感じだと三十五キロは確実にあつたと思うのだが、そこはお茶を濁しておくということ……。実際には何キロだろうと構わないのだ。要は、美空ちゃんの体を和音さんが持ち上げられるかどうか、である。

俺は手の平を美空ちゃんの頭上に乗せ、しばらく大人しくしているようにお願いした。

体重の誤審に対する不平不満を高らかに叫んでいた美少女は、スイツチを切ったように黙った。彼女なりに状況を理解しているらしい。

「自称三十キロの美空ちゃんを肩に乗せて、和音さんが立てるかどうか試してみますか？ たぶん、無理ですよ。人間て結構不安定で重心の定まらない生き物だから、小柄な先生が肩車をして更に立ち上がるなんて可能だとは思えません。きっと、鈴檜さんでも無理ですよ。それとも挑戦してみますか？」

「……………」

鈴檜さんは無言で首を横に振った。そこまでする必要がないと判断したのだろう。仮に肩車できたとしても、二人を犯人と断定する決定的証拠にはならないのだ。今日のところは十分に情報を引き出した、と満足しているに違いない。

ちなみに俺の予想だと、和音さんは美空ちゃんを持ち上げることができたと思う。その辺は駆け引きつてやつだ。

「いいでしょう。今日はこれで十分です。お二人とも捜査にご協力していただき感謝します。陽影君もワザワザご足労いただき、感謝の言葉もありません」

そう言つて鈴檜さんは姿勢正しく頭を下げ、俺たちを視聴覚室から追い出した。

この先は独りで推理するから邪魔者は出て行けということらしい。

ちつ、何て勝手な女だ、とは言わない。刑事などみんな身勝手に横暴なものである。一般市民は駆られゆく野ウサギのようにビクビク震えているしかない。今、俺の手を掴んで放さない美空ちゃんが良い例だ。

「もう美空ちゃんのこと、悪いことしてないってわかってくれたかな？ 人殺しなんかしてないって信じてくれたかな？」

手を繋いで階段を下りながら、俺の顔を仰ぎ見て頼りなげな口調で訊いてきた。不確かな立場と崩壊した心の盾を少しでも再構築しようとして俺の同意を求めているのだ。でも、彼女を救済する台詞など知らないし、紡ぎ出す言葉もない。だから、代わりに優しげな表情を装って誤魔化する。

「美空ちゃん、一人で家に帰れる？ 俺が送っていいこうか？」

「送ってもらおう……」

短い返答。

すると、俺たちの三段先を下りていた和音さんが徐に振り向いた。「私を送っていきます。富士原さんとは家が同じ方向ですから……。それに、話さなくてはならないことも色々……」

和音さんはそう言って、美空ちゃんに手を差し伸べた。

「……………」

躊躇する美空ちゃん。

そりゃそうだろう。いずれバレてしまったらどうけど、最も信頼していた教師が、容疑をかけられるや否や、秘密の相談事を何もかも暴露してしまったのだ。信頼が大きかった分、裏切られたショックは並大抵のレベルではない。それは俺にも理解できる。

それでも、美空ちゃんは思い切ったように俺から手を離し、先生の手を掴まった。

俺みたいな正体不明の無表情なデブよりも、気心の知れた女教師の方が数段頼りになると思っただろう。

いや、裏切られたショックよりも信頼する心が勝ったということだろうか。

「バイバイ、太っちょのお兄ちゃん」

美空ちゃんはそう言い残し、和音さんは小さく会釈して帰った。

さて、俺も帰るか。

家では密希が退屈してるだろうし、二日酔いのさやかちゃんも気になる。

清涼飲料水を大量に買って行ってやろう、などと考えつつ玄関にて靴に履き替えていると、背後から声をかけられた。

「あの……」

「ん？」

振り返ってみると、そこには帰宅したはずの生徒会長が立っていた。

「百合子ちゃんじゃないか。どうしたの？」

「いえ……あの……」

何か言いたそうだが、口籠もったまま顔を僅かに紅潮させている。「もしかして、俺のことを待ってた？」

一向に話を切り出さないの俺の方から訊くと、百合子ちゃんは益々顔を朱色に染めて首肯した。

「お礼を……言おうと思ったので……」

「お礼？」

何のお礼だ？

「はい。先程、私が刑事さんに言い包められて犯人にされそうになった時、貴方は助けて下さったでしょう？」

ああ、あの時のことか。

俺は靴を履き、つま先をコンクリート床に打ちつけて履き具合を確かめながら思い返す。

助けたとは言っても、あれは話の流れ上、仕方なく助け舟を出しただけで、救済の意図があったわけでも、邪な思惑が隠されていたわけでもない。強いて理由を上げるなら、鈴檜さんを言い負かして

みたかっただけである。そんな低次元な衝動からの行為だ。

「お礼なんて必要ないよ。無実の女の子を犯人に仕立て上げようとする極悪刑事に反抗してみたかっただけだからね。それに君はさつきちゃんとお礼を言ってくれただろ。小さな声だったけどしっかり聞こえたよ」

「でも……やっぱり、ちゃんとした形でお礼を言わないと私の気が済みませんから」

うーん、真面目な女の子だよな。真面目っていうか、頑固っていうか、一度決めたら最後まで押し通さなきゃ気が済まない性格。厄介な性分である。心持ち鬱陶しい。とつとつ、お礼でもなんでも言ってくれ。俺は帰りたいんだ。

「どうぞ、百合子ちゃん」

俺は促した。

百合子ちゃんは姿勢良く背筋を伸ばしたまま、四十五度の角度に腰を折ってお辞儀をした。

「今日は本当にありがとうございました」

「いやいや、どーってことないさ。俺のことなんかさくつと忘れちゃっていいよ」

「私としては何らかの形でお礼がしたいのですが……。この後、お茶でもご一緒しませんか？」

「……………」

正直言うと、俺はこの時かなり迷った。帰宅と美少女とのデートを天秤にかけて重い方はどっちと訊かれても、答えは同じ重さとしか言えない。密希たちの相手をするのもかったるいし、百合子ちゃんのような生真面目な生徒会長とデートしたところで、その先に楽しいイベントが用意されているとは思えない。当然、色っぽい展開など期待できるわけではない。それに、中学生に手を出して警察にとっ捕まるのはゴメンである。やはり帰宅すべきだろう。

「悪いけど、この後、大切な用事があるからデートは無理」

「ああ、そうですか……。って、デートじゃありません！」

百合子ちゃんが濃い眉をぎゅっと逆立てて叫んだ。

感情的になつていてるところを見ると、年相応の女の子っていう感じがして結構可愛い。普段はすまし顔だから大人びて見えるけどね。「それじゃ、また今度、縁があつた時にでもデートしよう。あと、スカートはもう少し長めの物を穿いた方がよいよ。階段の下とかから覗かれちまうからね」

意地悪な口調で言つてやつた。

「！」

百合子ちゃんの顔がこれ以上ないというくらい真っ赤になつた。

今更ながらに両手でスカートの前を押さえている。

とどめとばかりに俺は彼女の耳に囁く。

「いくらギンガムチエックのパンツがお気に入りだからって、初対面の男に見せびらかすのはどうかと思うよ」

生徒会長はもう少し恥じらいを持たなきゃ、と言おうとしてスリッパを顔面にぶつけられた。

「痛っ！。こういうお礼は歓迎できないよ」

顔を押しさえながら呻く俺。

百合子ちゃんはスリッパ攻撃で気分を晴らしたのか、そんな俺の様子を見てクスクスと笑っていた。

【5・小野寺紗枝】

早朝から白岐学園中等部校舎四階の男子トイレで行われた実況見分は、何名もの捜査員が関わった割に、一時間も要せず終わった。しかし、その後には立ち合いを求められた視聴覚室での事情聴取に思った以上に時間を取られた。始まるまでの待機時間がやたらと長かったのだ。

なぜ立会いを求められたのかと言えば、私が野口竜一郎を殺害した容疑者の一人だからではなく、天園陽影という名の相撲レスラーが私の記憶している顔と声の主かどうかを確認させるためである。その結果、同一人物である、と私は判断した。あの不摂生の集大成のような特徴的体型と、自分以外の人間を見下すような喋り口調、やや甲高い声音は、そうそう偽れるものではない。犯行推定時間における彼のアリバイが証明されれば、自ずと私のアリバイも証明されるわけで、西川不二彦を刺殺したことは否定しようのない事実だけど、関わっていない殺人の罪を問われないで済んだことは素直に喜ばしかった。

視聴覚室を後にした私は、担当の刑事に手錠を引かれる形で四階から玄関へと下り、正門前に停められている警察車両へと向かった。その途中、数名の女生徒とすれ違い、全員に奇異の目で見られた。一応、手錠によって括られている両手の上にはタオルがかけられ、私が犯罪者だとバレない配慮がなされていたが、同行しているヒゲ男が刑事臭をぶんぶんさせていたので、タオルでのカモフラージュは無意味だった。

パトカーは中等部の校舎を出てすぐの所に停められていた。この後、拘置所に帰るのではなく、警察署に連れ戻されて、再び怠惰な取り調べを受けるハメになるのだろう。何の楽しみもない拘置所に帰るのは嫌だけど、このヒゲ刑事との陰湿問答も嫌だった。

「なんだ……誰もいないのか？」

玄関前からパトカーを見たヒゲの刑事が訝しげに呟いた。

パトカーに同乗してきた二名の刑事がいなかったのだ。

二人仲良くコンビ二にでも行っているのだろうか？

「ちっ。あいつら、職務を何だと思ってるんだか……」

ヒゲの刑事は舌打ちして同僚に対する不満を零しつつ、パトカーの後部座席のドアを乱暴に開け、先に乗っているよう私に向かいアゴをしゃくった。

命じられるままに乗り込もうとして……私は一步後退した。座席の下に刑事が二人、折り重なるように横たわっていたのだ。一瞬、後部座席で仲良く眠っていて寝相悪く下に落ちたんだな、と現実逃避を図ったが、血塗れの座席が非常事態を物語っていて逃避し切れなかった。

私は迸りそうになる悲鳴をなんとか抑え、周囲を見渡して同僚を探しているヒゲの刑事のネクタイを強く引っ張った。

「刑事さん！」

「あ？ なんだ？ こら、ネクタイを引っ張るんじゃない。首が絞まるじゃないか」

そう苦情を申し立てながら、ヒゲの刑事は前屈みになって後部座席を覗き込んだ。

「な！」

刑事は絶句した。それと同時に、小さな呻き声を上げ、頭からパトカーの中へと突っ込んだ。その背中には出刃包丁が突き立っていた。

私は呆然と立ち尽くす。

すると、背後から腕を掴まれた。

「パトカーに乗りなさい！」

耳を打つヒステリックな叫び。

後ろを見ると、そこには女夜叉の形相をした母親が立っていた。

「お母さん……」

母は化粧もせず、髪も乱れたまま、寝巻き同然の格好で、サンダルすら履いていない裸足状態だった。

きつと事件当日から今日まで一睡もできず、私の安否を想い続けていたのだろう。その瞳には狂気を宿し、右手には刺身包丁という凶器を装備していた。

「紗枝、早く、早く乗って！」

周囲の耳を憚らない絶叫。学園の敷地全体に響き渡る大声。

幸いにして、近場にいる警官には聞かれなかったようだ。

「紗枝！」

「……………」

この段階での逃亡は全くの無意味であり、罪を上積みする結果しか生み出さない愚行だ。この上、逃げて私に百害あって一利なし。ただ、母が警察殺しの大罪を犯してまで逃げよと言うのであれば、犯罪者に身を墮して母親を絶望させた私が従わないわけにはいかなかった。

私はまだ息のあるヒゲの刑事の服を探って手錠の鍵を取り出し、母に手渡して鍵を外してもらった。そして、刑事の体全部を後部座席に押し入れ、パトカーの後ろを回って助手席に乗り込んだ。

母は口ほど慌てた様子もなく、ゆっくりと運転席に座り、エンジンをかけ、スムーズにパトカーを発進させた。

正門前に立っている二名の制服警官に見咎められることもなく、私たちは無事に白岐学園を脱出した。

「紗枝は何も悪くないのよ」

一つ目の交差点で赤信号に引っかかった。そこで、母はこっちを向き、にっこりと笑って言った。

もう彼女の瞳に正気の色はない。周囲の状況は何も見えていない。まさに盲目の守護神。あるのは、娘に対する独善的な救済意志だけ。見切り発車で猪突猛進。破滅へのカウントダウン。でも、パトカーを運転する母の顔は、近年稀に見るほど血色が良かった。

青信号になった。

右折して駅方面へ向かう。

警官の死体を二体と瀕死の重傷を負った刑事を後部座席に乗せて、母はどこへ行こうというのだろうか？ 何をしようとしているのだろうか？ 私にどうしろと言うのだろうか？

「お母さん……あの……」

「いいのよ、紗枝。何も言わなくても、お母さんは全部わかってる。あんたは何も悪くないわ。悪いのは紗枝に酷いことをした奴らよ。そうでしょ？ ええ、そうに決まっているわ。だって、あんたは私の娘ですもの。間違いを犯すわけがないわ。うふふふ」

「お母さん……」

現実を映していない母親の瞳。歪んだレンズが映し出しているのは数日前の私。人の道を踏み外す前に映した私の残影。そして、もう、それが矯正されることはないのだろうか。

「お母さん、どこに行こうとしているの？」

「紗枝ったら、何を言っているのかしら。可笑しな子ね。お家に帰るに決まっているでしょ。そうそう、ご飯が用意してあるのよ。あんたの好きな鳥のつみれ汁とか。警察じゃ美味しいご飯、食べさせてもらえなかったでしょ？」

「お母さん……」

自宅に死体入りのパトカーを乗り着けるつもりらしい。

それが、どのような結果をもたらして、私たちをどんな結末へと導くのか、母は想像できない状態なのだろう。殺人犯である娘の奪還も、パトカーの強奪も、警官二名の殺害も、ヒゲ刑事に重傷を負わせたことも、全て、現在の彼女にとっては最善の行動なのだ。そう思い込んでいる。

止める術は、ただ一つしかない。

「き、貴様ら……ここ、こんなことをして……ただで済むと………思
うな………」

後部座席から弱々しい声が聞こえてきた。

ヒゲの刑事がうつ伏せの状態から顔だけ捻って運転席を睨みつけている。頑丈な男だ。

「すぐに本庁の……たちばなけいしが……」

「！」

母が徐に急ブレーキを踏み、ダッシュボードの上に置かれていた刺身包丁を鷲掴みにして、ヒゲ刑事の首筋に刃先を突き立てた。血がしぶき、刑事の口から変な呻き声が発せられる。それに構わず、彼女は包丁を引き抜いて更に刺し、もう一度抜いてとどめの一撃を突き刺した。

血が飛散し、私の服にも赤黒い染みが点々とついた。

ヒゲの刑事は動かなくなった。

「ふうっ、静かになったわね」

母は一仕事終えた充実感に満たされた笑みを浮かべ、血塗れの包丁をダッシュボードの上に放り出し、パトカーを再発進させる。

「早くお家に帰らないとつみれ汁が冷めちゃうわ。あ、そうだ。コンビニで飲み物を買って帰らなくちゃね。お父さんのワイン、切らしちゃってたのよ。あの人、お酒がないと物凄く怒るから、ちゃんと用意しないとね。うふふ。紗枝は何にする？ オレンジジュースかな？ ちょっとだけお酒を試してみる？ 今日は無礼講よ」

「お母さん……」

お父さんは何年も前に事故死してしまっただでしょう、という言葉が口を出そうになったが、寸前で飲み込んだ。

何を言ったところで、母のしている世界と現実の世界が噛み合うことはない。一秒毎にズレ、口を開く度にかき離れていく。

もう駄目だ……。

私のせいで……いや、あいつらのせいで全て壊れてしまった。何もかもが台無しになってしまった。その償いはさせる。全員に。絶対。

でも、その前に

私はダッシュボードの上に置かれた刺身包丁を手に取り、刃にべ

つとりと付着している鮮血をシートになすりつけて拭った。

そして、母親の横顔を見た。

「お母さん、お願いがあるの」

「あら、何かしら？ 言ってみなさいな。お母さんは紗枝の望みを何でも叶えてあげるわ。それが母親の役割だもの。お腹が痛いのか？ それともおしっこ？ すぐ、近くのコンビニに寄るけど、そこまで我慢できない？」

「そうじゃなくて、あの駐車場に入って欲しいの」

私は、前方に見えてきた駅の隣りにそびえたつ立体駐車場を指差して懇願した。

「どうして？」

不思議そうに訊かれた。その目がちらっと包丁に向けられるが、娘の行動に疑問を持った様子はなかった。

私は微笑む。

「後ろに積んでる荷物、降ろさないと駄目でしょう？」

「ああ、そうね。ああ、そうだね。そうそう、そうよね。うふふ。紗枝の言う通りだね。邪魔な荷物は降ろしとかないと、面倒なことになっちゃうわよね」

母は笑顔で頷いているが、ちゃんと理解して答えているのかどうかさえ定かではない。でも、私の願いを聞き入れて、パトカーを駅前の立体駐車場へと侵入させてくれた。

螺旋状の上り坂を進み、最上階の一番奥の端っこに停車する。

「さあ、紗枝、邪魔な荷物を降ろすわよ。手伝いなさい」

母がパトカーから降りようとして、ドアに手をかけた。
私は背後から抱き着くようにして、母の首筋に刺身包丁を当てがい、真一文字に引いた。

運転席の窓に真っ赤な血が飛び散った。

崩れ落ちる母。

私に背を向けていたので、最期に母親がどんな顔をして死を迎えたのかわからなかったし、知りたくもなかった。

【6・天園陽影】

深夜の二時を少し過ぎた。

俺はベッドに寝転がった状態でタバコを啜え、携帯電話を手に取り、記憶している番号をプッシュした。

程なくして相手が出た。

「ういーっす、陽影君。こんばんは、だね。昼間は犯人の逃亡劇があつて、何名かの警察官が殺されて、捜査員が総動員されての大捜索が行われたみたいだけど、きみは大丈夫だったのかな？」

「おう、大丈夫だったぞ。俺が校舎の中にいる時に起こった出来事だからな。全然関係ない他人事だ。まあ、鈴檜さんは所轄の失態に相当お冠だったけどな」

「ふーん、鈴檜さんね……。それ、刑事さんのことでしょ？ 何だか親しげな感じで嫌だなあ。あ、そうだ、白岐学園で西川さんを殺害した犯人と対面したんだよね？ どんな感じの子だった？」

「結構な美少女だった」

「きみ好みの？」

「年下も年上も俺の守備範囲じゃねえよ」

「あはは」

軽快な笑い声を響かせておいて、左右良は口調を改めた。

「気分はどう？」

「まあ、そこそこだな」

「そこそこ？ それは凄い。そして、おめでとう、と祝福しなくちゃだね。きみのような偏屈な人間が、平常心を保持しつつ、義妹想いのお義兄さんを演じられたのだからね。もう、これは、称賛に値する快挙だよ」

「俺も少しは成長したってこつたな」

「うい。でも、ちよーっと電話してくるのが遅過ぎないかな？ 私にはアパートで電話をずーっと待ってたんだよ。メールすら超越さな

いんだからっ！ この薄情者っ」

「わりの。例の小野寺紗枝っていう女の子が逃げ出したせいで、色々ごたごたして電話できなかったんだ」

「うー。まあ、いいけどさあ。もし今夜中に連絡がなかったら、悲嘆のあまり窓を開け放って大声で哀歌を熱唱してたところだよ」

「歌うのだけは止めるよ。すんげー近所迷惑になるから」

色嶺左右良の数少ない欠点の中でも最悪と目されているのが、類い稀な歌唱能力のなさである。鼻歌ですら拝聴するに困難なレベルなのだ。カラオケになど恐ろしくて誘えない。

「うい。勿の論で冗談だよ。そんじゃ、用件を聞かせてよ」

「おいおい、何言ってるんだ。事件について左右良の意見を聞きたいからに決まってるんだろ。昨日、思わせぶりの態度を取っておきながら一方的に通話を切りやがって。答えを聞かせるよ、答えを！」

ケータイの向こうから溜め息が聞こえた。

「昨日の質問に対する解答は《わからない》じゃ駄目かな？ この色嶺左右良の明敏な頭脳を最大限に活用しても正しい解答は導き出せなかった……っていう返答じゃ陽影君は納得できない？」

「いや、受け入れるとか駄目とかじゃねえ。左右良がこの事件について何を思ってる、何を感じたか、それを知りたいんだ。犯人がわかったんなら、そいつの名前をはつきりと言って欲しいけど、わかんねえならしょうがない」

「ほんとにわかんないわけじゃないもん。犯人の目星はついてるもん。でも、もつと詳細な情報を教えてくれれば、正確な分析ができるし、尚且つ真相に近い結論が得られると思うんだよね……」

左右良は彼女らしくなく、奥歯に魚の骨が挟まったような口調で続ける。

「だけど、私の情報源は、きみの口とニュース番組だけでしょ？ それだけじゃ情報が偏り過ぎちゃって、正確な推理ができないよ。できるなら、きみの義妹さんや死体の第一発見者の女の子から事件の話を知りたいな。そうすれば、事件の全体像を理解できると思う」

し、簡単に犯人も特定できちゃうと思うんだよ。だから、便宜を図ってもらえないかなーって、駄目かな？」

「……………」
俺は無言で拒絶を表明した。

「うー。やっぱ、駄目だよね……。残念だけど仕方がないかな……………」
左右良の吐息が耳元でざらつく。

諦めるのがやけに早い。どうしたのだろう。いつもなら様々な角度から切り込んできて、根掘り葉掘り聞き出そうとするくせに、今日はあっさりと引き下がってしまった。

「どうしたんだ？　いつもの左右良らしくねえぞ。そんな簡単に諦めたりして……。玲佳みたく体調でも悪いのか？」

「ううん、私は生理じゃないよ。体調はすこぶる良好。身边に危険が迫っててヤバイ感じなのは事実だけど、それは事件が解決してからも間に合うことだから心配ご無用だよ。あー、いやいや、心配してくるのは物凄く嬉しいから、もっと日頃から心配りをして欲しいなあ。でも、今、望むべきことじゃないよね。それに、高望みが過ぎると、きみに嫌われちゃうかもしれないし……。だから、心配は程々にしてね」

「心配なんかしねえよ」
冷たく突っ撥ねる。

「まさか、左右良……俺に遠慮してんじゃねえだろうな？」
……………」

左右良は数秒間の沈黙を用いて、俺の質問の答えとした。

「俺に何か言いたいのか？」

「……………」
無言の返答。

やれやれ、何だっというんだ。左右良のやつ、もしかして怒ってるのか？　密希や百合子ちゃんの情報を得られずに拗ねてるのか？　殺人事件の情報を飢えてるのか？

「左右良、事件の詳細を知りたければ、今日、俺が仕入れてきた情

報を教えてやるぞ」

「ほ、本当に？ わあっ、ありがとー、陽影君。私の心情を察してくれたんだね！ 物凄く嬉しいんだよっ！ 私ときみの心が通じ合った結果だねっ！ 魂同士の強い結びつきを感じちゃってるよー！」
左右良の恍惚としている様が想像できたのでちよっつと引いた。

感情的になられても困る。愛とか恋を語る左右良は相手にしていると酷く疲れるから、必要以上に冷たく接してしまいそうになるのだ。常時、冷静であって欲しいものである。

「魂の結びつきがあるかどうかはともかくとして、俺の口から話るのがいいか、鈴檜さんから聞きたいか、どっちにする？ 鈴檜さんがいって言うんなら、彼女のケータイの番号を教えてやるぞ」

「あ、私は両方から聞きたいんだよ。きみの語る偏見満載の情報と鈴檜さん……立花刑事の語る客観的な情報じゃ、内容が全然違うだろうから」

偏見満載……。ぐらっつと揺れた。

でも、声は平静を装う。

「わかった」

俺は鈴檜さんの了解なしに、彼女の携帯電話番号を教えた。

「既に連絡先をゲットしちゃってるってことは……もしかして、ムフフな感じ？ きみも案外手が早いんだねえ」

「あほか！」

その手の冗談は嫌いじゃないが、瞬間的にいらっつとしたので、通話を切ってやった。

ブツツと音を立てて回線が断たれる。

良い気味だ。

タバコの煙りを大きく吸い込み、細く長く吐き出す。

携帯電話が鈍い振動音を発して着信を伝えた。左右良め、慌てふためいて掛け直したのだろう。その光景が思い浮かぶ。

俺は通話ボタンを押した。

「下らん冗談は後回しにしろよ」

「ごめんなさい。謝ります。だから、許してくれないかな。きみが相手だと、ついつい、ああした品のない冗談を口走っちゃうんだよ。許してよ、ね？ いい？ この通り、お願いしますっ！」

携帯電話の向こうで必死になっている左右良の姿を想像すると、何だか可笑しい。携帯電話に向けてぺこぺこ頭を下げている光景が容易に思い浮かぶ。思わず笑ってしまいそうになり、俺は衝動を奥歯で噛み潰した。

「許してやるよ、左右良」

「ああ……、ありがとー、陽影君。安心したよ。腰が抜けちゃうくらいに安堵感つすね。冷や汗を拭ったタオルがぐずぐずだよ。思わず泣きそうになっちゃったよ。今も動揺で涙腺が緩んじやつてるかな。私が泣いたら、きみはすぐさま慰めに来てくれる？ こんな時は泣き落としも有効な一つの手法だよ。古来より伝わる恋愛技術を試す価値はあるかな？ うーん、ないみたいだね……」

「他の男には、涙は効果があるかもしれないけど、俺に対しては無意味だぞ。わかってんだろ？ そんな下らん戯言をほざいてねえで、話を聞く準備をしやがれ。メモを取るなり、録音するなりな」

「あはは。準備なんか必要ないよ。私の戯言なんかすらーっと聞き流して、一方的に話しちゃってよ」

クッションのバネが軋むような音をさせて、左右良は気楽な声を上げた。

想像するに、ベッドの上で寝転がりながら話を聞こうとしているのだろう。そうだとすれば、お互いに同じ姿勢で会話していることになる。俺はタバコを吸っているが、左右良は非喫煙者という違いはあるけれども。だからなんだ、と言われれば、返す言葉はない。話の内容に色気はないが、少し恋人っぽいシチュエーションかな、と思ったただけだ。

ただ、それだけだ。

俺は馬鹿馬鹿しい他事を脳内から排除し、昼間の白岐学園で見聞きしたやり取りを思い起こしながら、なるべく客観的に物語るよう

に心掛け、順を追って話していった。

まあ、幾ら客観的になろうとしても、容疑者の目を通して記憶された出来事が保身のフィルターを通された後、更に俺の耳を通して記録され、偏見のフィルターにかけられた末の客観性だから、事実とかけ離れてしまってもしかたがないだろう。俺は自分の見たまま聞いたままを伝えるだけだ。左右良ならそこら辺を理解しているはずなので、自分の中で情報を精査して分析し、解読しながら、より事実に近い形に変えてくれるだろう。頭の中がどう働いているのか知れないが、そういう能力を持っている女なのだ。

俺は、忍ちゃん、百合子ちゃん、美空ちゃん、和音さんの証言を順番に話し、鈴檜さんの解釈と共にその仕事ぶりも伝えた。

「鈴檜さんて、人間としては面白くて付き合い甲斐のあるお姉さんなんだけど、一人の刑事としては頼りにならない感じだな。殺人課の刑事なら尚更不適任だと思うね。着眼点がズレてるっていうか、刑事の才能がないっていうか……。俺みたいな素人でも無実だとわかる女の子を鬼みたいに犯人扱いしちまうんだからな。しとかやってた方が社会に貢献できる人だと思うぞ、俺は」

「うー、そうでもないと思うんだよ。珍しくも今回は、きみの見解に意見するよ」

含み笑いをする左右良。

「へえ、意見ね……。そんじゃ、左右良はあの女が刑事向きだって言うのか？」

「うい」

理由は説明しないが、と左右良は言った。

話を聞いた後の発言だけに衝撃的だった。犯人を捕らえる為には容疑者の心を幾らでも傷つけても構わない、という鈴檜さんの捜査手法を認めると言うのだ。普通認めるか？ 容疑者相手なら心を齟り者にするような事情聴取も許されるのか？ まあ、許されるのだろうか。現実に許されてるみたいだし……。

「話が逸れたようだ。事件自体に話を戻せよ、左右良」

「うい。きみから得た情報を今までの推測と合わせて分析した結果、目星をつけてた人物の犯行である可能性が益々高まってきたよ。もう断定するしかないレベルだね。きみも納得しちゃうと思うな」
「ほう、そりやすげえな。そこまで自信があるなら、犯人が誰か教えてくれ、左右良」

「……………」

「またもや沈黙。」

昨日も犯人の正体の話になると、無言で何かの意思表示。思わせぶりな台詞と沈黙を交互に用いた緩急自在の攻撃。

いい加減止めて欲しい。焦らしないでハツキリ教えろ。犯人の名前を言ってみろ。

「私の口から犯人の名前を告げる必要があるのかな、陽影君？」

左右良は一言一言に魂を込めるような強い口調で言った。

そんな厳しい語り口の彼女を相手にするのは初めてだった。全てを見透かし、全てを理解した上での言葉。彼女は何もかも理解してしまったのだ、と俺は今更ながらに気づいた。

俺って凄く鈍感だ。致命的なほどに頭が悪い。周囲ばかりを注意し、足元を疎かにしていた。

「きみは最初からわかってるんだよね？ わかってるけど、知らんぷりをしてたんだよね？ っー、そういう言い方は正確じゃないかな。きみは殺人現場を目の当たりにした瞬間、犯人が誰であるのかわかったんだよね？ でも、あえて何も気づいていない風を装ったんでしょ？」

「……………」

「答えてよ、陽影君！」

今までにない迫力。

イエスかノーの二択を突きつけられた。

さて、どーすつか。選ぶか選ばざるか。答えずに関係を断つか。
っーん……………。

「左右良の言う通りだ」

俺は答えた。

そう答えるしか選択肢はなかった。

「……………」

三度目の沈黙。

嫌になる静寂。

無音は最高のプレッシャー。本当に勘弁して欲しい。

「左右良、何かリアクションしてくれ。ここでのだんまり攻撃はさすがの俺にも辛いぞ」

「ご、ごめん、陽影君。ち、ちょっとばかり感激しちゃって…………胸が一杯になつて…………上手く喋れないんだよ…………」

「はあ？ 何言つてんだ？」

俺は本当に彼女が何を言っているのかわからなかったので、携帯電話を強く耳に押し当て、向こうの様子を探るべく意識を集中した。泣いている？

グズグズと鼻を鳴らしながら、静かにではあるけども泣いているようだ…………。

なぜだ？ 全然わからない。

しばらくの間、無言の時を刻み、俺たちは意味のない通話料金を加算させた。

一分。

三分。

五分。

おいおい…………。

「おい、左右良！」

「ありがとー、陽影君。ありがとぅ、本当にありがとぅ。私に対してとぼけたり、誤魔化したり、欺こうとしたり、逃げ出したりせずに答えてくれて。本当に本当に嬉しいよ。今日、私は、初めて、きみの深い信頼を感じ取ることができたよ…………」

殆ど泣き声に近い声音で左右良が叫んだ。

「今更だぞ。今日までの一ヶ月間、何を見てきたんだ？ 今更だ俺

が左右良に僅かでも隠し事をしたか？ 信頼とか信用とか、そんな馬鹿げた言葉なんか必要ないくらい、俺は左右良に依存してるんだぞ。それくらい理解しとけよ」

「陽影君……」

左右良は感極まったように声を震わせ、言葉を詰まらせた。

「私は……きみのことが好きなんだ」

唐突な告白。

「ああ、知ってる」

何でもない風に俺は答えた。

「そうか……そうだね……そうだよ。知ってて当然だよ」

左右良は一方的に想いを告げることで気持ちを落ち着けたようだ。携帯電話から聞こえる呼吸音が穏やかになっていき、代わりにくすくすと笑い声が聞こえてきた。

「きみは全く、捻くれるにも程があるよ。今まで散々、私の気持ちを伝えてたのに……。きみに対する愛情を、ことある毎に表現してたのに……。きみはそれを知らんぷりしてたのに……。気づいていない風だったのに……。ちゃんとかわかってたんだね？ 私の想いを理解してて、その上で無視してたんだね？」

「まあそうだな……」

俺はニヒルっぽい口調を使用して曖昧に答えたが、実際には全然理解していなかった。

左右良の想いなどわからない。心情など感じ取れない。恋心に至っては認識不可能。彼女の口から好きと言われているのだから、わからないはずない、と思われるかもしれないが、俺自身に《愛》とか《恋》とか《好き》という感情が希薄なので、理解のしようがないのだ。例外として、俺の心を激烈に震わせるくらい理に適った《好き》ならば理解できなくもない。単なる言葉ではなく、形ある結果としての《愛》を目に見えるように表現してくれさえすれば、俺の虚無に等しいガランドウの心も反応せざるを得ないから。でも、そんな結果を導き出せる者などまず存在しない。俺が生きてきた十

八年間で《好き》という感情をいだけさせてくれた人物は、風守玲佳ただ一人である。単なる言葉を吐き散らかすだけじゃなく、俺の捻じ曲がった歪な心でも理解でき、受け入れてしまうほど明確な形で揺るぎない想いを証明してくれたから、俺も玲佳を好きになったのだ。しかし、左右良の言う《好き》はただの言葉である。口から放たれた音が、俺の鼓膜を震わせただけ。意味は伝われども心に響かない。それは俺が「ラーメンが好き」、「焼肉が好き」、「酒が好き」と言うのと同レベルだ。左右良は、どれくらいのレベルで俺のことが好きなのだろう？ 同じ《好き》という想いでも上下の幅はかなり広い。俺の基準で考えてみても、《嫌いじゃない》から《心が飽和するくらい好き》までの距離はとてつもなく広い。まして、《好きだから、何をされても信じ続けることができる》に至るまでの距離は測量不可能だ。まあ、俺は他人の心を見通す能力など持っていないので、疑問を解消するには直接確認を取るか、玲佳に試したように《実験》してみる必要がある。でも、俺はそこまでして左右良の気持ちを理解したくない。

だから、思考を切り換える。

事件についての話題に戻す。

「なあ、左右良。犯人は誰だと思う？」

俺はさつきとは異なる意味において訊いた。

「あー、それは難しい質問だね」

左右良は正確にその意味を理解しているので、深刻さは微塵もない。むしろ、面白い難問を出題されて喜んでる気配さえある。

「ちょこーっとだけ私にシンキングタイムを与えて欲しいんだよ。

三分……いや、五分でいいからさ。きみがタバコを一本吸い終わる間に解答を導き出すよ。お気楽極楽で一服しててちょ」

「わかった」

俺は了解して、携帯電話を耳から離した。

新しいタバコを抜き出し、口に咥えて火を着ける。

ふーっと紫煙を吐き出して微笑。

持つべき者は頭の切れる親友だ。今現在、それをしみじみと実感している。恋愛対象として認識してないし、性的欲求を感じる相手じゃないが、掛け替えのなさにおいては一番と言っても過言じゃない。もし玲佳よりも早く出会っていたら、俺は間違いなく左右良を選んでいただろう。無論、その仮定には何の意味もないが……。

一分。

三分。

五分。

無言の時に刻み、俺たちは意味のある通話料金を加算させた。

「左右良、答えは出たか？」

フィルター部分だけになったタバコを灰皿に捻じ込みつつ、ケータイを耳に当てて訊いた。

返答は勿論、「うい」だ。

「犯人は野口竜一郎だよ。あはは。ちよつと意外な答えだったかな？ でも、あながち間違いではない解答だと思うよ」

「はあ？ 何言ってるんだ、左右良。野口は犠牲者だろ。首絞められてくたばった被害者だ。被害者が犯人だって言うなら、そりゃ殺人じゃなくて自殺になっちまうじゃねえか。こいつは殺人事件なんだけ？」

「あははっ、それは可笑しな言い種だね。この事件が殺人だと誰が定義したのかな？ 私？ きみ？ それとも、立花刑事かな？ うん、そうじゃないよね？ 誰も殺人事件なんて定義してないんだよ。きみがそう思い込んでいるのは、きみ自身が死体の第一発見者だからでしょ？ 正確に表現するなら、被害者の死体を目撃しているきみと生徒会長の無堂百合子だけだね。幸いにして、無堂さんは死体を目撃したショックで殺人現場の状況を殆ど記憶してないみたいだから、実際の第一発見者はきみだ。そのきみが《殺されている》と認識してしまったせいで、ここまで話が挟れてしまったんだよ。本来なら、この事件は野口の自殺として処理されて、そのまま解決されるはずだったのに、ね」

「……俺のせいなのか？」

「いいや、きみだけのせいじゃないよ。立花刑事が優秀だったからでもある。捜査手法はきみ好みじゃないかもしれないけど、殺人課の刑事としての資質は一目を置くに値するよ。きみから聞いた話だけで想像できる」

「……鈴檜さんが？」

俺は苦く呟き、新しいタバコを一本抜き出した。

「立花刑事は、殺人現場の微妙な不自然さと容疑者の証言から、殺人事件だと直感したんだろうね。自殺の可能性を考慮しなかったわけじゃないだろうけど、捜査の初期段階で捨て去ったんじゃないかな。とても聡明な女性だと思うよ。でも、まあ、彼女については心配いらない」

「どうしてだ？」

「この事件を殺人つて考えているのは、およそ彼女だけだからね。他の捜査員は最初から自殺と決めつけちゃってるんじゃないかな。言わば、立花さんの個人プレイつてやつだね。彼女が常に一人で行動している理由もその辺にあるんだと思うよ。もしかしたら、彼女は捜査一課の中でも爪弾き者なのかもしれない。エリートの哀しい性かな」

しみじみと左右良は言った。

同じように、大学で厄介者扱いされている自分の境遇と重ね合わせているのかもしれない。色嶺左右良は性欲の捌け口を求める一部の男には好かれていようだが、その他の男女には白眼視されている身の上だから。

「それじゃ、俺はこれからどうすりゃいいんだ？　これが殺人事件じゃないと、鈴檜さんに証明して見せなきゃなんねえのか？」

「んにゃ、それは駄目だよ。きみが下手に動く逆効果になっちゃうからね。きみは何もしない方がいい。昨日と同じように、立花刑事の捜査に協力してるふりをすればいいんだよ。それで、後のことは私に任せといてよ。この色嶺左右良を信じて、事件を丸投げしち

やって欲しいな」

「おう」

俺は即断した。

「よーっし、やるぞおっ！ きみに信じてもらえる喜びを力に換えて、最高の結果を導き出してみせるよ」

左右良は可笑しそうに保証した。

「そんじゃ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

「大好きだよ、陽影君」

「……………」

「返事はなし？ 釣れないなあ」

苦笑を残して通話が切れた。

俺は携帯電話をテーブルの上に放り投げ、啞えていたタバコに火をつける。

紫煙の吐息。

「自殺か……………」

自嘲気味に呟く。

確かに、そんな答えもあったな…………。全く思いつきもなかったし、考えもしなかったが、確かに殺人よりも自殺と判断する方がしっくりくる。全ての辻褄が合う。しかも、誰も傷つかない。野口竜一郎以外の全員が救われる解答だ。こんなことなら、もっと早い段階で左右良を頼るべきだったな。判断を誤った。

俺はタバコを吹かしながら、明日の行動を考える。

「明日が勝負だな……………」

たぶん、この事件は明日で決着を見る。色々な可能性が残されている限り捜査は続くと思うが、左右良が動いた以上、自殺という形か、それに近い結論に達して、一応の捜査終了となるだろう。鈴檜さんも納得せざるを得ない理屈と理論で、左右良に丸め込まれてしまわずだ。

騙す者と騙される者、どちらがどれだけ悪いのか、俺の内に答えはない。一般的な意見としては、騙すの方が悪い。常識的な答えに俺は疑問を感じずにはいられないが、騙す方に積極的悪意がある場合は騙される者よりも悪いと言えるだろう。しかし、善意に基づいた嘘は悪とは言えないのではないか。世の中には、騙されて幸福を得る者もいるし、逆に不幸になる者もいる。結局、人間は何かしら騙されて生活しているようなものだから、騙された者が幸福であれば、騙す側には何の問題もないと思うのだ。

でも、その全ては戯言だ。

騙す者が知患者と称され、騙された者は愚者と嘲られる。それが一般的な見解。騙される側が注意していれば何の問題も起きないし、警戒されれば騙す側も相手を選ぶだろう。

騙され易い者が最悪に不幸だ。

騙されるから悪い。

騙されたから悪い。

それを、誰もが暗黙に理解している。

もし俺が騙されたとしたら、相手を恨んだりせずに、自分の愚かさを呪うだろう。

逆に、俺が騙した相手には同情しない。嘲笑もしない。蔑まないし、見下さない。ただ、騙して得られた利益を手に、満足感を噛み締めるだけだ。

そんなものである。

今回の事件で容疑者になってしまった者は、騙す側でも騙される側でもなく、巻き込まれただけの二次的被害者であり、加害者は警察である。その点は鈴檜さんに責任があるわけだが、原因を作ったのは俺なのでどうこう責めるつもりはない。

騙されたのは鈴檜さんと警察。

騙したのは俺。

選んだ選択肢が最善と知り、最高の結果に結びつくこと確信できたから、そして明日には最良の結末を迎えるだろうから、俺は今、十

分に満足している。

「真相を知ったら、鈴檜さんはどんなリアクションをするかな？」

俺は罪悪感の欠片もなく呟いた。

さてさて、立花鈴檜は明日、どんな言葉を持って俺を事件現場に迎え入れるのだろうか。

どの面下げて容疑者と対面するのだろうか。

想像するだけで胸が高鳴る。

明日が楽しみだ。

毎日、夜になったら眠る。そんな行為に果たしてどれくらいの意味があるのか、俺にはよくわからない。夜眠り、朝起きる。もしくは、昼間眠って夜活動する。どの道、人は眠る。まるで決められたノルマのように睡眠をとる。眠りを貪る。それはなぜだろう。

体内時計を安定させるためか？

何か学術的な意味合いがあるのか？

いつも不思議に思う。ベッドに寝転がり、瞼を閉ざし、意識を闇に解放する度に考えてしまう。

俺にはわからない。

三日に一回、二日に一回の睡眠では駄目なのだろうか。身体が眠りを要求するまで起き続け、意識のスイッチが切れたら寝る。眠いから眠り続け、目が覚めたから起きる。それでは駄目なのだろうか。非常識だと言われるだろうか。

そんなことはないだろう。

世の中には俺の考えているように、勝手気儘に起き続け、好き放題に眠る者もいるに違いない。睡眠欲の赴くままに生きるのは、ある意味、非常に人間的だと言えるだろう。

だけど、そう言う俺は毎日、結構規則正しく生活している。夜更かしするし、朝寝坊は日常茶飯事だけど、大まかな目で見れば、夜寝て朝起きるサイクルを守っているのだ。その行為に重要な意味があるかという点、別にない。大学の授業時間に合わせて起床しているだけであり、そこから逆算して最低限の睡眠時間を算出して床に着いているだけだ。余程の真面目人間でない限り学生全員が同様のサイクルで生活してのではないだろうか。学生だけでなく、社会人もそうだろう。例外としては、職に時間を縛られない人間と、今の俺のように休日を楽しまなければならない脅迫観念に苛まれていう変わり者ぐらいだ。そこまで時間に支配される生活、時間という

概念が人間の行動をシステムチックに制御しているのだとすれば、それをぶち壊して放り捨ててしまおうしかない。太陽という存在が時間という概念を生み出してしまうなら、それすらも破壊しろ。もしくは地下に潜れ。陽光を拒絶し、人類全員で地底人になって、時間に縛られない生活を満喫すればいいのだ。

なーんてね。

さて、お馬鹿な思考は強制廃棄しようか……。

俺は今、ベッドの上にいる。

現在の時刻は午前八時五分。

本来なら、まだ眠っていないくはならない時間だ。昨日ベッドに入ったのが四時頃だから、四時間ちよつとしか寝てない。俺の平均睡眠時間は六時間なので、計算上では二時間も睡眠を怠ったわけだ。もし、これが誰かに無理矢理起こされた結果であれば、中途半端な感情を怒りに換えて文句の一つも言い放ち、二度寝に突入するのが、今朝に限っては自分で目覚めてしまった挙句、快眠したのと同じくらい頭がスッキリと冴え、ジョギングでもしようかと血迷ってしまうほど体調が万全なのだから始末が悪い。せつかく早起したのだから、時間を有効に活用すればいいようなものだが、大した趣味もなく、仕事もなく、何かを率先して行おうという積極性もない俺には、こうしてただベッドに寝転がって下らない考えを巡らせているくらいしか時間を潰せないのである。

「こりゃ、マジでジョギングでもするか？」

俺はパジャマ姿のまま自室を出た。

勿論、ジョギングなどするつもりは毛頭ない。無責任な独り言を口走っただけである。一人でゴロゴロしていても退屈なので、リビングに顔を出して誰か起きてないか確かめてみようと思ったのだ。

この時間なら光理さんは起きているだろうし、密希もリビングにいるかもしれない。二人は時間潰しの相手として申し分のない存在だ。特に、光理さんは話をしていて楽しい女性である。

「さて、光理さんはいるかな？」

独り言を呟きながら、リビングへ入っていくと
ありゃ、誰もいねえぞ。

光理さんは町内会に参加しているとしても、密希はどうした？

まだ、寝てるのか？

俺は寝癖でぐしゃぐしゃの髪を掻き回しながら、キッチンに入っ
ていく。

すると、パタパタとスリッパの音を立てながら密希が姿を現し、
にこーっと満面の笑みを浮かべた。

「おにいちゃん、おはよー」

「ああ、おはよう」

軽い調子で挨拶を返す。

「おまえ、こんな朝っぱらからキッチンで何をしてたんだ？」

室内を観察しながら訊いてみた。

密希は呆れたような顔を作り、肩を竦めてガスコンロの方を指差
した。

「何してるって、決まってるでしょー。お料理だよー、お料理いー

！ おにいちゃんが起きてくる前に朝ご飯作っておこうと思って頑
張ってたんだよー。でも、今日はおにいちゃん、凄く早起きだから
ー、まだご飯できてないんだよー。ごめんねー。もう少し待ってて
よー」

「ああ、そうか。そりゃそうだよな。別に構わねえから、のんびり
作ってくれ。どうせ、今日は急ぎの用なんてないんだからな」

「はい。了解しましたー！」

密希は元気良く叫んでパタパタとガスコンロの前に戻り、お玉を
手にして鍋の中身をグルグルと掻き混ぜ始めた。

うーん、いつもながらに元気度百パーセントの美少女だ。見てい
て気分が良くなる。早朝という微妙なコンディションの中で心和む
など何年ぶりだろうか。

俺は自然と自分の方から義妹にコミュニケーションを図ってみた

くなり、彼女の背後に忍び寄って肩越しに鍋の中を覗き見た。

「何を作ってるんだ？」

「うわあーっ！ おにいちゃん、吃驚するじゃないのー。いきなり声をかけるのはー、密希の心臓に良くないんだよー。それに、驚いた拍子にお鍋を倒しちゃったら大変なことになっちゃうでしょー。気をつけてよー」

「悪い。おまえがそんなに驚くとは思わなかったから」

「驚くよー。おにいちゃんがそういうことするのー、珍しいからー。こんな風に密希に話しかけてくれたのってー、初めてなんじゃないかなー。いつつ密希の方から話しかけないとー、おにいちゃん、相手してくれないからー。だから、吃驚しちゃっても仕方ないんだよー。でもでも、こういうのは嬉しいかもー。これからも、おにいちゃんからお話してくれればー、密希は嬉しいんだよー」

密希は喋りながらお玉を置き、食器棚から大皿を取り出してテーブルの上に並べた。箸や茶碗も並べ、更にコップを用意する。本当にちよこまかとよく動く。働き者のシンデレラだ。何だか生き生きしてるし、朝食を作るといふ面倒臭い作業を嬉々としてやっている様子だ。素晴らしい義妹である。

文句の付け所のない女の子だな、と思った。

「手伝ってやるうか？」

自分でも驚愕するくらい腑抜けた台詞を口走っているのに、全く気にならない。キッチン内を所狭しと動き回る義妹の姿を見て、ついつい口が滑ってしまったのだろ。正気であれば即座に腹を切って自害すべき愚言だが、今の俺は特に気にせず自然体で振る舞っていた。

当然のことながら、密希は俺のおかしな様子に気づいた。

「おにいちゃん、どーしたのー？ 何だか今日は凄く優しいねー」

密希はフライパンに油を敷き、玉子を割って目玉焼きを作りながら、ちらちらと俺の顔を見て言った。

「優しい？ 俺が？」

俺は天地動転の指摘に驚いた。

「そうだよー。いつも優しいおにいちやんだけどー、今日は特別に優しい感じがするんだよー。いつもよりここにこしてるしー」

「ここにこ?!」

俺はシヨックを受けて顔を引き攣らせた。意識して表情を改め、いつもの仏頂面を装う。

「ああー、駄目だよー。そーゆーお顔よりー、ここにこしてるおにいちやんが好きだからー、そういうお顔をして欲しいんだよー。元に戻しちゃうなら黙ってれば良かったかなー」

密希は口先を尖らせて不満を表明した。そうしながらも、手際良く目玉焼きを完成させていく。

「目玉焼きの完成ですよー。テーブルに運んで下さいねー」

「ああ、お安いご用だ」

俺は皿を受け取り、テーブルの上に置いた。

三秒で事足りた。

「どうしてそんなにご機嫌なのー?」

「ご機嫌?!」

俺が、か?

そうか、気分が良いと自覚できるくらいに調子が上向きで、心晴れやかな状態だから、外面も機嫌良く見えてしまうのだろう。まして、日頃から無表情に近く、笑うにしても微笑する程度の俺が笑顔を浮かべているのだから、ご機嫌と思われるも仕方がない。

またもや、俺は笑顔を作っている自分に気づいたが、今度は仏頂面に戻さなかった。

感情がプラス表示の場合は笑うべきだ。人間としてごく自然なことでだろう。今までの俺が不自然だっただけ。

「別に、ご機嫌ってわけじゃねえよ」

ぶつきらばうな調子を装おうとしたが上手くいかず、言葉の端々から優しさの欠片が零れ落ちてしまう。それもしょうがない。なにせ、本日、煩わしい事件が完全に解決するのだから。

殺人事件の第二発見者となり、容疑者にされ、なんやかんやと不本意な気分を味わわれた日々を思い返せば、事件の解決を前にすると、誰でも自然と心が浮き立ってしまうに違いない。

この俺でさえ上機嫌になってしまう。

鈴檜さんの方は左右良に任せておけば何の心配もない。今頃は終章に向けての準備を無事に終えているだろう。そして、俺は舞台の幕が開けるのを待つだけだ。まあ、事件が解決してしまうと鈴檜さんと会えなくなってしまうので寂しい気もするが、俺は女刑事と息の長い付き合いをするほど奇情な冒険心の所有者じゃないから、今日できつぱり、さつぱり、すつぱりとお別れである。

自分の潔白を証明し、守るべき者を守り、必要のない者を切り捨てる。それで十分だし、俺としては最善を尽くしたつもりだ。どんな結果が出たとしても後悔はしない。

「今日はさやかちゃん、来ないのか？」

「あー、おにいちゃん、もしかしてー。さやかちゃんのことー、好きになっちゃったのー？ それは駄目なんだよー。密希のことをもっと好きになってくれなきゃー」

「ははは、何言ってるんだか……。俺が中学生なんか好きになるわけがねえだろ。まあ、密希は義妹だから、例外的に《好き》だけだな。好きつつても家族の好きだけど……。それに、何を言っても俺は彼女持ちだぜ。おいそれと浮気はしねえよ」

密希の頭に手を乗せてグリグリしながら言うと、彼女はにへーっと頬を緩ませて首筋まで桜色に染めた。

「密希もおにいちゃんのこと大好きだよー」

密希はそう元気良く叫んだ。

余程恥ずかしかったのか、俯いたまま冷蔵庫へ走っていき、中がさがさと漁って納豆のパックを取り出した。そして、赤くなつた顔を隠すように納豆の用意を始める。

「今日はー、さやかちゃん、朝から部活があるんだよー」

密希は箸で納豆を掻き混ぜつつ言った。

糸を引く納豆と美少女のコントラストは見る者を萎えさせるが、ある種の美を感じさせる要素がなきにしもあらずだ。いわゆる醜美のギャップってやつ。

「へえ、さやかちゃんは朝から部活動か……。ん？ でも、連休中は部活の練習がないって言ってなかったか？」

「言ってたよー。本当は今日から休みだったんだよー。だけど、昨日の練習をサボっちゃったからー、顧問の先生に怒られてー、今日も練習に出なきゃなんないんだってー。大変だよー。ちょっと可哀想かなー」

なるほど、そういう理由か。昨日、さやかちゃんは二日酔いで部活動をサボタージユしたからな。しかも、無断欠席で。だから、怒られるのも当然だ。自業自得である。

「まあいい。それで、さっきの質問に対する答えは何だ？」

俺は椅子に腰を降ろし、プチトマトを一つ摘まんだ。

「あつ、おにいちゃん！ 食べるのはー、いただきますしてからだよー。今日は密希も一緒に朝ご飯食べるんだからー、フライングは駄目なんだよー。お行儀悪いって叱られちゃうんだからねー。でも、さっきの質問でなにー？」

「何作ってるのか、最初に訊いただろ」

「あー、そうだったねー。んーと、今朝は和食なんだよー。白身魚の照り焼きと和風目玉焼きだよー。あとは、お味噌汁とサラダだねー。納豆もあるからたくさん食べて下さいねー！」

「あー。今日も朝から満腹状態か……」

二つ目のプチトマトに伸ばしかけた手を引っ込めて苦笑。

なんか、日を追う毎に朝食のメニューが一品ずつ増え、一皿に盛られる料理の量が増しているように思える。俺の気のせいか？ それとも何かの陰謀か？ 連休中に俺の体重を十キログラム増加させる計画が密かに企てられているのか？ これ以上、デブらせてどうする？ そんな意味のない計画が進行しているとは考え難いが……。

密希は二人分の料理を手早く皿に盛りつけ、茶碗にご飯をよそい、

味噌汁をお椀に注いで、朝食の準備を終えた。そして、いそいそと俺の正面の席に腰掛ける。

「それじゃー、朝ご飯を食べましょー」

「おう」

「いただきまーすー」

密希は礼儀正しく手を合わせ、元気良く叫んだ。

「……………」

俺は頷くだけ。別に、礼儀知らずってわけじゃない。日頃の習慣の違いってやつだ。感謝の気持ちは自分なりにいただいている。

しばらくの間、会話をせず、テーブル上の料理を食べる作業に専念した。

旨い物を食べている時、人間は自ずと無口になるものらしい。特に、俺みたいなグルメ気取りの贅沢人間は、素朴で味わい深い料理を口にする機会など滅多にないので、こうして義妹が一生懸命作ってくれた料理を食べていると妙に感動し、変な感情を持て余して、黙々と箸を進めてしまうのだ。

こんな料理を毎日食べられたら幸せだろうな、という思い。

心を下へ下へと引つ張っていく闇色の魔手の存在を忘れてしまうほど、心穏やかになっている。

そう思っている自分に気づいていても自己否定しようとしない。

これって、俺が密希のことを家族として認めたいゆえの想いなのだろうか。自分自身に欠落している大切なものを、義妹と接することで獲得できたのだろうか。それとも、偽りの家族を相手に、本当の家族になった気分浸って、浮かれ、勘違いしたまま家族ごっこを楽しんでいるだけなのか？

わからない。わかりたくない。

「おにいちゃん、今日の予定はー？」

食事を終えて、後片付けを二人で手分けして済ませ、リビングに移動して一息入れている時に、密希が訊いてきた。

俺はタバコに火をつけながらぐしゃぐしゃの頭を掻き回す。

「予定か？」

天井を見上げる。

「たぶん、刑事さんから連絡が入って白岐学園に呼び出されると思うけど、それがいつになるかはわかんねえな。帰りがいつになるかわかんねえし、最悪の場合は帰ってこれないかもしんねえし……」
最後の部分は密希に聞こえないように言う。

ミルクティーの入った陶器製のコップを両手で包み込むような形で持ちながら、密希は少しお行儀悪く両足を水泳のバタ足みたいに上下させた。

「今日も警察の人に呼び出されたのー？ おにいちゃんって疑われてるのかなー？ 逮捕されちゃったりするのかなー？ そんなことないよねー？ 密希はそんなのヤダよー」

急に泣きそうになって俺の立場を心配する。

そもそも俺が事件に関わる要因となったのが、被害者の野口とその協力者である忍ちゃんに誘い出された密希なのだ。義妹が俺に同行を求めさえしなければ事件は起こってないし、俺は容疑者に名前を連ねていなかっただろう。だけど、俺が一緒について行かなければ、密希は確実にレイプされていた。犯され、撮影され、脅迫されていたに違いない。それを考えれば、今の状況は最悪ではない。最低でもない。俺は自分の選んだ選択肢に満足している。だから、それに関して、密希が申し訳なく思う必要などない。

「そんな顔すんな。似合わねえぞ、密希。この事件は今日で終わりなんだ。どんな形で決着するのかわかんねえけど、一応の解決に至って捜査終了ってことになると思う。俺たちの容疑も目出度く晴れて無罪放免、自由の身ってわけさ。だから、密希は安心して留守番しとけ。わかったな？」

「密希も一緒に行っちゃ駄目かなー？」

「そりゃ、駄目に決まってる」

「でもー……」

「デモも革命もねえ。おまえは家で大人しく留守番してる。いいな？」

「はい……」

密希は納得のいかない面持ちで返事をした。

「よしよし、おまえが素直で聞き分けの良い義妹で俺は嬉しいぞ。連休中はおまえのワガママを聞いてやるから楽しみにしてろよ」

そう言っただけで、密希は屈託のない笑顔を取り戻して「はい」と返事をした。

まあ、密希が幾ら表面的にごねて口答えしようとも、俺の命令に反発したり、反抗したり、反論したりできるわけがない。義理の妹は、笑顔を浮かべながらも絶えず俺の顔色を窺い、反応を観察し、機嫌を損ねないように気を配っているのだから。いじらしいと言っただけで、憐れと言っただけで、可哀想と言っただけで、

そんな姿を目の当たりにしても、以前は何も感じなかったが、今は……。

しかし、同時にそうまでして仲良くなりたいのか、と皮肉な感想もいだいてしまう。

俺は筋金入りの捻くれ者なのだ。

情けないよな……ほんとに。

【2・天園陽影】

白岐学園へ来るように鈴檜さんから連絡を受けたのは、時計の針が午後一時を示す直前だった。

「事件が解決に至ったので二時までには白岐学園にいらして下さい。詳細は視聴覚室で説明させていただきます」

その言葉を受けて、俺はにんまりと顔を綻ばせてしまった。左右良が上手く計らって事件を解決に導いたらしい。

心配顔の密希を残し、俺は決戦の地へと出陣した。

その途中、一度、自宅マンションに立ち寄り、この三日間着の身のままであった服を着替えた。

クライマックスに相応しい格好をして赴くのが容疑者として最低限の礼儀というものだろう。

ベッドには生理痛での半死半生状態から息を吹き返した風守玲佳の姿があり、俺の着替えを手伝おうと身を起こしかけたが、それを手で制しておいてクローゼットを開く。そして、皮ジャン、皮パンツ、銀細工の装飾品をジャラジャラと身に着ける、というメタル調の反社会的スタイルを装った。

俺なりの無能な警察に対する意志表示だ。この事件を通して感じた憤りをストレートに表現したのである。鈴檜さんが理解してくれば良いのだが……きっと無理だろう。期待はしない。無視されるか、白眼視されるのが関の山だ。これは、優等生好みのスタイルじゃねえし。

自宅マンションを出る間際、俺は玲佳にあるお願いをしていた。頼みを聞いた玲佳は上半身を起こし、漆黒のストレート髪を撫でつけ、冷笑に近い薄笑いを浮かべて、俺の目を真っ直ぐに見つめた。「貴方の命令に従うことが私の任務であり、存在理由なのです。それが要望であるなら、例えばこの身が朽ち果て滅び去るうとも……」

「あー、そういう奴隷紛いの戯言は聞きたくねえ。口を閉じてる
「はい」

玲佳は唇に沿ってチャックを引く動作をし、ゆっくりとベッドに横たわって掛け布団を首までズリ上げた。

「まだ辛いのか？」

玲佳は首を横に振った。

「風邪とかか？」

再度、首を振って否定。

「じゃあ何で糞真面目なおまえが真昼間まで寝てるんだ？」

「不貞寝です」

玲佳は僅かに上体を起こし、口のチャックを開く動作をしてから答えた。

「……………」

なるほど。せつかくの長期連休、一切構ってやれないことで不貞腐れちまったってわけか。金の件で頼らなかったことも根に持つてるかもしれない。いや、単に拗ねてるだけか？ まあいい。

俺は苦笑を残して自宅マンションを後にした。

一路、白岐学園へ向かう。

その途中、駅前の交差点で赤信号に引っかかり、そこで中等部の制服を着た見覚えのある女の子の後ろ姿を発見した。

俺は咄嗟にクラクションを鳴らした。そして、愛車を歩道に寄せて声をかける。

「お嬢さん、乗ってくかい？」

他人が聞けば、名門女子学園に通う美少女をナンパする、不埒で身の程知らずの軽薄者と思われるってしまう台詞だろう。けれど、声をかけられた女の子は、振り向いて微笑み、無警戒の気安さで駆け寄ってきた。

重道忍である。

「お兄さん、こんにちは」

ぺこつと頭を下げて挨拶をする忍ちゃん。ドアを開けてやると、躊躇なく乗り込んできた。

「おいおい、俺が万が一にも邪な企てを秘めていたらどうするつもりなんだ？ 野口や西川に酷い目に遭わされたのに、そんな警戒心のなさで良いのか？」

「少しは学習しろ、と思ったが、忍ちゃんの俺に対する信頼感がなせる行動だと理解しているので、頭の固い大人みtainな忠告は控えておいた。」

「忍ちゃんも呼び出されたの？」

「聞くまでもないが一応確認した。」

「はい。立花刑事から連絡を受けたので、休日登校しました。午後二時までに集合しなきゃならないんですね？ 私、電車通学だから大変です。でも、事件が無事に解決したそうですから、最後だと思えば足も軽やかですよ。」

忍ちゃんの顔は、レイプ被害者という苦悩が綺麗に洗い流され、明るく輝いているように見えた。

「というか若干のハイテンション。彼女を苦しめていた全てが払拭（レイプされた記憶は一生消えないだろうけど）されようとしているのだから、心浮き立つのも無理ないだろう。」

俺も同様の気持ちである。

「そうだね。日本の警察は優秀だから、こんな事件なんかさくつと解決しちまうんだろうね。」

「ああ、よかつた……。」

忍ちゃんは胸の前で手を組み合わせ、祈るようなポーズで安堵の吐息を漏らした。

「でも、一体誰が犯人なんでしょうね。昨日は全然見当ついてないみたいだったのに、今日になっていきなり解決だなんて……不思議です。お兄さんの意見は？ 誰が犯人だと思いますか？」

「うーん。それはわかんねえよ。誰が犯人かって考えるよりは、自分が犯人にされちまわないように祈ってるところだよ。」

冗談ぽく言ったが、俺は結構本気だ。失敗は成功の母という言葉があるけど、今回の場合はそれが成立しない。失敗したら人生が終わる。ジ・エンド、だ。

「心にやましい気持ちがあれば、疑われたりしないと思いますよ。いくら容疑者って言っても、私たちは人殺しじゃないんですから。そうでしょ？ 心配いりませんよ」

俺の方が元気付けられる始末。

「そうだといいんだけどね……」
皮肉な微笑。

日本警察が公明正大で、優秀で、正義に適った組織であれば、今まで一度として誤認逮捕などなかっただろう。冤罪事件で涙を流す容疑者もいなかったはずだ。警察の絶対的正義を信じる者など今の世の中には存在しない。警察は間違いを数知れず起こす組織……。そんな認識が大勢を占めているのが現状である。過去の例に倣って今回も誤認逮捕されない保証などない。いくら鈴檜さんが有能な刑事であっても、否、優秀だからこそ、俺を逮捕しない保証がないのだ。

「密希ちゃんは一緒じゃないんですね……」

忍ちゃんが、今気づいたみたいに訊いてきた。突然、疑問に感じたらしい。昨日も一緒じゃなかったのに、なぜ今日は疑問に思ったのだろうか。

「あいつは家で留守番してる」

「そうなんですか。ちよつと残念かな……。密希ちゃんがいると心強いですけど。お留守番なら仕方ないですよね」

彼女は少し顔を傾けて、寂しそうに笑った。

ああ、そういうことか、と俺は納得。

忍ちゃんが今頼りにしてるのは、家族を除けば密希と俺だ。年の離れた俺よりも、クラスメイトの密希にサポートを求める心理は理解できる。密希は傍にいただけで安心感というか、事態を楽観視させてくれるというか、不思議と不安感を忘れさせてくれる雰囲気

醸し出しているから、仏頂面で陰気くさいデブ男なんかよりも数倍頼りにできるのだろう。でも、それはそれで心外だった。

「こんな俺でも結構頼りになる男だよ。頼ってくれとは言わねえし、頼られたくねえけど、密希の方がマシって言われちゃ黙ってらんねえぞ。っていうか、俺ってあいつより信用ねえのか？」

「ああつと、えー……そういうわけじゃ……」

しまった、という内心を表情で吐露し、忍ちゃんは慌てて弁解を始めた。

その態度が既に心外である。

「違うんです。別にお兄さんが妹さんより信頼できないんじゃないんですよ……。お兄さんて基本的には優しいんですけど、要所所で怖くなるっていうか、肝心な時に自分第一主義っていうか……」

何か酷い台詞でさらっと罵られているような気がする。間違っていないから余計に悪い。もしかすると、忍ちゃんは無意識に俺の本質を察知しているのかもしれない。

「他に誰が呼ばれたか聞いてる？ 昨日、視聴覚室にいた人間は全員呼ばれたとして……。あ、まあ、刑事さんを殺して逃走した紗枝ちゃんには来ないだろうね。あとは……。さやかちゃんとか野口や西川さんの家族とか呼ばれそうな人間がいるけど……。そこんとこ、何か聞いてない？」

「いえ、何も聞いてません。さやかちゃんは部活があるって言うってたから呼ばれても来ないと思います……。でも、本人に聞いたわけじゃないから、確かなことは言えません。あの子、ちょっと苦手なんです……」

「そうか、苦手か……」

事件前の騒ぎで忍ちゃんとさやかちゃんは激しくぶつかっていたから、二人がわだかまりを捨てて仲良しクラスメイトになるのは難しいのかもしれない。密希というクッションが間に挟まっていれば二人は上手く接していけるのだろうが、二人が直接仲良くなるには心の距離を縮める時間とお互いの譲歩が必要だろう。さやかちゃん

て意地っ張りな性格してそうだもんな。

「野口君の家族は来ないと思います。あそこのご両親は野口君のことを邪魔者扱いしていたみたいだし、お通夜の時も全然悲しそうじゃなかったから……」

「へえ」

俺は気のない声を出した。

野口の家事情など知ったことではない。気になった点と言えば、忍ちゃんがレイプ魔の通夜に出席したことくらいだ。

散々酷い目に遭わされた男の葬式に出るなんて、常識に照らし合わせて考えても普通の行動じゃない。理解不能の心理である。

なぜ、忍ちゃんは通夜に出席したのか？

考えられる理由はただ一つ。野口竜一郎に好意を持っていたからだ。出会った形がどんな酷いものであれ、結果として心が通じ合えたのならそれで良いと思うし、忍ちゃんが一秒でも幸せを感じたのなら、他人が口を挟む筋合いの話ではない。それが、たとえ、惨めな自分を救済するために自己暗示を施した結果だとしても。

そう言えば以前、密希がデパートで忍ちゃんを目撃した際、二人が仲良さそうにしてたって言ってたっけ……。それに、俺が野口を気絶させた時も、やたらと心配していた。その辺りを踏まえると納得できなくもないか？ まあ、どうでもいいことだが。

午前二時の十五分前、俺たちは白岐学園の駐車場に到着した。

前日と同じように駐車場のド真ん中に停車しようと思っただ、生憎と先着の車が停まっていた。

純白のポルシェ。立花鈴檜の所有車だ。

今日に限っては、正門から直接《H校舎》の玄関前に乗り入れなかったようだ。それとも、自動車はちゃんと専用の駐車場に止めるように、と学校関係者から注意をされたのだろうか。でも、これだけ閑散としている駐車スペースの中から、俺の指定位置を選ばなくてもいいだろうに……。

新手の嫌がらせか？

俺は渋々ながらにポルシェの隣りに駐車し、車を降りた。

今日は警備員が寄ってくる気配がない。それどころか警備員の姿が見当たらない。連休中なので彼も休暇中なのかもしれないが、だからこそ警備を強化すべきだろう。上靴とか収集している変態が侵入したらどうするんだ？ そう思ったけど、学園内に不審者が侵入しようが、殺人事件が起ころうが、俺の知ったこっちゃなかったので、警備員については頭から排除した。

運動場の外周に沿って歩いてしていると陸上部の集団を発見。同時に、さやかちゃんの姿を見つけた、というか、あちらが俺たちを目敏く見つけて、練習を放ったらかして駆け寄ってきた。

彼女の格好は初対面の時と同じ、ゼッケン付きのランニングシャツに短パン姿。大粒の汗が小麦色の肌に輝いていても健康的である。

「おいつす！ 珍しい組み合わせだね。こんなところで何してんの？ デートとか？」

さやかちゃんは息を弾ませながらも、俺たちをからかうように言った。

「似たようなもんだよ」

そう言おうとしたが、横から忍ちゃんが滑稽なくらい大袈裟に手を左右に振って飛び出し、デート説を完全否定した。

「ち、違う違う！ 違うんだよ、さやかちゃん。デートじゃなくて刑事さんに呼び出されたんだよ。取調べなの！ 尋問なの。私たち、容疑者だからっ！」

なんだかムキになって否定している……。そんなにデートと誤解されたくないのだろうか。

俺って、もしかして嫌われてる？

「あははは。忍っちってば、そんなに強く否定しなくてもいいよ。ちゃんんとわかってる。密希抜きでお兄さんとデートするなんて許

されないし、学校でデートなんか普通しないよ。第一、お兄さんとのデートを万が一、密希が許可したとしても、あたしが許さないから。抜け駆けは駄目だかね」

さやかちゃんは腰に手を当てて、忍ちゃんを軽く睨んで言った。

勿論、冗談であろう。

でも、それを真に受ける忍ちゃん。

「あ、うん、大丈夫。絶対に抜け駆けしないよっ。誓う。安心していいよ」

押され気味で腰引けまくりだけど、さやかちゃんに凄まれても気分を害した様子はない。苦手だと言った割には仲良くしている。

《忍うち》って渾名で気安く呼ばれてるし……。この分なら放っておいても問題なくクラスメイトとして、友達として付き合っているだろう。

「あつ、お兄さん。もうすぐ二時ですよ！ 急がないと集合時間に遅れちゃいますっ！」

さり気ない動作で腕時計を見た忍ちゃんが注意を喚起した。

別に、俺は遅刻しても気にしない。鈴檜さんも目くじらを立てて怒ったりしないと思う。でも、現役の中学生であり、校則が厳しい白岐学園の生徒であり、真面目な性格の忍ちゃんとしては、一、二分の遅刻が罪悪感に結びつくのかもしれない。ここは彼女の意味を尊重して急ぐとしよう。

「あたしも一緒に行つてあげよつか？」

そんな戯言をほざく小娘を優しく且つ強引に部活の練習に戻らせ、《H校舎》に入り、例によって来客用のスリッパに履き替え、四階をを目指す。

途中、鈴檜さんの部下らしき垂れ目で長身の優男とすれ違い、鋭い視線で突き刺されたが、無視して視聴覚室に入った。

室内には二人の大人の女性と二人の女の子、計四人が、それぞれ思い思いの場所で佇んでいた。

面子は以下の通りである。

女刑事の立花鈴檜。

美術教師の葦澤和音。

生徒会長の無堂百合子。

美術部員の富士原美空。

そこに、重道忍ちゃんと天園陽影が加わって全員集合というわけだ。

「いつも通り、時間ギリギリでのご登場ですね。もっと時間に余裕を持って行動できないのですか？」

入室早々、冷徹な嫌味。腕組みをした鈴檜さんが事務的な口調でチクチクと毒針を刺してきた。

主人公は常に遅れて登場するものですよ、と心の中で返答したが声にはしない。彼女も気の利いた台詞など求めてないだろう。

「こんにちは」

「太つちよのお兄ちゃん、こんにちはー！」

俺が部屋に入っていくと美空ちゃんと百合子ちゃんがそれぞれ個性に合った挨拶をしてくれたので、「やあ」と返事をしておいた。

今時の若い子は挨拶などできない礼儀知らずばかりだと思っていたが、名門女子学園だけあって躰が行き届いている。ちなみに、俺は礼儀礼節を気にしない大らかな人間である。

「えー、全員集まったようなので、早速本題に入りましょう。宜しいですね？」

鈴檜さんは束ねていた腕を解き、部屋の中央に移動して声を張った。

「始めるって、今日は一体何をしようとかしら。昨日のように、あらぬ疑いを私たちにかけて、無理矢理犯人に仕立て上げようというのですか？」

女刑事嫌いの和音さんが初手からアクセル全開で噛みついた。

質問というよりは攻撃に近い口調だ。今日、急遽集合をかけられた理由を知っているの台詞だから始末が悪い。レベルの低い嫌味が

込められている。昨日、犯人扱いされて相当頭に来ているのだろう。「……いえ、昨日まで捜査を行う上で働いた無礼、非礼、失礼の数々は、後程幾重にもお詫び致しますが、その前に事件の真相を語らせて下さい。宜しいですか？」

鈴檜さんは凜とした面持ちで確認した。

和音さんの攻撃にも全く揺らいだ様子がなく、毅然として申し訳なさの欠片も見せない。むしろ、私は犯人逮捕のために刑事として最善を尽くしたのだから責められる筋合いはない、とでも言うような態度である。

ん？ ちよつとまで。今、彼女は何て言った？

事件の真相とか言わなかったか？

真相？ 真実の様相？

つまり、犯人が判明したって言うのか？

真の犯人が？

真犯人……。

俺は、自分の心臓が勢い良く跳ね上がるのを実感した。まるで、耳元で鼓動音が鳴り響いているようだ。

デカイ重低音。

ドクンドクン。心臓が痛い。

全身の血液が物凄い圧力で血管内を流れている。

動揺している自分を抑えられない。

落ち着け！ 俺は冷静な人間だ。

「真相を語るとはどういう意味ですか？ 犯人を特定できたという意味でしょうか？ 私たちを召集して真相を明らかにするからにはこのメンバーの中に犯人がいることになります。しかし、私たちの無実を昨日の時点で証明されたのではないのですか？」

そう言つて、百合子ちゃんはメガネのフレームに手を添え、くいと持ち上げてレンズの角度を調節した。

「まさか、警官を殺害して逃亡した小野寺さんが犯人なのですか？ それとも部外者が犯人だったのでしょうか？」

「野口竜一郎の死に小野寺紗枝は関与していません。それに、部外者という表現も適切ではありません。犯人という言葉を用いる必要もありません」

「えーっ。それってどーゆー意味ですかあ？ 美空ちゃん、わかりませーん」

美空ちゃんは頭を抱えて苦悩のポーズを作り、彼女特有の甘ったれた声で訊いた。

本当に理解できないのかい、美空ちゃん？ 思考しようとしてないだけじゃないのかい？ 俺は理解できたぞ。そして、理解したからこそ全身を侵していた動揺が消え去り、落ち着きを取り戻せたのだ。脇の下に冷や汗が溜まっていて気持ち悪かったけど、それに勝る安堵感が俺を心地よく抱擁してくれていたので、不快ではなかった。

「もったいぶらずに結論から言ってしまうでしょう。野口竜一郎の死因は首吊りによる自殺です」

鈴檜さんの口から放たれた言葉を、容疑者として厳しい取調べを受けていた女性陣がどう受け止めたか、俺はじっと観察した。

なるほど、と頷く生徒会長。

それ見たことか、やっぱり私たちは犯人ではなかったでしょう。

昨日まで散々犯人扱いしてくれたお礼はきっちりとお返ししますから、首を洗って待ってなさいよ、とでも言いたげな美術部顧問。

自殺と聞かされた途端、痛ましげな面持ちで目を伏せた被害者の協力者。

そして、いつもの笑顔を消して無表情になり、心の動きを窺わせる美少女。

四人が四人とも異なった受け止め方をしたようだ。

「自殺って、どういうことですかあ？」

甘ったれた調子はそのままだに、いつものテンションを五段階落としたような声で美空ちゃんが訊いた。

「自殺と判断した根拠は何なんですか？」

百合子ちゃんも訊いた。

「それを今から順に説明していきます」

鈴檜さんは再び腕組みをして、ちらりと俺の方へ視線を移した。魂を砕くような凄烈な眼光だったので内心によるめいたが、表面的には平静を保った。

「まず、この事件がそもそも何を発端として始まったのか、そこから話さなくてはなりません」

鈴檜さんは視線を窓の外へと移動させ、何も無い宙空を見据えるように眼光を強めた。

「被害者……いえ、自殺した野口竜一郎は、西川不二彦を主犯とする集団婦女暴行の常習メンバーでした。彼らが一体いつ頃からメンバーに加わって、女性を暴行し、その一部始終を撮影して、自分たち隷属するように脅迫していたのかは判明していません。最も古いテープに記録されていた日付けが四年前なので、その時期もしくはそれ以前から犯行を重ねていたと思われる。しかし、その事実には明るみにはなりません。暴行された被害者女性が誰も警察に被害届を出さなかったからです。出せなかったのでしょうか。ゆえに、彼らは調子に乗って犯行を繰り返しました」

忍ちゃんは顔を真っ青にして、自分自身を抱き締めるように両腕を回した。

美空ちゃんはいつの間にか俺の隣りに寄り添っていて、ぎゅっと手を握ってきた。

二人とも、西川と野口がいなくなった現在でも、凌辱された記憶を呼び起こすような話題になると酷く動揺してしまうのだろう。男の俺が理解するのは難しいが、相当辛い体験だったことはわかる。

「そして、連休前、学園一の美少女として名高い綾瀬密希さんの存在を聞かされていた野口は、彼女のクラスメイトである重道さんに協力を強要し、休校日に無人の視聴覚室へと密希さんを呼び出させました。ここまでは彼らの計画通りでした。今までのように、密希さんをレイプできると思っていたでしょう。しかし、思わぬ邪魔が

入り、計画は失敗に終わります。同様に騙されて被害にあった女の子の口から、重道さんに関する悪い噂が学園内に流されていたので、密希さんはお義兄さんと同行を求めて身の安全を図ったのです。重道さんがレイプ犯に協力する女として噂されていたわけではないようですが、悪事に手を染めている要注意人物として危険視されていたようです。それについては、職員室でも話題になっていたそうですよ」

忍ちゃんは俯いて唇を噛み締めていた。自分が犯した罪の重さを改めて実感したのかもしれない。今更後悔しても遅いが、今からでも贖罪は可能だろう。彼女には頑張つて生きていつて欲しいものである。

「そして、事件当日、密希さんは約束を守り、陽影君と共に白岐学園を訪れました。車を教職員専用駐車場に停め、警備員と一言二言言葉を交わして、この《H校舎》に入ります。校内はほぼ無人でしたが、四階に向かう途中で黒門さやかさんと遭遇しました。密希さんが休日登校した理由を聞いた黒門さんは、彼女が危険な目に遭うのではないかと危惧して同行を申し出ました」

鈴檜さんはそこまで話しておいて一度区切り、視線を外から黒板に移して話を再開した。

「視聴覚室に着いた密希さんは、無警戒で室内に入ろうとしましたが、ドアのすりガラスに映る人影に気づいた陽影君に制止されました。危険人物が待ち伏せている可能性に思い至ったからでしょう。そうでしたよね、陽影君？」

同意を求められ、俺は「その通りです」と答えた。

鈴檜さんは微笑んで頷いた。

「陽影君は義妹さんと黒門さんを待たせておいて、自分の身をもつて安全確認をするべく、ドアを開けて室内に入ろうとしました。そこへ、身を隠していたつもりの野口が襲いかかったのです。入ってきた相手が密希さんだと思込んでいた野口は、用意していたスタンガンで楽に気絶させられると思ったでしょう。しかし、相手は義

妹を守るためなら酷い暴力も辞さない大学生の男性でした。すかさずスタンガンを押し当てましたが、逆に押さえ込まれて倒されてしまいます。しかも、倒れた後に顔面を蹴りつけられ、自分の方が気絶させられてしまいました。計画は大失敗です」

事件当日の経過を聞かされ、百合子ちゃんは俺の顔を見た。へえ、そんなことがあったのですか、という表情だった。

美空ちゃんはやたらときらきらした目で俺を見つめ、繋いでいる手を強く握り締めてきた。

何なんだろう……。

「ここからが事件の要点です。その後、重道さんと密希さんは和解しました。そして、気絶状態にある野口を警察に突き出さず、教師も呼ばず、視聴覚室に放置したまま廊下に出ました。黒門さんは部活動の練習へと戻り、重道さんは野口の安否と西川の動向を気にしつつも帰宅しました。陽影君と密希さんも帰路につこうとしましたが、彼は尿意を我慢できず、途中で四階のトイレに立ち寄りました。当然、密希さんは廊下で待たされました。その間、約十分。視聴覚室では、気絶から覚醒した野口が自分の置かれた状況に絶望していました。計画が失敗した今、警察沙汰は必至です。逮捕されたりすれば、今日まで犯してきた数々の婦女暴行が全て明るみに出てしまいます。名門女子学園で逮捕された強姦魔の汚名を背負って今後一生生きていかなくてもなりません。視聴覚室に姿を見せなかった西川の助けも期待できません。完全に八方塞です。追いつめられた野口は、その瞬間に死を決意したのでしょうか。彼は自分で持ち込んでいた白い麻縄を使用し、黒板の上部に付いているフックを支点にして、首吊り自殺を図りました。その後、書類の束を抱えた無堂さんが生徒会室から視聴覚室を訪れ、彼の死体を発見するに至ったのです。当然、無堂さんは悲鳴を上げました。その時、丁度、トイレから出てきた陽影君が悲鳴を聞きつけ、密希さんと共に視聴覚室に戻りました。陽影君は、無堂さんと密希さんに教師を職員室から呼んで来るように指示し、自分は野口が死んでいるかどうか確認する為

に視聴覚室に入りました。その間、葦澤先生と富士原さんは美術室で絵を描いていたので、警察が到着するまで騒ぎに気づきませんでした。美術室もそれなりの防音効果が施されているそうですから、室外の騒動に気づかなくてもおかしくはありません。数分後に警察が到着し、みなさんは容疑者として警察署へ連行されました……というのが事件当日のこの真相だと思われれます。断定はできませんがね。おわかりいただけでしょうか？」

鈴檜さんは話し終わると苦渋に満ちた顔を俯けた。

悔しそうな、苛立たしそうな、残念そうな、諦めたような、複雑な表情だった。それは感情のミックスジュースだ。俺好みのジュースである。でも、事件を解決した刑事が浮かべて良い表情ではない。彼女はいまだに、この事件が自殺ではなく他殺であり、このメンバーの中に犯人がいると考えているのだろう。それなのに自殺という形で捜査を打ち切られてしまうのだから、憤りを覚えてしまうのも無理ない。

「美空ちゃん、よくわかりましたあ！ 刑事さんが言ったのって、つまり、悪いことしようとして、逆に太っちょのお兄ちゃんにやつつけられちゃったから、今まで悪いことしてきたのを隠し通せなくなって、自棄になって自殺しちゃったってことでしょ？ ってことは、太っちょのお兄ちゃんが、あのレイプ魔を退治したってことだよねっ！」

美空ちゃんは零れ落ちそうな笑顔で俺の手をブンブン振り回しながら、脳味噌を破砕するくらいの超音波的ハイトーンで叫んだ。

「凄く感謝されているみたいだけど……それって、俺が野口竜一郎を殺したと言っているのと同じだぞ。不本意である。心外だ。俺を間接的に犯罪者呼ばわりするな、と怒鳴りたくなる。」

すかさず俺をフォロワーしてくれたのは、百合子ちゃんだった。

「陽影さんが野口竜一郎を殺した、というニュアンスの表現を用いるのはいささか問題があると思います」

「そんな難しいこと、美空ちゃんはわかんないもん。太っちょのお

兄ちゃんが美空ちゃんの仇を討ってくれたのは本当だもん！ それでいいんだもん！」

小学生か幼稚園児のごとき理屈を用いて断言する美空ちゃん。

生徒会長は呆れ顔だ。

俺は発する言葉もない。

もう何とでも言ってくれ。レイプ魔殺しのヒーローとでも渾名して嘲ってくれ。

そんな俺たちを無視して、ヒールの音を鳴らしながら鈴檜さんに歩み寄った和音さんは、険しい顔のまま真正面から睨みつけた。

「お話が終わったのであれば、もう帰らせていただいても宜しいかしら、刑事さん？ これでも私は結構忙しい身なのです。こんな下らない茶番に付き合っている暇ありません。それとも、まだ話足りませんか？ 例えば、私たちを犯人扱いしたことに對する謝罪の言葉とか、この三日間、生徒たちの大切な授業時間を潰してしまつたことへの謝罪の言葉とか、その他色々……ありませんか？」
皮肉たっぷり、嫌味満載の台詞を憎々しい口調で言い放つ和音さん。

だけど、女刑事は小揺るぎもせず、眉一つ動かさず、能面のような無表情を維持した。

「謝罪ならばお望みの言葉をお望みの数だけする用意はできていますが、忙しくて聞いている時間が惜しいと仰られるのなら、どうぞ早々にお帰り下さい。私からみなさんへお伝えすることは、これ以上ございません」

感情の込められていない台詞を淡々と吐き出す女刑事。口では謝罪すると言っておきながら、「ごめんなさい。ご迷惑をおかけしました」という言葉が出てこない。頭を下げもしない。申し訳なさそうな素振りも見せない。謝る気など皆無。それを、部屋にいる全員が感じ取っていた。

和音さんは眼光を鋭くし、肩を怒らせ、どうにかして謝罪の言葉を引き出せないものかとしばらく思索している様子だったが、三十

秒ほどで忍耐力を使い果たし、「ふん！」と荒っぽく鼻息を吹いて視線を外した。

「帰らせていただきます！」

和音さんは激しい苛立ちを隠しもせず吐き捨て、ヒールの音を必要以上に鳴らしながらドアに向かった。床に穴が開くんじゃねえかと心配になるくらい、力強い足取りだ。彼女はドアの取っ手に手をかけ、最後に室内の全員をひと睨みし、そして、立ち尽くしている美空ちゃんに気づいた。

「富士原さん、帰りましょう。先生の家でコンクールの絵を仕上げなくてはなりませんからね。そんな男と手を繋いでないで、こちらへいらつしやい」

和音さんは手を差し出して言った。

今までの怒鳴るような低いトーンではなく、美空ちゃんを優しく諭すような柔らかい調子だった。

言われた美空ちゃんは一瞬、拒否したような顔をして隣りにいる俺を見上げたが、もう一度和音さんに促され、そして俺に背中を押されると、大人しく先生の下へと駆け出した。

「バイバイ、太つちよのお兄ちゃん」

帰り際に手を振ってくれたので、俺も軽く手を翳して応えた。

横目で鈴檜さんを見ると、予想外にも、退出する二人に対して謝罪するように一礼していた。プライドがスーツを着ているような女だと認識していたので、自分の非を認めて謝罪の気持ちで表すようなマネは絶対にしないと思ったのに……驚きだ。俺なら断固として謝罪しないだろう。だけど、彼女は真つ当な大人であると同時に、常識的道德観を持つ普通人だから、謝罪せざるを得ないのだろう。

帰っていった二人がそれに気づいたかどうかはわからない。それは俺の知ったことじゃない。

和音さんと美空ちゃんが帰るのに続いて、忍ちゃんと百合子ちゃんも視聴覚室を後にした。

「このまま残つていても仕方がないから私も帰ります。お兄さんには大変お世話になったので幾重にもお礼を言わせて下さい。本当にご迷惑をおかけしました。これからも度々会うと思いますから、お別れはしません。これからも宜しく願います」

「いや、俺は大したことは何もしてないし、君のために何かしたつもりもないよ」

何の謙遜もなく俺は微笑み、忍ちゃんの謝意を拒んだ。

もう会うつもりはない。会う機会もないと思う。俺は彼女と友達になる意志なんてない。彼女はあくまでも密希の友人であって、俺には関係のない女の子であるべきだ。まさか、俺の自宅マンションにまで遊びに来るなんてことはないだろうし。

「立花さんもお世話になりました」

「いいえ、私の方こそ謝りますよ。色々失礼な言動をしてしまい申し訳なく思っています」

おいおい、鈴檜さんが謝罪してるぞ。

どういうことだ？ どんな心境の変化が謝罪させたのだろう。さっきの二人に対する態度とは百二十度くらい違っている。やけに素直じゃねえか。目には目を歯には歯を、非礼には非礼を、敬意には敬意を、謝罪には謝罪を、ってことか？

忍ちゃんと並ぶようにして、百合子ちゃんも俺たちに頭を下げた。私もこれで失礼します」

凄く簡素な言葉だったけど万感が込められていた。

俺も鈴檜さんも返礼こそしなかったが、微笑みを持って送り出した。

二人が出て行き、ぱたりと音を立ててドアが閉まった。

視聴覚室には俺と鈴檜さんだけが残った。

【3・天園陽影】

気まずい沈黙。

女刑事の苛立ちが空気を通じて肌にピンピン伝わってくる。

黒板の周辺が帯電しているみたいだ。

ちよつと怖い。

「タバコ、吸って良いと思いますか？」

肌寒い雰囲気を変えるべく、俺は愚にもつかない質問をした。

ここは密閉された視聴覚室の中だから、当然、良いわけがない。

それ以前に、規則を重んじる名門女子学園中等部の校舎内なのだ。

灰皿がなく、空調も作動してないこの部屋で、喫煙などが許されるわけない。

そう思ったのだけど、鈴檜さんは少し表情を崩し、溜め息混じりに「構わないと思いますよ」と許可してくれた。

おいおい、刑事さん、いいんですかい？

「タバコの灰と吸殻の処分さえ気を配り、窓を開けて換気すれば咎められないでしょう。連休中なので教職員は殆ど登校していないそうですし、この場には私と貴方しかいませんからね。モラルに反する行為とは思いますが、今日だけは特別に見逃します」

鈴檜さんはそう言って、手ずから窓を開けてくれた。

「ありがとうございます」

俺は礼を言っただけでタバコを取り出し、一本抜いて口に啜えた。愛用のジツポで火をつける。そして、味わうように軽く吹かした。

「しかし、鈴檜さんが最終的に野口の自殺ってことで納得するとは思いませんでしたよ。貴女は殺人説を強固に貫いていたみたいだから、幾ら周囲の人間が自殺ってことで事件を終わらせようとしても、断固として譲らずに、独りだけでも捜査を続けるものと思っていました」

「そうですね……」

鈴檜さんは少し疲れたような笑みを浮かべ、瞼を閉ざして、目尻に指を持っていった。そして、眼球をマッサージするようにゆっくりと指を動かした。

「私も殺人説を曲げるつもりはありませんでした。実は、こうして結論を出した今になっても、野口竜一郎は殺害されたと信じています。しかし……」

不意に、彼女は言葉を切り、つかつかと大股歩きで俺に近寄った。そして、しなやかな指を伸ばしてきて、俺の啜っていたタバコを掴まんで取り上げてしまった。

「よく考えてみたら、貴方は未成年ですから喫煙は許されませんよ。私が刑事であることを理解した上での暴挙ですか？ 何にしても、このタバコは私がいただきますね」

鈴檜さんは俺が啜っていたタバコを躊躇なく茜色の唇で挟み、美味しそうに目を細めた。ふっと息を吐き、紫煙を撒き散らす。

こんな真面目そうな人でもタバコを吸うんだな、と変に感心した。警察組織という男社会で上を目指すエリート女性ともなると、優等生でも精神の安定を図る必要があり、タバコでも吸わなければやってられないのかもしれない。警視庁捜査一課なんていう厳しそうな部署にいるわけだし……。

まあ、いくら大変でも自分で選んだ仕事なわけだから、俺が言えるのは「頑張れ」の一言だけだ。でも、こういう場面くらい喫煙を許可して欲しいものである。

「自分の年齢を失念していました。大学生って言ったら社会的には大人でしょ？ 気分的に成人男性になってもしょうがないですよ」
「ふふふ。確かに大学生は大人の範疇ですが、貴方の吸い慣れた仕種を見ていると、もっと若い頃から喫煙をしているように思えてなりません。喫煙の常習犯ですね。逮捕して差し上げましょうか？」

「喫煙で逮捕は無理でしょ？ 法律で禁じられているとは言っても、何か罰則があるわけじゃないみたいだしね」

「……………」

鈴檜さんは口許を綻ばせて、くすつと小さく笑った。俺の紡いだ言葉の中に面白い要素が含まれていたらしい。茜色の口紅に彩られた唇を尖らせ、タバコの煙りを細く吐き出し、もう一度笑う。俺が笑わせたというより、笑われている感じだ。

ちよつと不愉快。

「私は貴方が犯人ではないかと推測していました」

唐突に、女刑事はとんでもない告白をして下さった。

「はあ？ 俺が、ですか？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

この人、いきなり何を言い出すんだ。事件は自殺として解決したのだから、今更、俺を疑っていたと告白するのはナシだろ。マジで勘弁して欲しい。

「鈴檜さん、何を言ってるんですか。俺が犯人なんてあり得ないでしょ？ アリバイは完璧なんですから」

「最初、私が事件現場に到着し、貴方の証言を聞かされた時にピンと来たんです」

「ピン、ですか？」

「そう、ピン、です。現場に携わる刑事の勘です。何の根拠もありませんでした。犯人は貴方です。しかあり得ないと思いましたが」

鈴檜さんはタバコの灰が落ちそうになるのを見て、窓辺に移動し、外に向けてトンとフィルターの部分を指で弾いた。

タバコの灰がニセンチほど零れ落ち、ぱらぱらと下に舞い落ちていく。小さな環境破壊行為だ。

「それに、全員の証言を私なりに整理して推理したところ、犯人である可能性が一番高いのは貴方でした。いえ、富士原さんと蕪澤先生の方がアリバイの不十分さから言えば犯人である可能性は高かったです。ですが、実際に殺人を犯すとすると身体的な問題によって容疑者から除外しなければなりませんでした」

「ああ、それって、黒板の上にあるフックに手が届くのは、俺だけだったからですね？」

俺は黒板の下に移動して、上部に付いているフックに手を伸ばし、そこにぶら下がってみせながら言った。

鈴檜さんは頷いた。

「これは犯人が単独犯であると仮定した上での仮説ですが、容疑者の中で野口竜一郎を殺害する動機を持ち、黒板の上部に手が届き、この《H校舎》の四階にいた人物は貴方ただ一人です。貴方はトイレの中で十分間ずっと携帯電話を通して恋人の色嶺左右良さんと話をしていたと証言していますが、実際にその姿を確認していた者はいないのです。貴方が何らかのトリックを用いて、小野寺さんと色嶺さんと義妹さんを欺いたと考えれば……犯行は可能でしょうか？」

「ちよつと酷過ぎる推理ですね。強引過ぎますよ。理に適ってません。俺はトリックなんて使ってないし、左右良を騙したりしませんよ。密希を騙す意味もないですしね。俺が奴を殺すなら、もっと巧妙な手段を用います。それこそ、左右良の知恵を借りて」

「確かに、色嶺さんは優秀な頭脳の持ち主です。きつと、貴方の力になってくれたでしょう。アリバイに関しては、彼女が犯行時刻に貴方とトイレで会話をしていたことを理路整然と証明してくれました。疑う余地などないほど完璧に解説されましたので、私も納得せざるを得ませんでしたよ。それゆえに、貴方は事件翌日の段階で容疑者から外されたのですが……。どうしても、私には貴方が犯人であるように思えてなりません」

明確な理由はありませんが……と鈴檜さんは自嘲気味に呟いた。

「貴方が容疑者でなくなり、他の容疑者も不完全ながらアリバイが認められ、身体的条件から容疑者名簿から外されると、単独犯の説が全否定されます」

「そこで、複数犯と仮定して仮説を組み立ててみたわけですか？」

「いいえ。私が仮説を立てる前に、色嶺さんによって複数犯の可能性を全て否定されてしまいました。私が最も疑っていたのは、貴方と義妹さんの組み合わせです。野口を気絶させ、重道さんと黒門さんを帰宅させた後、貴方一人で視聴覚室に戻って絞殺し、義妹さん

をアリバイの証言者に仕立てた……。その時、偶然、色嶺さんから電話がかかってきたので、急いでトイレに入り、より完璧なアリバイを作る為に利用した……。この仮説は、小野寺紗枝の存在を無視すれば、成り立ちます。つまり、小野寺さんを騙す何らかのトリックを用いたと考えれば、貴方たちを疑う余地が出てくるわけです」

「そんなわけありません。たとえ義妹を襲おうとしたクス男相手だからって、その義妹をアリバイ作りに利用してまで殺害しようなんて思いませんよ。その仮説も左右良が否定してくれたんでしょ？」

「ええ。義妹さんの性格上、貴方が殺人を犯そうとすれば、絶対に制止したでしょうし、もし犯行を知っていたら、警察署で尋問された際に、正直に話していたでしょう。色嶺さん曰く、自分を騙して密室に誘い込んでレイプさせようとしたクラスメイトと仲直りして友達になれる変わり者だから……。だそうです。その点については私も同感でした」

「俺も驚きましたよ……。友達が少ないからと言って、裏切り行為を働いたクラスメイトを、その場で許して友達になろうと呼びかけるなんて、俺には到底真似できません」

「優しい義妹さんですね」

「……………」

肩を竦めただけで、俺は返答しなかった。

密希が本心からの優しさで忍ちゃんを許したかどうか、実際は怪しいところだ。もしかしたら、今後扱いやすい友人が一人増えるという計算が働いて許したのかもしれない。弱い自分を守るための盾として、勝気で積極的に体育会系なさやかちゃんとは別に、もう一人、自分より心脆い人間を傍に置いておこうと図ってもおかしくないのだ。

密希とて馬鹿ではない。その全てを計算に基づいてやってはいないだろうが、無意識にそうしているのかもしれないのだ。

「貴方と義妹さんの共犯ではないとなると、次に考えられる組み合わせは、残念ながら葎澤先生と富士原さんのコンビ以外にあり得ま

せん。あの時点では、間違つても、義妹さんと重道さんのコンビで犯行に及ぶとは思えませんからね。他の組み合わせは言うに及ばずです。犯行を犯す共通の動機がありません」

「だから、自殺説に乗り換えたんですか？」

「そうですね……。捜査本部では当初から自殺説が有力視されていたので、確かな根拠もないまま私だけが他殺説を唱えても、組織の中で孤立してしまうだけです。それは、百害あって一利なし、だと判断しました。昨夜、色嶺さんから電話をいただき、この事件が自殺であることを論理的に解説されてしまいましたし……」

「……………」

俺は唇が緩みそうになるのを堪えた。

「これで捜査は終了です。野口竜一郎は自殺したという結論に至り、私は次の事件の捜査に携わることとなるでしょう。私の負け、犯人の勝ちです。非常に悔しいですが、仕方ありません」

「刑事さんて大変な仕事ですよね」

俺は心ない同情の言葉を送った。

あまりの白々しい台詞に苦笑しながらも、鈴檜さんは首を左右に振る。

「いえ、この仕事は好きでやっているんで、さして大変だとは思いませんよ。警察が忙しいのは憂慮すべき現実ですが、忙しければ忙しいだけやり甲斐のある仕事です。そして、頑張っただけの満足感を得られます。今回の事件も、不本意な結果に終わってしまいましたが、一応の解決を見たことですし、最終的な結論によって生者が誰も不幸にならなかつたのですから、私はそれなりに満足し、納得しています。犠牲者のご両親には申し訳なく思っていますが……」

鈴檜さんにはにっこりと顔全体で頬笑んだ。

初めて見る女性らしい柔和な表情であり、俺を虜にするぐらい魅力的な笑顔だった。けれど、すぐにいつものお堅い女刑事の顔に戻ってしまった。

ちよつと残念だった。

日頃からその笑顔で容疑者に接すれば、男限定ではあれども、有力な情報を容易に引き出せるだろうに。自分の容姿が持っている効力に気づいていないようだ。気づいているとしても有効活用してないのだから、宝の持ち腐れである。いやいや、もしかしたら、彼女の笑顔は特定の男の独占所有物なのかもしれない。先日尋ねた時には交際相手の存在を否定していたが、俺に真実を告げる義務などないのだ。鈴檜さんレベルの美女なら、恋人の一人や二人いても何ら不思議ではない。

「何ですか？ おかしな目でじろじろと」

「いえ、なんでも」

曖昧に口を濁す。

笑顔が魅力的で見惚れていたとか、鈴檜さんの男関係を邪推していたなどとは言えない。

「鈴檜さんはどうして警察に就職しようなんて思ったんですか？」

話題を変更する必要を感じ、俺は当初からの疑問を投げかけた。予想外の質問だったのか、鈴檜さんは驚いたように両目を大きく見張った。唇の狭間から細長く煙りを吐き出し、困惑の微笑を浮かべる。

「特に理由なんてありません。なるべくしてなった、と言うだけです」

「でも、普通、女の人は警察に就職しようなんて考えないでしょ？」

まして、鈴檜さんのような頭抜けた美人さんなら、尚更、警察を就職先には選びませんよ。楽して金を稼げる職業が、他に幾らでもあると思います」

鈴檜さんは頭も良さそうだから、勤め先など選り取り見取りだろう。

そんな俺の不躰な質問にも、鈴檜さんは丁寧に答えてくれた。

「私の家は代々警察官僚を輩出してきた家系なので、生まれた時から警察関係の職業に就くことを義務付けられていたのですよ。もし私に兄弟がいたら、もっと別種の職に就いていたと思いますよ、生

憎一人っ子だったので、親の希望に沿って国家公務員試験を受け、必然のごとく警視庁捜査一課に配属されたのです」

「国家公務員試験に合格しているってことは、鈴檜さんてキャリアなんですね？」

「当然です」

今更何を言っているんだ、と言いたげな顔。

「私は警視庁捜査一課の立花鈴檜警視です。初対面の時、そう名乗ったと思います」

「そうでしたね……」

俺は数日前の記憶を思い起こしながら頷いた。確かに、彼女は姓名所屬を名乗った。だけど、警視という階級は明かさなかったと記憶している。

大体、警視などという高い階級の人が、なぜに殺人課で外回りなどしているのだろう。それだけ偉い人なら、デスクに陣取って踏ん反り返り、下っ端の報告を悠々と待っていてもおかしくない。平の捜査員のようなマネをしている方がおかしいのだ。まして、捜査に不慣れなキャリア組に現場をうるちよろされると、ノンキャリアのベテラン刑事が迷惑を被るだろう。いや、女の身で三十歳そこそこにして警視になれるくらい優秀なのだから、ベテラン刑事の信頼を集めているのかもしれない。まあ、その辺は、俺の知ったことではないが。

短いノック音と共にドアが開き、さつき廊下に立っていた垂れ目の優男が視聴覚室に入ってきた。

「失礼します」

彼はキビキビした口調で言い、額の横に手の平を翳して敬礼した。「警視、そろそろ捜査にお戻り下さい。小野寺紗枝の搜索は警視に一任されているのですから」

「わかっています。直ちに返るので、貴方は先に駐車場へ行ってエンジンを温めておきなさい」

「了解しました」

男は再度敬礼した。俺に好奇の視線を向けるが、表情は生真面目を装ったまま踵を返し、部屋から出ていった。

「残念ながら、貴方とお喋りしている時間の余裕はないようです」

「十二時の鐘の音が聞こえましたか？」

「私はシンデレラではありませんよ」

「時間に支配されている点は同じでしょ？」

「私の人生もハッピーエンドであれば、同じと言って良いでしょうね」

「鈴檜さんみたいな美人さんが不幸な人生を歩むわけありませんよ」

「……私にお世辞を言っても何も出ませんが、一応、ありがとうございますと言っておきましょう」

鈴檜さんは短くなったタバコの火を黒板下のチョーク置きで揉み消して、吸殻をスーツのポケットに入れた。そして、「駐車場まで一緒に行きましょう」と促しておいて、ふと何かに気づいたように歩みを止めた。

「そう言えば、まだ貴方には謝罪の言葉を述べていませんでしたね」

「ああ、そんなのは別に必要ないですよ。謝られるほど、俺は嫌な思いをしてません」

「そうですね。確かに貴方は私が迷惑をかけたと同じくらい、私に失礼を働きましたからね。差し引きしてゼロ。相殺ということで謝罪はしないことにします」

「……………」

押し倒された件を、まだ根に持っているらしい。

うーん、確かにあれはやり過ぎたような気がする。レイプ未遂の現場で女刑事を押し倒したのだ。しかも、殺人現場でもある。人間性を疑われてもおかしくない蛮行だった。反省しておこう。

ごめんなさい。

すいませんでした。

俺は鈴檜さんと駐車場まで一緒に行き、そこで別れた。

もう二度と会わないと思うが、意外とまたどこかで遭遇するかもしれない。

しかし、今回はここでお別れだ。

美人さんとの離別はほんの少し寂しいけど、携帯電話の番号とメールアドレスは教えてもらっているから、暇な時にでも連絡してみよう、と思った。

【4・天園陽影】

肩の荷を白岐学園であらかた降ろし、ホッと息を吐いて実家へ戻るや否や、リビングでぼんやりテレビを見ていたらしい密希が出迎えてくれた。

「あれれー、おにいちゃん、その格好何いー？ 朝、お出かけした時と違う格好してるー」

「似合うか？」

ポーズを決めて訊いてみると、密希は腕組みをして小さく唸った。微妙な顔をしている。

「密希の好きな格好じゃないかなー。体型と合ってないしー、今風じゃないよー。そういうのは、ロック歌手の人が着る服だしねー。おにいちゃんが着るのはどーかなーって思うんだよー」

「ヘビメタチックで格好良いと思うんだけど……。気に入らないって言うんなら着替えるよ」

俺はそう言っつて、リビングを出て行こうとし、ふと足を止めた。

「そっだ、おまえもついて来い。ちつと話があるから」
手招きして呼ぶ。

密希は不思議そうに首を傾げたが、言われるままにソファから立ち上がり、テレビを消してついて来た。

俺の部屋に入ると、密希は座椅子に小さなお尻を落とした。そして、手早く着替える俺の姿を見ないように顔を俯け、恥ずかしそうにクッションを抱き締める。

着替え終えた俺がベッドの端に座ってタバコを口に啣えると、密希はようやく顔を上げて、俺が何を話そうとしているのかを測るようにじつと見つめてきた。

「まず、おまえに良い報告だ」

「良い報告うー？」

鸚鵡返しする義妹。

「ああ、事件のことだ。野口竜一郎がらみの報告だよ」
俺は無表情で言った。

「……………」
密希の表情が硬くなり、幼さを残す美貌に憂いと儂さが宿った。
少し大人びて見え、こういう表情も悪くないな、と馬鹿げた感想をいだいた。

「朝言った通り、事件は無事解決したよ。野口竜一郎は自殺ってことで一件落着だ。全て丸く収まりましたってとこだな」

俺が下らない世間話をするように軽い口調で告げると、密希は口を半開きにして何か言おうとし、じつと俺を見たまま、クッションを抱き締める腕に力を込めた。喜びはなく、安堵もない。完全な無表情。数度瞬きし、落ち着かなく視線をさ迷わせ、また何かを言ううとするが口を閉ざしてしまふ。

反応としては悪くない方だ。

変に安堵したり、もろ手を上げて喜びを表現されでもしたら、俺はこれからの対応に苦慮しただろう。だが、こういう複雑な反応なら問題はない。感情を抑えようと努力する義妹の姿には、若干ながら好感が持てた。

「俺の話ってというのは、ここからが本題だ。一つ、おまえに質問があるんだよ」

俺は仏頂面のままで義妹の目を直視した。

密希は逃げ道を探すように泳がせていた目線を俺へ固定して硬く頷く。何を訊かれるのか察している顔だ。覚悟を固め、全てを晒す決意が美貌に表れている。

「密希、おまえ」

「……………」

身構える義妹。

「なぜ、野口竜一郎を殺したりしたんだ？」
直球勝負。

とぼけられれば、そこで終わり。もう二度とこの事件に触れないし、動機も訊かない。同時に、家族ごっこも終わり。全て終わりだ。

だけど、義妹に答える意思があり、今後も俺と家族をしていたいと思うなら、答えなければならぬだろう。

「なんで殺したんだ？ 俺には理由がわかんねえよ」

言いながら、俺は素早く右手を伸ばし、密希の頬をきゅっと摘まんで引っ張った。

「痛ひ……いたひよおー…おにいひゃん」

身を振って逃げようとする義妹を、俺は無言の圧力と鋭い眼光で制した。

密希は抵抗を諦め、頬つぺたを抓られるに任せた。そして、小さな声で打ち明け始めた。

「どーひよおーもらかったんらひよー……。ふいーん……。おにいひゃん…、お話ひにくひからー、放ひへー」

潤んだ瞳で訴えられたので、仕方なく頬つぺたを解放してやった。密希は少し赤くなった頬をさすりながら話を続ける。

「あの日、おにいちゃんが突然おトイレに入っちゃってー、密希は廊下で待つてなくちゃならなかつたでしょー？ あの時、野口っていう男の人のことが心配になってー、視聴覚室に戻っちゃったんだよー。もし死んじゃってたらー、おにいちゃんが殺人犯になっちゃうと思つたしー、怪我が酷かつたら救急車を呼んであげようって考えたからー。それで、部屋に戻つて男の人の様子を見たらー、いきなり目を覚ましてー……。それで、密希の方を見ていきなり抱き着いてきたのー。驚いたよー。男の人に触られたの初めてだったからー、パニックになっちゃったんだねー。そんであの人、密希の服を脱がそうとしたからー、必死で逃げようとしたんだけどー……。上手く逃げられなかつたんだよー。圧しかかれちゃつてたからねー。これじゃー、忍ちゃんみたいになっちゃうって思つてー、何とかしようとしてたらー、丁度手の届く所にヒモが落ちててー……。それ

を取ってー……グルグルって首絞めて殺しちゃったんだよー……」

「おまえは……何でそんな馬鹿なことをしたんだ？ あんなクズ人間なんか放置しとけって言っただろ。それに、一人で様子を見に行くなんて、どう考えても危ねえだろ。一言俺に声をかけてくれりゃ良かったんだぞ。そうすりゃ、俺も一緒に行つてやったのに」

俺は義妹の考えのなさ、警戒心のなさ、無防備さに呆れ声を出した。そして、もう一度手を伸ばし、今度は髪の毛をクシャクシャにしてやった。

密希はされるがままで、いつものような抗議の声を上げなかった。

「おにいちゃん、あの時、楽しそうに電話してたからー……邪魔しちゃいけないのかなーって思ったんだよー」

「あほ！ そんなわきゃねえよ」

「そーだねー、あほだねー。凄く反省してるよー。学校みんなや先生に迷惑かけちゃったからー。本当は自首しようかなーって思ってたんだけどー……。でも、密希はおにいちゃんと一緒にいたかったからー……。だからー……嘔吐いちゃった……」

真実を告白する密希は、泣き笑いのように酷く顔を歪ませて、哀れを誘うように、慈悲を乞うように、許しを求めるように俺を見つめている。

理由はどうであれ、人を一人殺してしまったのだから、苦悩して当然であり、現在も殺人者としての罪悪感に苛まれているに違いない。少し傷つけられれば弾けてしまうシャボン玉のように、心が脆くなっているのだろう。

そんな義妹に対して、俺は不思議な感情をいだいている。胸を締めつけられるような、身体が痛いような、内蔵がむず痒いような……。

「本当に大馬鹿な義妹だな、おまえは……。馬鹿だから、こんなに可愛いのか？」

俺はクシャクシャに乱れた義妹の髪を指で梳って、綺麗に整えてやった。

「おにいちゃん……………」

密希は声と唇を戦慄かせ、涙に潤んだ瞳で見つめてきた。腕に抱きかかえていたクツションを放り出して、よろめくように立ち上がるが、何をしてもなく立ち尽くす。

うーん、困る。そういう表情をされても、俺には義妹が何を訴えているのかわからない。通常、こういう場合は優しく抱き締めてやるのがセオリーか？ それとも、強く叱りつけるべきか？ わからない……。わからないから、自分のやり方でやるしかない。

俺はちよつと高い位置へ移動した義妹の頭を手の平で押さえてグリグリと揺すった。

「しっかし、おまえ、野口に抱き着かれた時、よく逃げられたな。あいつ、かなり良いガタイしてたから、力も強かっただろ？」

「うーん……。そうでもなかったかなー。何かフラフラした感じでもー、手足に力とか入ってなかったみたいだったよー。手とか掴まれてもー、密希が体を擦って抵抗したらー、すぐに放しちゃったからねー。おにいちゃんに蹴られてー、意識がもーろーとしてたんじゃないかなー」

「ああ、なるほど。奴のアゴを蹴った時に良い感触があったから、あいつ、脳味噌を良い感じに揺さ振られてノックアウト状態だったのかもしれないな。まあ、病院送り間違いなしだったろうから、おまえでも何とかできたんだろ」

俺はジツポでタバコに火をつけ、深く息を吸い込んで肺の中をニコチンで満たした。十分落ち着いていたつもりなのに、一息紫煙を吸い込んだだけで心が楽になった。

ありやりや、俺は今、結構本気で怒ってるのかもしれない……。怒り？

そう言えば、帰宅した辺りから、下っ腹の奥の方で熱い塊が存在感を主張し、徐々に上部にせり上がってきているような感覚がある。今は、胸の辺りでうねっている状態だ。心臓もスローペースとは言えない。デスメタルなビートを容赦なく刻んでいる。気づかない間

に、身体の内部で異変が起こっていたようだ。

なんだこりゃ？

どうなってるんだ？

なぜか無性に叫びたい気分だ。大声で怒鳴り散らしたい衝動に苛まれている。どうにも抑え難い激情が苦しい。

まさに憤怒状態。

「なあ、密希。どうして、野口の馬鹿を殺しちまった時に、正直に打ち明けて、俺を頼ろうとしなかったんだ？」

「だ……だってー……」

「俺って、そんなに信用できねえか？」

なぜか、ぐおつと熱い物が込み上げてきて、鼻の奥をつーんと刺激した。不覚にも意識が飛びそうになった。

「俺、おまえと兄妹になつたんだぜ？」

今、自分がどんな表情をしているのか、想像するのが怖かった。

高熱を帯びて、顔面が真っ赤になっているのは確実だ。更に、冷静であろうと意識すると、無意識に脳内が白濁し、準備していないような禁句を叫んでしまいそうになる。顔が小刻みに震えているのは、寒さのせいではなく、暴走しそうな感情の昂ぶりからだ。

密希は怯えたように身を竦ませて、泣き出しそうな顔で俺を見つめるが、逃げようとはせず、座り込みもしなかった。健気にも震える足で必死に体を支えている。

「怒ってるー、おにいちゃん？」

半泣き状態で訊いてきた。

俺は早いピッチでニコチンを吸収しながら、今、自分が持て余している感情について考えてみた。

怒り。

それは、人間の持つ負の感情の中で二番目に凄まじいパワーを備えているものだ。どんな人間でも一度は心に宿したことのある激情だろう。でも、俺は今までの人生において、両親と玲佳以外から怒りを感じた記憶がない。不満や不快な想いなら数知れずいだいたが、

怒りの衝動に身を任せたことなどない。それは、俺の心の中がガランドウだからである。空っぽ。虚無の空間。心を奮わせようとしても、響くものが備わってないから、何も伝わらないし、何も感じない。だから、つい先日会ったばかりの女の子に対して怒りを覚えることなどあり得ないのに……。

俺は今、感情を持て余している。

「わかんねえよ。怒ってるのかのしんねえな。どうして、おまえはそう思うんだ？」

「お顔が怖いしー、声も冷たいんだよー。密希、泣いちゃいそうだものー……」

「それじゃ、俺は今、怒ってるんだな……」

俺はそう言っつて、自分の心に宿っている感情が怒りであることを認めた。

俺は今、怒っている。

なるほど、俺は心の中で綾瀬密希という美少女を身近な存在と認めちまっているんだな。面白い、面白いけど、なんか頭がくらくらしてヤバイ感じだ。正気を失っちまいそうだ。

「ちゃんと答えるよ、密希。なぜ、俺に本当のことを打ち明けなかつたんだ？」

今、勢いに任せて義妹の髪を鷲掴みにし、テーブルに思いっきり打ちつけたら、さぞ気分がすつとするだろうなあ、と耳元で誰かが囁いた。

幻聴？

おいおい、何を考えてるんだ。そんな暴挙に及んだら、今まで俺が積み重ねてきた全てがパーだぜ。愚かな思考を働かせるんじゃない。落ち着け！

心が制御不能になりつつある俺の状態に気づかない密希は、涙で顔をグズグズに汚しながら必死に答える。

「おにいちゃんに迷惑がかかると思ったからー、どうしても言えなかつたんだよー。まだ、会ったばっかだったしー、密希のこと好き

くないみたいだったから……。密希が人殺しになったらー、おにいちゃんに致命的なくらい嫌われちゃうと思っただよー」

「そんなわきゃねえだろ！」

俺は初めて他人に対し、感情を剥き出しにして怒鳴った。怒鳴らずにはいられなかった。自分自身を意識的に操作できない状態だった。思わず手を伸ばして義妹の髪を掴みそうになり、ギリギリのところで理性が急ブレーキをかける。寸前で感情が制御され、俺の手は髪を掴まずに、再び頬つぺたを掴まんだ。でも、今度は一切の手加減をせずに、思い切り捻り上げた。

密希は悲鳴すら上げずに、手を払う素振りも見せず、されるがままになっていた。

くっ、我慢しようっていうのか？

それじゃ、もう片方も抓ってやるぞ！

俺は左手も用いて両頬を同時に抓り上げた。

さすがに痛かったようで密希は身を擦った。

「い、いたひよー、おにいひゃん。いたひー。コメンなさひー……ゆるひへえー」

泣きべそを掻きながら謝る義妹の姿に、俺は少しだけ溜飲を下げ、怒りのボルテージを数段階階落とした。ちよつとだけ指の力を緩めてやり、顔を近づけて、幼い美貌を覗き込む。

「今後、俺に対して絶対に嘘を吐かないって約束するか？」

真面目な顔で訊いた。

密希は即座に頷いた。

「約束するよー。絶対に嘘吐かないからー。密希は約束を守る良い子だよー。学校で一番の優等生なんだよー」

「そうか、そんじゃ許してやるよ」

俺は意識して笑顔を作った。

不思議なことに、怒りの感情は綺麗サッパリ霧散してなくなり、それに代わって晴れやかな爽やかさが心を満たしていた。

「おにいちゃん……、密希のこと許してくれるのー？ ほんとにー」

「？」

頼りなげな声。まるで幼子のような顔と声音で、確かめるように訊いてくる。

俺は抓っていた指を離し、涙に濡れた頬を優しく撫でながら、微笑んで頷いた。

「許すよ。俺に嘘を吐いたことや、俺を事件に巻き込んだこと、人を殺しちゃったこと、その全てをひっくるめて許してやるよ」

「おにいちゃん……」

ありがとう、と義妹が言おうとした「あ」の部分を生に出したところで、俺は手を翳して制止させた。

「だけど、どうも腹の虫がおさまらないから、最後にキツイお仕置きをするぞ。ちっと痛いかもしれないけど我慢しろよ。ほら、目を閉じてる危ねえから」

右手を広げてみせ、握ったり開いたり、軽く手首のスナップを利かせて素振りして見せたりしながら、俺はアゴをしゃくった。

密希は目を見開いて何か言おうとしたが、黙ったまま頷いて固く目を閉ざした。

緊張からか、睫毛と頬が細かく震え、唇も小刻みにダンスしている。全身ガチガチだ。そんな姿でも、類い稀な美少女はダントツに可愛い。こうして間近から観察してみると良くわかる。肌の木目細かさ。透き通るような色白さ。艶やかな栗毛。ぷりぷりした唇。見れば見るほど可愛さを再認識してしまう。

俺は音なくベッドから立ち上がり、タバコの火を灰皿で揉み消して、義妹の前へとにじり寄った。そして、左手を彼女のさらさらな髪の毛に添える。

ぴくつと体を引き攣らせる義妹。

「そんなに硬くなるなよ」

俺は右手を密希の頬に滑らせながら言った。

「でも……」

密希が何かを答えようとした。

その瞬間

キスしてやった。

しかも、舌も捻じ込んだ。

「！」

密希は何が起こっているのかわからないようだ。大きく目を見開いて、自分の今置かれている状況、状態を確認している。

三分ほど停止。

そして、ようやく自分が義理の兄にキスされていると理解したようだ。しかも、舌までも絡め合っている……。

「むぐう……むぐぐ！」

何か言っているが、俺はお構いなしに美少女の唇を貪った。

やってることは殆ど犯罪。

強制猥褻。

家族間のキスは世界標準ではあっても、日本人としてはアウト。

近親相姦に片足を突っ込んでいるとしか言えない。

密希は身を擦って小さな抵抗を試みたが、俺の長い腕で両腕ごと体を強く拘束されている状態だったので、非力な女子中学生が逃れるのは無理だった。すぐに抵抗を諦め、全身の力を抜いて体をこちらに預けてきた。

俎板の上の鯉である。

しばらくの間、俺は背徳のキスを堪能した。

時間にして約五分くらいだろうか。

密希は恥じらいながらも、ほんの少しだけ自分の方から舌を絡めてきたが、かなりぎこちなかった。もしかしたら、これが初めてのキスだったのかもしれない。もしそうだったら、ちょっと可哀想なことをしたな、と微かに反省した。

俺が唇を離すと、密希は風呂でのぼせたように顔全体を桜色に染めて、焦点の定まらない眼を上方に向けた。体の芯が抜けてしまったようにぐんにやりとしていて、一人では立っていられそうにない。俺は抱擁を解いて妹を自由にした。

途端に崩れ落ち、座椅子にへたり込んでしまふ密希。

俺もベッドに座り直し、熱い息を吐く妹の頭に手を乗せ、顔を覗き込んだ。

「お仕置きは終わりだ。もうこれからは、人殺しなんかして俺を困らせるなよ。もし次にもやったら……キスだけじゃ済まねえからな。覚えとけよ」

「……………」

密希は猛烈な勢いで数回首肯した。

「良い子だ」

俺は妹の反応に満足して、新しいタバコに火をつけた。そして、彼女が落ち着くまで黙って待った。

これ以上ないくらい動揺していた密希も、数分を経ると落ち着きを取り戻し、若干頬を赤らめてはいたが、真っ直ぐに俺を見上げた。

「ねえー、おにいちゃん」

「ん？」

「どうして密希が犯人でわかったのかなー？」

俺に犯行を打ち明けたことよって散々に乱れていた心が整理され、絡みつく罪悪感と責め立てる良心に折り合いをつけたのだろう。無邪気そうに訊いてくる妹の顔に暗い影はなく、憑き物が落ちたように晴れやかだった。

まあ、人を殺した記憶は一生消えない心の傷となって、死ぬまで彼女を苦しめるのだろうが、それはもう仕方がない。本人が選んだ道だし、選んだ以上は、傷ついた心と上手く付き合っていくしかないだろう。それに、記憶なんざ、案外簡単に改竄できるものだ。

「おにいちゃん、どうしたのかなー？ 密希のこと、じーっと見たりしてー。ちょっと恥ずかしかったりー。照れちゃうんだよー」

「あ、ああ……………」

俺は妹の心情について考察するのを止め、質問に答えることにした。

「犯人がおまえだってわかった理由か？ まあ…………そりゃ、殺害現

場を一目見て五秒間ほど推理すれば、誰にだってわかつちまうさ。いや、誰でもつつーのは大袈裟だけど、密希のおかしな態度と現場の状況を合わせて考えれば、一番怪しい人物はおまえだってわかる。俺は即座にわかったぞ。俺以外の人間でも、その時の現場の状況と容疑者の顔ぶれから推理していけば、おまえが犯人だと断定できただろうな」

「えっ！ それじゃー、密希、もうすぐ捕まっちゃうかもしれないのー？」

安堵したのも束の間、不安を煽るような言葉を浴びせられ、妹は弱々しい声を発した。

俺は優しく微笑み、安心させるように頭を撫でてやった。

「大丈夫だ。おまえは捕まらねえよ。さっき言っただろ。この事件は自殺として処理されたって。野口竜一郎は首を吊って自殺したんだよ。そうと警察が結論付けたんだ。それで、一切合切全部解決さ」

「……首吊り自殺？」

密希は眉を寄せ、困惑の表情を作った。

自分の犯した罪の記憶と警察の下した結論の不一致に戸惑ったのだろう。なにせ、野口を絞殺する際に、密希は馬乗りになったのだから。断じて、首吊り状態になどしてないだろうから。身体能力を考慮しても、妹の腕力では不可能なのだ。

「もしかしてー、おにいちゃん……」

「ん？」

「……ううん、なんでもないよー」

密希は大きく首を振って、疑問を飲み込み、にこーっと満面で笑った。

うん、良い笑顔だ。そういう笑顔をしている妹が一番可愛いし、そういう笑顔を浮かべられる間は心配要らないだろう。

「ところで密希、事件が無事に解決した今だからこそ訊くけど」

「なあにー、おにいちゃん？」

「おまえ、俺に話さなきゃなんねえことがあるんじゃないか？」

「えー？ 話すことー？」

豆鉄砲を食らったようにキョトンとした顔で、密希は小さな頭を傾けた。

何を指摘されているのかわかっていないらしい。

「うーん……。わかんないよー」

「おいおい、おまえ、何かを俺に言おうとして、何回も口籠もつてたじゃねえか。それ、言わねえの？ それとも、言えねえのか？

忘れちまつてるってことはねえよな？」

「あー！」

密希は頬を張られて目を覚ましたみたいに、表情を一変させた。

バネ仕掛けの人形みたいに跳ね上がって立ち、きをつけの姿勢で正面から俺を見据える。その幼顔を彩る緊張と動揺は、殺人を告白した時の比ではなかった。まるで、樂園の崩壊を目の当たりにした天使のように絶望的な顔をしている。真っ青だ。血の気がまるでない。

「あのー……おにいちゃん。あのー……み、密希……。おにいちゃんに謝らなくちゃなんないことがあるんだよー」

「ああ、わかつてる。わかつてるから、すつと言ってみるよ」

「わ、わかつてるってどういうことかなー？ 密希、本当に困っちゃってー、どう謝ったらいいのかわかんないんだよー。正直に言ったらー、おにいちゃんは密希のことを嫌いになっちゃうかもしれないからー」

「嫌いになんねえって言ってるんだろ」

あまりに間誤付いてなかなか告白しようとしないうちに、俺は仄かな苛立ちを覚え始めた。

言いたくないから、一秒でも先延ばしにしようとして、愚にもつかない前置きを並べ立て、俺を怒らせないように伏線を引こうとしている。その意図が見え見えなので、全くの逆効果である。とつと打ち明ければ、すんなり流れる話なのに、変にもつたいぶるから苛立ちの加速度も大きくなっていくってもんだ。せつかく収まった怒りがぶり返しそうでヤバイ。

「ほら、密希！」

妹の柔らかい髪の毛を手で弄びながら、強めの口調で返答を急がす。

密希はか細い息を吐いた。

「密希、おにいちちゃんから貰ったブローチ……なくしちゃったのー。た、大切にするって約束したのにー。なくなっちゃったのー。なくなっちゃってー……でも、必死に探したんだけどー……でも、でも……見つけられなくてー。ご、ごめんなさいー」

義妹は座椅子にへたり込み、土下座をするように床に両手を着いて、頭を垂れて泣き始めた。

嗚咽しながら謝り倒す美少女の姿は、哀れであると同時に酷く無様であり、一秒として直視できる光景ではなかった。

俺の持つ美意識が目を背けさせ、この場からの逃避を促してくる。何の罪もない俺が罪悪感をいだくのは、あまりにも理不尽極まりないと思うのだ。しかし、この胸を切り裂かれるような痛みは、どう表現しようとも、良心の声作り出している断罪の痛みであり、妹をここまで追い込んだ自分を責め苛む情念だった。まるで、この俺に妹を大切に思う感情が芽生えたかのような……。

「あり得ねえよな……」

だけど、涙で床を水溜りにする妹の滑稽とも言える姿が、確実に俺を追い詰めていく。彼女が俯いている分だけ表情を見ないで済んでいるので、まだ救いはあったが、俺の望む妹の理想像とは真逆の姿であり、間違った結果だった。

俺は状況判断を誤り、選択肢を間違えたみたいだ……。こんな風に謝らせようと思ったんじゃない。ただ、妹の口からブローチの紛失を告白させて、反省を促そうと図っただけなのだ。

それなのに……。

無言で俺は立ち上がった。

後悔などしても意味はない。選ぶ選択肢を間違えたのなら、これ以上悪く展開しないように状況を見極めるべきだろう。自分が今で

きる最善を尽くせ。

俺はベッドを離れ、ハンガーにかけておいたスーツの上着のポケットの中に手をつっ込み、入っている物を取り出してきた。そしてそれを密希に見せてやった。

「ほら、密希、これを見てみる」

声をかけて、頂垂れる妹の顔を上げさせた。

密希は涙でベタベタになった顔を上げ、差し出された手の平の上に乗っている物を見て、ポカーンと呆けたように大きく口を開け、最大レベルの驚きを表現した。

「お、おにいちちゃん……これ……どこで？」

信じられない物を見る目。

理解しているのだけど、どこか混乱気味な面持ち。

「どこで？」

俺は妹の手を取り、なくしたはずのブローチを握らせてやりながら、優しく微笑んだ。

「おまえ、まだどこで落としたのかわかってねえのか？ あの日、

《H校舎》に入る前に、俺が注意しといただろ？ あの時、おまえは胸に付けてたブローチを外して、ポケットにしまったじゃねえか」「んー、そうだったねー」

「その後で、野口の馬鹿に襲われた時、揉み合いになって暴れたんだろ？ その時に落としたんだな、きつと」

「あー……」

ぼりぼりと鼻の頭を指で搔く密希。

「だから、最初に百合子ちゃんの悲鳴を聞いて視聴覚室へ行った時、部屋の中に、おまえにやったブローチが落ちてるのを発見した瞬間は、マジでビビったぞ。どう考えても奴を殺したのはおまえだからな。咄嗟に百合子ちゃんを職員室に走らせてブローチを回収しなかつたら、こっしておまえと顔を合わせていられなかつたぞ」

「……………」

上目遣いで俺を見つめる密希。

「だけど、まあ、全てはまーるく収まったことだし、終わり良ければ全て良しってことで、もう、なくしたりするんじゃないやねえぞ、密希わかったか？」

俺は両手で妹の頬を挟み、キスするくらい顔を接近させて確認を取った。

答えは聞かずともわかった。

わかっていた。

初めて他人の心を読み取れたような気がした。

密希は僅かに首肯し、震える手の中のブローチを大事そうにポケットへとしまった。そして、何の前動作もなしに俺に抱き着いてきた。

あまりの勢いに、ベッドに押し倒されてしまった。

はつきり言って驚いた。やはり、他人の心など読み取れないんだな、と思った。

「おにいちゃん、ありがとー！ それに、ごめんなさいー！ おにいちゃん、密希は約束守るからー。もうなくさないからー」

妹は覆い被さるように俺の体に抱き着きながら、胸に顔を埋めて泣きじゃくった。恥も照れもなく、幼児のように大きな声を上げて「おにいちゃん」と俺を呼ぶ。だけど、その声音はさっきとは異なり、甘やかな媚びが含まれていた。

「……………」

俺はどう対処して良いのかわからず、何となしに妹の背中をさすり、髪を撫でてやっていた。

何か言葉をかけてやるべきなのかもしれないけど、こんな状況は生まれて初めてであり、適切な言葉を選ぶだけの経験値も不足していたので、何もせずに黙っていた。

こんな事態の対処方法も前以って用意しておく必要があったか？ それとも、こういう時は行き当たりばったりの方が良い結果が生まれる場合が多いから、ノープランで正解とすべきか？

結局、俺は一言も声をかけずに、密希が静かになるのを待った。

時間にして約三十分間ほど。

結構長時間ベッドの上で抱き合っていたため、変な気分になりそうだった。

無論、倫理にもとる行為は一切しなかったが、許される際々の範囲で、美少女中学生の抱き心地を堪能した。

密希は華奢なのでギスギスとして骨張っていそうにも思えたが、服の上からでも瑞々しさと弾力、柔らかさ、肌の張りを感知取ることができた。

泣き止んでもしばらくの間、密希は静かに俺の体の上に身を預け、激情の余韻に浸っているようであった。

しかし、俺は困惑せずにいられない。突き放すわけにはいかないし、積極的行動を起こせない状態だったから。

「密希、そろそろ俺の体から降りてくんねえか？　ちっと重くてしんどいぞ」

俺は冗談っぽく言った。

密希は服の袖で涙を拭い、眉間にきゅっとシワを寄せて、睨んできた。

「そ、そんなことないよー！　密希、重くないんだよー！　羽根布団みたくふわふわなんだからー！」

怒っておいて、すぐに頬を緩め、くすくすと笑い出した。

「久しぶりに大泣きしちゃったんだよー。ごめんねー、おにいちゃん。密希の涙でお洋服を汚しちゃったりしてー」

甘え声で言い、横に体を転がして、俺から身を離れた。

俺は上体を起こし、ベッドの端に座り直す。

密希も上半身を起こして、俺と並ぶように腰掛ける。

「ほら、これで顔を拭けよ。涙で酷いことになってるぞ。可愛さががた落ちだ」

俺はポケットからハンカチを出そうとして、ハッと気づいた。

そう言えば、ハンカチは左右良にあげちまったのだ。

「あっと、ハンカチは持ってねえんだった」

「大丈夫だよー。密希、ティッシュで拭くからー。気にしないで下さいー」

そんなやり取りをした。

密希は部屋を出て行く時、泣き腫らした桜色の顔に最上級の笑顔を浮かべ、一言残していった。

「おにいちゃん、密希はおにいちゃんのことー、本当に好きだよー。本当の本当だよー。おにいちゃんの妹になれて、本当の本当の本当に嬉しいよー」

ぱたりとドアが閉まった。

「……………」

妹になれて嬉しいか…………。

その気持ちは、俺の無反響な心にも十二分に伝わってきた。響きはしなかったけど、何となく感じ取れるくらいには必死な想いが伝わってきて、じんわりと心壁に染み渡っていったようだ。

親族に対する敬慕、に近い愛情ってやつだろうか？

わからない。

密希は真っ直ぐな気持ちを誤魔化さずに直接ぶつけてきたから、俺も理解し易かったのだろう。完全に理解したわけじゃなくても、それなりに想いを受け入れる準備ができていただけに、理解した気になれたのだ。

俺が密希の気持ちを認識しさえすれば、彼女に接する時の感情も極めて和んだものになり、もう今後、「妹なんて必要ねえ」とか、「俺の家族に妹なんていねえ」とかいう思いによって狂おしく掻き乱される心を鎮めなくても済むだろう。

「俺は密希と家族になれて嬉しいのかな？」

自問してみる。

「……………」

返答はなかった。

解答がわからなかった。

自分のことだからわからない。

自分のことでもわからない。

妹に和んだ感情を抱き、心を傷つけないように気遣い、優しい言葉を囁きかけ、優しい表情で微笑みかけ、ブローチをなくしたことを許し、人を殺したことを許し、家族になることを許した。今までの俺では考えられない言動に及んだ。でも、今までと同じスタンスで接した。表面上の家族を演じようと心掛けたつもりが、いつの間にか感情を剥き出しにして怒鳴っていた。最悪の選択肢を選んでしまったのに、最良の結果を生み出した。最善の選択肢だと思って選んだのに、最低の経過を辿り、今の状況を作り出してしまった。そして、それが最上の結果だった。

何が何だかわからない。

何もかもわからない。

結果的に良かったのか悪かったのか判別不能。

明瞭な結果を提示されて理解できないのだから、馬鹿と言っしかない。

俺は馬鹿なんだ。

「本当に馬鹿なんだな、俺って……」

でも、一つだけ自分について理解できた。

それは、密希が犯罪者として逮捕されなくて良かったと、心から安堵している俺の気持ちの本物であることだ。

妹が無事に事件を乗り切り、笑顔を持って明日を迎えられることを、何よりも喜んでいる。

今までは感じられなかった情念が、新しく俺の中に芽生えたのだろうか。

それは、お笑い種に等しいちっぽけな変化だけど、他人から見れば下らない化学変化かもしれないけど、その変化が掛け替えのないものと感じ取れるくらい成長したのだ。きっと。

左右良は今の俺をどう評価するのだろうか。

やはり、馬鹿と罵るだろうか。

それとも、別の評価を下すのだろうか。

予測できないが、是非聞いてみたい。

そして、何よりも、偽りのない思いは

「帰ってきて良かったな」

この騒々しい数日間を振り返り、俺はそんな結論を出した。

第六章 『偽り家族の救済レシピ』 【1・天園陽影】

ゴールデンウィーク期間中、俺は元気のあり余るお転婆中学生数名に散々連れ回されることとなった。

密希だけなら息切れもせず、上手くペース配分をしながら、連休を満喫することができただろうが、忍ちゃんや、さやかちゃんを始めとする密希のクラスメイトたちが多数加わってしまったものだから、もう制御不能の暴走特急に身を任せて、とことん遊び尽くすしかなかった。

特に、さやかちゃんの存在は俺の生命力を限界まで搾り取った。彼女さえいなければ何の問題もなかったのだ。忍ちゃんだろうが、麻子ちゃんだろうが、初めて会う女の子が幾人加わるうが平気なのだ。むしろ、心地好い賑やかさが楽しかったりする。だが、さやかちゃんの体育会系のノリが加わると、もう楽しんではいられない。彼女はワザとブレーキを壊し、暴走する危険を楽しむ特異な性格らしいので、どこへ遊びに出かけても大騒ぎだ。そのはっちゃけぶりが他の女の子に悪い影響を与え、俺をとにかくひたすらに死にそうなくらい疲れさせた。まさに、悪性のウイルスだ。勘弁して下さい、とお願ひしても全く聞き入れられず、強引に連れ回されてしまうのだから始末が悪い。強く拒絶できない俺にも問題があるのだろうが、際限なく引き摺り回して下さる女の子たちも、少しは俺の体調を気遣い、遊びに来るのを控えて欲しいものである。じゃないと、ぶっ壊れちまうぞ、俺の身体。

そんな地獄の日々を満喫させていただいたので、連休最終日は断固として家から出ないぞ、と宣言し、情眠を貪ると共に気力と体力の回復を図った。

もし、さやかちゃんが部活の練習で身柄を白岐学園内に拘束されていなければ、強引かつ自主的に遊びに連れていかされていただろう。けれど、今頃は陸上部の先輩にしごかれている頃だ。俺は心置

きなく安眠していられる。

そう思ったのに……。

「お兄さん、お兄さん。もうお昼ですよ。そろそろ起きて下さい」
遠慮がちにはあるが体を揺り動かされ、俺は目を覚まさざるを得なくなつた。

顔をしかめ、瞼を細く開けると、ベッドの端に腰掛けて俺の顔を覗き込んでいる女の子の姿が見えた。

重道忍である。

「……………」

何でこんな時間に起こすんだ。俺は夕方まで眠りつづける予定だったのに、と心中で文句を言ったが、言葉にせずに無言のまま寝返りをうつ。

「あつ、こら！」

「あとちよつと、三十分……いや、五十分寝かせてくれよ」

うつ伏せの状態で訴えるが、忍ちゃんは聞き入れるつもりがないらしく、俺の肩を抱えて、もう一度仰向けにしようとする力を込めた。

揺さ振られる俺の体。

美少女の息遣い。

甘い体臭。

体の一部分だけが目覚めちまいそうな感じ。

でも、夢の国へとひた走る。

「んもう！ 駄目ですよ、お兄さん！ 起きて下さい！ あんまり眠り過ぎると脳味噌が腐って馬鹿になっちゃいますよ！」

「俺、頭悪くなくても良いから、眠らせてくれ……………」

呻くように哀願してみる。

「駄目ですってば！ こらっ、起きなさい！」

忍ちゃんが力任せに肩を抱え上げるので、どうにも落ち着いて眠れない。

声で起こされるだけなら聴覚を意識から切り離して対処するのだが、直接の攻撃は回避不能だ。放っておいてくれと思ったが、彼

女は俺を起こす行為に勅命級の使命感をいただいているようで、しつこく起こそうとしてくる。もう、ムキになっているとしか思えない勢いだ。

それなら、多少強引だが実力行使しかないとばかりに、抱き着くような体勢の忍ちゃんを俺は逆に抱え込み、布団の中に引き摺り込んだ。更に、腕枕の要領で彼女の頭の下へ腕を差し込み、反対側から手を回して口を塞ぐ。そうして完全に彼女の動きを封じ込めた。「動けないし、声が出せないだろ？　もう少しの間だけ静かに眠らせてくれよ」

「むぐ……むむうーぐう、むぐっ！」

何か言おうとしているようだが、聴覚が眠りから覚めてないので何も聞こえない。聞くつもりもない。身を擦らせて逃げようとしているが、ガツチリと体を抱え込み、全体重をかけているので、絶対に動けないだろう。

「ほら、大人しくして。静かに」

「むう……むぐっ！」

「しーっ……」

「……………」

忍ちゃんは抵抗を諦めたように、動きを止めて黙った。

「よしよし、良い子だ」

大人しくしてくれれば、力を入れて抱き締める必要もない。

俺は身体の力を抜き、再度眠りに突入した。

女の子の甘い体臭は俺を快い眠りへと誘い、夢の楽園に導いてくれる。

不思議な世界が広がった。

登場するお転婆娘たち。鏡の迷路で鬼ごっこ。鬼は……鈴檜さん。

全面鏡貼りの世界でミニスカートの着用は不適切だな、と思った。

刹那の夢。

そして、現実を思う。

あれれ、俺ってもしかして、人としてやつちやいけないことしてんじゃねえの？ 夢の国から帰還した意識の片隅で、良心が意見を述べた。

そうかな？ 俺は人道にもとる行為を働くようなクズじゃねえよ。少なくとも、大学生になつてからは鬼畜的悪行を働いた覚えはない。単に睡眠欲を満足させるために、より良い環境を作つたに過ぎないのだ。強引ではあつたが、非道なことはしてないつもり……って馬鹿か俺は！

忍ちゃんは今俺がやつてるみたいに暴行され、心に深い傷を負つた女の子だぞ。その傷に粗塩を塗すようなマネをして、非道じゃないとか、人道に背いてないとか、ほざいてるんじゃねえ、と良心ががなり立てる。

ああ、そうだ……そうだった。眠気によって脳が麻痺していたから、その点まで思い至らなかつた。うつかりしていた。

今の俺は最低のヒトデナシになっている。睡眠欲解消とか自分至上主義とか言う資格などない。人間として失格だ。こりゃ、腹を切つて償うしかねえか？ それとも、ベッドの上で土下座か？ 逆に、何事もなかつたかのように起きようか……。何にしても、忍ちゃんの心傷に追撃を加えちまつたのは確実だろう。

でも、眠い……。眠いんだから仕方ねえよ。

「お兄さん、今度こそ起きて下さい。そろそろ三十分経ちますよ」
耳元で囁かれた。

直ちに俺は目を覚ました。

もう三十分過ぎちまつたのか……。時間てやつは重要な時だけやたらと速く進むよなあ、と心の中で愚痴る。だけど、さすがに起きないわけにはいかなかった。できれば、三十分ではなく五十分寝かせて欲しかったが、文句を言う権利など俺にはない。なにせ、レイプ被害者の女の子を、強引に抱き枕にして眠っていたのだから。本来なら即座に切腹ものである。

「忍ちゃん？」

俺は様子を窺うように、恐る恐る顔を覗き込んだ。

泣いてたら困る。

「大丈夫？」

「はい」

明快な返事。

表面上、シヨックを受けた様子はない。

「さあ、起きて下さいね」

忍ちゃんは布団の中から抜け出して、ベッドから降り、掛け布団を引っぺがした。

いつも以上に素直になつて身を起こした俺は、ベッドの端に腰掛け、タバコを手に取った。

「ああっ、お兄さん。一服するのは朝ご飯を食べちゃってからにして下さい。すぐに用意しますから」

「ああ、うん。一本だけだよ」

俺は啜えたタバコに火をつけ、口の端を歪めた。

「もう！ お兄さんは！」

何でそんなに自分勝手なんですか、と目で語り、仕方ない様子で座椅子に正座した。

俺がタバコを吸い終えるまで、ここで待つつもりらしい。

うーん、待つてなくてもいいのに。リビングで寛いでてくれれば、そのうち顔を出すから……と想着て、ハテと首を傾げた。

「密希はどうしたんだ？」

「密希ちゃんはお出かけしてます。連休中、ずっと遊んではかりいたから、お買い物する時間がなかったみたいです。今日は、さやかちゃんが部活なので、その隙に渋谷まで遠征して来ますって」

「買い物？ 何だ……そんなもん、俺に言えば好きな所に連れてってやったのに……」

紫煙を吐き出し、俺は呆れた声を出した。

「密希ちゃんは、連休中ずっと遊びに付き合ってくれたお兄さんの身体を気遣ってくれたんだと思います。昨日のお兄さんて、本当に

疲れてるみたいだったし……。それに、ちょっと苛々してたみたいだから……」

「そうか、あいつ、俺を気遣って……」

俺は自然と緩みそうになる口許を引き締め、意識して仏頂面を維持した。半分くらいしか吸ってないタバコを灰皿に押しつけ、ベッドから勢い良く立ち上がる。

「そう言えば、さっき押し倒したりして悪かったね。嫌な思いをさせちゃっただろ？ 謝るよ」

土下座をしようかとも思ったが、あまりに無様だと思い直し、頭を下げるに止めた。

「え？ ああつと。いえ、全然気にしてませんから、私」

忍ちゃんは慌てたように手を振って、無理している様子もなく、簡単に答えた。自然な微笑みを湛えて、俺を許そうとしている。

「でも、不快な思いをさせちゃっただろ？」

「そんなことありませんよ。そりゃ、少しだけ吃驚しちゃいましたが、お兄さんは乱暴しないって信じてますから大丈夫です」

「……………」

俺なんかを信用しているらしい。

「押し倒した側の俺が注意するのもどうかと思うけど、少しは男を警戒した方がいいよ。まだ出会って数日しか経ってない俺なんかを信用したりして、万が一、乱暴されたらどうするんだ？」

「いいんです。私はお兄さんを信じるって自分で決めただから、それで、もし、お兄さんに何かされても、それは私の不注意が招いたことなんだって納得します。でも……お兄さんは何も変なことしませんよね？ たまに酷い時もあるけど、基本的には女の子に優しい良い人ですよ」

明快な答えが返ってきた。

なるほど。この子は、自分の身に降りかかった災いから、しっかりと学習できている。信用で生じる自己責任。裏切られた時に、自分が被害者となる覚悟が定まっているのだ。その上に成り立つ信頼

関係なら、多少の凶事では揺るがないだろう。大したものだ。俺には到底到達できない境地。裏切りを前提とした信頼など、愚行としか思えないし、はなから他人を信じる度量などない。唯一の例外として、色嶺左右良の存在が上げられるが、それは俺以上に彼女の側が俺を信頼しているとわかってるゆえの信用なのだ。まして、風守玲佳に至っては、もう別物としか言いようがない。信じるとか頼るといふ以前に、俺を守護するためだけの存在なので、他人とのあらゆる全ての接触を断絶してしまっているのだ。中学校の時のこともあるし……。だから、あいつを信頼する意味がない。

そんな俺に比べたら、忍ちゃんは強い心の持ち主だと言えるだろう。

まあ、加害者であり続けた俺と被害者の忍ちゃんを比較するのは無理があるのだけど。

「さあ、お兄さん、私が朝ご飯の用意をしますから、キッチンへ行きましょう」

「ああ……っと、ちょっと待って。俺、ちょっとシャワー浴びてくつから」

「はい。それじゃ、私は朝ご飯の準備をしておきますね」

忍ちゃんは面倒見の良い性格からか、座椅子から立ち上がる際に、テーブルの上を汚していた酒の滴み類などのゴミを両手に纏めて持った。

「どうやら片付けてくれるようだ。きつと、世話焼きなのだろう。」

俺は着替えの服を持ち、バスルームへ向かおうとして、ふと足を止めた。

「忍ちゃんはどうして家に残ったの？ 密希と一緒に買い物へ行けば良かったのに」

「えっと……それは……」

忍ちゃんは少し躊躇するように口籠もらせ、両手に持つゴミに視線を落とした。

「あまり外に出るような気分じゃなかったっていつか、体調が悪い

日なので……」

「じよじよと言葉を濁す。」

ああ、なるほど、体調ね……。

俺は納得し、深く追及するのを止めた。思春期の女の子に訊くのはマズイ話だ。でも、それなら、どうして玲佳のように家でじつとしていないかったのだろう？ 外出する気分じゃないと言いながら、しつかりここに遊びに来ているじゃねえか。矛盾してるだろ。それとも、俺に会いに来たとしても言うのか？ そんなことねえよな？ うん、そんなわけねえ。

「……………」

深く考えるのは止めとこう。

俺はドアを開け、隣りに設置されているユニットバスへ入ろうとして、またもや立ち止まった。キッチンに向かおうとしている忍ちゃんの背中に声をかける。

「忍ちゃん、一緒に入る？」

「な、なな……何言ってるんですか、おにーさん！ そ、そんな破廉恥なこと……駄目に決まってるでしょっ！ 無理です、無理！」

持っていたゴミを廊下に落とししてしまうほど忍ちゃんは狼狽し、顔を完熟トマトのように真っ赤にして拒否した。意味なく左右の手を交互に上下させ、バタバタと羽ばたく。

完全な及び腰だ。予想外の反応である。もっと冷静に冗談ぼく笑って、さらっと流してくれると思っただのに、この有様は一体……俺が押し倒した時とは正反対の反応だ。

何だ？ どういうことだ？

俺がベッドに引つ張り込むのは冗談として笑っていられるけど、シャワーと一緒に浴びるのは冗談にならないってわけか？ つまり、俺が本気で忍ちゃんをバスルームに引つ張り込む可能性があるかと判断したんじゃないかねえのか？ おいおい、俺って全然信用されてねえじゃん。

「冗談だよ」

皮肉っぽく唇を歪め、俺はバスルームに入った。

何だか可笑しくて、シャワーを浴びながらこっさり笑ってしまった。くつくつくつと喉の奥で笑いを潰す。やっぱり、他人の気持ちなど理解できない。美少女ともなれば尚更だ。

同じシチュエーションなのに、忍ちゃんとさやかちゃんの反応は正反対と言えるくらい違った。一方は冗談を理解して逆に切り返してきたのに、もう一方は酷く狼狽して拒絶を示した。性格から生じる違いなのだろうか。それとも、俺のやり方に差があったのか。二人とも同様に接しているつもりなのだが……。体育会系美少女と平凡な女の子を比較するのは無茶だろう。

シャワーを浴び終え、身嗜みを整えてからキッチンに入ると、既にテーブル上には温かい料理が並べられていた。

「へえ、忍ちゃんも料理上手なんだね」

感心してみせる。

忍ちゃんはエプロンを外しながら、料理を作ったのは密希であり、自分は温め直ただけである、と笑って明かした。

「私、お料理とかお洗濯とかの家事全般が得意じゃないんです」

「ま、誰にでも、得手不得手はあるからね」

俺は何の慰めにもならない台詞を吐き、昼食に箸を伸ばした。

メニューはシンプルな和食だ。焼き魚、味噌汁、納豆、漬物、海苔、そして大量のサラダという品揃えである。サラダを抜きにすれば真つ当な量なので、無理なく胃袋に収められるだろう。サラダは夕食にでも回してもらえばいい。

「忍ちゃんは食べないの？」

「あつ、いえ、私、食欲ないですから……」

「ああ、そうだったね」

体調の関係で食欲減退中。

女の子って、色々辛いことが多い生き物だよな。

「ねえ、忍ちゃん。ちつとばかり無神経な質問してもいいかな？」

サラダ以外の料理を食い尽くし、緑茶を含んで口内を爽快にした後、俺は徐に切り出した。

「いいですよ。何でも訊いて下さい」

「そうか、それじゃ遠慮なく訊かせてもらっけど……。忍ちゃんは今回の事件や乱暴されて脅迫されたことを、どんな風に自分の中で折り合いをつけているの？ 結果としては、君にとってマイナスばかりで良いところなしだろ？ 最低じゃないにしろ、自分の望んでない結果を強制的に押しつけられる形になったのに、君はまるで最良の結果が出たみたいに微笑んでいる。なぜ、そんな顔ができるんだ？ 俺にはわかんねえよ」

「それは……私が救われたと感じているからだと思います」

「はあ？ 救われた？ そんなわきゃねえだろ。君はレイプされて、その様子を撮られて、言いなりになるように脅迫された挙句、レイプの片棒を担がされたんだぜ？ しかも、それがバレたら、相手は自殺しちまって警察沙汰だ。君の身に起こった出来事が全部明るみに出ちまって、両親や友達にまで知られちまったっていうのに、救われたっていう表現はおかしくないか？ 不適切だろ。普通、そんな風に考えるか？ 普通は自暴自棄になるだろ。俺だったら、自棄になつて周囲の人間全員を不幸の道連れにしてるところだぞ」

俺は思わず熱くなつて、忍ちゃんを睨みつけた。

少女は穏やかに笑う。

「そうですね。お兄さんはそういう人ですよね……」

「……………」

断定されるのは心外。

「私は野口君に乱暴されたことを恨んでないし、もう彼を憎んでもいません。その当時は死にたいくらい嫌で、殺してやりたいと思っただけど、今考えれば、私が初対面の男の子に何の警戒心もいだからにフラフラとついでに行ったことにも非があるし、世の中に悪意を持つて人を騙す人間なんていないと信じていた私の想像力のなさも原因なわけだし……。それに私も密希ちゃんを騙して同じ目に遭わせ

ようとしたんだから、野口君だけを悪く言えません。そう思えば、乱暴されたことや撮影されたこと、家族に知られちゃったことも自業自得で仕方がないかなって納得できるし、結果が出てるのに今更泣いて悔やんだり、誰かを恨んだりしてもしょうがないでしょう？

当の野口君は自殺しちゃいましたから……。それに、救われたっていうのも本当です。密希ちゃんが、あの時すぐに許してくれたこと、本当に心から感謝しています。こんな風に、お友達として普通に遊んでくれてるし……。私がしようとしたことを考えれば、逆にイジメられていても文句を言えない立場ですから。それなのに、こんなに良くしてくれて……。だから、私は密希ちゃんのためにも笑顔でいなくちゃいけないんです。あと、お兄さんにも感謝しています。何か、ついみたいで悪いですけど、本心です」

「いや、まあ、その……。なんだ……。俺のことはどーでも良いんだけどな……。それじゃ、君は全部全て一切合切を吹っ切ったって言うのか？」

「はい」

明朗にして、明快にして、明確な返事。そして、影のない笑み。自分に降りかかった災難を受け止め、受け入れた者だけが浮かべられる表情。

忍ちゃんは前向きに生きていく道標を見つけたようだ。

そんな彼女が羨ましかった。

いや、羨ましく思ったような気がただだけで、別に何も感じなかった。感じるわけがない。感じられるわけがねえ。ああ、くそつ、苛々してきた。酷く不愉快だ。何なんだ畜生！ 忍ちゃんの前向きな姿がそんなに羨ましいのか？ 簡単に過去を吹っ切って、未来を見据えている中学生に嫉妬してるのか？

落ち着け……。ネガティブになるな。自問自答して苛立っていて何になる。少しは学習して成長しろ。心を磨け。精神を鍛えろ。そうしなければ、いつまで経っても同じ過ちの繰り返しだ。また、昔のように間違いを犯したいのか？ 大切な者を穢しておいて、狂っ

たように笑い転げる鬼畜に戻っちまってもいいのか？ いいわきやねえぞ……。

「お兄さん？」

突然黙り込んだ俺を心配してか、忍ちゃんは心持ちハイトーンで声をかけてきた。

「ん？ なんだい、忍ちゃん？」

「いえ、お兄さん、怖い顔をしてたから」

「そうか……」

俺は両手で顔面を強く擦って、意識的に仏頂面へと表情を戻した。そろそろ、一人で正気を保つのも限界に近づいてきたようだ。負の感情を無意識に表現している時点で危険度は六十パーセント。早いところ左右良のカウンセリングを受けるか、玲佳に癒してもらうかしないと、限界水域を超えちまうぞ。堤防が決壊すれば、もう止まらない。あとは滅茶苦茶になるだけ。それゆえに、大洪水の発生は何としても食い止めねばならないのだ。

「熱いお茶、くれないかな」

俺は食後の一服をするべくタバコを啜えた。

「はい。すぐに淹れますね」

甲斐甲斐しく、慣れないキッチンを跳ね回る忍ちゃん。

そんなこんなで、俺は夕方まで忍ちゃんと一緒にだらだらと時間を消費し、密希が買いい物から帰るのを待った。

大人しい性格の忍ちゃんと俺の間で会話が弾むわけはなかったけど、それは気まずさに直結せず、むしろ断続的に交わされる言葉によって良い感じに気が散ったので、自分の暗い内面と向き合わずに済んだ。それに、彼女の口から学園生活の面白話が聞けたので、有意義な時間を過ごせたとと言えるのかもしれない。彼女と時間を共有して退屈しなかったのは偽りのない事実だ。

夕方の五時、密希が買いい物から帰ってきた。

時を同じくして、光理さんも町内会の会合から戻ってきた。

だから、というわけではないだろうが、忍ちゃんが帰り支度を始めた。

「また、お兄さんが実家に戻ってきてるところを見計らって遊びに来ますから、それまではお別れです。さようなら」

そう言い残して、忍ちゃんは帰宅した。

その後、家族三人で夕食をとって、しばらく下らない会話を楽しみ、適当なところでそれぞれの部屋に引き取った。

自室に戻った俺は何をするでもなく、ぼんやりとタバコを吹かす。
トントン。

ドアがノックされた。

「おにいちゃん、密希だよー。入ってもいいかなー？」

勝手にドアを開けて頭を覗かせている時点で既に室内に入っているのと何ら変わらないような気がしたが、文句を言うほどの過失でもないので、手招きして入室を許可した。

密希は嬉しそうに微笑んで、スキップを踏みそうな軽やかさで入ってきた。

なぜか既にパジャマ姿。髪の毛が微妙に水分を含んでいるように見える。夕食後、すぐに入浴したのだろう。連休は今日で終わり、明日からは学校の授業が再開されるので、早く眠るつもりなのかもしれない。

「うわあー、おにいちゃん！ お部屋の中がタバコの煙りで一杯だよー。濃霧注意報が発令されちゃうくらい真っ白けだよー。密希、煙が目染みて嫌だしー、パジャマにタバコの匂いがついちゃうと困るからー、窓開けて換気するよー。いいよねー？」

「ん？ そんなにケムかったか？ 全然気づかなかったぞ」
密希は大きく手を振って室内に充滿する煙を掻き分けながら、ベランダ側の窓に近づいて全開にした。

ざっと夕風が流れ込んできて、室内の濃霧を根こそぎ追い出し、悪臭もろとも退治してしまう。

うむ。言われてみると部屋の中が清々しくなったような、酸素の

量が増えたような気がする。

「換気完了おー！」

妹は軍人みたいに敬礼して、キビキビした声を上げたが、やはり語尾は間延びしている。

頃合を見計らって窓を閉め、カーテンを引き、大きく深呼吸して部屋の空気を確かめ、オツケーサインを出してから、密希はちよこちよこ俺の前に近寄ってきた。俺が例のごとくベッドの端に腰掛けていたので、その前に座椅子を持ってきて、膝を崩して座る。そして、今初めて気づいたかのように目を丸くして俺の姿を見た。

「あれー、おにいちゃん、これからお出かけするのー？」

「ああ、ちらつと、友達ん家へ」

「女の人の所かなー？」

「まあ、一応……女の人だな……」

「恋人さんかなー？」

「……いや、ただの話し友達だ。相談相手って言った方が正確かな。恋人じゃねえよ」

「もしかしてー、この前、おにいちゃんに電話してきた人かなー？」

密希は眉を寄せて不安そうな表情を作った。

どうしてそんな顔をするんだ？ 恋人じゃねえって言うてんのに。恋人じゃねえから心配なのか？ なぜ、密希が心配するんだ？

「大学でのクラスメイトの色嶺左右良っていう女だ。前に話したただる？」

「……………」

密希はなぜか拗ねたように口を尖らせ、物言いたげな上目遣いをしたが、その点についてそれ以上触れようとはしなかった。代わりに、パジャマのポケットから包装された小さな箱を取り出して、俺に差し出した。

「これー、おにいちゃんにー」

天然度百二十パーセントの美少女スマイルを惜し気もなく全開する密希。仏頂面の俺でも微笑み返してしまうくらいに魅力的な笑顔

だった。

「ん？ 何だ、これ？」

俺は差し出された物を観察した。

綺麗に包装され、リボンがかけられた小箱。

差し出されているからには、俺へのプレゼントと判断して間違いないなからう。

「これ、俺が貰ってもいいのか？」

「いいよー。密希からおにいちゃんへのプレゼントなんだよー。色々お世話になったしー、迷惑かけちゃったしー、高いブローチも買ってもらっちゃったからー。お返しなんだよー。開けてみてよー、おにいちゃん」

「ああ」

俺は促されるままに、リボンを解き、包みを剥がして、中身を確認した。

「ハンカチ？」

品物を取り出して、広げて見ながら、「なるほど」と頷く。こいつはありがたい。丁度、ハンカチを切らしてたところだったのだ。

自宅マンションに戻れば幾らでも予備はあるが、自分で買った物よりも可愛い女の子、しかも妹にプレゼントされた物の方が嬉しいし、大切にできそうな気がする。

「ありがとな、密希。これ、結構高かっただろ？ ハンカチって言ってもブランド物だから、千円や二千円じゃ買えねえはずだぞ」

「ううん、そんな高くなかったよー。買ってもらったブローチと比べたら全然安かったんだよー。んー、でもー、密希的にはー、ちょっとピンチな感じだねー。今月のお小遣い、なくなっちゃたからー。にははー。でも、おにいちゃんに感謝するためだからー、どーってことないんだよー」

「……良い妹だよ、おまえは。今度、小遣いやるからな。楽しみにしてる」

頭を撫でてやると、妹はにへーっと蕩けるように頬笑んだ。

【2・小野寺紗枝】

世間が大型連休で浮かれていた数日間、私は西川不二彦殺しに加え、刑事殺しと母親殺しの罪も背負わされ、朝昼夜のニュース番組で顔写真を公開され、指名手配犯として逃亡生活を強いられた。

しかし、それは想像していたほど辛くなかった。なぜなら、母親が所持していたバッグの中から五枚の万札と十数枚の小銭が入った財布を発見したので、金銭面での苦勞をせずに済んだのだ。それに、連休を楽しむことで頭一杯の一般人は、すれ違う女子が指名手配犯かどうかなど判別しようとしないうし、つばの長い帽子にサングラス姿の女子は巷に溢れ過ぎていて、小野寺紗枝と識別できる人間とは地元でうるつかない限り出会わない。こんな境遇に身を墮して、初めて東京は犯罪者に優しい都市だと思い知った。

だが、発見されないからと言って、調子に乗って繁華街を闊歩するような馬鹿はしなかった。

連休期間中、何をしていたかと言えば、昼間は公園の女子トイレの個室でじつと過ごしつつ、私を絶望の淵に叩き落した人間を全員殺害するために夜な夜な包丁を携えて重道宅の前まで行き、復讐心と自制心と罪悪感の狭間で逡巡し、結局何もせず夜明けと共に公園へと戻る、という行動を繰り返していた。

しかし、私は復讐だけを念頭に置いて潜伏し、行動していたわけではない。時には自首や自殺も考えた。重道忍が後悔の念に苛まれ、衰弱死の一步手前までやつれていたなら、見逃そうとも思っていたのだ。

だが、彼女は、これっぽっちもやつれていなかった。それどころか、連休初日の夜から今日の今まで観察した結果、元気になる一方であり、私に対する贖罪の念など欠片も感じ取れなかった。私の存在など忘却し、連休を満喫するべく、クラスメイトと遊び歩いているらしい。今日も夕刻までどこかへ遊びに行っていたようだ。最悪

のクズ人間である。自宅に駆け込む彼女の顔には幸せそうな笑みが浮かび、玄関から聞こえる「ただいまー」という声からはレイプ被害者としての苦悩やレイプ犯に協力してしまった心痛が感じられなかった。そんな馬鹿は、無様な死体を晒して当然だろう。

重道宅の前で待ち伏せていた私は、重道家の人間が全員寝静まるのを待つて一家を皆殺しにしようと決断し、隣り街のコンビニへ夕飯を買いに行つてから、第二の我が家と化した公衆トイレの個室に帰った。そして、食事をして仮眠をとった。

もう、トイレの悪臭や人の出入りは気にならなくなっていた。

夢を見た。

幼い頃の私が、山奥の川辺で、太い竹を並べてロープで括った足場にしゃがみ込んで、うちあげられてくる鮎を手掴みしている。勿論、竹の上で飛び跳ねる川魚を、コツを知らない幼女が素手で捕獲できるわけもなく、捕まえてもすぐに指の間から逃げられてしまうのが現状だ。でも、終始、はしゃぎっぱなし。ずぶ濡れなのに笑顔。そんな私を食堂から微笑ましげに眺めている両親。家族三人で愛知県を旅行した時の記憶だろうか？ いつ頃の思い出かは定かではない。ただ、それが素晴らしい思い出であることだけは確かだった。

暗転。

夢が急変した。

法定速度を無視して暴走する車に乗っている私。隣りには金髪男。運転席にはモアイ。助手席には重道忍が座っていて

「！」

最悪の記憶が再生されそうになった瞬間、私は目を覚ました。全身を包む悪寒。正体不明の恐怖感。

首筋を伝う冷や汗。不気味なほど耳を突く呼吸音。

心を苛む夢の断片。自失と錯誤。

ここはどこ？

私はなぜ？

周囲を見回す。

私は蓋を閉めた便座に腰掛け、毛布に包まっていた。しかも、足元には刺身包丁が転がっている。実母の喉を切り裂いた凶器だ。

「ふふっ……」

苦笑混じりの嘆息。

自分の置かれている状況を再認識するまでに数秒の時間を要したが、現実逃避に無駄な時間を費やさなかった点は評価に値するのではないだろうか。

もう私に逃げ場はない。

この公衆トイレも、発見される危険性の高い隠れ場所なのだ。いつ何時、警察官がドアをノックするかわからない。今日まで逮捕されなかったのが不思議なくらいである。きつと、警察も大型連休で浮かれていたからに違いない。

私は濡れタオルで軽く体を清め、手櫛で髪を梳かし、昨夜隣り街の民家から拝借しておいた下着に穿衣替え、最低限の身嗜みを整えた。

人間、何をするにも清潔感を失ってはいけない。たとえ道を踏み外して、殺人鬼に身を落としても、である。最後に刺身包丁をタオルで包んで懐に隠し、帽子を装着して準備完了。私は聞き耳を立てて、女子トイレ内に誰もいないことを確認してから、個室のドアを開けた。

公園の時計を見ると、時刻は既に午後九時を回っていた。

私は不審に思われない程度の早歩きで重道宅へ向かう。

その途中、パトカーとすれ違い、若干肝を冷やしたが、見咎められて職務質問されることもなくやり過ごせた。

数分歩いて重道宅に到着。その斜め前に位置する月極駐車場の中へ入り、隅に停めてあるワンボックスカーの影に身を潜ませる。

そして、そつと顔を覗かせた。

窓から部屋明かりが漏れていた。まだ夜も浅い時間なので、重道

家の人間は誰も就寝していないようだ。時折、窓に人影がちらつく。踏み込むには早い。あと五、六時間は待った方が無難だろう。少し先走った感はあるが、心の準備も含め、標的の様子を窺いながら、時が満ちるのを待てば良い。とにかく、殺意を萎えさせない努力が不可欠だ。昨日までのように、直前になって犯行を思い留まっては意味がない。なるべく復讐のみに心身を委ねてテンションを維持し、同時に猪突せぬように冷静さを保持する。難しい精神コントロールだけど、大事を成すためにはやるしかないのだ。

三十分くらい経過した。

すると、白い国産車が目の前で減速し、月極駐車場ではなく、重道宅の車庫に入っていくではないか。

テールランプが消え、車内が一瞬明るくなり、ドアの開く音が響く。そして、壮年の男性が運転席から降りてきた。

年齢からして、重道忍の父親だろう。

鼻歌が私の耳を打った。

カッとした。

汚辱と罪悪に塗れた娘を持つ親としての心構えがまるでない。彼女に撮影されたレイプ被害者の気持ちを考えたら、報復が怖くて外出などできないだろう。鼻歌など論外だ。全く……娘が娘なら父親も父親である。どうしようもない馬鹿家族だ。

ふと気づくと、右手で刺身包丁を握り締めていた。

膨張する殺意。抑えようのない殺害衝動。無防備な背中に凶器を突き立てたい。愚かな娘を育んだ責任を取らせたい。狂おしいまでの劣情が殺人に駆り立てようとする。自分では冷静のつもりなのに、心は焦燥感に侵蝕されていたようだ。私は意識せず、駐車場から道路の中央へと歩み出ってしまった。

それが致命的なミスになった。

突如、周囲が騒然となり、暗がりから警察官の制服を着た数名の男が駆け出してきた。私を遠巻きに取り囲んだ。

警官？

待ち伏せされた？

立ち尽す私。

「やはり、姿を現しましたね。小野寺さん、待っていましたよ」

私を半包囲して重道宅への進撃を阻んだ警官たちの背後から、警視庁捜査一課の立花鈴檜が姿を現し、勝ち誇るように言った。

「凌辱されたことに対する復讐ですか？」

「……………」

「重道さんは貴女と同じレイプ被害者なのですよ。脅迫されて、嫌々ながらに協力させられていたのです。そんな彼女を復讐の対象に選ぶのは間違いです」

「……………」

警察の人間と事件について討論するつもりはない。重道忍を殺害するまでは逮捕されるつもりもない。殺せないなら逃げるしかないだろう。

私は咄嗟に退路を探した。

「逃げ道はありませんよ。大人しくお縄につきなさい」

お縄につく、という時代があった表現が少し可笑しくて、小さく笑いを零してしまった。

無論、警告は無視する。

前方を警官に半包囲され、後方には背丈ほどもあるコンクリートの壁。確かに退路は断たれている。逃げるには強行突破しかない。

私が刺身包丁の切っ先を向けて威嚇すると、警官が一斉に警棒を抜いた。

立花は拳銃を構え、銃口を私に向ける。

「無駄な抵抗は止めなさい！ 凶器を手放して、両手を挙げなさい

！ 早く！」

「……………」

私は警告を無視し、包囲網の一番端っこに立っている警官に向かって突進した。

いくら相手が殺人犯であっても、住宅地で拳銃は使用できないだ

ろう。夜なので視界が悪いし、私は未成年者なのだ。立花が発砲する可能性はゼロ。

案の定、私が包丁を振り被っても銃声は鳴らなかった。

私は、退路を塞ぐ警官を刺し殺して、一気に包囲を突破し、この場から逃げ去ろうと思った。

しかし、現実には甘くなかった。私の振り下ろした刺身包丁は何もない空を切り裂き、標的の警官が突き出した警棒は私の胸元を抉ったのだ。息が詰まり、痛みが背中に抜けた。蹲りはしなかったけど、打たれた反動でよろけて体勢を崩してしまった。畳みかけるように、警官が二撃目を繰り出してくる。

所詮、私は格闘の素人である。犯罪者を殴り殺す訓練を受けていて、しかも同僚の敵討ちに燃えている警官の攻撃を回避することはできなかった。

横殴りの警棒が私の右腕を強打した。

鈍い衝撃。

鋭い痛み。

骨の軋む音。

思わず包丁を取り落としそうになる。

三撃目は背後から来た。

今度こそ痛み屈し、私はアスファルトに膝をついてしまった。

それを見るや、悪鬼羅刹も尻尾を巻いて逃げそうな形相をした警官が、四方から怒号を放ちながら掴みかかってきた。

粗い鼻息が間近に迫る。

捕まる？ そんなの嫌だ！ 母親殺しとして白眼視されるくらい

なら、いつそ射殺して欲しい。立花刑事、私を撃ち殺して下さい。

お願いします。

警官の手が肩に触れる。

「！」

その刹那、何かが私の内側で弾けた。

捕まりたくない一心から振り回した包丁が、肩を掴みかけた警官

の手首を切断していた。

更に、立ち上がりざまの一振り、真横からタックルを仕掛けてきた警官の首筋を切り裂く。

血と悲鳴。

一斉に掴みかかろうとしていた警官たちが怯み、狭まりかけた包囲の輪が遠のく。

これは偶然か？ それとも幸運か？ 無我夢中の抵抗が好結果を生んでいるのか？

何がどうなっているにしろ、進むべき道は一つしかない。

私は再び逃走を図った。

さつき私の胸と腕を警棒で打って下さった警官が、再び眼前に立ちはだかる。

振り下ろされる警棒。

しかし、今回は警棒の辿る軌跡を視認することができた。しかも、身体が自然に反応し、警官の警棒を握っている手首ごと反射的に斬り飛ばしていた。

なぜ身体が動くのかは不明。でも、これは偶然ではない。幸運でもない。自分の潜在能力が発揮されているだけなのだ。

私は殺人の才能を自覚した。

鮮明になる世界。まるで脳味噌を炭酸水で洗浄されたような感覚。眼球の周囲を爽快感が包む。目に見える全ての人間を殺害対象として認識できる。凶器を振るえば殺すことができるという確信。迸る歓喜。冷静なる狂気。私は最強だ。絶対に捕まらない。

両足を踏ん張り、身体を跳ね上げ、右手首のない警官の首筋に包丁を刺す。邪魔者を排除する。心底から噴き上がる狂喜をエネルギーとして積極的に殺人を犯す。

驚くほど身体が軽い。

相手は格闘に秀でた警官だけど、殺人に関しては所詮素人だ。人殺しの能力は私より数段劣る。否、比較不可能なくらい実力差がある。ルールなしの殺し合いなら《負け》はあり得ない。なぜなら、

彼らはただの人間で、私は殺人鬼だから。人が鬼に勝てるわけない。道が開けた。

立花の「抵抗を止めて大人しく捕まりなさい。でないと、撃ちます！」という声が聞こえたが、余裕で無視して走った。彼女は発砲しないだろう、と確信していたからではない。撃たれても弾を食らわない自信があったからだ。

警官を皆殺しにしてから、ゆっくりと重道忍を殺しに行っても良かったのだが、無駄に時間を費やして立花に更なる応援を呼ばれてもしたら厄介なので、私は重道宅への襲撃を諦めた。

重道忍が駄目なら、標的は色嶺左右良という女性に変更だ。そもそも、彼女が西川のカラオケの誘いを断らなければ、私がレイプされることはなかったのだ。それゆえ、彼女こそ生きている人間の中で最も憎むべき、恨むべき人物と言えよう。

私は決意を新たにし、夜の住宅地を駆け抜けた。

【3・天園陽影】

深夜の一時を過ぎた頃。

俺は愛車のジャガーを駆って、色嶺左右良が独り暮しをしているアパートを訪れた。

この時間まで俺は、密希の宿題を手伝わされていたのである……。いつもの俺であれば、自分の不始末は自分で片付けるべきだと言って突っぱねているところだが、ハンカチをプレゼントされて浮かれ気分だったのか、つい安易に協力を承諾してしまった。まさかとは思うが、宿題を手伝わせる目的でプレゼントという布石を打っておいたのかもしれない。妹の内にそれくらいの計算が働いてもおかしくはない。なにせ、宿題の量が半端ではなかったのだ。この俺でさえ眩暈を覚えるほど、重厚なプリントの束がテーブルの上で存在感を示していたのだから。

「おにいちゃんは大學生だからー、こんなの楽勝だよー。余裕でクリアーだよー？」

そんなお気楽な台詞を吐いて、密希はプリントの七割を俺の前にドンと積み重ねやがった。

嗚呼、妹よ……俺にこの量をこなせと言うのか？

女の所に出かけようとしていた俺に、行くな、と仄めかしているのか？

可愛い顔をして、やってることは悪鬼羅刹に等しい、暴虐極まらない兄イジメだぞ、と心の中で嘆いたが、俺は文句を言わずに黙々とプリントをこなしていった。

結局、宿題を全て終わらせたのが夜の十二時を回った頃であり、それから三十分間、半死状態でベッドに横たわり、体力の回復を図った。そして、重い瞼を引っ張り上げて左右良の家へと向かったのである。

俺は、左右良の自宅アパートに併設されている駐車場の空きスペースに愛車を乗り入れ、エンジンを停止した。

ここはアパートの住人の専用スペースかもしれない、勝手に駐車するのはマズイかもしれない、と思っただが、近くに駐車できそうな場所がなかったので仕方がない。路上駐車などでの外だし、暗がりやに停めて車上荒らしにでも遭ったら堪らない。もし駐車場の所有者が文句を言ってきたら、金で解決すればいいだけの話だ。

俺は車を降りて、アパートの外観を眺めた。

夜中なのでハッキリとした評価はできないが、それなりに洒落た造りである。西洋風味漂う、女の子好みのアパートと言えるだろう。先日、左右良を送ってきた時には気づかなかったけど、こうして見ると結構新しい建物だ。築二年てところか。家賃は八万くらいかそれ以上。そこそこの防犯設備も整っているみたいだし、女の子の独り暮らしには悪くないアパートである。

「そう言えば、左右良がどの部屋に住んでいるのか聞いてなかったな……。迂闊だった。ケータイで呼び出すか？」

どうしようか思案しながら玄関に入り、ふと横へ視線をやってハッと閃いた。

ポストに名前があれば、何号室に住んでるかわかるじゃねえか。

どれどれ、色嶺さん家は何号室かな、などと、半ばストーリー紛いの思考を働かせつつ、一つ一つポストに書かれた名前を調べていく。

うーん……名前の記されているポストの数が予想外に少ない。これってストーリーカー対策なのだろうか。新聞とか郵便物を配達する人間は、どうしているのだろう。大声で名前を叫ぶのか？

さて、どうしよう。

やはり、ここは文明の利器、携帯電話を頼らざるを得ないのか？

でも、何だか負けたような気がするから使用したくない。前以って部屋を確認しておかなかった自分に對して腹が立つ。今日という日を予測できなかったのも失敗だろう。頭が悪いとしか言えない。

想像力に乏しい敗北者。携帯電話を使用するくらいなら、ここから大声で左右良を呼んだ方がマシだ。羞恥心さえ我慢すれば問題解決である。しかし、物凄く格好悪いだろうな……。

「どうすつか……」

俺は腕組みをし、首を捻って思案する。

すると、微かな電子音と共に目の前の自動ドアが開いた。

このアパートの住人が出てきたらしい。

チャンス！

住人に尋ねれば、容易に判明するだろう。左右良は社会的協調性に欠ける独立独歩な女だが、一応常識的な社会通念を持っているので、アパートの住人と交友関係を築いていてもおかしくない。それに、美人さんだから目立つし……。

俺は相手を見た。

相手も俺を見た。

「あれ、天園じゃん？」

相手の方が声をかけてきたので戸惑った。

ん？ こいつ、確か、大学で同じクラスの学生だったような気が

……。誰だっけ？

その男は、日焼けした顔にヘラヘラした笑みを浮かべ、「おっす！」と手を振り上げた。

何か、やたらと馴れ馴れしい感じだったので、不愉快な気分になった。軽薄そうな笑顔も気に入らない。だから、俺は返事をせずに無言を貫く。

「いつもながらの不景気面でダンマリかよ。返事くらいしろよな。」

一応クラスメイトなんだからよ」

俺は肩を竦めただけで無言。

「へいへい、俺なんかと語り合う口はないってことですかい。わかりました。わかりましたよー。んじゃ、俺は帰るけど、もしかしておまえも色嶺さん家に来た口か？」

男はいやらしい笑みを口に貼りつけて、俺の肩に手を置き、意味

ありげな視線を向けてきた。

何だか無性に右ストレートを顔面にぶち込みたい衝動に駆られる表情だったが、驚きの方が勝り、上げかけていた拳を下ろした。

「おまえも左右良の所に？」

「おう、ようやくマトモな言葉が返ってきたぜ。そう言うからには、おまえも例の件で来たんだな」

トン、と肩を叩かれた。

「例の件？」

こいつが何を言っているのか全く理解できなかったので、俺は首を傾げて反問した。

「例の件で何だ？」

「あ……いや、わかんねえならいいんだ。おまえって色嶺さんと仲良いから、例の件は知らない方がいいかも。忘れてくれや。それに、後で色嶺さんにも訊かないでくれ」

男はふざけ顔を改め、俺の肩から手を離れた。そして、「じゃあな！」と声をかけてアパートを出ていこうとする。

「おい」

俺は呼び止めた。

「ん？ 何だ。もしかして、一緒に色嶺さん家に行こうって、誘ってくれてるのか？」

「そんなわけねえ。一つ訊きたいだけだ」

「訊く？ 何をだ？」

「左右良の部屋番号」

「知らねえの？」

男は呆れたように両眉を下げ、大袈裟に手を広げてみせた。

「おまえ、もしかして、色嶺さん家に初めて来たのか？」

「ああ」

「おいおい、天園君。こんな深夜に美女の家を訪問して何をしようっていうの？ えろいことか企んでる？ まあ、部屋がわかんねえところを見ると、それほど仲が良いってわけじゃなさそうだが…」

…。俺たち、色嶺左右良フアンクラブのメンバーとしては、おまえたちの関係が心配なんだよな」

「フアンクラブ？」

初耳である。

「ははっ、冗談だ。本気にすんなよ」

「……………」

別に、怒ってませんよ。こんな奴に馬鹿にされた程度で、頭に血液を集中させるほど俺は単純じゃねえから。

「んで、天園、おまえ、色嶺さん家に何しに来たんだ？ 実際のところ、マジでえらいことするつもりで来た？」

「その質問に答える義務はない」

「ありゃ、その反応からすると、えらいことをマジでやりかねねー感じじゃなかよ。駄目だ駄目だ、天園！ 俺たちや、キツチリ大金を払わなきゃなんねーんだぞ。なのに、おまえだけフリーだなんてズルイじゃねーの。それに、俺が言うのも何だけど、こんなところラグビー部の連中に見られでもしたら洒落になんねえぜ。西川さんのこともあるんだからな」

「金を払う？ 何にだ？ ラグビー部とのいざござはもう解決済みだろ。あと、西川さんが死んだのは自業自得だ」

「西川さんは確かに自業自得だけだな……………」

「だけど、何だ？」

「……………そうやってすっ呆けてる。まあ、俺は門前払いを食った口だから、勝ち組みのおまえには何も言えねーけどな。敗者は背中を丸めて去るっつーことで、また出直した。んじゃな、天園！」

男は背を向け、「とぼとぼ」と呟きながら去って行くこととする。

ふーん、鬱陶しい奴だが、悪い人間じゃないみたいだ。それに、面白い性格をしている。友達としては不適當でも、クラスメイトとして付き合う分には何の問題もないな、と思った。

ん？

あいつ、忘れてやがる。

「おい！」

男の背中に声をかけて呼び止めた。

「あん？ まだ、何か用か？ あ、いや、悪い、そうだった、色嶺さん家の部屋番号だっけ？ 忘れてた。わりい。ええっと、二階のすぐ手前だ。端っこ。《201号室》だと思っぞ。そんじゃ、ばいちゃー！」

男はぶらりと手を振って帰っていった。

あいつ、何しに来てたんだろう。

少し気になったが、他人の行動理由など知りたくなかったので、すぐに忘却した。

【4・小野寺紗枝】

色嶺左右良の自宅を探すのに随分と手間取ってしまった。

京桜大学の学生が多く入居している安アパートを軒並み当たってみたが、都内は絶望的に広く、アパートの数も多すぎたので、途中で捜索を断念せざるを得なかったのだ。

でも、復讐は諦めたくない。彼女を血祭りに上げなければ逃走している意味がない。せつかく目覚めた殺人能力が宝の持ち腐れに終わってしまう。

だから、私は最終手段を用いた。京桜大学のラグビー部員を脅して住所を聞き出したのだ。その結果、彼女の自宅が判明した。私は即刻、タクシー移動。住所を教えてくれた学生には、申し訳ないけど死んでもらった。警察に通報されると、またもや襲撃を妨げられてしまうからだ。

もしタクシーの運転手に本体がバレたら殺してしまうつもりだったが、初老の運転手はバックミラー越しに私の顔を一瞥しても何のリアクションも見せなかった。白岐学園の事件自体を知らないか、もしくは乗客の素性に興味を持たない人間なのだろう。見咎められなければ殺しはしない。無益な殺人は犯したくない。私は復讐者だけど、無差別殺人鬼ではないのだ。だから、普通の乗客と同様に、きちんとお金を払ってタクシーを降りた。

私は物陰から色嶺左右良の住むアパートを見上げた。

割りと洒落た造りの建物だ。ところどころ窓辺に干してある下着は女性物ばかり。きつと、ここは女学生向けのアパートなのだろう。しかし、そうになると、問題は侵入方法である。性犯罪者の侵入に対する防犯は万全と見ていい。標的の部屋は二階なので、腕力に自信があるなら、雨どいを攀じ登ってしまえば良いのだけど、私は非力なので強引な侵入は無理だ。標的がアパートから出てくるのを気長

に待つのも一つの手だが、残念ながら逃亡者である私には時間の猶予がない。妥当な手段としては、アパートの住人が出てくるのを待って、オートロックが開くと同時に入れ違いに侵入する、というものだ。でも、そういう陳腐な手は極力使いたくない。

そうこう考えて数分間、何もできず、時間を無駄にしまった。焦燥が苛立ちを生む。

私は玄関を睨みながら爪を噛む。

口内に広がる血の味。

警官の血。

あの警官は死んだだろうか。頸動脈を切断したからと言っても殺してしまったとは限らない。落とした手首は繋がらないだろうけど、すぐ病院送りにすれば命だけは助かる可能性がある。助かって欲しいものだ。

そんな物思いに耽っていると、闇の中から見覚えのある外国産高級車が姿を現し、アパートの隣りにある駐車場へと入っていった。忘れるわけがない。あれは、天園陽影という男子の所有する車だ。およそ、恋人に会いに来たのだろう。チャンス到来である。彼を脅してオートロックを解除させ、色領宅のドアを開けさせれば、余計な手間をかけずに目的を達成できる。

そう考えていたのだが、駐車場から出てきた天園は、玄関前に来るや、何を思ったかポストを品定めし始め、飛びかからんと身構えていた私を蹴躓かせた。そのまま一向にアパート内に入ろうとしない。大家に代わってポストの総点検を行っているわけではないだろう。まさか、オートロックの解除コードを知らない？ 恋人なのに知らない？ そんな馬鹿なことがあり得るか？ いや、もしかすると恋人ではない？ こうなったら、背後から襲いかかり、首筋に包丁を当てがい、彼に携帯電話で色領に連絡を取らせ、オートロックを解除させようか……。

このまま手をこまねいているだけでは駄目だ。何か手を打たねば、時間が無駄に流れていってしまう。

包丁を振り翳して攻めるか、様子を見守るか。

どうしようか迷っていると、突如、自動ドアが開いた。アパートの住人が出てきたのだ。何という幸運だろう。そのタイミングに合わせて天園がアパートに入ろうとした。私も駆け込もうと右足を踏み出しかけ……思い留まった。出てきた人物の顔が私に急停止を強いたのだ。

大迫利一。私の想い人だった。

なぜ、ここに？

色嶺左右良に会いに来たのか？

まさかとは思うが、天園ではなく大迫先輩が色嶺の恋人？ よりにもよって、私を汚辱に塗れさせた女と恋愛関係にある？ 想像したくはないが、私を貶める意図的な謀略なのではないのか？ 西川を唆して私をレイプさせたのは、野口や重道ではなく、敬慕していた大迫利一？ よく考えてみれば、先輩が私を売らない限り、私という人間がレイプの標的に選考されることなどあり得ないのだ。恋人を守るための生贄にされた？ そう考えれば、全ての辻褃が合う。それは、あつてはならぬ裏切り行為だけど……。私の思い過ごしかもしれない。本当に彼が元凶なら、死すべきは先輩だ。

殺意は想いを上回らない。

天園は自動ドアが閉まるのも構わず、大迫先輩と立ち話を始めた。両者とも京桜大学の学生なので、知り合いなのだろう。だが、二人の会話する表情を見るに、友達関係ではなさそうだ。何を話しているのだろう。発見されないように距離を取っているので、二人の声は聞こえない。

大迫先輩が笑い声を上げた。

なぜ笑える？

私がこんな目に遭っているのに。殺人にまで手を染めているのに。ここまで私を追い詰めておいて、どうして陽気を保てる？ 私はその程度の存在だった？

爆発的に高まる殺意。右手の凶器が疼く。

大迫先輩が手を挙げて別れの挨拶を残し、天園に背を向けた。そして、こっちに向かって歩いてくる。先輩が近づいてくる。殺されようと近寄ってくる。きつと、死を以って私に贖罪するつもりなのだろう。軽薄な笑顔と軽快な歩調は、内面を隠す擬態に違いない。

先輩が私の前に差しかかった。

暗がりに身を潜めている私に気づく様子もなく、素通りしていく。距離は限りなくゼロに近い。

一歩踏み出して軽く手首を返し、首筋目掛けて凶器を振るえば、簡単に殺害できる。

でも……。

「大迫先輩」

思いきって声をかけた。

私を西川たちにレイプさせた真意を問い質したかった。

先輩は万歳をするように両手を挙げ、大袈裟に跳び上がって驚きを表現した。

「な、なんだ？ あー？ ん？ おまえ、小野寺じゃんか……。こんな所で何してんだよ」

私を認識するや、先輩は笑顔を凍りつかせて数歩後退った。

殺人鬼と化した私を恐れた？ いや、右手の包丁を見て警戒したのかもしれない。

私は離れた分だけ間合いを詰め、凶器の先を向けた。

「先輩……逃げないで下さい」

「おまえ、その包丁、血が……」

「仕方なかったんです。みんなが私の邪魔をするから……」

「……おまえ、西川さんどころか、自分の母親まで殺しちゃって、ニュースに顔まで出ちゃって、この上どうしようってんだ？ 逃げ回って何をするつもりだ？」

高校時代には見せなかつた険しい表情と厳しい口調。私を責める言葉。

お説教を拝聴する為に声をかけたのではない。質問するのは私の

方であり、答えるべきは先輩なのだ。そして、断罪されなければならない人間は私ではない。

「……先輩、教えて下さい。どうして私をレイプ魔に紹介したんですか？ なぜ私がレイプ魔に襲われなければならなかったんですか？ 恋人を守るためですか？」

「はあ？ おまえ、何言ってるんだよ。恋人って何の話だ？ 俺が、おまえをレイプさせたって、マジで思ってるのか？ 冗談じゃねーぞ」

「じゃあ、なんで西川不二彦が私のことを知っているんですか？ 彼らが先輩の名前を語って私を誘い出したのはなぜですか？ どう考えても、先輩が関わっているでしょう？ そう考えなければ辻褄が合いません！」

激情で包丁が震える。

先輩は不可視のバリアを張るように両手の平を広げて前に突き出し、大きな音を立てて生唾を飲んだ。

「あー……。そりゃ、たぶん、ラグビー部の練習後に高校時代の後輩自慢をした時、俺がついついおまえの名前を出しちまったのが原因だ。悪い、謝る」

「……そんなに色嶺左右良って女が好きなんですか？」
「は？」

一瞬、先輩の動きが止まった。意味を理解できなかった様子で、きょとんとしている。否、そう演技したのだろう。

「色嶺さんがどうしたって？ おまえ、話が噛み合っていないぞ」
白々しく聞き返され、逆に私を責めてくる。

「とぼけないで下さい！ 恋人の代わりに私をレイプさせておいて！ どうしてそんなヘラヘラしてられるんですか！」

「おいおい、おまえ、何か勘違いしてるぞ……マジで！」
「もういいです！」

涙で視界が霞んだ。
がっかりした。

こんな軽薄男に恋慕していたなんて……。

何もかも幻想だったのだ。私を騙す擬態だったのだ。私はこの最低男に騙されていたのだ。本性を見抜けなかった自分が情けない。全ての元凶が恋焦がれていた想い人だったなんて、あまりにも滑稽すぎる。

「小野寺、マジで警察に自首した方がいいって。これ以上罪を重ねて何に――」

親切ごかした厄介払いの言葉。

殺意が先輩との甘酸っぱい思い出を黒く塗り潰していく。

偶像の崩壊。もはや彼は、無意味に口を開閉する軽薄男でしかなかった。

もう耳を貸す価値はない。ただ、殺すのみ。殺し尽くして、事実も真実も真相も何もかもを抹殺する。

私は心身を狂気に解放した。

斬殺もしくは刺殺するべく、凶器を腰溜めに構えて突進する。

ドス黒く腐った臓物を撒き散らして死ね！

大迫が憐れを誘う泣き顔で悲鳴を上げ、尻もちをついた。

構わずに切っ先を大迫の腹部へと突き出す。

「――」

刹那、右手に衝撃が走った。

大迫の腹部を抉った手応えではない。何者かの攻撃が私の右手を打ち据えたのだ。

私は取り落としそうになった刺身包丁を握り直し、復讐劇に水を注した闖入者を睨みつけた。

日本人形のような無表情女が、私と大迫の間に割り込んで、静かに佇んでいた。安っぽいブラウスにデニム地のパンツ姿。二十歳前後だろうか。私よりは年上だろう。そして、私よりも美人だった。

「部外者が邪魔をしないで！」

包丁の先を向けて怒鳴るが、相手は耳が不自由なのか、聞こえないフリをしているのか、完全に無視して大迫を振り返った。凶器を

備えた殺人鬼を前にして、視線を外し、背を向けたのだ。私の右手を弾いた蹴りは称賛に値するが、闘いの基本をまるでわかっていない。しかも、背を向けるや否や、身の程を弁えない大言壮語を吐いたのだ。

「大迫君、私が犯罪者の相手をするので、貴方は警察に通報して下さい」

真夜中に路上で目を開いたまま寝言とは、笑えないにも程がある。屈強な警察官すら易々と退けた私と、多少腕に覚えがあるからといって、対等に闘うつもりなのだ。私が何者かをちゃんと理解した上で、相手になると言っているのだ。勝てる、と確信しているのだ。その自信に満ちた立ち振る舞いが憎々しい。

無防備の背中に包丁を突き刺してやるうか、と思った。

「風守さん……どうして？」

「陽影の命令により、連休期間中、陰ながら重道忍を護衛しておりました。そして、先刻、重道邸の前で騒動を起こした彼女を追ってきたところ、大迫君が刺殺されそうだったので、助けに入りました。ご迷惑でしたか？」

「と、とんでもない！ 大歓迎だぜ。マジ、助かる！ す、すぐに警察連れて戻るから、風守さん、無茶すんなよ！」

大迫は滑稽なステップを踏みながら、脱兎のごとく逃げ去ってしまった。

さすがは軽薄な腰抜け男。自分の安全を図るためには、勘違い女を殺人鬼の生贄に捧げることも厭わならしい。それは、私をレイプ魔に献上したのと同様の卑劣行為。男気など皆無。そういう人間の持ち主なのだろう。今更ながらに元想い人の腐れ果てた性根を垣間見たが、人間鑑定に役立てる機会には恵まれそうにない。でも、この自信過剰女に組み伏せられるつもりはなかったし、怨讐を払うまでは警察に逮捕されるつもりもなかった。

勘違い女は回れ右をして私と正対し、肩幅に足を開き、僅かに腰を落として右掌を目の高さに上げた。「ストップ」という台詞が似

合うポーズである。でも、それが彼女のファイティングポーズなのだろう。一見して隙だらけだが、向けられた手の平から瘴気じみた波動が噴出しているようで、迂闊に攻撃できない。

気の使い手？

名のある武道家？

私と同質の殺人鬼？

何にしる一般人ではない。

「貴女は……何者？」

殺意をぶつけつつ誰何した。

女は伏し目がちになって微細な笑みを湛え、構えを維持したまま名乗った。

「風守玲佳という者です」

「なぜ私の邪魔をするの？」

「主の命令は絶対です。大迫君の護衛は任務外ですが、貴女を捕獲すれば結果的に重道忍の安全が確保されるので、横槍を入れさせていただきました」

「私が大迫先輩を殺してからにしてよ！」

「大迫君は同じ大学のクラスメイトなので、殺害されるのを傍観してはいられません」

「退きなさい！ 殺すわよ！」

「今から追い駆けても、大迫君には追いつかないと思います」

「標的は色嶺左右良よ！ 私がレイプされる要因を作った女を殺すのよ！ ついでに、あの陰険そうなデブも殺してやぶぐう！」

鉄柱で顔面を強打されたような衝撃と共に、激痛が鼻面から後頭部へと抜けた。体勢は崩されなかったが、涙が溢れ、鼻血が滴り落ちる。鼻の骨を砕かれたようだ。

打撃を食らった？

相手の接近を察知できなかったばかりか、攻撃モーションすら視認できなかった。

「主への暴言は慎んで下さい」

怒りに任せた攻撃。天園陽影という男を愛するが故の憤りなのだろう。それなのに、感情の起伏が表情や口調に反映されていない。故意に感情を押し殺している様子もない。自然に無表情。それでいて眼に生命力が宿っている。気圧されるくらいの眼光。化粧っけは皆無。ルージユすら引いてない。言わば、完全無添加女だ。幼少期の渾名はロボット女か人造人間？ 鉄仮面女という蔑称もあり得る。だが、そんなことどうでもいい。とにかく、時間の猶予がないから、この邪魔女を速やかに排除しなければならぬ。

「死になさい！」

刺身包丁を両手で握り、お臍の前で構え、私は突進した。

駆け寄って突き刺す。

簡単な作業だ。

もし回避されたとしても、返す刃で最低限のダメージを与える。

もし反撃されたとしても、構わずに包丁を振り回して、相手の身体のどこかしらにダメージを与える。群を成した警官すら圧倒した私に、たかが素手の女一人を撃退できないわけがない。

包丁で風守の左胸を突いた。

刃が空を穿った。

かわされた。

風守は半身を捻って体を開き、両手で私の腕を押し離し、刃の軌道を逸らせたのだ。

この女、何かの武道に精通しているようだ。

しかし、捕捉できないスピードではない。

最後に踏み出した右足に体重をかけて踏ん張り、体を反転させる勢いを包丁に乗せて斬りつけた。

刃が空を斬った。

斬殺対象が攻撃可能範囲に存在していなかったのだ。

一瞬、目を離れた隙に逃げた？

どこへ？

私の背後へ。

振り向く間もない。

刹那、膝が砕けた。

文字通り、両膝の骨が砕け散ったのだ。

あまりの激痛に悲鳴が喉にひっかかる。

必然的に転倒した。

更に、肘が砕けた。

文字通り、両腕の骨が砕け散ったのだ。

手から包丁が零れ落ちる。

どんな攻撃を受けたのかわからなかったが、致命的ダメージを被った。

完全敗北。

身の程を思い知らされた。

「安心なさい。これでもう、貴女は罪を重ねずに済みます」

それが、私が耳にした最後の言葉。

後頭部に衝撃が生じ。

意識が飛んだ。

【5・天園陽影】

色嶺左右良の部屋が判明すれば、あとは訪問するだけである。面倒臭い点は、最後の関門、オートロックをどのようにしてクリアするかだ。

素直に左右良を呼び出すのが最良の手段だが、携帯電話を使用したくないのと同様の理由で、その手は使いたくない。それに、ちょっと驚かせてみたいという悪戯心もある。となると、残された手段はただ一つ。泥棒さんの要領でアパートに侵入するしかない。

俺はアパートの裏手に回り込み、植木を乗り越えて、一階の廊下に面する壁にヤモリのごとくへばりついた。高さは三メートルもない。楽によじ登れる高さだ。俺は両手を伸ばし、壁の切れ目に指を差し込み、懸垂をして体を持ち上げ、そのまま二階の鉄柵を握って強引に二階廊下まで這い上がった。自重を支えるには腕力の限界を極めねばならず、各関節の損傷や両肩の脱臼も気遣わねばならなかったが、身体の損壊は免れた。

廊下は無入だった。

誰にも入るところは見られなかった。どうやら監視用のモニターも設置されていなかったようだ。外観から想像していたよりも相当に無用心なアパートだな、と俺は批判した。

侵入してしまえば、もうこっちのものである。俺は、さも玄関から入ってきた来客の顔をして、堂々とアパートの二階廊下を移動し、階段側の一番端の部屋の前で立ち止まった。

なんと《201号室》のネームプレートには、《色嶺》と名前が書かれていた。間違いようがない。ここが左右良の部屋だ。俺は一秒の躊躇もせずに、チャイムを鳴らした。

ピンポンというありがちな呼び出し音が室内から微かに聞こえてきた。

「……………」
待つこと十秒。

人の気配と共に小さな足音が近づき、少し乱暴にドアが開かれた。ガチャという金属音は、防犯用のチェーンが鳴ったのだらう。左右良も強い防犯意識を持っているらしい。良いことだ。

そう感心していると、相手の顔も確認せずに、左右良が不機嫌な声を浴びせてきた。

「もっつ、まいどまいど何なんだよ、一体っ！ 日本語が理解できないのかなっ？ 私の体は、きみなんか売り渡すほど安っぽくない、って断言したはずだよ！ いい加減にして帰らないと、警察にご登場いただくよ。それでもいいのかな？ いいなら、一生そこで突っ立ってなさいな。私は興味のない相手と……………っ、あれ？」
怒鳴り散らしている途中で相手が俺であることに気づいた左右良は、この女にしては珍しくポカーンと口を開きっぱなしにして、数秒間棒立ちになった。

「陽影君？」

左右良は衝撃から回復して呆然顔を改めるが、いまだ完全には状況を認識していないらしく、不思議そうに俺の顔を見つめた。

「なぜ、こんな夜遅くにきみが…………私の部屋の前に立っているのかなあ？ 夢魔の悪戯？ 我知らず幻覚剤を吸っちゃったとか？ うりよりよ、左右良さん、ぱにくってるっすよー。困惑の混乱中なので。んぎゃ、どうやって？ んーじゃなくて、それ以前に…………」

目に見えて錯乱状態だ。

まあ、深夜に何の前触れもなく出現すれば、驚いて当然だろう。左右良のように肝の据わった女でも例外ではないらしい。日頃見られない、聞き慣れない喋り口調を用いている。滑稽で可笑しかったので、もう少し観賞していたかったが、女性限定アパートの通路で突っ立っているわけにもいかない。

「俺なんか相手にしたくないってか？ そりゃ悪かったよ。そんじや、とつとと退散する」

俺は皮肉っぽく笑って言い、くるりと踵を返した。

「わーっ、ちょ、ちょ、ちょ！ たーんま！ たんまの待ったでストップの停止を即時要求しちゃうんだよ！」

左右良は大慌ててドアチェーンを外し、ドアを開け放って、帰ろうとする俺の手首を掴んだ。

「本気のマジで緊急停止してよ！ そんなで回れ右！ そのまま左右良さんのお家にかむいん！ きみじゃないの！ きみのことを言ったんじゃないんだよ！ これ、ほんと！ 誤解なの！ 綺麗なお姉さんのお茶目な過ち。きみの前で閉ざす扉など一枚として私は持っていないんだ。どんな状況でも、全開のオープンで招き入れる用意があるんだよ。だから、さあ、入っちゃって」

俺は手を掴まれ、強引に引つ張り込まれる形で左右良の家に入った。

なぜか左右良は手を放してくれず、ぐいぐいと部屋の奥へ連れ込もうとするので、急いで靴を脱ぎ、引かれるに任せて短い廊下を進んだ。

下駄箱からすぐの所に小ぢんまりとしたキッチンがあった。それと向かい合う位置にバスルームらしきドア。部屋の内部は隅々まで掃除の手が行き届いていて、清潔感が漂っていた。悪くない棲み家だ。俺にはちつと狭いが、女の子が独り暮らしをする分には、申し分ない空間だろう。

一枚の引き戸を経て寝室に入った。いや、ワンルームのアパートだから、寝室という表現はおかしいか。

室内は十畳くらいの広さがあった。シングルベッドと足の短いガラステーブルが置かれていて、部屋の隅に一際存在感を示す本棚には数多くの洋書が並べられている。あとは数点の小物がちらほらとあるだけで、それほど目を引くものはない。年頃の女の子らしさは微塵もない。ただ、学生生活に必要な物が整然と並べられているだけ。まさに、シンプル・イズ・ベストである。

「いやいや、まさかまさかのビッグサプライズだよ。きみが自らの

意思で私のアパートを訪問してくれるなんてね。くうーっ、感動だよ。感激のあまり、涙腺の蛇口を壊す勢いで泣きそうになってるよ。予想だにしてなかった……わけじゃないけどね。正直言って物凄く嬉しいよ。しかも、こんな真夜中に……。過剰で過激な期待をしましそうかな。不埒な期待をしちゃってもいい？ うー、その表情だと望み薄だね。残念無念」

左右良は本当に嬉しかったらしく、調子外れのハイテンションで戯言をほざき、紅潮した顔に少女っぽい笑みを浮かべ、キッチンに移動した。そして、冷蔵庫を開けて中身を漁る。

俺はその様子を立ったまま眺めていた。どこに座ったらいいのかわからず、困惑していたのだ。ガラステーブルの下に一つだけクッションが置かれているけど、それは左右良専用だろう。俺としてはベッドに座りたいのだが、女の子の寝床に腰掛けていいものかどうか判断が難しいところである。フロアリングの床に直接座るのも少し嫌だった。

「なあ、左右良」

「何かな、陽影君？」

「さっきの男、ここを訪ねて来てたんだろ？ あいつ、何しに来たんだ？」

「あー、あの大馬鹿者ね……」

左右良は飲み物を用意しながら答える。

「あれはクラスメイトの大迫利一だよ。ゴールドデンウィーク前に、大学の学食で私たちに声をかけてきた男なんだけど……きみは記憶してるかな？」

「覚えてる。やたらと口数が多いくせに内容のない奴だった。そんなことはわかってる。俺が聞きたいのは、あいつが何をしに来てたかってことだ。もしかして、左右良の恋人か？ そんな風には見えなかったが……」

ビシッと脹脛に衝撃が走った。

飲み物の入ったグラス二つと茶菓子をお盆の上に乗せた物を両手

で持ちながら、左右良がローキックを放ったのだ。

器用なものである。ちよつと感心した。

「こらつ、陽影君！ 性質の悪過ぎる戯言は、冗談でも勘弁して欲しいんだよ。きみも、あの大馬鹿者が私の恋人じゃないことくらいわかってるんでしょ？ それなのに、その台詞は……最低に酷いよっ！」

「悪い、謝る。だけど、恋人じゃねえとして、他に考えつく理由って何がある？ 遊び仲間ってわけじゃねえよな。意味なく来訪したわけでもねえだろ。じゃあ、何だ？ 陽気なストーリーカーにも見えなかったぞ」

俺は腕組みをして、頭上の蛍光灯を見上げた。

「あいつは理由を訊かないでくれ、みたいなことを言ってたが……本当に何なんだ？」

「うー。それは……ちよつと、私の口からも説明したくないかな。お耳汚しな風評を交えなきゃなんないし、醜悪な風聞はきみの私に対する好意を猛烈に減退させちゃうだろうから」

左右良はお盆をテーブル上に置き、グラスと茶請けを取り分ける。「陽影君、そんな所で天井観測者の模倣に励んでないで、適当な場所に座つたらどうか。そのまま突っ立っていると、どうにも落ち着かないよ。ジャスミンティーを飲みながら、お気楽にお喋りしようよ。お茶請けには名古屋名物のいろいろもあるよ。美味しいから一緒に召し上がれ」

「ベッドに座ってもいいか？」

「ん？ うい、もちのろんだよ。んーでも、それって何かを意図しての台詞かなっ？」

「いや。俺って家じゃいつもベッドに座ってっから、そうすると落ち着くんだ。他意はない。期待に背くように悪いが」

「うー、少しだけ期待しちゃったかな。でも、まあ、きみに色っぽい展開を希望しても無意味だと理解してるからねー。達成不可能な願望はうっちゃって、洪々きみの質問に答えちゃおうかな」

左右良はクッションの上にお尻を落とす、少し不自然な横座りで、ジャスミンティー入りのグラスに手を伸ばした。

俺もベッドの端に座り、ジャスミンティーに手を伸ばす。

グラスを鼻先に近づけた時、心安らぐジャスミンの仄かな香りがふわっと立ち昇った。

「あの道化者が来訪した理由は、私を買ったためだよ」

心の安らぎなど軽く吹き飛ばす言葉を、左右良は平気な顔をして言い放った。

「私に関する数々の噂話を、きみもちらちらと耳にしているよね？」

どれもこれも、耳の穴を防音材で塞ぎたくなるような下劣極まりない話だよ。その中の一つに、十万円出せば一晩だけ私の体を自由にできる、っていう噂があるんだ。知ってるでしょ？ それを鵜呑みにした馬鹿者が度々……っていうか頻繁に来るんだよ。彼もその中の一人ってわけだね。あはは。私としては笑うしかない悲劇なのです。身から出たサビじゃないけれど、日頃の言動が災いして被害を及ぼしちゃってんのかな？ あはは。これはもう笑うしかないでしょ？」

「噂か……。確かに耳障りな話を幾つか知ってるが、それを本気にする奴もいるんだな。世の中には、許容不可能の馬鹿が物凄く多いってことが」

俺は他愛なく笑い、ジャスミンティーを一口啜った。

「でも、言っちゃなんだけど、十万円っていう金額はともかくとして、一晩中、左右良を自分の自由にできるってのは魅力的な条件ではあるな」

「おやおやおや。陽影君、それを言っちゃうの？ 言っちゃうのかい？ きみの口から紡ぎ出された言葉の中じゃ一番だよ。それは、俗に言うところの、セックスを望んでるって受け取っちゃってもいいのかな？ そうなら嬉しいんだけど、そうじゃないよね？ 私を一晩自由にするってのは、どんな意味での台詞なのかな？」

「今みたいに左右良とサシで話をするっていう意味だ。俺にとって

は重要な気分転換になるから魅力的なんだよ。一日十万はキツイが、長いスパンで考えると、一年で三千六百万、十年で三億六千万か……。高くはねえな。俺には払う価値がある」

「むむつ、金額で評価されるのは若干不本意だなっ！でも、私を必要としてくれるからこそその暴言って理解してるから、怒ったりしないよ。逆に嬉しいかも。んー、でもでも、私としては、話をするだけじゃなくて、肉体の方もがつがつ求めて欲しいんだよね。そういうワガママは言わないけどさ。とにかく、噂話については、私も憂慮してるし、その対処法がないわけでもないんだよねー。計画してることもあるしー。ドミノ倒しな感じで、ね」

そう言って、左右良は悪巧みをする悪代官のようにニヤリと笑った。

俺は肩を竦める。

左右良が俺の知らない所で何をしていたようが関心はない。学生相手に売春をしようが、好色男を手玉に取って金を貢がせようが、教授に色仕掛けして成績を上げてもらおうが、邪魔者をぶち殺そうが大迫と仲良くしようが、全然興味が湧かない。心の底から知ったこっちゃねえ。こうして、たまに話をして、精神状態のケアをしてくれさえすれば、それだけで十分なのだ。俺は、それに応じた代価を払う用意があるし、左右良の望む願いはなるべく叶えてやりたい。でも、肉体関係を求められると戸惑う。俺は、十万で一夜の快樂を買っ下司どもと同じになりたくない。彼女の気持ちは理解しているつもりだし、俺も好意を持っているから、深い関係になってもいいとは思っただけど、俺を踏み止まらせる何かが作用してしまうのだ。左右良とは清い仲でいたいという単純な理由なのかもしれない。いや、玲佳の存在が躊躇させているのかもしれない……。うーん、自分の心理などわからない。わかりたくない。

「ときに、左右良」

「なんだい、陽影君？」

「今夜、俺が来た理由はわかってるよな？」

「うい。勿論だよ。さっきは突然の来訪に驚いて取り乱しちゃったけど、今はもうクールダウンして脳味噌メルトダウンな状態だからね。即、推察完了だよ」

左右良は嬉しそうに微笑み、一度座り直した。表情を改めて、正面から俺の顔を見据える。

「事件の報告をするために来てくれたんでしょ？ 携帯電話による間接的な報告じゃなくて、直接来てくれたってのは、事件が《正しい結末》に恙無く帰結したってことだよな？」

「ああ、そうだ。左右良が上手く鈴檜さんに自殺説を説いてくれたお蔭で、最良の結果が出たんだ。その礼を言うために来たってのも本当だぞ」

「お礼の言葉なんか欲しくないよ。ただ、ぶちゅーっとキスしてくれるか、このベッドに押し倒してくれさえすれば、それで大満足なんだよ」

「冗談めかして言っているが、どこか本気な左右良。勘弁して欲しい。」

「うー、釣れないなあ。まあ、ベッドに押し倒してもらうのは我慢するけどさー。キスくらいなら許されるんじゃない？ どう？ 駄目？ 道徳的にも倫理的にも、心理的にも、玲佳さんも許してくれると思うよ」

「……………」
俺はどんな顔をしていたのだろうか。

余程、困惑して見えたに違いない。

そんな俺に、左右良は「あはは」とアゴを仰け反らせて大笑いし、人差し指を顔に突きつけてきた。

「メインディッシュどころか前菜もお預けじゃあ、お客様は腹を立てて帰っちゃうぞっ！ でも、まあしょーがないかな。あんまり騒ぎ立ててきみの機嫌を損ねるのは上策じゃないし、ことを急ぐのも私のスタイルじゃないからね。段階を踏みながら一歩ずつ、目的に近づいていくことにするよ。その代わり、今日は事件の真相をくわ

しーく話してもらおうからね。自殺じゃなくて、殺人事件としての真相を！ いい？」

「ああ、そのつもりだ」

俺は親指を立てて了解を示した。

「でも、陽影君。きみが一方的に解説するんじゃないから、まず最初に私の推理を聞いてくれないかな。事件に殆ど関わっていない私でも、それなりに情報を集めて、私なりの解釈で事件を分析し、身勝手な結論を導き出してみただよ。先日、事件の真相について私が推理を述べた際に、的外れじゃないってきみが評価してくれたわけけど、完璧な正解かどうか今一度判定して欲しいな」

左右良は挑戦的な笑みを浮かべて、勝負を挑んできた。正解か否か。俺たちの災厄を基にしてクイズがしたいわけだ。

良い性格しているよ、左右良。

でも、拒絶はしない。

「いいぞ。聞かせるよ、左右良の推理を」

「うい」

左右良は頷いて一度瞼を閉ざした。唇を固く結び、まるで瞑想するかのように静かに間を置く。そして、ゆっくりと瞼を開いた。知性を備えた美しい双瞳が鮮やかに色づいて、俺の心を虜にする。怖い目だ。何もかもを見通す千里眼。

「さーて、どこから話そうかな。どの場面から話し始めれば、解説し易いだろうか。うーむむ……そうだねー……。きみが義妹さんに乞われて、白岐学園に同行した場面から始めようかな」

どうせ、そこまでは全て、きみに聞かされた話の受け売りだから、と左右良は笑う。

「事件当日、きみは義妹さんと一緒に白岐学園の《H校舎》に入り、階段を上がっていく途中で上の階から下りてきた黒門さやかと遭遇した。これは偶然だね。彼女は事件とは何ら関係のないエキストラだから、以後の話からは除外するよ。いいね？ そして、きみたちは特別教室が集まっている四階へと移動し、廊下奥に位置する視

聴覚室へ向かった。ドアの前に立つたきみは、すりガラスに映る人影から、義妹さんの身に迫る危険を察知し、自らが囿となって室内に足を踏み入れた。すると、案の定、ドアの陰に身を隠していた野口竜一郎が襲いかかってきた。きみは、その時、驚いた？ いや、驚かなかつただろうね。予想通りの展開になったと思っただけ。違うかな？ きみは、その体型に似合わず喧嘩が強いから、野口を簡単に撃退した。アゴを蹴りつけて気絶させたのは、鈴檜さんと同様に少々やり過ぎだと私も思うけどね。でも、義妹さんがレイプされたかもしれない状況を鑑みれば許されちゃうかな。どうだろう。まあ、どっちでもいいか。きみは室内で震えていた野口の協力者、重道忍を断罪した後、義妹さんの口添えもあって、罪を許した上で帰宅させた。きみたちも気絶したままの野口を放置して帰路につこうとした。ここまででは、きみが話してくれた通りのままだ。揺るぎない事実だろう。偽る箇所はないし、偽る意味もない。問題はここからだよ。きみは、男子トイレを発見すると同時に尿意を催し、階段横のトイレに駆け込んだ。そこで十分間もの長時間、義妹さんを廊下に待たせて、私との下らない問答に明け暮れていたわけだよ。きみは、どういふつもりで義妹さんを一人きりにしてしまったのかな。理由は訊かないで上げてあげるけど、非常に軽率な行動だった、と責めなきゃならないぞ。電話をした張本人である私が叱責するのもおかしい話だけども。でも、紛れもない愚行だよ。猛烈に反省すべきだね。いや、もう既に血を吐くくらい反省したのかな？ 義妹さんを一人にしちゃいけない理由としては、義妹さんの優しい性格上、気絶した野口を放置して黙っていられるわけがない、というものが一つ。あー、義妹さんの性格については、きみの話から勝手に推測したものだから、正確じゃないかも。その辺は許してちょ。もう一つの理由は、野口の気絶が深いものでなかった場合、すぐに覚醒して視聴覚室から出てきて、義妹さんを襲う危険性があったからだよ。どんなに小さな間違いでも、結果として絶望的な後悔を生み出しかねないんだ。きみはトイレの中なんかで話さずに、義妹さ

んの行動を監視できる範囲で話すべきだったんだよ。でも、きみは義妹さんから目を離しちゃった。そこに空白の十分間が生まれたわけだね。十分後、きみがトイレから出ていくと、義妹さんの様子がおかしいことに気づかされる。酷く動揺していて泣きそうになっていた、ときみは話してくれた。その状態から、空白の十分間に、義妹さんが容易ならざる事態に巻き込まれたとわかるよね。ね？ そして、その直後に視聴覚室の方から悲鳴が上がった……。本当は逃げ出したかったけれど、悲鳴を聞いてしまった以上は無視できないから、きみたちは視聴覚室に戻った。開かれたドアの前に立つたきみは、野口の絞殺死体を発見。第一発見者は生徒会長の無堂百合子。その時点で、きみは第二発見者だった。ふふっ、死体を発見したときみは何を思ったのかな。まあ、想像に難くないけど……。室内の状況、野口の状態から、きみは即座に犯人を特定できてしまった。他の誰でもない、きみの義理の妹さんだ。綾瀬密希だよ。それを一瞬で悟ったきみは、咄嗟に無堂百合子と義妹さんを、教師を呼んで来させる、という名目で現場から追い払った。そして、その間の僅か数分を利用して事件現場を改竄……。否、改善した。何をしたのかは、それは容易に推測できちゃうよね。床に横たわった状態で首に白い麻縄を巻きつけられて死んでいた野口を、黒板上に付いている金具を用いて首吊り状態にして、義妹さんの身体能力では決して作成できない殺人現場を作ったんだ。その時、きみは、たぶん、野口が自殺したように現場を偽装しようと思ったわけじゃないよね？ どうかな？ むしろ容疑を自分自身に向けさせようと意図したんじゃないかな？ 間違ってる？ まあ、どっちにしろ、きみは空白の十分間における義妹さんのアリバイのなさをフォローして、容疑者から除外することに成功したんだよ。しかも、同時に、容疑者の筆頭に挙げられるであろう自分のアリバイまでも完璧に近いものにしちゃったんだから大したもんだよ。なぜかと言えば、義妹さんの容疑が晴れば、彼女がトイレの前で待っていたという証言にも信憑性が生じるからね。これに無堂さんの目撃証言を合わせれば、義

妹さんの証言はより信憑性を帯びるだろう。あとは、西川不二彦を殺害していたであろう小野寺紗枝の証言と、私の携帯電話の通話履歴と理路整然とした証言によって、きみたちのアリバイはほぼ完璧になるってわけだ。ふふふ。死体発見後のちよつとした空白時間と絞殺死体を首吊り死体にしちゃうんだから、大した度胸の持ち主だと褒めなきゃなんないよね。しかし、そこで幾つかの問題点が生じてしまった。まず一つ目は、当然と言えば当然だけど、第一発見者の無堂百合子だよ。彼女は首吊り死体ではなく、床に横たわっていた絞殺死体を目撃しちゃってるわけだもんね。もしそれを事情聴取で証言されちゃったら、きみが疑われることになる。同じ現場を目撃している二人が、異なる証言をするんだから、疑って下さい、って申し出ているようなもんだよ。そうなった場合、きみはどう対処するつもりだったのかな。まさか、眼鏡っ子の証言なんか当てにできないぞ、って言い張るつもりだったとか？ それとも、彼女に大金を握らせて偽証させようとしたのかな？ まあ、訊かないで okay。幸いにして、死体発見時のショックで、無堂さんは死体の状態を記憶してなかったから、あやふやな証言しかできなかった。日頃は洞察力の優れてる真面目で気丈な生徒会長でも、生まれて初めて死体を目の当たりにすれば動揺して当然だよ。何と言っても、彼女はまだ中学生なんだから、正確に殺人現場を記憶してなくても責められないよ。まあ、そんなわけで、きみは首吊り死体の実質的な第一発見者となり、問題は解消された。二つ目の問題は、言わずもがなの、義妹さんの心理状態だ。自己防衛のためとはいえ、人を殺しちゃったんだから、動揺して当然だし、警察の尋問の際に犯行を自白しちゃってもおかしくないんだ。これは、きみにはどうしようもない心の問題だから、相当にヤキモキしたんじゃないかな？ 警察署で事情聴取を受けてる間、義妹さんが自白しないかどうか気が気じゃなかったでしょ？ 義妹さんが打ち明けてくれない以上、きみの側から口止めするわけにはいかなかったらどうしね。でも、結果的に彼女は自白しないで、トイレの中で電話をしていた義兄を

十分間廊下で待つていた、と証言した。なぜ彼女が偽証したのかは……想像に難くないけど、あえて言わないどくよ。問題の三つ目は、この事件が実質上の不可能犯罪になってしまった、ということだ。まあ、結果的に偶然そうなっちゃったんだろうけどさ。死亡推定時刻に、《H校舎》の四階にいた全員が野口を殺害することができなかった、っていう結論に達しちやったんだ。この結果には、警察と同様に、きみも困惑しただろうね。しかも、何を血迷ったのか、きみは容疑をかけられている生徒たちを弁護しているし……。その行為が最終的には、自殺説へと結びつける布石になったわけだから良かったものの、一步間違えば真相が明るみに出ちゃうくらいの軽拳だったって自覚しなきゃ駄目だぞ。可愛い女の子に優しくするのも程々にしとかなきゃ。あ、こらっ、陽影君てば、すっとぼけた顔してるけど、わかってるの？ んもうつ！ しょーがない男だね、きみは！ でも、まあ、この三つの問題点は、危険こそ孕んでたけど、致命傷になり得るものじゃなかった。無堂百合子は死体をガン見したショックで記憶がアヤフヤだったから、警察の捜査に悪影響を及ぼさない無害な存在だと判断したんだろうし、義妹さんのことは、一度口を噤んじゃったら、彼女の性格上、自分から自首することはないって確信してたんだろうね。この事件が不可能犯罪になっちゃった点も、このまま事件が解決されずに迷宮入りになってもそれはそれで構わないって思ったんでしょ？ だから、以上三つの問題点は、きみにとっては憂慮するまでもない、小さな悩みだったわけさ。しかし、急遽生じた四つ目の問題点は樂觀視できなかった。警視庁捜査一課の立花鈴檜のことだよ。最初、頼りなく映っていた女刑事が、実は頭の切れる優秀な捜査員かもしれないと薄々気づき始めたきみは、動揺を隠せなかっただろうね。彼女は最初から、きみを殺人の容疑者筆頭と見なしてたと思うな。益暗刑事を装い、きみに罠をかけ、きみ自身の口から犯行を告白させようって謀ってたんだよ。きみと二人つきりで事件現場へ赴いた時も、容疑者を召集して事情聴取した時も、最後にみんなを集めて《野口の自殺》と結

論付けた時も、きみがうつかりと口を滑らせて犯行を自供するのを手薬煉挽いて待つてたつてわけさ。くくっ、嫌な女だよー。あれ、意外なの？ そんな風に見えなかったって？ 華麗な外見や的外れな言動に惑わされて本質を見誤っちゃったんだね。他人を見下す癖は早々に改善するべきだよ。もし先日きみが私に聞かせてくれたみたいに、立花刑事に《事件当日の記憶》を語つたら、間違はなく真相に辿り着いちゃつてて、即座にきみたちを逮捕してたんじゃないかな。んー、そう断言してもいいと思う。きみも薄々、立花刑事から嫌なプレッシャーを感じ取ってたんじゃないの？ だから、呼ばれてもいない実況見分に参加して、事件の捜査状況を見極めようとしたり、信用に値する人間を演じようと努めたんでしょ？ だけど、それは相手側の策でもあったんだよ。最初、犯人は自らの無実を証明しようと思死になつて防衛線を張るから、容疑者から外して安心させといて、油断してうつかり口を滑らせたところをガブツと丸齧り……。きみ好みじゃないかもしれないけど、私は嫌いじゃない手法だね。あはは。まあ、結局のところ、立花警視は事件の真相に肉迫しながら、あと体半分の所で強制リタイアさせられちゃったわけだね。可哀想だけど、それが彼女の捜査能力の限界だったんだから仕方がないかな。この勝負はきみの勝ち」

左右良はそこまで話して、ジャスミンティーを一口飲んだ。そして、反応を確かめるように俺を上目遣いに睨む。

「要するに、犯人は綾瀬密希つてことだよ。それで、その犯行を偽装工作によつて隠蔽したのがきみ、つていう結論だ。きみたちは立派な犯罪者兄妹だよ。あはは。さーて、ここまでの私の推理は正しいかな？」

俺は苦笑するしかない。

「まあ、大筋は間違っちゃいなえな。左右良の推理通り、野口を首吊り状態にしたのは俺だ。密希に容疑がかからないようにするには、そうするしかなかった。あの時は、ぱにくつてて、他の案が思い浮かばなかったつてというのが本当だ」

「きみはその時、物証になりそうな物を持ち去ったんだよね？」

「そこまでわかるのか？ スゲーな左右良」

俺はお世辞抜きで褒め称えた。

「持ち去ったって言っても、一品だけだけどな」

それが何かわかるか、と目で問う。

すると、左右良はくすつと笑った。

「きみが義妹さんにプレゼントしたっていうウサギのブローチでしょ？ それしか考えられない」

左右良は自信に満ちた笑みをもって答えた。

「何でわかつたんだ？」

俺は畏怖の目を向ける。

左右良はくすくすと笑いを零した。

「わからないはずないよ。きみの《事件当日の記憶》では、義妹さんがウサギのブローチを身につけてるのを見て、先生に怒られるかもしれないから学校につけて行っちゃ駄目だよ、って注意したんでしょ？ そんで、義妹さんはその場でブローチを外してポケットにしまった、って話してくれたでしょ？ その日は、休日登校だったから、他に荷物は持っていないかつたはずだよ。そういう条件の下、一目で誰の所有物を判別できる物の中で、事件現場に落とせる物は、ウサギのブローチだけでしょ。こんなのは易い推理だよ」

「なるほど……」

感心するしかなかった。

「もし、プレゼントしたブローチが事件現場に残されてなかったら、きみは犯人を義妹さんと断定できなかっただろうね。それを考えれば、事前の注意が幸いしたと言っても過言じゃないかな。もっと言うなら、前日にブローチを買い与えたことが幸いしたんだし、きみが私の忠告に従って実家に戻ったことが最悪の結果を回避させたと言えなくもない。ね？ そう考えると、銀行のトラブルで預貯金を降ろせなかったことにきみは感謝しなくちゃならない。そう思わないかな？ んー、その辺は微妙だよ」

左右良は目を細めて言う。

「しかし、義妹さんは野口に襲われた時、よくも反撃できたと思うよ。なにせ相手は背の高い金髪の男子高校生でしょ？ 押さえ込まれちゃったら抵抗のしようがない。首を絞めるにしても、相手が大人しくしてくれなきゃ、細腕の美少女には不可能だよ。ってことは、きみに撃退された時の後遺症が酷くて、野口は身体の自由が利かなかったわけだね？」

「まあ、そういうことだろうな」

答えながらも、それに関しては正確な事実を知っているわけではないので、曖昧な表情で誤魔化すしかなかった。

密希は大した苦勞もせずに返り討ちにしたと言っていたが、実際にはかなり激しく格闘したのではないかと俺は想像している。身長差、体重差は言うに及ばず、野口の持つ威圧感に萎縮しないで冷静に対処できたとは考え難い。服を脱がされそうになった、という話からしても、押さえ込まれていたのは確実だ。そんな状態から本当によく助かったものである。

「まあ、最悪、抵抗できずに組み伏せられちゃっても、すぐに百合子ちゃんが視聴覚室に来たわけだから、それほど酷い目には遭わなかったと思うけどな」

「うい。そうだね。確かに、無堂百合子が来るまで時間稼ぎができれば、最悪の事態は避けられたかもしれない。でも、全ては仮定の話だよ。そんなの、全く意味ないんじゃないかな」

左右良の言う通り、仮定の話など何の意味もない。今は、過程と結果を明らかにすべき時だ。仮想するのは、自室のベッドに寝転がりながらでいい。

「なあ、左右良」

「うい。何だい、陽影君？」

「いつ気づいたんだ？」

「ん……《いつ》とは、この事件がきみと義妹さんの共演殺人ってことに、どの時点で気づいたか、って意味かな？」

「ああ」

俺が頷くと、左右良は両足を投げ出し、両手を後ろに伸ばして体を支え、自堕落な姿勢を取った。そして、天井を見上げてくすくすと笑う。

「きみに《事件当日の記憶》を聞かされた直後だよ。あはは」

「直後？」

「うい。事件の全容まではさすがにわかんなかったけどさ。でも、義妹さんが殺人犯で、きみが偽装工作を施した張本人ってことはすぐにわかったよ」

天井を見上げながら言う左右良。

俺は思わずベッドから腰を浮かせ、左右良に詰め寄った。

「冗談でなく、マジで？」

「うい」

俺が覆い被さるように接近して、キスする勢いで顔を近づけたので、左右良は咄嗟に身を逸らせて距離を保とうとした。だが、嫌な顔はせず、むしろ驚きと共に面白そうな笑みを湛えている。

「こんなに顔を接近させて何をするつもりなのかな、陽影君。もしかして、キスしてくれるのかな？ 私は拒絶する唇など持っていないから、何回でもぶちゅーってしてくれて構わないけど、もう少しムードを大切にしたいなあ」

「……………」

俺は眉をひそめ、無言で身を引いた。咳払いをしてベッドに座り直す。

「悪いな。ちつと興奮しちゃった」

「ちつとも悪くなんかないよ。そのままの勢いでベッドに押し倒してくれても良かったのに……残念だな。あはは。きみは衝動に身を任せて求愛する男じゃないと理解してるけどね」

俺は肩を竦めるしかない。

「……………どうして気づいたんだ？ 俺の話のどの部分から真相を導き出した？」

「ごく簡単な相違点からだよ。きみから聞いた事件当日の話の中で、無堂百合子の悲鳴を聞きつけて男子トイレから視聴覚室へ駆けつけた時、室内の死体を見たきみは、『横たわっていた』と表現したんだよ。しかし、発見時の死体の状態を立花刑事に訊かれた時、きみは黒板下の壁にもたれて、両足を投げ出し、うな垂れている姿を演じて見せたんでしょ？ 本来なら、『横たわって』見せなきゃならないところを、きみは『座って』見せちゃったんだよ。この違いは、誰が聞いても首を傾げざるを得ないでしょ。そう思わない？ たぶん、きみは自分で意識せずに死体が『横たわっていた』と私に話しちゃったんだろうけど、それは致命的なまでの凡ミスだよ。ふふふ。良かったね、相手が私で」

「……………」

俺は唇を噛み締めて数日前を思い起こした。そんな軽率な発言をしたと言うのか？ 死体が『横たわっていた』などと、証言と矛盾する話を左右良に語ってしまったのだろうか？ 覚えがない。もしかしら話してしまっただかもしれない。しかし、そんな小さな矛盾点から妹の犯行と俺の偽装工作を見破れてしまうものなのか？ いや、現に見破られているわけだから、納得せざるを得ないか……。

「なあ、左右良」

「何だい、陽影君」

「その頭の中って、どんな構造になってやがるんだ？ 何か変な物でも詰まってるんじゃないやねえだろうな？」

「えへへ。それ、褒め言葉と解釈してもいいの？ ベた褒め？」

左右良は歓喜で万歳する。

俺が「うい」と彼女の真似をして肯定すると、「あははは」とアゴを逸らせて笑われた。

それほど不愉快にはならなかった。

「やっぱり頭良いんだな、左右良は」

「んー……確かにねー。私って、一般人なんかよりも数段頭良いけどさ。それを自覚しちゃってるけどさ。でも、今回の事件って、言

うほど大した推理は必要じゃなかったし、幾通りもの仮説を立てた
ってわけでもないんだよ。必要だったのは想像力。単に、きみから
得た情報があまりに正確だったから、容易に事件を読み解くことが
できたっただけだよ。脳味噌を酷使するまでもなかったね。あはは。
きつと、私以外の人間でも、きみから話を聞いていたら、事件の真
相に辿り着くことができたんじゃないかな。その程度の事件だよ、
これは」

笑いながらのたまう美女。

なんだかな……。

まあ、いいけど。

【6・天園陽影】

左右良は一頻り笑うと、お尻の下に敷いていたクッションを抱きかかえた。

俺は、ふと思いついた。

「なあ、左右良。高校時代の写真を見せてくれよ。連休前に見せてくれるって約束をしただろ？ すんげー可愛いセーラー服姿だったとか言ってたよな」

今、左右良が着ている服は、無地で大き目のトレーナーにスリムジーンズ。ラフな格好である。やはり、家の中でもスカートは穿かないらしい。いや、家の中だと余計に穿かないか。俺はスカートなんて穿いた試しがないから適切な評価はできないが、あれって、ひらひらして酷く生活し辛そうだもんな。

「な、何を言い出すのかな、いきなり！ きみの話には脈絡ってもんがないの？ まあ、約束しちゃうてるのは本当だから仕方ないけどさ。もしかして、きみの望みは私のスカート姿かな？」

困惑を露わにして左右良は言った。

「ああ。今、チラッと思い出したんだ。左右良はいつもズボンばかりだから、たまにはスカートを穿いている姿も見たいな、なーんて思ってたね。ああ、別に今、ここでスカートに穿き替えてくれるのもいいな。その方が嬉しいかもしれねえ」

「スケベだね」

軽蔑の視線。

「スケベ心なんてねえよ」

俺はムツとして抗議した。

左右良は目を細める。

「どうだかねー。きみの発言は、通勤電車内で痴漢行為を働いておいて、捕まると白々しくしらばっくれる変態オヤジと同レベルだよ。不潔だねっ！ 最低、って罵らなきゃなんないくらいの変態的願望

だよ」

左右良はすくつと立ち上がり、腰に手を当てて、聞き分けのない子供を叱りつけるように俺の顔を覗き込みながら、一言一言吐き捨てるように言った。

スカートの話題には心の底から嫌悪感をいだいてしまつらしい。洒落や冗談では済まない感じた。平手打ちの一発も放ちそうな面持ちである。

「変態っつーのは言い過ぎだろ」

「それ以外の表現を私は知らないな。本当なら、もつと下品でドギツイ言葉を使用したけれど、きみにはしたくない女とは思われたくないから我慢してるんだよ。一応、お年頃の清純な乙女だからね。だから、私に低俗な言葉を使わせないためにも、スカートの話題には触れないで欲しいな」

「……………」

俺が、つまらねえなあ、という顔をすると、左右良は情けなさそうに眉を下げた。小さく溜め息を吐く。どこか諦めにも通じる哀しげな吐息だった。

「うー。どうしても見たいの？」

「ああ、是非見たい」

「んもう……。仕方ない男だね、きみは！」

もう一度、深く溜め息を吐き、左右良はクローゼットの前に移動した。そして、下の引出しを開けて奥の方から薄いアルバムを取り出した。

へえ、アルバムなんか作ってやがるのか、と俺は心の中で皮肉っぽく呟いた。

左右良の性格からして、過去の思い出を写真という二次元の保存法で残しておくなど、相応しくないと思ったのだ。過去は過去であり、取り返しがつかないものだから、記録しておいても意味がない。過去を懐かしむ行為は、ネガティブ極まりないものである。左右良なら、写真など破り捨てて未来を見据えて前向きに生きるべきだ、

とか言いそうなものだ。

「ほら、これが幼少期から高校を卒業するまでの、私を写したアルバムだ」

赤い表紙のアルバムをテーブルの上に置き、ぺらぺらと捲り返しつつ、一つずつ写真を指差して、当時の左右良が置かれていた状況の解説をしてくれた。

「わあっ！ 子供の時の写真は恥ずかしいから見ちゃ駄目だよ！ 私だってはっちゃけてた時期はあるんだよ。え？ 今も十分にはっちゃけてるって？ それは心外だなっ！ あ……っと、次のページへ行って……。うい、これだ。この写真が中学時代に、修学旅行の時に撮ったものだよ」

人差し指で示された写真には、お土産の木刀を片手に眉をひそめる不機嫌面の美少女が、数頭の鹿と並んで突っ立っていた。

「奈良公園か？」

鹿イコール奈良、という安直な推理を働かせて確認すると、発想の貧困さを哀れむような目で睨まれた。

でも、正解らしい。

「うい。中学の修学旅行先として選ばれる定番中の定番は、奈良、京都だよ」

「何か、すげーつまんねえ顔をしてっけど、どうしたんだ？」

「実際につまんなかったんだもん、しょうがないじゃん。私は極度の引き籠もりで性質の悪い不登校児だったからね。当然、友達が一人もいかなかったんだよ。だもんで、修学旅行の班分けをした時、私だけ蚊帳の外ってわけさ。一応、私を加えてくれる心優しいグループがあつたはあつただけど、いわゆる人数合わせ要員として使われたのは明白だったんだよ。修学旅行もボイコットすると思われていたみたいだしね。だから、強制的に参加させられても、グループに溶け込めずに、このざまってわけさ」

「ふーん。悲惨な思い出だな」

そんな思い出なんかを写真という形で残しておいても意味がない

のでは、と思つたが、もしかしたら左右良には惨めな記憶に浸つて自己嫌悪に陥るといふ自虐趣味の持ち主なのかもしれない。だから、余計な感想は言わないでおいた。

次のページに移動。

「これが高校時代の私だよ。どうだい、特徴的なセーラー服が可愛いだろう?」

指差された写真には、彼女が言うように、一般的に言うところのセーラー服とは少しデザインの異なる奇抜な制服を身に着けた色嶺左右良が立っていた。背中まで伸びる黒髪を三つ編みにした女の子が淡く微笑んでいる。いわゆる、模範的優等生な風貌。スカートの丈が極端に短い点を除けば、文句をつける箇所などない抜群の美少女だった。

「左右良つて、すげく可愛かつたんだな」

「見直した?」

「ああ、そうだな。ずば抜けた容姿の持ち主だつて再確認したぞ」
「ありがとう」

少し照れ臭そうに微笑む美女。

「それで、私のスカート姿を見た感想はどう? 率直な感想を述べちゃつてくれたまえよ。興奮で鼻血ぶー? 前屈み注意報?」

嫌悪感をいだいていた割には、高評価を期待してやがる……。
でも、正直困つた。

セーラー服を身に着けた左右良は想像通り可愛かつたし、現在より幼さを残した容姿も十二分に楽しめたが、感想となると表現方法に悩んでしまう。スカートを穿いている類い稀な美少女。ただそれだけ。想像の範疇だった。だが、それをそのまま台詞にすると、せつかくアルバムまで出して見せてくれた彼女に失礼だろう。

「左右良がスカートに嫌悪をいadak理由は、写真を見る限りじゃわかんなかったな。際どいスカートは今も昔も同じだろ?」

「私は時代背景なんか問題にしてないもん。私自身がパンツ丸出しに等しいスカートを、どんな想いで穿いてたか、が重要なんだよ。」

流行を常識だと錯覚して、パンツを見られても平気な顔で大手を振る恥知らずな能無し女どもと一色多に考えるのは止めて欲しいな。奥歯にズキズキ虫唾が走るよ。きみの言葉だから許すけどさ。他の男だったら、平手打ちの二、三発も叩き込んでるところだよ」

「お気遣い、ありがたき幸せ」

俺は馬鹿丁寧に頭を下げた。

「つつーことは、今ここでスカートに置き替えてくれって要求したらビンタされちまうのか？」

「うい。いくらきみの頼みでも、できることとできないことがあるよ。まして、今さっきの暴言の後だからね。鋭い平手打ちを一発打ち込む可能性大だ。だから、不埒な要求は止めて欲しい。私はきみを叩きたくない」

「俺が新しいスカートをプレゼントするって言ってもか？」

「うー……」

左右良は真剣な顔で悩み始めた。

眉間を厳しく狭め、唇を真一文字に引き結び、視線をフローリングの床へ落として苦悩している。頭の中で、どんな計算が行われているのだろうか。プレゼントは欲しいけど、スカートを穿くのは嫌だ、というジレンマが計算を困難なものにしているのか？ それとも、単に、羞恥心の足し引きに戸惑っているだけなのか。読心能力のない俺にはわからない。ただ一つ言えるのは、左右良も他の女の子と同様に、プレゼントを望む人間なのだ。

「やっぱ、駄目か？」

「うむむっ……。それって、スカートを購入する際のデートも込みっていう条件かな？ いちゃいちゃするのも込み？」

「おやおや、更に条件提示ですか……。なるほど、一緒に買い物に行きたいってことか。しかも、デートという設定で。」

「デートか……」。

悪くない。

よく考えてみると、左右良とは大学構内以外で会ったのは、今日

が初めてなのだ。

「デートってことで構わねえよ」

「うい。承知した」

どうやら、デートがスカートに対する嫌悪感を凌駕したらしい。俺という人間のどこを気に入っているのだろうか。そんなに俺みたいな変な人間とデートしたいのだろうか。変人だから近くで観察したいという研究的視線なのだろうか。全くわかりません。理解不能です。でも、嘘偽りなく好きと言ってくれるのだから、同じく好意を持つ俺も、少しは期待に応えなければならぬだろう。

「おい、左右良」

俺は酷くぶつきらぼうに名を呼んだ。

その思いやりの欠片もない無感情な無機質声に、左右良は「はい」と居住まいを正して返事をした。彼女以外の女であれば、誰もが怯え、身を竦ませてしまう声にも全く動じず、俺が重要な話を切り出そうとしていることを察してくれている。頬の辺りに緊張を漂わせ、真剣な面持ちで言葉を待っている。

俺は上着のポケットから細長い小箱を取り出して、無言で差し出した。

「ん？」

知性派の美女は差し出された品を見て、しばらく沈黙。チラッと上目遣いで俺の表情を確かめて、また視線を戻す。何か得体の知れない異次元物質でも観察するかのようには、不審そうな目で睨みつけている。

「こいつをくれてやるよ」

もっと気の利いたお洒落な言い回しが百万語以上存在しただろうけど、俺のような捻くれ者にはこんなアプローチしかできないのだ。不器用っていうか、自尊心過剰っていうか。まあ、簡単に表現すると馬鹿なのだろう。

左右良の表情が急変した。畏を見破ろうとする策士から、畏に嵌められた策士へと。

包装されてリボンを掛けられた小箱を呆然と凝視している。だが、徐々に口許を綻ばせ、最終的には、唇を震わせて、泣き笑いで顔全体を支配した。

「こ、これ……私がいただいちゃってもいいの？」

「そう言っただらう」

「プレゼント？」

「そうだと言ってる。しつこいぞ、左右良」

「ほんとの本当に？」

「……いらねえの？」

「い、いるっ！ いただき！ 貰う！ ありがたく頂戴するよ。あ、嗚呼、何てことだらう……。何ていう日なんだ……。何だらう。何かな。開けてみてもいい？」

「勝手にしろ」

手放しの喜びように、俺は心持ち引いた。少々手渡す状況を見誤ったか、と反省する。笑顔を見ていると心は和むが、泣き笑いは心にかかる負荷がキツイ。俺が受け止めるには重過ぎる。どう対処していいのかわからなくなっちまう。頼むから過剰な感情表現は止めて欲しい。できれば、内向きに喜んでくれ。でないと、左右良に対する好意が、捻じれてマイナス方向へと暴走しかねないぞ。

俺は左右良をイジメたくない。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、唇を戦慄かせつつも感情を暴発させることなく、左右良は小箱の包装を解いて中身を取り出した。感激に目を潤ませながらジュエリーボックスの蓋を開ける。

「あー……」

小さく感嘆。

「ペンダント？」

「ルビーの首飾りだ。左右良に似合うと思っただ。どうだ？ 悪かねえだらう？」

「悪いわけないよ……」

震える声で応じ、ペンダントを手にとって首へと持っていく。ぎ

こちない手つきで装着し、長い髪の毛をチェーンから抜いてさらりと肩に流し、俺の方を向いた。

「どうかな？ 似合うかな？」

答えの選択肢は一つしかない。それ以外は、許されない状況だ。今、彼女が着ているジーンズとトレーナーでは、高価な首飾りとミスマッチだ、と思っても、口に出してはいけない禁句だろう。

「美人さんの左右良に似合わねえわけがないだろ。それに、俺が選んだんだぜ」

「そ、そうだよね……。ありがと。感謝感激だよ。うー。気持ちが高ぶり過ぎて言葉が紡ぎ出せない。この想いをどう伝えたらいいのか大困惑だねっ。きみにとっては大迷惑かな？ あはは」

左右良は本当に嬉しかったようで、それこそ美空ちゃんばりのハイテンションで一頻り小躍りし、俺の手を握って大騒ぎした。ご近所様に迷惑じゃねえのか、と変に心配りしてしまうくらいの弾けっぷりだった。

ここまでプラスの感情をぶちまけるってことは、義理で感謝しているんじゃないだろうから、俺も満足ってもんだ。

左右良は三十分近く跳ね回った。

その後、ジャスミンティーをがぶ飲みして、気分の鎮静化を図ってくれた。それでも、立て続けに熱い溜め息を吐きながら、左右良は恍惚としてペンダントを觀賞している。今日明日はトリップしたままかもしれない。

「陽影君、このペンダントは肌身離さずに一生大切にするよ。あと、お礼をしなくちゃなんないよね。何がいいかな？ キスとかセックスじゃ駄目？ それはお礼になんないか……。うー、困ったぞっ」「何もいらねえよ。構うな。礼なんて望んでねえ。日頃世話になってる感謝と、これからも迷惑をかけるお詫びの前倒しと、事件の口止めの意味を兼ねたプレゼントだからな」

「でも、これ、物凄く高価な物でしょ？」

「値段は訊くな。マジで洒落になんねえと思うから」
俺は不敵に笑って見せる。

左右良は小さく頷き、それ以上、ペンダントの話題には触れな
った。

【7・天園陽影】

それから一時間程度、俺たちはどうでもいい下らない会話をして無駄に時間を消費した。

左右良にとつては楽しい時間だったかもしれないが、俺には苦痛でしかなかった。どれほど短い会話でも、何らかの意味を持たせたいのだ。それは間違いじゃないだろう。人間の死期を予測するのは不可能だけど、自分の肉体の限界を極めるまで、とことん人生を満喫する努力を怠るべきではない。俺は怠りたくない。その努力が何の意味も成さないような不良人格の俺が言っている台詞じゃないのは重々承知しているが……。

「んじゃ、俺、そろそろ帰る」

話が途切れたので……と言っても俺が意識的に断ち切ったのだが、一瞬の静寂に室内が満たされたのを見計らって、俺はベッドから立ち上がった。

このまま左右良のアパートに泊り込んで朝日を拝むつもりはない。一度、実家へ戻り、連休中世話になった密希と光理さんに感謝の意を伝え、一緒に朝飯を食ってから、玲佳の待つ自宅マンションに戻る心積もりである。

以前の俺だったら、一度実家へ戻るなど自我崩壊に導く愚考だと断言しただろうが、今の俺には、二名の新しい家族と共有する時間が大切に思えるのだ。

心の中でどんな化学変化が生じたのだろうか？

自分のことだからわからない。

けれど、この変化は俺に欠けたものを補う上で必要不可欠だったに違いないのだ。

左右良は満面の笑みを浮かべた。

「また、明日……って言うより、今日と表現した方が正しいかな。

また今日、大学で会おう。お昼を一緒に食べようね」

「ああ」

俺は短く返答して玄関へ向かった。

「ねえ、陽影君。最後に二つだけ、訊いてもいい？」

靴を履こうとしていた俺の背中に左右良の声がぶつかった。

帰りがけに呼び止められるのは嫌だし、いちいち応答するのも面倒臭かったので、無視して帰っても良かったが、彼女の口調に強い意志を感じ、靴を履きながら質問を促した。

「構わねえよ」

「うい。許可してくれてありがと。実は、これから放つ二つの質問こそが私の中で最大級の疑問だったんだよ。それに比べれば事件の真相なんかどうでもいいくらいさ。本当は真つ先に質問したかったんだけど、きみが相手だからね。どうにも切り出し難くて、その機会を逸してしまいそうになったよ。笑うしかないね。あはは」

その自嘲じみた笑いと、もったいぶった言い方に、俺は興味を引かれた。

「気になる言い方だな。もったいぶらず率直に訊けよ」

「うい」

左右良は下駄箱前まで歩み寄り、俺の背後に立った。

「こつちを向いてくれないかな、陽影君」

俺は求められるままに回れ右をして、顔を向かい合わせた。

「質問は極めてシンプルでわかり易いものだよ。でも、きみが返答できるかどうかは私にもわからない。非常にきみの内面を抉る質問だからね」

「……………」

無言で俺は質問を待った。

「では、訊こう。なぜ、きみは義妹さんの犯行を隠蔽しようとしたのかな？」

「……………」

俺は無言のまま石像と化した。

質問の意味を脳味噌が理解した瞬間、ブラックアウトするように

意識が弾け跳び、世界が白濁したのだ。

返答を拒絶。

つまり、無意識のうちに心が防衛反応を起こして、外界とのコンタクトをシャットアウトしたのである。それくらい答えたくない質問だと、心が自動的に判断したのでらう。

「陽影君？」

ただならぬ反応を示した俺を心配そうに見つめて、遠慮がちに声をかける左右良。だけど、返答を期待している目。

「……………」

俺は意識的に無意識の防衛システムを解除して、閉鎖した心の扉を開き、自問した。

俺はなぜ、密希の犯行を隠したのか？

なぜ犯行現場に偽装工作を施してまで、妹を守ろうとしたのか？
自らが容疑者の筆頭に名を連ねてまで偽装する、という危険行為に走った理由は何か？

記憶を遡り、事件当日の出来事を思い起こしながら、自分の思考がどのように働いたかを分析してみる。

あの時、百合子ちゃんの悲鳴が《H校舎》四階に反響して、渋谷視聴覚室に戻り、室内に倒れている野口と床に転がっているトパーズのブローチを見て、俺は全てを理解した。

その時、何を考えたのか。

ヤバイ、と思ったのは間違いない。このままでは、密希が警察に捕まっちゃう、と思ったのも事実。

しかし、なぜ密希が捕まっては駄目なのか、という疑問が湧く。

俺のような自分第一主義の排他的駄目人間が、妹とはいえ血の繋がらない他人に対して、非利己的行動に及んだ理由は……俗に言う家族愛とやらか？ 騎士道精神か？ 英雄願望か？ いや、どれも俺には無縁のものだ。依頼もなしに救援するようなボランティア精神など、俺は持ち合わせていない。まして、相手が犯罪者ともなれば、助ける意味がない。ほんの数時間、家族ごっこをしただけの

女の子を、法に背いてまで助けて何になると言うのか。いつもの俺であれば、平然と妹を警察に突き出していただろう。

「だけど、助けてしまった。」

ブローチを密かに回収し、野口を首吊り状態にし、容疑を自分に向けようと謀った。

その時、俺は妹を守りたい衝動に突き動かされていたのだ。

気の迷いではなく。妹に感謝されたいわけでもなく。ただ単に、妹を不幸にしたくなかっただけ。

そんな馬鹿げた下らない衝動に心を支配されちゃっていたのだ。

「何て情けない……。」

「答えてくれないの？」

悩乱する俺の心を見透かしたように、同情的な表情を作って左右良が訊いてきた。

俺に返答を催促するのではなく、返答をする意思があるのか確かめているのだ。

「わからねえな……。」

俺は答えた。いつものように、いつもの台詞を。

「自分のことだからわかんねえよ。」

「それはあり得ないよ、陽影君。」

即座に左右良が応じた。

顔を張るような厳しい口調だった。

「わかるはずだよ。その時、義妹さんを助けたのは、内向きの感情に強いられたからじゃないでしょ。心の奥底に閉ざされて封じられる記憶じゃないんだよ。絶対にあり得ない。きみは、わからないフリをしてるだけだ。どうしても認めたくないんだね。自分の内面に芽生えつつある外向きの感情を。義妹さんを大切に思っている心を。義母と義妹を家族として受け入れつつある自分が、妙に気恥ずかしいんじゃないかな？」

「そんなことねえぞ。俺はちゃんと密希たちを家族として受け入れてる。自分を偽ってなんかねえよ。恥ずかしいなんて思ってねえ。」

「あれれーっ、自分で納得し切れていないことを私に信じさせようなんて、きみらしくないなあ。心の中では、新しい家族と馴れ合ってたまるか、っていう思いが残ってるんじゃないの？」

「残っちゃねえよ」

「嘘だ！」

言うが早いか、左右良の右手が電光石火のスピードで空を切り裂き、俺の頬を打った。

ぴちっ、と小気味良い音が鳴った。肉体的には全く効かなかったが、精神的には結構効いた。まさかビンタを食らうとは思ってなかったのだ。何より、左右良が手を上げるとは全く予測できなかった。

「私に、この色嶺左右良に、嘘を吐いちゃ駄目だよ、陽影君」

泣きそうな顔をしていた。

だったら殴るな、と言いたかった。

「……………」

不思議と怒りはわかかなかった。戸惑いもない。原因が結果を生み出すのだ。ビンタされるような言動に及んだ俺の過ち。確かに嘘は許されない。

「わかった。正直に答える」

「ありがとう、陽影君」

左右良はにつこりと頬笑んだ。

「まあ、左右良の言う通りかもしれないねえな。俺はいまだに密希と光理さんを完全な家族と認めてねえよ。認めようとしてるんだけど、心のどこかで拒絶反応が起こってるんだろっな。本当の家族はもうぶっ壊れちまつてて回復不可能だけど、それに替えて新しい家族と馴れ合うってのは、どう考えても納得いかない。理屈にあわねえよ。どの角度から見ても、偽物の家族は偽物の家族なんだからな」

「んー、偽物の家族か……………」

「完璧な偽家族だ。馬鹿親父がいなけりゃ、それこそ理想的な偽り家族だろっな」

皮肉たっぷりに吐き捨てる。

「密希と光理さんには文句のつけ所なんて一箇所もねえよ」

「二人のことが好きなの？」

さり気なく、何気ない口調で訊かれた。

「まあ、好きだな。大好きかもしれないねえよ」

「……どんなところが？」

「光理さんは一緒にいると安心感を得られる母性の塊のような人なんだ。愛嬌があって面白いし、美人さんだし、何より話してると心が休まるんだ。その辺は左右良にも通じる部分だな。誰が評価しても良い母親って言うと思うぜ。密希は明るくて元気で前向きな美女だ。俺に欠けているものを全部持つてる女の子だな。だから、可愛いっていうか、貴重っていうか……」

「だから、守ってあげたかったわけだね」

左右良は全てを理解したとでも言うように、大きく頷いた。

「きみは自分にはないものを持つてる女の子が妹になったことに反発しつつも、心の奥底では大切に思っていて、ついつい犯行を隠蔽してしまっただけだ。なるほどね。それで納得がいったよ。そして、感動だ。きみのような人間にも、おぼろげながらに家族愛………：兄妹愛というものが芽生えたんだからね」

「……………」

俺は無言で左右良を一瞥し、背を向けた。

そんなわきやねえだろ、と言ってやりたかったが、思いを言葉にできなかった。

認めるつもりはないが、不本意だけど、心のどこかで新しい家族との絆を大切にしていきたいと願っている。

「じゃあな、左右良」

俺はドアを開けた。

「最後の質問が残ってるよ、陽影君」

「何だ？」

「野口に引導を渡したのはきみだね？」

直球で訊かれた。

それは、質問ではなく、認識に確証を与える問いでしかなかった。左右良は何もかも読解しているらしい。

「ああ」

俺は短く答えた。

野口竜一郎は、百合子ちゃんが悲鳴を上げた時点では、窒息して意識を失っていたが、まだ生きていた。密希は野口の首を麻縄で絞めたけど、殺害するには至らなかったのだ。半死半生の野口を無理矢理首吊り状態にして、とどめを刺したのは俺である。そうしなければ、密希が殺人未遂で捕まる可能性があったし、殺人未遂をネタに脅迫される危険もあったのだ。それに、俺が奴の首に麻縄をぐるぐる巻きにして酷い絞め痕をつけなければ、密希がつけた絞殺の痕が不自然に目立ってしまっただろう。

それに関して左右良は何のコメントも出さなかった。

俺は外に出た。

「家族の所に戻るのかい？」

「ああ」

短く、だが、はっきりと答えた。

「本当に、きみが新しい家族の二人を好きになれる日が訪れるといいね」

酷く優しい声が背中を斬りつけ、同時にドアが閉まった。

終章 『密やかな光の下へ』

俺は言葉なく駐車場へ向かった。

足下に視線を落としながら、密希と光理さんのことを信頼できるくらい好きになれる日が来るのだろうか、と考えてみる。

好きなのは事実だ。左右良の問いには嘘偽りなく答えた。しかし、本当の意味での家族として好きなのかと問われれば、否定するしかない。好きは好きでも、それは親しい人間としての感情であって、親兄妹としての感情ではないのだ。どちらかと言えば、友人に対する好意に似ていると思う。

「陽影、こんばんは」

聞き慣れた声。

目の前に風守玲佳が立っていた。

俺が左右良の家に一泊するかどうか、アパートの前で監視してた？ 尾行されてた？ いや、こいつは俺の行動に疑惑をいだいたりできない人間である。

「……こんな所で何してんだ？」

驚愕と動揺が声を震わせる。何もやましくはないけど、狼狽していることを自覚。

逢引きの現場を押さえられた不貞者の気持ち少しだけ理解できた。

「命令を遂行したのです」

「おまえの役目は忍ちゃんの護衛だろ。なのに、なんでここにいる？」

「守護対象者を襲撃した女性が、警察の包囲を突破して逃走したので、姫城セキユリテイシステムの助けを借りて追跡したところ、ここでタクシーを降りたという情報を得たのです」

なるほど、忍ちゃんを殺そうとして警察の妨害に遭い、紗枝ちゃんは復讐対象者の変更を余儀なくされたのだ。左右良が復讐対象者

に選考された理由はわからないが……。

「ここで小野寺紗枝を捕まえたのか？」

「はい。つい先程、警察病院へ搬送されました」

「そうか、ご苦労さん」

「いえ。貴方の命令に従うことが私の幸せであり、喜びであり、誇りであり、私のそんざ……」

「あー、うるせーうるせー。そういう奴隷根性丸出しの戯言は聞きたくねえ。口を閉じてろ」

「はい」

玲佳は口を噤み、飼い主の命令を待つ愛犬のように、俺の傍に寄り添った。

「なんだか、余計なことを一杯喋っちまったな……」
呟く。

左右良相手とはいえ、内面を晒し過ぎた。今夜訪問した目的は事件の報告とプレゼントを渡すことなのに、途中で話が大きく脱線してしまった。しかも、結果として左右良との距離を不用意に近づけてしまった感が強い。

でも、まあいいか、と思った。

「俺、一度実家に戻るから、おまえは先にマンションへ帰ってろ」
ポケットから愛車ジャガーのキーを取り出しながら命じる。

玲佳は従順に頷いた。

「はい。朝食はご家族と？」

「ああ」

「承知しました」

深々とお辞儀をする玲佳を背に、俺はキーを振り翳してドアの口ツクを解除し、巨体を押し込んだ。

体重で車体が揺れ、軋む。

この数日間、実家に戻ってから今日の今まで、俺は少しだけではあるけど優しい人間になれた気がしたから。反省点と同じだけ満足感を得られたのなら、誤った選択をしていないのだろう。

そう思いたい。

さて、偽り家族の下へ戻るとしよつか。

《END》

終章 『密やかな光の下へ』 (後書き)

以上で本作品は完結です。

主人公のキャラがアレなので、他の作品と比べると感情移入しにくいような気もしますが、意図した設定なのでご容赦ください。そして、いつか投稿するであろう第二話も読んでいただけると幸いです。それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968/>

偽り家族の救済レシピ

2010年10月10日04時40分発行